

広島城跡

八丁堀地点 発掘調査報告書

－広島市中区八丁堀所在－

2010年

株式会社パスコ
財団法人 広島市文化財団

廣島城跡八丁堀地點出土 金箔押瓦



はしがき

近年、広島市では原爆投下以前の歴史をふりかえろうという動きが活発になってきました。それは、単に昔を懐かしもうという風潮だけではなく、原爆投下以前を知る世代が少なくなってきてることへの危機感の表れともいえます。そのような時期に数多くの広島城跡関連の遺跡の発掘調査が行われ、近世から近現代へかけての広島市中心部の様子を知る上で大きな成果をあげきました。このことは、原爆投下で断ち切られたかに見える広島市の歴史をつなげる大きな役割を果たしているものといえます。

さて、今回の広島城跡八丁堀地点における発掘調査でも近世から近代にかけての建物跡や第二次大戦以前の広島を知る人には馴染みの深い北清事変記念碑の基礎跡などが見つかりました。また、特にこの地点は、広島城の中でも重要な京口門の内側にあたる場所で、広島市の歴史をつなげる上でも大きな成果が得られました。この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。

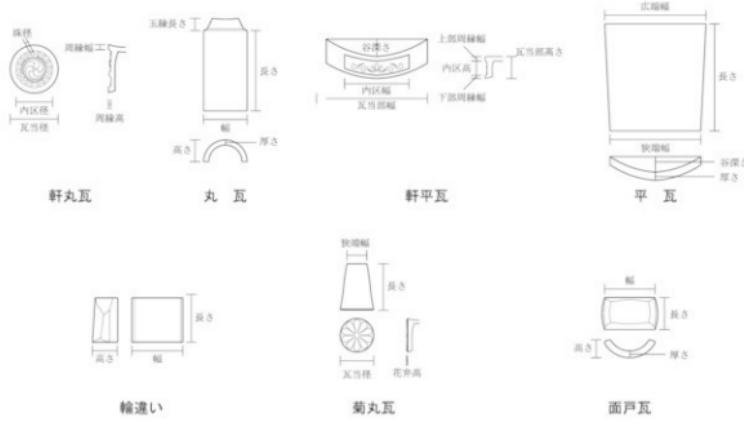
最後になりましたが、この調査にあたってご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成22（2010）年3月

財団法人 広島市文化財団文化科学部文化財課
株式会社パスコ

例　　言

1. 本書は、大成建設株式会社新築ビル工事に伴い実施した、広島県広島市中区八丁堀所在の広島城跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大成建設 広島支店の委託を受けて、株式会社パスクが受託し、財団法人広島市文化財団の指導のもとに、小柳太一・田部秀雄・秀島龍雄が担当した。
3. 現地調査は2007年（平成19）9月4日から2008年（平成20）3月13日まで行った。
4. 現地調査でのデジタル測量は石原啓治が行い、手実測は中野智恵・宮下大輔が主に行なった。写真測量は（有）メティオ富田武・小林進哉が行なった。ラジコンヘリコプターによる空撮はふじた航空写真が行なった。
5. 遺物の実測は陶磁器が株式会社タクト、株式会社C-ファクトリー、木製品は前山理恵が行なった。
6. 図面作成は（有）メティオ小林進哉・湯之戸千佳が行なった。
7. 遺物の写真撮影は（有）メティオ富田武が行なった。
8. 本報告書の遺構表示記号は以下のとおりである。
SK：土坑　SV：溝状遺構・溝・区画溝　SB：建物跡　SE：井戸・井戸状遺構
SA：柵列　SX：不明遺構　P：小穴（一部掘削中に広がったものも含む・P 600～606までは旧遺構名で表記する。）
9. 木製品・瓦実測図に付されているスクリーントーンは漆部分である。
10. 本書の執筆・編集は小柳太一が行い、まとめ2は若島一則、3瓦については佐藤好司が担当した。



瓦計測部位模式図

目 次

I	はじめに	1
II	位置と歴史的環境	3
III	調査の概要	5
IV	近代の遺構と遺物	15
V	近世の遺構と遺物	23
VI	まとめ	74
VII	自然科学分析	245
	遺構図面	9・89
	遺物図版	125
	PIT観察表	217
	遺物観察表	219
	写真図版	257

表 目 次

第1表	絵図の年表	7	第20表	貨幣観察表	230
第2表	SB01 PIT観察表	21	第21表	木製品観察表 (1)	231
第3表	PIT観察表 (1)	216	第22表	木製品観察表 (2)	232
第4表	PIT観察表 (2)	217	第23表	軒丸瓦観察表 (1)	233
第5表	陶磁器観察表 (1)	218	第24表	軒丸瓦観察表 (2)	234
第6表	陶磁器観察表 (2)	219	第25表	軒丸瓦観察表 (3)	235
第7表	陶磁器観察表 (3)	220	第26表	軒丸瓦観察表 (4)	236
第8表	陶磁器観察表 (4)	221	第27表	丸瓦観察表 (1)	236
第9表	陶磁器観察表 (5)	222	第28表	丸瓦観察表 (2)	237
第10表	陶磁器観察表 (6)	223	第29表	軒平瓦観察表 (1)	237
第11表	土師質瓦質土器観察表 (1)	224	第30表	軒平瓦観察表 (2)	238
第12表	土師質瓦質土器観察表 (2)	225	第31表	軒平瓦観察表 (3)	239
第13表	土師質瓦質土器観察表 (3)	226	第32表	軒平瓦観察表 (4)	240
第14表	土師質瓦質土器観察表 (4)	227	第33表	軒平瓦観察表 (5)	241
第15表	土師質瓦質土器観察表 (5)	228	第34表	その他の瓦観察表	241
第16表	土人形観察表	229	第35表	鬼瓦・鰐瓦・飾瓦観察表	242
第17表	金属製品観察表 (1)	229	第36表	平瓦・水切・敷平瓦・棟瓦観察表	243
第18表	金属製品観察表 (2)	230	第37表	広島城における金箔押瓦出土地点	83
第19表	石製品他観察表	230			

挿 図 目 次

第1図 広島城跡遺跡分布図	2	第31図 SK16・17・19・20・22・23・25・26・27・29・31 平面・断面・エレベーション図	110
第2図 調査地点周辺図	4	第32図 SK36・39・41・46・47・48・49・SV14 平面・断面・土器出土状況図	111
第3図 基本土層模式図	6	第33図 SK51・52・56・57・60・62・63 平面・断面 ・エレベーション図	112
第4図 調査区区割図	8	第34図 SK64・66・70・73・74・76・77・80・81・88・89 平面・断面図	113
第5図 近代の遺構配置図	9・10	第35図 SK84・90・91・92・93・95・101 平面・断面・立面図	114
第6図 近世の遺構配置図	11・12	第36図 SK97・99・100・102・104・105・SV24 平面・断面図	115
第7図 調査区基本土層図	13・14	第37図 SK106・107・109・110・111・112・115・116 平面・断面図	116
第8図 被爆前の八丁堀付近	22	第38図 SK114・118・119・122・128・130・131・132・133・ 134・137・147 平面・断面・エレベーション図	117
第9図 建物跡1・2 配置図・エレベーション図	88・90	第39図 SK135・136・138・140・142・143 平面・断面・エレベーション図	118
第10図 建物跡1・2・SB03・SB04・SB05 平面・立面・断面・エレベーション図	88・90	第40図 SK144・145・146・148・149・150 平面・断面図	119
第11図 建物跡1 平面・断面図	91	第41図 SX01・02・03・04・05 配置図・遺物分布図	120
第12図 建物跡2 平面・断面図	92	第42図 SX01・02・04・P02・P03・P05・P07・P08・P09 平面・断面図	120
第13図 建物跡3(SB01)・SA01・SK05 平面・断面・エレベーション図	93	第43図 硬化面範囲・平面・断面図	121
第14図 建物跡4・5柱穴・柵列 配置図	94	第44図 P57・73・77・99・100・102・127・145・152 平面・断面図	121
第15図 SA09・11 平面・断面図	94	第45図 P153・164・169・191・197・198・205・210・211・ 218・228・233・234・245 平面・断面図	122
第16図 建物跡4・SA04・05・12 平面・断面図	95	第46図 P246・252・253・257・261・262・263・265・330・ 346・351・360・366・363・364・381・401・436 平面・断面図	122
第17図 SA04・10 平面・断面図	96	第47図 P382・386・415・430・439・445・505・509・532・ 557・569・576・582・584 平面・断面・ 土器出土状況図	123
第18図 SV40・41・42 配置図	97	第48図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(1)	124
第19図 SV40・41・42 平面・断面・立面図	98		125
第20図 SV01・02・03 平面・断面・立面図	99		
第21図 SV04・05・06・08・10 平面・断面図	100		
第22図 SV07・11・12 平面・断面図	101		
第23図 SV13・16・17・21 平面・断面図	102		
第24図 SV18 平面・断面図	103		
第25図 SV22・26・27 平面・断面図	104		
第26図 SV25・29・30・31・33・34・35・36・38 平面・断面図	105		
第27図 SE01・05・08・09・10 平面・断面図	106		
第28図 SE11・12・14・15・16 平面・断面図	107		
第29図 SE18・19・21・22・23 平面・断面図	108		
第30図 SK04・10・12・13・14・15 平面・断面・土器出土状況図	109		

第49図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(2)	126	第67図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(20)	144
第50図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(3)	127	第68図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(21)	145
第51図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(4)	128	第69図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(22)	146
第52図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(5)	129	第70図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(23)	147
第53図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(6)	130	第71図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(24)	148
第54図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(7)	131	第72図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(25)	149
第55図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(8)	132	第73図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(26)	150
第56図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(9)	133	第74図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(27)	151
第57図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(10)	134	第75図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(28)	152
第58図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(11)	135	第76図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(29)	153
第59図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(12)	136	第77図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(30)	154
第60図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(13)	137	第78図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(31)	155
第61図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(14)	138	第79図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(32)	156
第62図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(15)	139	第80図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(33)	157
第63図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(16)	140	第81図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(34)	158
第64図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(17)	141	第82図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(35)	159
第65図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(18)	142	第83図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(36)	160
第66図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(19)	143	第84図	出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(37)	161

第85図	出土木製品	遺物実測図(1)	162	第120図	出土瓦	遺物実測図(25)	197
第86図	出土木製品	遺物実測図(2)	163	第121図	出土瓦	遺物実測図(26)	198
第87図	出土木製品	遺物実測図(3)	164	第122図	出土瓦	遺物実測図(27)	199
第88図	出土木製品	遺物実測図(4)	165	第123図	出土瓦	遺物実測図(28)	200
第89図	出土木製品	遺物実測図(5)	166	第124図	出土瓦	遺物実測図(29)	201
第90図	出土木製品	遺物実測図(6)	167	第125図	出土瓦	遺物実測図(30)	202
第91図	出土木製品	遺物実測図(7)	168	第126図	出土瓦	遺物実測図(31)	203
第92図	出土木製品	遺物実測図(8)	169	第127図	出土瓦	遺物実測図(32)	204
第93図	出土木製品	遺物実測図(9)	170	第128図	出土瓦	遺物実測図(33)	205
第94図	出土木製品	遺物実測図(10)	171	第129図	出土瓦	遺物実測図(34)	206
第95図	出土木製品	遺物実測図(11)	172	第130図	出土瓦	遺物実測図(35)	207
第96図	出土瓦	遺物実測図(1)	173	第131図	出土瓦	遺物実測図(36)	208
第97図	出土瓦	遺物実測図(2)	174	第132図	出土瓦	遺物実測図(37)	209
第98図	出土瓦	遺物実測図(3)	175	第133図	出土瓦	遺物実測図(38)	210
第99図	出土瓦	遺物実測図(4)	176	第134図	出土瓦	遺物実測図(39)	211
第100図	出土瓦	遺物実測図(5)	177	第135図	出土瓦	遺物実測図(40)	212
第101図	出土瓦	遺物実測図(6)	178	第136図	出土瓦	遺物実測図(41)	213
第102図	出土瓦	遺物実測図(7)	179	第137図	出土瓦	遺物実測図(42)	214
第103図	出土瓦	遺物実測図(8)	180	第138図	出土貨幣	遺物実測図	215
第104図	出土瓦	遺物実測図(9)	181	第139図	軒平瓦瓦当文様分類 (1)	77
第105図	出土瓦	遺物実測図(10)	182	第140図	軒平瓦瓦当文様分類 (2)	79
第106図	出土瓦	遺物実測図(11)	183	第141図	軒丸瓦瓦当文様分類	80
第107図	出土瓦	遺物実測図(12)	184	第142図	王字銘軒丸瓦瓦当面集成図	81
第108図	出土瓦	遺物実測図(13)	185	第143図	各地出土の滴水瓦と広島城出土滴水瓦	
第109図	出土瓦	遺物実測図(14)	186		復元案	82
第110図	出土瓦	遺物実測図(15)	187				
第111図	出土瓦	遺物実測図(16)	188				
第112図	出土瓦	遺物実測図(17)	189				
第113図	出土瓦	遺物実測図(18)	190				
第114図	出土瓦	遺物実測図(19)	191				
第115図	出土瓦	遺物実測図(20)	192				
第116図	出土瓦	遺物実測図(21)	193				
第117図	出土瓦	遺物実測図(22)	194				
第118図	出土瓦	遺物実測図(23)	195				
第119図	出土瓦	遺物実測図(24)	196				

図版目次

図版1	1 南壁土層断面図 (A) (東側).....	257	4 SV06 遺物出土状況 南より.....	263
	2 南壁土層断面図 (A) (西側).....	257	5 SV07・08 完堀 西より.....	263
	3 ①②③ 東西土層断面図 (B) (東側).....	257	6 SV07 AA' 断面 西より.....	263
	4 東西土層断面図 (B) (西側).....	257	7 SV08 BB' 土層断面 東より.....	263
	5 南北土層断面図 (C).....	257	8 SV09 完堀 南より.....	263
	6 西側土層断面図 (D).....	257	図版8 1 SV11 完堀 西より.....	264
図版2	1 第2面完掘 近代の建物跡1・2東側 西より.....	258	2 SV11 断面 北より.....	264
	2 第2面完掘 近代の建物跡1・2西側 南より.....	258	3 SV12 検出 東より.....	264
図版3	1 建物跡3・SA01 検出状況 南より.....	259	4 SV12 完堀 東より.....	264
	2 建物跡3・SA01 完掘 南より.....	259	5 SV13 完堀 北東より.....	264
図版4	1 建物跡4・SA04・09・10・11・12完掘.....	260	6 SV13 断面 南より.....	264
	2 SA04・P12・P11 断面 北より.....	260	7 SV16 完堀 南より.....	264
	3 SA05 断面 北より.....	260	8 SV16 断面 北より.....	264
	4 SA04 P8 断面 北より.....	260	図版9 1 SV17 完堀 南より.....	265
	5 SA04 P2～P6 断面 北東より.....	260	2 SV17 断面 北より.....	265
	6 SA04 P16～18+P26～P28 断面 北より.....	260	3 SV18 完掘 北より.....	265
	7 建物跡4 断面 北より.....	260	4 SV18 CC' 断面 南より.....	265
図版5	1 東側SV40 検出 西より.....	261	5 SV18 BB' 断面 南より.....	265
	2 SV40 BB' 断面 西より.....	261	6 SV18 遺物出土状況 南より.....	265
	3 西側SV40 検出 北より.....	261	7 SV21 完堀 南より.....	265
	4 SV40 AA' 断面 西より.....	261	図版10 1 SV22 完掘 北より.....	266
	5 SV41 検出 北より.....	261	2 SV22 BB' 西より.....	266
	6 SV41 断面 北より.....	261	3 SV22 遺物出土状況 北より.....	266
	7 SV42 検出 南より.....	261	4 SV24・SK99 完堀 北より.....	266
図版6	1 SV01 完堀 南より.....	262	5 SV24・SK99 断面 南より.....	266
	2 SV01 断面 南より.....	262	6 SV26・27 完堀 北より.....	266
	3 SV02 完堀 北より.....	262	7 SV27・26 断面 南より.....	266
	4 SV02 断面 南より.....	262	8 SV25・29・30・31・33 完堀 北より.....	266
	5 SV03 完堀 北より.....	262	図版11 1 SV29 断面 東より.....	267
	6 SV03 断面 南より.....	262	2 SV25・33・SK148 断面 南より.....	267
	7 SV04・05 完掘 東より.....	262	3 SV30 断面 北より.....	267
	8 SV04 断面 南より.....	262	4 SV30・31 断面 南より.....	267
図版7	1 SV05 断面 北より.....	263	5 SV34・35 完堀 南より.....	267
	2 SV06・10 完堀 北より.....	263	6 SV34・35 断面 南より.....	267
	3 SV06 断面 北より.....	263		

7	SV36	完堀	南より	267	3	SK04	断面	南より	272		
8	SV38	完堀	西より	267	4	SK05	完堀	西より	272		
図版12	1	SE01	完堀	北より	268	5	SK10	完堀	北より	272	
	2	SE01	断面	北より	268	6	SK10	断面AA	北より	272	
	3	SE05	完堀	南より	268	7	SK12	完堀	南より	272	
	4	SE05	断面	南より	268	8	SK12	断面	東より	272	
	5	SE08	完堀	南より	268	図版17	1	SK13	完堀	南より	273
	6	SE08	断面	南より	268		2	SK13	断面	西より	273
	7	SE09	完堀	北より	268		3	SK14	完堀	南より	273
	8	SE09	断面	北より	268		4	SK14	断面	南より	273
図版13	1	SE10	完堀	西より	269		5	SK15	完堀	南より	273
	2	SE10	断面	西より	269		6	SK15	土器出土状況	南より	273
	3	SE11	完堀	西より	269		7	SK16	完堀	南より	273
	4	SE11	断面	南より	269		8	SK16	断面	南より	273
	5	SE12	井戸枠内完堀	南東より	269	図版18	1	SK17	完堀	東より	274
	6	SE12	断面	南東より	269		2	SK17	断面	東より	274
	7	SE12	完堀	西より	269		3	SK19・20・22	完堀	南より	274
	8	SE13	完堀	南より	269		4	SK19・20断面	東より	274	
図版14	1	SE14	完堀	東より	270		5	SK22	断面	東より	274
	2	SE14	断面	東より	270		6	SK23	完堀	南より	274
	3	SE15	完堀	東より	270		7	SK23	断面	東より	274
	4	SE15	断面	東より	270		8	SK26	完堀	南より	274
	5	SE16	完堀	北より	270	図版19	1	SK26	断面	南より	275
	6	SE16	断面	北より	270		2	SK27	完堀	南より	275
	7	SE17	完堀	南より	270		3	SK27	断面	南より	275
	8	SE20	完堀	南より	270		4	SK27	遺物出土状況	南より	275
図版15	1	SE18	完堀	北より	271		5	SK29	完堀	東より	275
	2	SE18	断面	東より	271		6	SK29	断面	東より	275
	3	SE19	井戸枠除去後	北より	271		7	SK31	完堀	東より	275
	4	SE19	断面	北より	271		8	SK31	断面	南より	275
	5	SE21	完堀	南より	271	図版20	1	SK34	瓦出土状況	東より	276
	6	SE21	断面	北より	271		2	SK36	断面	南より	276
	7	SE22	完堀	西より	271		3	SK39	完堀	西より	276
	8	SE22	断面	東より	271		4	SK41	完堀	南より	276
図版16	1	SE23	完堀	南より	272		5	SK41	断面	東より	276
	2	SE23	断面	東より	272		6	SK46・47	遺物出土状況	南より	276

7	SK48・49 完堀 西より	276	3	SK92・102 完堀 西より	281
8	SK48・49・SV14 断面 西より	276	4	SK92 断面 南より	281
図版21	1 SK51 完堀 北より	277	5	SK102 断面 北より	281
	2 SK51 断面 南より	277	6	SK93 完堀 北より	281
	3 SK52 完堀 北より	277	7	SK95 断面 北より	281
	4 SK52 断面 北より	278	8	SK97 完堀 北より	281
	5 SK55 完堀 南より	277	図版26	1 SK100 瓦検出状況 北より	282
	6 SK55 断面 南より	277		2 SK104 断面 西より	282
	7 SK56 断面 西より	277		3 SK105 埋土除去後 南より	282
	8 SK57 完堀 東より	277		4 SK105 断面 東より	282
図版22	1 SK57 断面 東より	278	5	SK106 完堀 南より	282
	2 SK60 遺物出土状況 北東より	278	6	SK106 断面 東より	282
	3 SK62 完堀 西より	278	7	SK107 完堀 北より	282
	4 SK62 断面 西より	278	8	SK109 完堀 南より	282
	5 SK63 完堀 北より	278	図版27	1 SK110・119・122 完堀 南より	283
	6 SK64 完堀 南より	278		2 SK110 断面 北より	283
	7 SK64 断面 北より	278		3 SK119 断面 南より	283
	8 SK66 断面 北より	278		4 SK122 断面 西より	283
図版23	1 SK70 完堀 南より	279	5	SK111・112 完堀 南より	283
	2 SK70 断面 南より	279	6	SK111・112 断面 南より	283
	3 SK73 完堀 西より	279	7	SK114 完堀 北より	283
	4 SK74 完堀 東より	279	8	SK115 完堀 北より	283
	5 SK74 断面 東より	279	図版28	1 SK115 断面 北より	284
	6 SK76・77 完堀 南より	279		2 SK116 完堀 西より	284
	7 SK77 断面 南より	279		3 SK116 断面 南より	284
	8 SK80 完堀 南より	279		4 SK118 完堀 東より	284
図版24	1 SK81 完堀 北より	280	5	SK118 断面 北より	284
	2 SK81 断面 南より	280	6	SK128 完堀 南より	284
	3 SK84 完堀 北より	280	7	SK130 完堀 北より	284
	4 SK84 断面 北より	280	8	SK131 断面 南より	284
	5 SK88 完堀 西より	280	図版29	1 SK132・133 完堀 北より	285
	6 SK88 断面 西より	280		2 SK132 断面 南より	285
	7 SK89 完堀 北より	280		3 SK133 断面 南より	285
	8 SK90・101 完堀 東より	280		4 SK134 完堀 北より	285
図版25	1 SK90・101 断面 東より	281		5 SK134・147 断面 北より	285
	2 SK91 磁検出状況 東より	281		6 SK147 完堀 北より	285

7	SK135 完堀 東より	285	4	P197 断面 南より	290
8	SK136 石出土状況 東より	285	5	P198 断面 西より	290
図版30	1 SK137 完堀 南より	286	6	P205 完堀 西より	290
	2 SK137・SK114 断面 北より	286	7	P210・211 完堀 東より	290
	3 SK138・143 完堀 東より	286	8	P218 断面 北より	290
	4 SK138 断面 北より	286	9	P228 断面 北より	290
	5 ①② SK143・SX04 断面 北より	286	10	P234 断面 南より	290
	6 SK140 完堀 北より	286	11	P245 石検出状況 南より	290
	7 SK140 断面 北より	286	12	P351 土器出土状況 西より	290
図版31	1 SK140 金箔瓦出土状況 北より	287	13	P360・P66 断面 南より	290
	2 SK142 断面 東より	287	14	P363・364 断面 北より	290
	3 SK144・146 完堀 北より	287	15	P382 断面 西より	290
	4 SK144 断面 北より	287	16	P346 断面 南より	290
	5 SK146 断面 北より	287	17	P386 石検出状況 南より	290
	6 SK145 完堀 北より	287	18	P415 遺物出土状況	290
	7 SK145 断面 北より	287	図版35	1 P245・246・252・253・257・261・262・263・ 264・265・330・381・401・436・439・ 450・495 完堀 南より	291
	8 SK149 完堀 西より	287	2 P430 断面 北より	291	
図版32	1 SK149 断面 北より	288	3 P455 完堀 北より	291	
	2 SK150 完堀 北より	288	4 P505・506 完堀 南より	291	
	3 SK150 断面 北より	288	5 P557 断面 北より	291	
	4 SX01 遺物出土状況 北より	288	6 P569 断面 北より	291	
	5 ①②③④ SX01 断面 南より	288	7 P77 断面 北より	291	
	6 SX04 完堀 西より	288	8 P532 完堀 東より	291	
	7 SX01植物遺体出土状況 SX02除去後 P02・ 03・05・07・08・09 完堀 南より	288	9 P576 完堀 南より	291	
	8 SX05 植物遺体出土状況 南より	288	10 P584 断面 東より	291	
図版33	1 SX03 植物遺体出土状況 北より	289	図版36	1 調査区 東側 完堀	292
	2 硬化面 南より	289		2 西側 完堀	292
	3 P57・73・100・102・127・145 完堀 東より	289	図版37	陶磁器・その他出土遺物(1)	293
	4 P99 断面 北より	289	図版38	陶磁器・その他出土遺物(2)	294
	5 P152 完堀 北より	289	図版39	陶磁器・その他出土遺物(3)	295
	6 P153 完堀 北より	289	図版40	陶磁器・その他出土遺物(4)	296
図版34	1 P164 断面 東より	290	図版41	陶磁器・その他出土遺物(5)	297
	2 P169 完堀 東より	290	図版42	陶磁器・その他出土遺物(6)	298
	3 P191 断面 北より	290	図版43	陶磁器・その他出土遺物(7)	299

図版44	陶磁器・その他出土遺物(8).....	300
図版45	陶磁器・その他出土遺物(9).....	301
図版46	陶磁器・その他出土遺物(10).....	302
図版47	陶磁器・その他出土遺物(11).....	303
図版48	木製品出土遺物(1).....	304
図版49	木製品出土遺物(2).....	305
図版50	木製品出土遺物(3).....	306
図版51	瓦出土遺物(1).....	307
図版52	瓦出土遺物(2).....	308
図版53	瓦出土遺物(3).....	309
図版54	瓦出土遺物(4).....	310
図版55	瓦出土遺物(5).....	311
図版56	瓦出土遺物(6).....	312
図版57	瓦出土遺物(7).....	313
図版58	瓦出土遺物(8).....	314
図版59	瓦出土遺物(9).....	315
図版60	瓦出土遺物(10).....	316
図版61	石碑	317

自然科学分析

VII-図版 1	木材 (1).....	251
VII-図版 2	木材 (2).....	252
VII-図版 3	木材 (3).....	253
VII-図版 4	種実遺体.....	254
VII-図版 5	虫えい・シダ植物	255

I はじめに

広島市市民局文化スポーツ部文化財担当（以下「文化財担当」。平成20年度からは同文化財課に変更）は、平成18年4月26日付けで、売却予定地（中区八丁堀3番4号）における埋蔵文化財の有無並びにその取り扱いについて照会を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（広島城跡）に含まれていたので、開発に伴っては発掘調査が必要である旨の回答を、同年4月27日付で提出した。さらに、同年5月8日付けの試掘調査の依頼を受け、同年6月7日・8日で実施した試掘調査において、少なくとも3時期の近世の遺構面を確認し、その旨を回答した。その後、売却用地を取得し、（仮称）八丁堀オフィスビルの新築工事を計画する大成建設株式会社広島支店（現中国支店）に対して当該遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、計画の変更是困難であるとの結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、大成建設株式会社広島支店と、発掘調査の管理・指導（監理）業務を財団法人広島市文化財団が、そのもとで実施する発掘調査業務を株式会社バスコがそれぞれ契約し、現地発掘調査を平成19年9月から平成20年3月にかけて実施し、報告書作成を平成20年4月から平成22年3月にかけて実施した。

なお、現地発掘調査において、平成19年3月11日に広島市文化財審議会委員三浦正幸氏（広島大学大学院教授）の現地指導を受けた。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者 大成建設株式会社

調査主体 財団法人広島市文化財団（調査管理）

調査実施 株式会社バスコ

調査担当者 小柳太一（株式会社バスコ） 田部秀男（株式会社バスコ） 秀島龍雄（株式会社バスコ）

平成19年1月～3月

調査補助員

生田悟之 上野芳明 大胡周平 岡本眞澄 大利春枝 奥田哲也 加藤昭勝 倉木勝太郎 倉木登志子

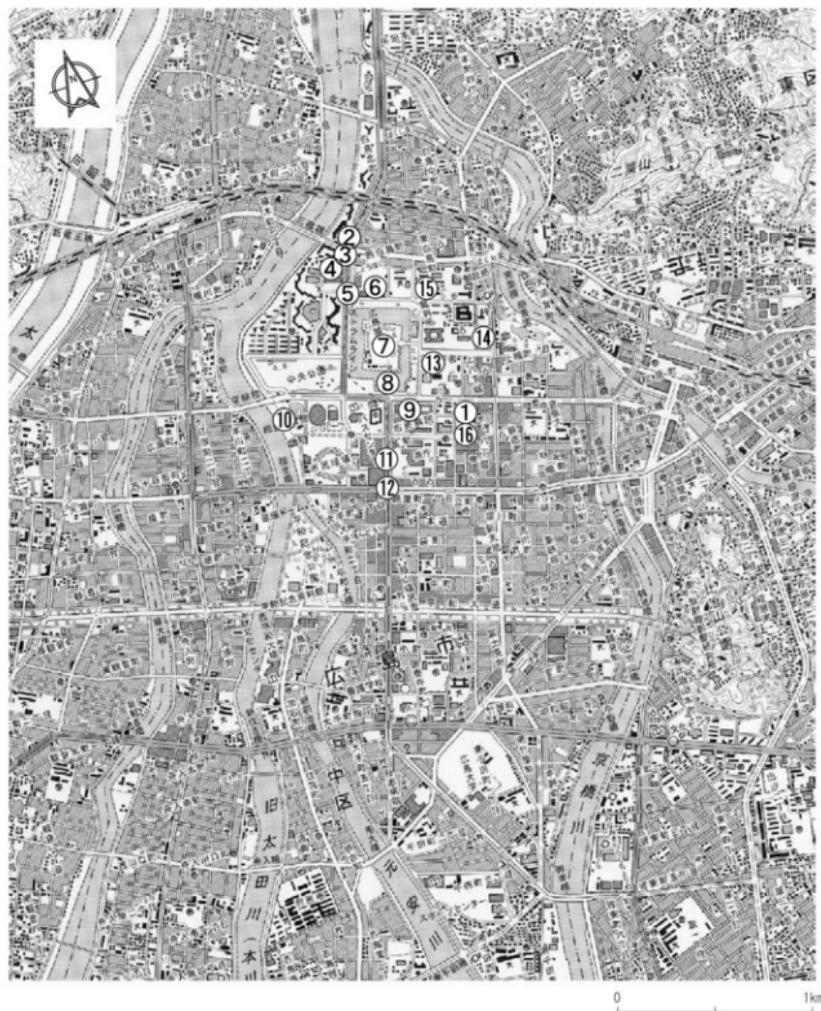
香原辰夫 山王哲司 柴田清志 高藤正博 玉田志保 鶴山勝行 寺本輝夫 豊田高志 中野智恵

中村輝夫 中村春男 中村茂 新田民江 平節夫 浜田善隆 廣田武子 松浦勇 樹木龍登 宮下大輔

森川敏明 山本繁征 山田進 義祖義彦 吉井清 横山好男 渡邊宣弘

現地調査から報告書作成にいたるまでに下記の方々や機関等からご教示ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

池之知広・植田真・大橋康二・高下洋一・小柳リラコ・佐藤雅彦・高梨雅幸・長石紀子・前山理恵・福原茂樹・古瀬清秀・松原啓・三浦正幸・柳沢健輔・若島一則・脇多賀夫・大成建設株式会社中国支店・広島県教育委員会・広島県立歴史博物館・財団法人広島市シルバーパートナーズセンター・(有)写真事務所クリーク・(株)C-ファクトリー・NPO法人ヒロシマ文化・健康サポートセンター・パリノ・サーウェイ株式会社



1. 広島城跡八丁堀地点
2. 城北駅北(旧西白島)交差点地点(外堀跡)
3. 城北駅北(旧西白島)交差点地点(堀跡)
4. 西白島地点(堀跡)
5. 基町高校前交差点地点(中堀跡)
6. 基町高校グランド地点(武家屋敷跡)
7. 史跡広島城跡丸
8. 史跡広島城跡二の丸
9. 中央庭球場地点(中堀跡)
10. 太田川護岸地点(外郭堀跡)
11. 県庁前地点(武家屋敷跡)
12. 紙屋町・大手町地点(外堀跡)
13. 司法書士会館新築地点(武家屋敷跡)
14. 法務総合庁舎地点(武家屋敷跡)
15. 国保会館地点(武家屋敷跡)
16. 太田川河川事務所地点(武家屋敷跡)

第1図 広島城跡遺跡分布図 (S=1:25,000)

II 位置と歴史的環境

1 調査地点の地理的環境

広島城は広島市中区に所在する。広島城は毛利氏によって太田川河口のデルタ地帯に築城された近世城郭である。このデルタ地帯は中国山地を源とした太田川が瀬戸内海へと流れ込む河口付近に形成した三角州である。広島城はこの内、京橋川、太田川、元安川に挟まれた中州の北側にあたる。

今回調査の広島城八丁堀地点は、現存する広島城本丸から南東方向、現在の京口門公園付近に位置する。

2 調査地点の歴史的変遷（第1表）

今回の調査地点に該当する絵図を年代別にまとめると以下のようなになる。①毛利氏時代の絵図には、代表的なもので『芸州広島城町割之図』、『毛利氏時代城郭内の図』、②福島正則時代の絵図には『福島氏時代城郭内の図』、③浅野時代の絵図には代表的なものとして1624～1632年『寛永年間広島城下図』、1743～1754年『家中屋敷割図』、1800年『広島城城郭内全城図』、1864年頃『御家中屋敷絵図重宝記』、1868～1869年『家中屋敷絵図重宝記』がある。

調査地点は、広島城の中堀と外堀に挟まれた侍屋敷のうち京口御門西北側の屋敷地の一角にあたる。各絵図に見られる名前は、①毛利氏時代は「三浦兵庫」、②福島氏の時代は「福島丹羽守」である。③浅野氏の時代は、浅野家を中心に屋敷地をそのまま引き続き使用されたものと思われる。変化していくのが浅野氏時代、『家中屋敷割図』からである。絵図を詳しく見てみると、それ以前には見られなかった屋敷地が区割りされている様子が伺える。また『御家中屋敷絵図重宝記』では浅野宅を中心に西側に「甲権大夫」、「黒川□□」、東側に「黒田益之進」、「木原慎一郎」、「野村彦次郎」の名が伺える。今回の調査地点は絵図を見る限り、毛利、福島、浅野氏時代と続く屋敷地の変遷が、浅野氏時代の1743～1754年に作成されたと云われる『家中屋敷割図』、から大きく区割りされ、幕末まで続く様子が伺える。今回の調査ではこれを伺わせる区画溝が検出された。

その後、明治6年（1873）に京口御門の解体が始まり、明治8年（1875）には鎮台鍊兵場（後の西鍊兵場）となる。この時期に武家屋敷は解体されていったのであろう。

明治以降、この西鍊兵場は広大な敷地を（23万m²）を有し、第5師団が軍事教練の傍ら軍の許可があれば、さまざまなイベント、博覧覧会等が行われた。古いもので明治43年「第五回中国六県連合畜産共進会・馬匹共進会」、大正4年「広島県物産共進会」、昭和4年には「昭和産業博覧会」が代表的なものである。また明治27年には日清戦争のための臨時帝国議会も開かれた。今回の調査地点は西鍊兵場東端にあたり、現在のYMCA（旧済美学校）の向かいに位置する。調査ではこれらの土地利用の変遷を示すように5m間隔の柱跡が確認された。



第2図 調査地点周辺図 (S=1 : 2,500)

III 調査の概要

1 調査の方法

調査地点は東西約54m、南北約30mのほぼ長方形である。調査区には安全対策のために法面などを設置し、実際の調査対象面積は約1490m²である。また、調査区は廃土置き場の関係で東西に分け調査することとした。

調査区に10m×10mグリッドを設定した。基点が北東隅から南方向へアルファベットのA～F、北から西へ算用数字の1～7までとした。（第4図）

平面測量はトータルステーションおよび写真測量を併用した。断面測量は主として手実測で行ない補助的にトータルステーションを使用した。

写真撮影は調査員が随時行い、機材は35mm一眼レフカメラを基本としてカラースライドおよびモノクロフィルムによって記録し、デジタルカメラは補助的に用いた。さらに、主要遺構等は中判カメラを使用した。また俯瞰撮影の一部は調査地南隣の現太田川河川事務所ビルからおこなった。

遺構は原則として長軸方向に半截して、その断面の写真撮影、図化、観察等をおこなった。その後、完掘作業、写真撮影をおこなった。

遺物はグリットと遺構単位で取り上げをおこなった。この際、瓦については、完形品およびそれに準じるもの等に限定して現地にて選別をおこなった。

最後に調査区完掘撮影をラジコンヘリコプターで行った。

2 調査経過と概要

調査区は旧国土交通省太田川河川事務所跡地である。平成15年に財団法人広島文化財団が発掘調査した北側にあたる。

表土除去作業から始め、GL-1.5mのところで暗オリーブ褐色土、明黄褐色ブロック、赤化色ブロックを含む、非常に固い層から調査を始めることとした。この固くしまった層から、近代の土管跡、排水升始め、配列する丸い円形のプランを確認する。調査過程で、5m間隔のプランであることを確認した近代の建物跡であることが明らかになった。また遺物も多数出土した。この層を近代もしくは幕末の面とした。またこの層から多数の瓦が出土した。この下からは近世の整地層である、整地層は良好に残っていたため遺構が多数出土した。尚調査区東側の北の部分は旧太田川河川事務所跡のコンクリートの基礎跡があった。そのため基礎と基礎の間に遺構が残っていた状態であった。

遺構は近代では建物跡、北清事件記念碑の基礎跡、近世では建物跡、柵列、廃棄土坑、溝状遺構、井戸、埋甕土坑、埋桶土坑、不明遺構、多数の小穴の遺構が確認された。遺物では、陶磁器、瓦、金箔瓦、土師質瓦質土器、金属製品、石製品、錢貨、木製品などが出土した。

3 基本層序（第3・7図）

第Ⅰ層 表土。レンガ、コンクリート片、瓦礫、近代から近世の陶磁器を含む。整地層である。

第Ⅱ層 3層（a、b、c）に分層した。近代から近世を含む。

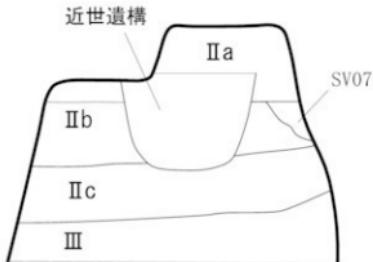
Ⅱa層は近代と近世の層とした。暗オリーブ褐色土に黄色ブロック、明黄褐色ブロック、赤化色ブロックを含む固く締まった整地層。調査区全体で確認できた。また遺物も近代から近世の遺物を多数含んでいた。

Ⅱb層としたのは、オリーブ褐色土を主として、暗灰黄色砂を含む整地層。遺物を多数含む。調査区の西側には確認できない部分もある。また南北土層断面では、中央部分から北側にかけて、更に再分層をした。近世の整地層。

Ⅱc層としたのは、オリーブ褐色土シルトとにぶい黄褐色砂を主とする。遺物を少量含む。近世の整地層。

第Ⅲ層 自然堆積層。

ⅢaからⅢdの4層に分けた。特に西壁土層断面では、北側から流入堆積した様相を示すものとして分けた。Ⅲaは褐色を主とするシルト混じり砂。Ⅲbはにぶい黄橙色砂、シルト（灰黄褐色）、細層（にぶい黄橙色）の互層。Ⅲcはオリーブ黒色シルト混じりの粘土。Ⅲdは粘土質シルト。



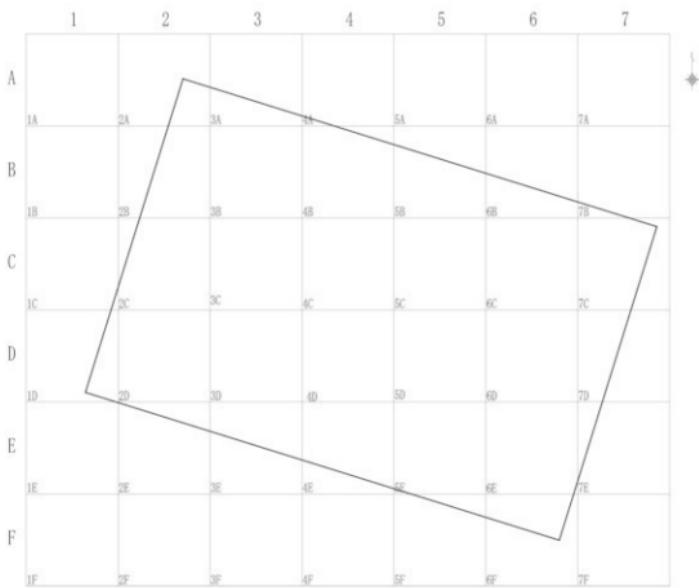
第3図 基本土層模式図

年号	西暦	調査区屋敷名	絵図名	出展	備考
1 文祿四年	1595	三浦兵庫	芸州広島城町割之図	後藤1990	
2 慶長二年	1597	三浦兵庫	毛利氏時代城郭内の図	後藤1990	1822頃成立か
3 慶長十八年	1613	福島丹波守	福島氏時代城郭内の図	後藤1990	
4 寛永二～九 年頃	1625～ 1632	大久保某	寛永年間廣島城下絵 図	広島市1923・ 後藤1990	
5 宝暦四年	1743～ 1754	浅野采女	家中屋敷割図	後藤1990	京口御門が描か れる。
6 天明年間	1800	浅野惟聰	家中屋敷割図	広島市1923	
8 元治元年	1864	浅野嘉吉	御家中屋敷絵図重宝	後藤1990	
9 明治10年	1877	記述なし	広島城之図	広島市教委	昭和12年模写 1989

第1表 絵図の年表

引用・参考文献

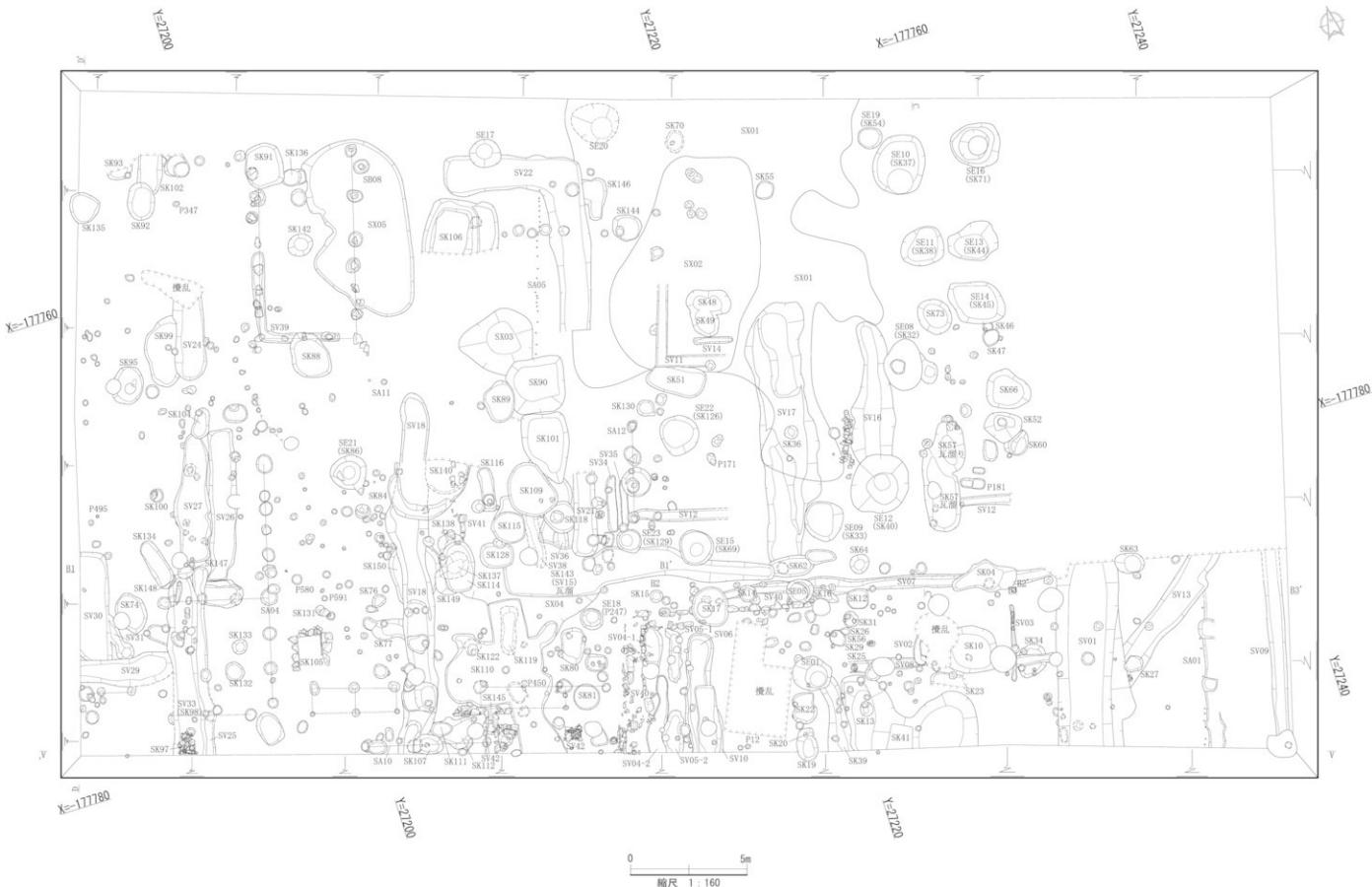
- 後藤洋一 『広島城下町絵図修成』広島市立中央図書館1990
- 財団法人広島市文化財団 広島城 2008 「城郭シンポジウム」『毛利氏時代の広島城を考える』資料集
- 財団法人広島市文化財団 広島城 『広島城の近代』 2008
- 財団法人広島市文化財団 広島城 『広島城と毛利氏の居城』2009
- 広島市教育委員会 『史跡広島城跡史料集成』第1巻 1989
- 財団法人広島市文化財団 『広島城跡太田川河川事務所地点』 2006



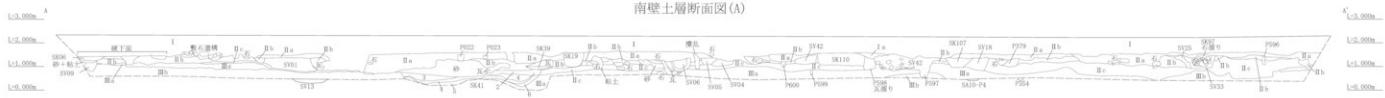
第4図 調査区区割図（模式図）



第5図 近代の遺構配置図



第6図 近世の遺構配置図



南壁土層断面図(A)



東西土層断面図(B)

A・B十層注記

1. 表土・塊状

II.a. 近世(古代) 細粒の褐色土を基質に黃褐色ブロック、明黃褐色ブロック、赤褐色ブロックを含む。粘性はないがよりは強い。遺物を多款含む。

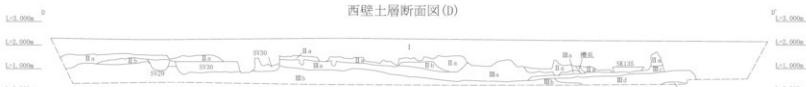
II.b. 近世 オリーブ褐色土を基質に暗黃褐色土層多く含む。遺物が見出る。しまりよい。遺物を含む。

II.c. 近世 トレンチ壁面に於ける褐色土層に、主に暗褐色土、オリーブ褐色土層を有する面積。遺物は含まない。

III.a. 自然堆積層 トレンチ壁面に於ける褐色土層に、主に黃褐色土層を有する面積。調査区西壁では南から北へ傾斜しており(地下水面以下)褐色土層と暗褐色土層との層厚は約1.5mである。



南北十層断面図(C)



西壁土層断面図(D)

I._a 表土・裸地
II._a - II._b 裸地 (黄褐色)
III._a 自然地被物
III._b 自然地被物
III._c 自然地被物
IV._a 自然地被物
IV._b 自然地被物

褐色シルトを基調に褐色シルトが底状に混在する。整地層、砂まで、炭化物は定量含むまれるが遺物はほとんど見られない。粘性はひくいが、しまりはある。
褐色シルトを基調とする黒褐色シルト。
褐色シルトより粘土分が多く、全体的に整った層面となっている。わずかに0.1mmの大小の黑色砂粒を混在する。炭化物の混入は多くは見られるものの遺物の混入も似られない。粘性、しまりはかなり弱い。
褐色シルト (黄褐色) より細かい褐色シルト (黄褐色) および褐色シルト (黄褐色) に細かい褐色シルト (黄褐色) が混在する。西側では南北へ傾斜している。水底の下層では(水底) では粗めと細めの層の混在するシート層にはグライ化し色調が異なる。
褐色シルトを基調とする褐色シルト。少部分の植物遺体を含む。腐植は全くない。シルト層の上位には、粘性物ややや多く、層厚は約10cmに亘る。層厚は約10cmに亘る。
褐色シルトを基調とする褐色シルト。少部分の植物遺体を含む。腐植は全くない。シルト層の上位には、粘性物ややや多く、層厚は約10cmに亘る。



第7図 調査区基本十箇図

IV 近代の遺構と遺物

1. 遺構

近代では建物跡と敷石、土坑を確認した。

建物跡1 (SB06) (第5・9・10・11図 図版2)

本遺構は面積約1000m²の広範囲な建物跡である。確認した柱穴は全部で26基を確認し、建物跡南西部で明確に並列する。調査区北東は現代の整地によって柱穴は失われている。また調査区外に延びている可能性もある。現状では東西桁行40m、梁行は25mである。南側は5m×5m区画の6間に仕切られている。西側は10m×10mの広間を有する。なお本来は北側のP22からP55の間に2基、P24からP17の間に1基の柱穴があったとおもわれる。ただし柱穴は確認できなかったが5m×5mに仕切られる。北側、礫列SB04が西辺と平行して確認され本遺構と関連すると考えられる。

P23=P563 (第5・9・10図 図版2)

SB06の北西隅から1間東に離れて位置する。平面は0.73×0.66mの不整円形である。確認された断面は深さ0.12mのレンズ状である。底面は平坦で、埋土は1層である。遺物は磁器1点、瓦が出土した。

P24=P565 (第5・9・10図 図版2)

建物跡内北側に位置する。P22の東へ3間離れて位置する。平面は0.62×0.55mの不整円形である。確認された断面は深さ0.10mの箱形である。埋土は2層に分けられた。遺物は出土していない。

P20=P302 (第5・9・10図 図版2)

建物跡内北西に位置する。平面は0.60×0.50mの不整円形である。確認された断面は深さ0.32mの箱形である。埋土は2層に分けられた。2層には礫、瓦を多量に含む。遺物は陶磁器5点が出土した。

P26=SK42 (第5・9・10図 図版2)

建物跡内南東に位置する。平面は0.73×0.57mの不整円形である。確認された断面は深さ0.86mの筒状である。埋土は3層に分けられた。遺物は陶磁器49点、瓦が出土した。

P18=SK127 (第5・9・10図 図版2)

建物跡中央部に位置する。中央部を構成する柱跡である。平面は0.68×0.63mの円形である。確認された断面は深さ0.37mの逆台形である。埋土は1層である。遺物は擂鉢1点が出土した。

P03=P243 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南に位置する。南を構成する柱跡列である。平面は0.80×0.68mの不整梢円形である。確認された断面は深さ0.42mの箱形である。底面に根石と思われる礫を有する。埋土は3層に分けられた。遺物は陶磁器27点、瓦が出土した。

P04=P373 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南の柱跡列、P03の西に位置する。平面は0.71×0.68mの不整円形である。確認された断面は深さ0.46mの箱形である。底面に根石がある。埋土は2層に分けられた。遺物は出土していない。

P05=P223 (第5・9・11図 図版2)

P04の西に位置する。平面は 0.69×0.66 mの円形である。深さ0.58mの箱形である。東側底面は一段下がる。埋土は3層に分けられた。2層と3層の境に扁平礫がある。遺物は陶磁器の碎片が出土した。

P06=P393 (第5・9・11図 図版2)

SB06-P05の西に位置する。平面は 0.75×0.73 mの円形である、確認された断面は深さ0.50mの箱形である。埋土は1層である。遺物は瓦が出土した。

P19=P291 (第5・9・11図 図版2)

建物跡西辺中央に位置する。平面は 0.69×0.67 m、深さ0.53mの箱型である。埋土は2層である。1層に扁平礫を含む。遺物は出土していない。

P07=P219 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南西に位置する。建物の隅柱跡である。平面は 0.77×0.69 mの円形である。確認された断面は深さ0.58mの箱形である。埋土は1層で東に位置するP06と規模・形状ともに近似する。

遺物は出土していない。

P14=P221 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南側に位置する。建物跡南側を構成する柱跡である。平面は 0.73×0.70 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.82mの深い箱形である。埋土は3層に分けられた。遺物は出土していない。

P10=SE06 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南側の柱跡列の東端に位置する。平面は 0.75×0.74 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.65mの箱形である。埋土は2層に分けられた。遺物は瓦が出土した。

P15=P283 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南側に位置する。建物跡南側を構成する柱跡である。P06が南に位置する。平面は 0.73×0.68 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.60mの歪な箱形である。底面中央は若干窪む。埋土は2層に分けられた。遺物は瓦が出土した。

P12=P248 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南側に位置する。建物跡南側を構成する柱跡である。P03が南に位置する。平面は 0.72×0.65 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.60mの箱形である。埋土は3層である。遺物は陶磁器6点、瓦が出土した。

P17=SK139 (第5・9・11図 図版2)

建物跡中央部に位置する。建物跡中央部を構成する柱跡である。この西にP18がある。平面は 0.69×0.64 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.34mの浅い箱形である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器の細片が出土した。

P13=P222 (第5・9・11図 図版2)

建物跡南側に位置する。建物跡南側を構成する柱跡である。P17の南に位置する。平面は 0.68×0.62 mの不整円形である。確認された断面は深さ0.54mの歪な箱形である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器4点が出土した。

建物跡2（SB07）（第5・9・12図 図版2）

調査区全体にわたって確認された。東西桁行35m、南北梁行20mによる建物跡である。北東部は現代の整地によって柱穴は失われている。確認した範囲の約425m²以上はあったと思われるが、SB06の各辺から2.5m内側に収まる規模であったと想定される。全部で24基の柱穴からなり、いずれもSB06との切り合いは認められない。建物の間取りはまず南北4間、東西3間の空間いわゆる大広間を配し、この西辺中央からさらに西へ南北1間、東西1間の突き出した空間いわゆる小部屋が並んで配されている。同様の小部屋は大広間の北東隅と南東隅を仕切って設置されている。

また大広間より東に2間離れて小部屋があり、この北側一帯が現代の整地によって柱穴は失われているがおそらく棟続きであったと思われる。なお建物跡北辺に接して礫列SB05、建物中心に相当する柱穴周囲で礫列SB03がある。

P01=P369（第5・9・12図 図版2）

建物跡西側に位置する。建物跡西側を構成する柱跡である。平面は0.67×0.66mの不整円形である。確認された断面は深さ0.39mの逆台形状である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器4点、瓦が出土した。

P02=P434（第5・9・12図 図版2）

建物跡西側の南隅に位置する。平面は0.70×0.68mの円形、確認された断面は深さ0.35mの歪な浅い箱形である。埋土は1層である。遺物は出土していない。

P08=P358（第5・9・12図 図版2）

建物跡西南隅に位置する。平面は0.80×0.78mの円形と推定される。確認された断面は深さ0.49mの逆台形である。埋土は1層である。遺物は陶磁器3点が出土した。

P10=SK120（第5・9・12図 図版2）

建物跡北辺に位置する。建物跡北辺を構成する。平面は0.71×0.67mの円形である。確認された断面は深さ0.45mの箱形である。埋土は1層である。遺物は出土していない。

P11=SK121（第5・9・12図 図版2）

建物跡北側に位置する。建物跡北辺を構成しP10の東に位置する。平面は0.74×0.74mの円形である。確認された断面は深さ0.43mの箱形である。埋土は1層である。遺物は陶磁器3点が出土した。

P18=P564（第5・9・12図 図版2）

建物跡大広間北側に位置する。平面は0.68×0.58mの不整梢円形である。確認された断面は深さ0.23mの箱型である。埋土は1層である。遺物は陶磁器3点が出土した。

P12=P335（第5・9・12図 図版2）

建物跡大広間北側に位置する。平面は0.71×0.58mの不整梢円形である。確認された断面は深さ0.16mで浅く、皿状である。埋土は1層である。遺物は出土していない。

P19=P559（第5・9・12図 図版2）

建物跡大広間北隅に位置する。平面は0.69×0.62mの不整円形である。確認された断面は深さ0.36mの箱形である。底面中央に浅い小穴を有する。埋土は1層である。遺物は陶磁器細片、焼

縮めが出土した。

P16=P25（第5・9・12図 図版2）

建物跡南側に位置する。建物跡大広間南側を構成する。平面は $0.67 \times 0.66\text{m}$ の円形である。確認された断面は深さ 0.23m の浅い箱形である。埋土は1層である。遺物は出土していない。

P20=SK68（第5・9・12図 図版2）

建物跡南東柱穴列に位置する。平面は $0.70 \times 0.63\text{m}$ の不整円形である。確認された断面は深さ 0.19m の浅い箱形である。底面に若干の凹凸がある。埋土は1層である。遺物は瓦が出土した。

P21=SK09（第5・9・12図 図版2）

建物跡南東に位置する。平面は $0.98 \times 0.81\text{m}$ の不整梢円形である。確認された断面は深さ 0.43m の逆台形状である。埋土は3層である。遺物は陶磁器細片、土師質甕、擂鉢が出土した。

P17=SK125（第5・9・12図 図版2）

建物跡南東に位置する。建物跡中心の柱跡。平面は $0.69 \times 0.66\text{m}$ の不整円形である。確認された断面は深さ 0.28m の不整な逆台形である。埋土は1層である。遺物は土瓶蓋1点が出土した。

本ピット北にSB03が隣接する。

敷石1（SB05）（第5・9・10図 図版2）

SB07の付帯設備である。2Cグリッドで確認する。規模は（残存値）長さ 7.50m 、幅 0.90m 、深さ 0.10m である。拳大の角礫を配列する。遺物は陶磁器101点、土師質甕、土師質土器、瓦が出土した。

敷石2（SB04）（第5・9・10図 図版2）

SB06の付帯設備である。4Cグリッドで確認する。規模は（残存値）長さ 2.30m 、幅 0.60m 、深さ 0.20m である。拳大の角礫を配列する。遺物は陶磁器確認9点、土師質甕、瓦が出土した。

敷石3（SB03）（第5・9・10図 図版2）

SB07の付帯設備である。4Dグリッドで確認する。規模は（残存値）長さ 2.00m 、幅 1.00m 、深さ 0.10m である。拳大の角礫を配列する。遺物は陶磁器11点、瓦が出土した。

建物跡3（SB01）（第5・13図 2表 図版3）

調査区南東端に位置する。6F-Eグリッドで確認する。規模は南北 8m で北側は現代の整地によって失われている。南側は調査区外へ延びている。幅は 3.0m である。柱穴が9基確認する。

東側には石を配列した痕跡が見られる。また 0.5m 角の礎石と思われる礎が並列して2基確認している。遺物は陶磁器74点、瓦、貨幣、焼締め、焼塙壺が出土している。

SK05（第5・13図 図版16）

調査区南東、6Eグリッドで確認する。規模は長軸 1.20m 、短軸 1.05m 、深さ 0.20m の不整形である。埋土は1層である。遺物は出土していない。

2. 遺物

(1) 陶磁器、土師質瓦質土器、金属製品

SB06-P08 陶磁器（第48図 5表 図版37）

1は眠平焼きの皿と思われる。19世紀代である。2は陶器の高岡式ガイシである。昭和期である。

SB06-P02 陶磁器（第48図 5表 図版37）

3は白泥釉の陶器鉢である。底部は無釉で内外面には砂が付着する。

SB06-P11 土師質瓦質土器（第48図 11表 図版37）

4は土師質甕である。下部は欠損している。体部は直線的に立ち上がり、口縁は肥厚している。

SB06-P12 土師質瓦質土器（第48図 11表 図版37）

5は土師質のナデ調整をした混炉である。

SB06-P09 金属製品（第48図 17表 図版37）

6は鉄釘である。断面は正方形である。

SB07-P26 陶磁器（第48図 5表 図版37）

7は染付の一号徳利である。昭和期である。

SB05 陶磁器（第49図 5表 図版37）

8・9は磁器である。8は染付端反碗で外面に花文と多重圈線文がある。見込みにも花文がある。砥部焼きと思われる。9は染付端反碗の碗蓋である。外面に「福」字、内面に四方櫻があり、松竹梅文を環状にめぐらす。10・11は陶器である。10は内外に灰釉掛流しの水注である。

11は外面褐釉の土瓶蓋である。19世紀代である。

SB04 土師質瓦質土器（第49図 11表 図版37）

12は土師質甕である。外面にナデ、内面に円形の当具痕が見られる。

SB01 陶磁器（第49図 5表 図版37）

13は磁器の染付皿である。見込みに網目と草花文、高台内に1重圏線と「大明成化年製」の文字がある。18世紀後半頃と思われる。14は土瓶の注ぎ口である。19世紀代である。

(2) 近代遺構の埋土から出土した瓦

SB06-P01（第96図 29表 図版51）

1は軒平瓦であり瓦当文様は均整唐草文で唐草文は下一上の二転である。中心文様については范型の欠損により不明である。

SB06-P03（第96図 23・35表 図版51）

2は鬼瓦である。丸頭型・海津型で、深い線刻により内区と外区を区切る。中心には鬼面が象られていたようで耳部のみ遺存しており、鬼面頭部は中空である。本体頭部は鳥衾瓦の受部が面取りされる。内面は削り出し成形による。

3は軒丸瓦で瓦当文様が珠文松皮菱文（松皮菱I類）である。珠数は12個とみられる。外面は細かいミガキ調整で中央部は斜位のナデ調整である。コビキAである。瓦当径は4寸8分である。

SB06-P21（第96図 23表 図版51）

4は軒丸瓦で瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で巴は小振りで尾が長い。瓦当径は5寸2分である。

SB06-P23 (第96図 35表 図版51)

5は鰐瓦の体部中位の破片で鰐部が一部遺存する。表面には鱗の表現が認められるが平面半円形の粘土板を個々に貼付し作り出している。鱗の接着面には櫛状工具による線刻が認められる。

SB06-P26 (第96図 27表 図版51)

6は丸瓦である。中央部に円形の釘穴が認められる。外面は幅の広いミガキ調整である。コビキBである。

SB07-P21 (第96図 34表 図版51)

7は箱熨斗瓦で外面はナデ調整。側面に幅3cm程の鰐部がつく。

SB05 (第96図 23・27表 図版51)

9は軒丸瓦の瓦当部で金箔押瓦で、瓦当文様が珠文松皮菱文（松皮菱I類）。瓦当面凸部の周縁部および松皮菱部分に僅かに朱漆が、松皮菱部分に金箔が遺存している。珠数は12個とみられる。

8は丸瓦で厚手で玉縁部は短い。丸部外面はミガキ調整であるが粗雑で未調整部を多く残す。コビキBで吊紐痕を残す。

SB01 (第97図 23表 図版51)

10は軒丸瓦である。瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴の尾が長く、珠数は16個とみられる。凹面にはコビキ痕が認められる。瓦当径は4寸5分である。

SB01-P01 (第97図 27・34表 図版51)

11は丸瓦である。比較的薄手であり焼質も堅緻で光沢をもつ焼である。明治期の瓦とみられる。

12は平瓦転用の加工円盤で、周縁は研磨され平滑である。

SB01-P05 (第97図 23表 図版51)

13は軒丸瓦であり瓦当部のみ遺存する。丸部との接合部は櫛状工具による線刻が認められる。瓦当文様は珠文松皮菱文（松皮菱I類）で、珠数は12個とみられる。

SB01-P06 (第97・98図 23・27・29・35・37表 図版51)

14・17・18は軒丸瓦の瓦当部である。18が金箔押瓦で瓦当文様が珠文松皮菱文（松皮菱II類）である。瓦当面凸部の周縁部および松皮菱部分に僅かに朱漆が遺存している。14が瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴の尾が長い。珠数は15個とみられる。瓦当径は4寸8分である。

16は丸瓦で頭部は欠失する。厚手で玉縁部は短い。玉縁部に横走する沈線が4条認められる。丸部外面ミガキ、コビキBである。

15は軒平瓦の瓦当部で瓦当文様は菊花文・均整唐草文で唐草文は下二上の二転である。

17は平瓦で完形である。凹面はミガキ調整である。長さ9寸7分である。

19・20は鬼瓦である。19が京型で、海津型とみられる。右側の鰐部のみ遺存する。内面は削り取り成形による。20が丸張型・数珠掛型・跨ぎ型で、連珠溝は突帯により形成され、その中には径5cm程の連珠が配置される。連珠の接合面は櫛状工具による線刻が認められる。内面は削り取り成形である。側面に1孔穿孔される。

SB01-P07 (第98図 34・35表 図版51)

21は箱熨斗瓦で外面はナデ調整。側面に幅4cm程の鰐部がつく。

22・23は鬼瓦で、22が左側角部であり、横断面形状は円形を呈する。下方には粘土紐を貼付して成形され

た眉毛の表現が3本認められ、その外面には毛髪を表す縦位の線刻が認められる。外面は細かなミガキ調整である。先端部は漆縫により補修されている。23が牙部の破片であり、横断面形状は方形を呈し、外面はナデ調整である。

24は鰐瓦の胸鱗部で鱗部は現存6段認められる。本体から脱落しており、裏面には接合のための櫛状工具による縦位の線刻が認められる。

SB01-P09 (第98図 23表 図版51)

25は軒丸瓦の瓦下半部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴の尾が長い。珠数は18個とみられる。

番号	長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物
P1	0.46m	0.37m	0.15m	円形	瓦
P2	0.53m	0.42m	0.26m	梢円形	磁器2点 瓦
P3	0.57m	0.40m	0.37m	梢円形	陶磁器3点 瓦
P4	0.48m	0.41m	0.19m	梢円形	陶器1点 瓦
P5	1.18m	0.77m	0.84m	梢円形	陶磁器18点 土師質土器 瓦
P6	1.37m	0.75m	1.02m	梢円形	陶磁器22点 瓦
P7	1.50m	0.94m	0.76m	梢円形	陶磁器14点 瓦
P8	0.64m	0.55m	0.15m	梢円形	瓦
P9	1.44m	0.95m	0.88m	梢円形	陶磁器16点 瓦質系 壺 瓢 土師質土器 瓦

第2表 SB01 PIT観察表



第8図 被爆前の八丁堀付近
(空中写真は米軍撮影、国土地理院発行)

V 近世の遺構と遺物

1. 遺構

近世面では、建物跡、石列を配した区画溝、溝状遺構、井戸、土坑、P I T群を多数確認した。

建物跡4 (SB08・SV39) (第6・14・16図 図版4)

調査区西側、3B・3Cグリッドにまたがって確認する。桁行は南北方向約8m、梁行は東西方向約4mで、柱穴および礎石列を矩形に配した側柱構造の建物跡である。南北方向の柱間は約2mで1間、梁行に4mで3間の柱穴9基からなる。SV39は当初溝として想定したが、調査の結果、柱穴および根石間を掘りつなげた布掘りと確認する。建物を構成するこれらの遺構から遺物は出土していない。

建物跡5 (SA10) (第14・17図 図版4)

調査区の南西側、2E・3Eグリッドで確認する。東西10mにわたって4基の柱跡が並ぶ。柱間は約2mである。P1～P3は4mで、その間の柱跡は確認できなかった。柵列と考えられたが、調査区外へ伸びて、構成している可能性があるため建物跡とした。18世紀後半のSV18に切られている。遺物は出土していない。

柵列

SA01 (第13図 図版3)

調査区東側、5E・6Eグリッドで確認する。長さ6mの柵列である。遺物は瓦が出土した。

SA04 (第14・16・17図 図版4)

調査区南西側、1D・2D・2C・3D・3E・4E・4Dグリッドにまたがって確認する。柱穴および根石により一連の配列が認められる。南北に並ぶ7基(約10m)とこれに直交して東西に展開する2列の柱跡17基(約12m)からなる。南北方向の柱間は約2mである。P7から西方向に3基の柱跡が並ぶ。P10南端から東に展開するP16～18・P26～28、P19～21・P29～30が同軸方向に配置され、東端部にはSK81が位置する。この柱間は東西に約2m、南北に約1mである。いずれも建物としての配列をなさないため柵ないし築地塀等の区画施設あるいは渡り廊下の根石のみが残存した結果と想定される。遺物は出土していない。

SA05 (第14・16図 図版4)

調査区西側、4Cグリッドで確認する。SA08の軸とほぼ平行に配列する。長さ9.5mの柵列跡である。南側一部はSV22によって消失している。遺物は出土していない。

SA09 (第14・15図 図版4)

調査区南西側、2Dと3Dグリッドで確認する。同規模の柱跡2基がSA04の西側に位置し、P1からP2までの距離は12.88mである。その間に柱穴ないし礎石跡は確認されなかつたが、同軸上に配置することからSA04と関連する柵列の一部かと思われる。遺物は出土していない。

SA11 (第14・15図 図版4)

調査区西側、3C・3Dグリッドで確認する。建物跡4の軸方向と並列している。長さ6mの柵列である。遺物は出土していない。

SA12 (P526・SK124・SK123・P452) (第14・16図 図版4)

調査区西側、3Dグリッドで確認する。南北4mにわたって4基の柱跡が並ぶ。柱間は約2mである。SK123

から遺物は陶磁器 8 点、貨幣が出土している。遺物から 18 世紀前半頃である。

区画溝

SV40 (第18・19図 図版5)

調査区南側、3E・4E・4Dグリッドで確認する。規模は東西に7.50m、南は調査区外へ延びており、南北5.80mである。切石が配されている。切石は大きいもので長さ0.40m、幅0.32m、小さいもので長さ0.30m、幅0.20mである。またSK17によって一部が壊されている。埋土には多数の瓦が確認された。遺物は陶磁器 5 点、土師質甕片、土師質土器片、瓦が出土した。

SV41 (第18・19図 図版5)

調査区中央部、3Dグリッドで確認する。規模は南北方向に2.95m、溝幅0.21mである。切石が配されている。切石は大きいもので長さ0.22m、幅0.21m、小さいもので長さ0.40m、幅0.17mである。一部19世紀代のSK84によって切られている。遺物は瓦が出土した。

SV42 (第18・19図 図版5)

調査区南側、3Eグリッドで確認する。確認時は疊によって覆われていた。南北に1.95mで、南側は調査区外に延びている。この東西に2.45mで、切石による長さ0.84mの配石列が東にのびる。溝幅は0.22mである。切石は大きいもので長さ0.73m、幅0.68m、小さいもので長さ0.29m、幅0.17mである。SK110によって切られている。遺物は陶磁器35点のほか土師質皿、土師質土器、瓦質土器、瓦、焼塙壺が出土した。遺物は18世紀後半を主体とする。

溝状遺構

SV01 (第20図 図版6)

調査区南西側、5E・6E・5F・6Fグリッドで確認する。規模は南北に7.85m、南側は調査区外に延びている。幅は2.26m、深さ0.38mである。溝内西壁に多数の瓦が堆積していた。西壁側には倒立した瓦列を確認した。埋土は6層に分けられた。3・4層はオリーブ褐色土を主体とし、陶磁器、瓦、貝等を含む。2層はオリーブ褐色砂質土、5層は暗オリーブ褐色土で多量の遺物を含む。遺物は陶磁器230点のほか土師質土器、土師質甕片、瓦質片、焼塙壺、キセル、土製品、瓦、貨幣、貝など多種の遺物が出土した。遺物は17世紀中頃～18世紀前半にまとまりがあり、主体は18世紀第2四半期である。

SV02 (第20図 図版6)

調査区南西側、5Eグリッドで確認する。規模は南北に1.58mである。幅は0.24m、深さは0.07mである。埋土は1層である。遺物は陶磁器 4 点のほか瓦質系、土師質土器が出土した。

SV03 (第20図 図版6)

調査区南西側、5Eグリッドで確認する。規模は南北に3.29m、幅0.14m、深さ0.06mである。埋土は1層でオリーブ褐色土が主体である。近代の建物跡に切られている。遺物は出土していない。

SV04 (第21図 図版6)

調査区南側、4Eグリッドで確認する。断続的に確認され、本来は南北方向に連結する 1 条と判断される。確認した規模として①は長さ1.57m、幅0.82m、深さ0.10m、②は長さ3.31mで、南側は調査区外に延びている。幅は0.35m～0.66mで、深さは概ね0.40mである。埋土は3層に分けられた。1・2層から多数の瓦が出土する。SV05に一部を切られている。遺物は陶磁器 2 点のほか土師質甕、土師質土器と多数

の瓦が出土した。

SV05（第21図 図版6・7）

調査区南側、4Eグリッドの2箇所で確認する。本来、南北方向の1条と思われる。①は長さ2.17m、幅0.50m、深さ0.20mである。②は南北1.82mで南側は調査区外に延びている。幅は0.72m～0.92m、深さ0.25mである。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器5点のほか瓦が多数出土した。

SV06（第21図 図版7）

調査区南側、4Eグリッドで確認する。規模は南北方向に5.10mで南側は調査区外に延びている。幅は1.40m～0.97m、深さは0.35m～0.60mである。埋土は5層に分けられた。5層の黒色土から陶磁器、瓦、木製品を多数検出する。SV10を切っている。遺物は陶磁器81点のほか焼締め、土師質皿、土師質土器片、瓦、木製品、硯、焼塙壺、金属製品が出土した。主体は18世紀前半頃である。

SV07（第22図 図版7）

調査区南東側、4D・5Dグリッドで確認する。東西方向に主軸をもつ溝で、規模は長さ13.84m、幅0.49m、深さ0.25mである。埋土は2層に分けられた。遺物は瓦が出土した。SK04・SE05・SK17より先行する。18世紀後半には埋没していたと判断される。

SV08（第21図 図版7）

調査区南東側、5Eグリッドで確認する。東西方向に主軸をもつ溝で、規模は長さ5.71m、幅0.37m、深さ0.14mである。埋土は1層である。遺物は出土していない。重複関係からSK10・SV02・SK25より先行し、このことから18世紀後半には埋没したと判断される。

SV09（第43図 図版7）

調査区南東端、6E・6Fグリッドで確認する。南北軸の溝である。規模は長さ6.25mで南側は調査区外へ延びている。幅は0.56m、深さは0.39mである。埋土は1層である。遺物は瓦片が出土した。19世紀代と判断される。

SV10（第21図 図版7）

調査区南側、4Eグリッドで確認する。南北方向に伸びる溝で南側は調査区外となり、規模は長さ1.80m、幅0.08m、深さ0.13mである。埋土は1層である。SV06に切られている。遺物は出土していない。

SV11（第22図 図版8）

調査区中央部、4C・4Dグリッドで確認する。L字状に屈曲し、規模は全長5.25m、幅0.44m、深さ0.19mである。溝の両端はいずれも近代の整地によって失われている。遺物は陶磁器19点のほか瓦、土師質皿、土師質土器、擂鉢、瓦質系土器が出土した。南側はSB03（近代）と並列していることから、同一構造物の一部の可能性がある。

SV12（第22図 図版8）

調査区中央部よりも東側、4D・5Dグリッドで確認する。東西に長く、規模は長さ15.97m、幅0.36m、深さ0.29mである。東側は現代の整地によって失われている。埋土は2層に分けられた。本遺構は19世紀代のSK57（瓦溜まり）に切られている。遺物は焼塙壺が出土した。

SV13（第23図 図版8）

調査区南東側、5E・6Eグリッドで確認する。基本層序III層面での検出である。主軸は北東方向である。

長さ10.12m、幅1.08m、深さ0.22mである。東側は近代の整地によって失われている。埋土は3層に分けられた。遺物は出土していない。自然流路である。

SV14（第32図 図版20）

調査区中央部、4Cグリッドで確認する。主軸は東西方向である。規模は長さ1.69m、幅0.27m、深さ0.30mである。遺物は出土していない。位置関係からSK48・49の付属施設の可能性がある。

SV16（第23図 図版8）

調査区中央部よりも東側、5Dグリッドで確認する。南北に長く規模は長さ5.73mで、幅は0.99～1.79m、深さは0.34mである。南側はSE12によって切られている。埋土は4層に分けられた。遺物は瓦、木製品、焼塙壺が出土した。SE12は幕末であるからそれよりも先行する。

SV17（第23図 図版9）

調査区中央部よりも東側、5D・5Cグリッドで確認する。南北に長く規模は長さ11.40mである。幅は1.56～2.40m、深さは湧水点に達したところで0.55mである。埋土は5層に分けられた。壁の立ち上がりは緩やかである。SX01の範囲内にあり、SV16と並列状態となる。遺物は陶磁器10点のほか焼締め、土師質皿、土師質土器、貨幣、瓦、木製品、貨幣、植物遺体（シダ）が出土した。18世紀代が主体である。

SV18（第24図 図版9）

調査区中央部よりも西側3C・3D・3Eグリッドで確認する。南北に長く規模は長さ15.49mである。幅1.07～1.84m、深さは0.87mである。南側は調査区外へ延びている。埋土は5層に分けられた。中央部では3・4層から多量の植物遺体、陶磁器、木製品が出土した。北側はSK84によって大きく削られていた。遺物は陶磁器193点のほか焼締め、金属製品、土師質皿、土師質土器、貨幣、キセル、瓦、木製品、土人形、焼塙壺、植物遺体（シダ）等多数が出土した。18世紀後半を主体とする。

SV21（第23図 図版9）

調査区中央部よりも南側、4Dグリッドで確認する。南北軸をとり、長さ4.69m、幅0.93m、深さは0.43mである。埋土は1層である。遺物は陶磁器が21点のほか焼締め、金属製品、土師質皿、焼塙壺、瓦質土器片、キセル、硯、土人形が出土した。SK143の瓦溜りを切っており、19世紀代のものと判断される。

SV22（第25図 図版10）

調査区中央部よりも北側、4C・4Bグリッドで確認する。東西から南北へL字状に屈曲し、全長12.94m、幅1.32～1.77m、深さは0.82mである。南側は現代の整地によって失われている。埋土は5層に分けられた。粘土、砂質土、シルト、砂等流水に由来する堆積状況となる。遺物は陶磁器93点、焼締め、金属製品、土師質皿、瓦質土器片、キセル、硯、土人形、瓦、木製品、鉄製品が出土した。遺物のまとまりから主体は18世紀前半と考えられるが一部19世紀代の遺物が混入する。

SV24（第36図 図版10）

調査区中央部よりも西側、2Cグリッドで確認する。長さは南北に長く3.73mである。幅は1.19m、深さは0.42mである。北側は擾乱によって失われている。埋土は5層に分けられた。SK99を切っている。SV27・SV26・SV32・SV33と並列する。遺物は陶磁器83点、土師質土器、瓦、土人形、石製品が出土した。主体は18世紀前半である。

SV25（第26図 図版11）

調査区南西端、2Dグリッドで確認する。南北に長く全長8.10m、幅0.45m、深さ0.25mである。南側は調査区外へ延びている。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器が6点出土した。

SV26・27（第25図 図版10）

調査区西側、2D・2Cグリッドで確認する。SV27がSV26を切っている。SV26は南北に長く全長6.46m、幅1.14m、深さ0.49mである。埋土は4層に分けられた。遺物は陶磁器11点が出土した。SV27はSV26と同様南北方向に軸をとり長さ5.37m、幅1.07～1.55m、深さ0.44mである。埋土は9層に分けられた。遺物は陶磁器が26点、土師質土器、土師質皿、焼締め、瓦、貨幣が出土した。SV27は遺物から18世紀前半を主体としておりSV26はこれより先行する。

SV29・30・31（第26図 図版10・11）

調査区西端、1D・2D・2Cグリッドで確認する。SV29は東西に長く全長3.97m、幅0.96m～1.39m、深さは0.45mである。断面は箱形である。西側は調査区外へ延び、東側はSV33によって切られている。埋土は3層に分けられた。遺物は陶磁器13点が出土している。SV30は南北に長く全長4.63m、幅1.14m～1.25m、深さ0.46mである。西側は調査区外に延び、南側はSV29によって切られている。埋土は5層に分けられ4・5層の黒褐色土から多数の遺物が出土した。遺物は陶磁器56点、瓦、土師質土器、土師質皿、キセル、土人形、瓦質土器片、石製品が出土した。SV31は南北に長く全長1.09m、幅0.42m、深さ0.10mである。北西側はSV30に切られている。埋土は2層である。SV30は18世紀後半を主体としており、SV31はこれに先行する。

SV33（第26図 図版10・11）

調査区南西端、2Dグリッドで確認する。南北に長く全長7.81m、幅1.05m～1.38m、深さは0.63mである。溝の北側上面は現代の整地によって失われている。南側は調査区外へ延びている。埋土は5層に分けられた。4・5層の黄褐色砂質土と暗オリーブ砂質土は遺物を多量に含む。SK148・SK147に切られている。遺物は陶磁器81点、瓦質土器片、瓦、焼締め、焼塙壺、土人形が出土した。遺物から18世紀後半～19世紀代に埋め戻される。

SV34・35（第26図 図版11）

調査区中央部、4Dグリッドで確認する。SV34は軸が南北方向で長さ2.43m、幅0.42m、深さ0.06mと浅い。SV35もSV34と同様南北軸で、長さ2.03m、幅0.29m、深さ0.08mである。埋土は1層である。SK123によって切られている。遺物はいずれも出土していない。

SV36（第26図 図版11）

調査区中央部、4D・3Dグリッドで確認する。主軸が南北方向で長さ1.30m、幅0.66m、深さ0.06mである。北側はSK118によって切られている。埋土は1層でオリーブ褐色土である。遺物は土師質土器が1点出土した。18世紀後半のSK118より先行する。

SV38（第26図 図版11）

調査区中央部、3Dグリッドで確認する。主軸が南北方向で長さ4.55m、幅0.54m、深さ0.05mである。北側はSK109によって切られている。埋土は1層である。遺物は出土していない。19世紀代のSK109・SK143より先行する。

井戸跡

SE01（第27図 図版12）

調査区の南側、4Eグリッドで確認する。規模は長軸1.66m、短軸1.48mの不正円形である。深さ1.55m、井戸の径は0.65mである。上段の枠は径約0.60mの漆喰製、中下段は木製の井戸枠である。井戸枠内から人頭大の礫が多数確認された。井戸内の土層堆積については湧水のため不明であるが掘り方の埋土は10層に分けられた。遺物は陶磁器5点のほか土師質甕、瓦、瓦質土器が出土した。遺物から18世紀後半を主体とし、19世紀代に廃絶したと判断される。

SE05 井戸状遺構（第27図 図版12）

調査区南側、4Eグリッドで確認する。規模は長軸1.14m、短軸1.08m、深さ1.24mの不整円形である。掘り方、井戸枠の明確な痕跡がなく「井戸状遺構」とした。埋土は3層に分けられた。2層から多数の瓦を確認した。遺物は陶磁器48点、土師質土器、土師質皿、焼締め、瓦、瓦質土器が出土した。遺物から18世紀後半を主体とし、19世紀前半に廃絶したと判断される。

SE08（第27図 図版12）

調査区北側、5Dグリッドで確認する。規模は長軸2.21m、短軸1.65m、深さ1.11mの不整円形である。埋土は4層に分けられた。2層の砂混じり層の除去後、底面に円形プランを検出し、壁面に竹製の籠の痕跡が確認された。井戸枠内に小礫が堆積し井戸枠を抜き取り埋め戻した結果を示している。遺物は瓦、瓦質土器が出土した。19世紀代に廃絶したと判断される。

SE09（第27図 図版12）

調査区南側、5Dグリッドで確認する。規模は長軸1.73m、短軸1.70m、深さ0.77mの不整円形である。埋土は2層に分けられた。2層人の人頭大ほどの角礫・円礫を除去後、井戸枠跡として竹製の籠を確認する。遺物は陶磁器7点のほか、瓦質土器（多数）が出土した。少量の遺物であるが17世紀後半を主体とする。

SE10（第27図 図版13）

調査区北側、5Cグリッドで確認する。規模は長軸2.55m、短軸2.21m、深さ0.66mの不整円形である。井戸はやや南に偏った位置で確認する。井戸の径は約1.01mである。埋土は8層に分けられた。埋土はかなり乱れている。井戸枠を撤去するため大きく掘り込んだものと思われる。遺物は陶磁器19点、土師質土器、土師質甕、瓦質土器、瓦が出土した。少量の遺物であるが17世紀後半が主体である。

SE11（第28図 図版13）

調査区北側、5Cグリッドで確認する。規模は長軸1.89m、短軸1.60m、深さ0.86mの不整円形である。埋土は6層に分けられた。埋土は攪乱の影響を被ったためかなり乱れていた。遺物は陶磁器片、瓦片、レンガ片が出土した。井戸廃絶時は幕末以降と判断される。

SE12（第28図 図版13）

調査区南側、5Dグリッドで確認する。規模は長軸2.80m、短軸2.42m、深さ1.04mの不整円形である。井戸の径は0.70mである。埋土は4層に分けられた。埋土中には拳大相当の角礫、瓦片を含む。籠の痕跡が確認された。遺物は陶磁器25点、土師質皿、土師質甕、瓦、焼締め、瓦質土

器、貨幣が出土した。井戸廃絶時は幕末頃と判断される。

SE13（第6図 図版13）

調査区北側、5C・6Cグリッドで確認する。SE11の東にあたる。調査中に崩落し、そのため土層断面の確認はできなかった。規模は長軸2.16m、短軸1.67mの不整円形である。遺物は陶磁器5点、土師質甕、瓦質壺、瓦、焼締めが出土した。少量の遺物ではあるが主に18世紀前半頃である。

SE14「井戸状遺構」（第28図 図版14）

調査区の北側、5D・6Dグリッドで確認する。規模は長軸2.63m、短軸1.88m、深さ1.14mの不整円形である。埋土は3層に分けられた。埋土中に角礫、埋土ブロックを多数含み、埋め戻しの状態を示す。掘り込みが底面の湧水面まで達しており井戸枠の痕跡は明らかではない。埋土が近隣の井戸と同様の状況と認められ「井戸状遺構」とした。遺物は陶磁器4点のほか土師質甕、瓦質土器、瓦が出土した。少量の遺物ではあるが主に18世紀後半の遺物が出土した。

SE15（第28図 図版14）

調査区中央よりも南側、4Dグリッドで確認する。規模は長軸1.53m、短軸1.45m、深さ1.37mの不整円形である。井戸の径は0.70mである。埋土は6層に分けられた。埋土を除去後、上段に井戸枠撤去後の籠跡と下段に井戸枠が残存していた。本遺構はSK143瓦溜りを切って構築されている。遺物は陶磁器29点のほか土師質土器、土師質甕、焼塙壺、瓦、瓦質土器が出土した。廃絶は19世紀頃と判断される。

SE16（第28図 図版14）

調査区中央よりも北側、6Cグリッドで確認する。規模は長軸2.13m、短軸1.93m、深さ0.69mの不整円形である。埋土は4層に分けられた。人頭大位の角礫、瓦片を含む。井戸枠の籠が確認された。遺物は陶磁器5点、瓦、瓦質土器が出土した。少量ではあるが主に19世紀後半の遺物が出土した。

SE17（第25図 図版14）

調査区中央よりも北側、4Bグリッドで確認する。一部消失しており、確認した規模は長軸1.34m、短軸0.85m、深さ0.85mの不整円形である。井戸の径は0.70mである。埋土は3層に分けられた。埋土中から籠を確認した。SV22を切って構築されている。遺物は陶磁器33点のほか土師質土器、瓦質系土器、焼塙壺、瓦が出土した。18世紀前半頃を主体とする。

SE18（第29図 図版15）

調査区中央よりも南側、4D・3Dグリッドで確認する。規模は長軸1.02m、短軸0.91m、深さ1.44mの不整円形である。井戸の径は0.65mである。埋土は7層に分けられた。埋土を除去後、長さ0.86m井戸枠材を確認した。湧水下にも井戸枠が確認された。遺物は陶磁器13点のほか焼締め、土師質土器、瓦質系土器、瓦、土師質皿が出土した。18世紀後半頃使用していたと判断される。

SE19（第29図 図版15）

調査区中央よりも北東側、5Cグリッドで確認する。規模は長軸1.03m、短軸0.93m、深さ0.54mの不整円形である。井戸枠の径は0.40mである。埋土は炭化物、人頭大の角礫、瓦片を投棄し埋め尽くした状況である。遺物は瓦が主体である。時期は不明である。

SE20（第6図 図版14）

調査区北側、4Bグリッドで確認する。規模は長軸2.03m、短軸1.73mの不整円形である。確認面はSX01の植物遺存体と同レベルである。湧水面直上まで削平が及んでいたため、確認面から数センチで湧水に到達した。井戸枠の板材片と籠を確認した。遺物は陶磁器15点、土師質土器、焼締め、簪が出土した。少量の遺物であるが19世紀代と判断される。

SE21（第29図 図版15）

調査区南側、3C・3Dグリッドで確認する。規模は長軸1.55m、短軸1.45m、深さ1.02mの不整円形である。井戸の直径0.60mである。埋土は7層に分けられた。瓦、陶磁器、礫が多数混入している。また、井戸枠2段分を確認する。井戸枠の上段は変形していたが、下段は残りが良く材の長さ0.80mである。遺物は陶磁器13点、土師質土器、瓦質系土器、焼締め、瓦、金属製品が出土した。少量の遺物であるが廃絶は19世紀頃と判断される。

SE22（第29図 図版15）

調査区中央部、4Dグリッドで確認する。規模は長軸1.74m、短軸1.69m、深さ0.89m、の不整円形である。井戸は径0.86mである。埋土は8層に分けられた。多数の陶磁器、瓦、礫が混入している。埋土除去後に籠を確認する。遺物は陶磁器39点、瓦、土師質皿が出土した。遺物から18世紀後半からのもので廃絶は19世紀第2四半期である。

SE23（第29図 図版16）

調査区中央部よりも南側、4Dグリッドで確認する。規模は長軸1.06m、短軸1.05m、深さ0.28mの不整円形である。埋土は5層に分けられた。籠を確認した。遺物は陶磁器3点、瓦、貨幣が出土した。遺物から幕末頃には廃絶したものと判断される。

土坑

SK04（第30図 図版16）

調査区中央部よりも南側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.80m、短軸1.34m、深さ0.40mのいびつな楕円形である。確認した断面は変形した皿状である。埋土は5層に分けられた。遺物は陶磁器41点、土師質土器、焼塙壺、瓦、瓦質土器、焼締め、土人形で、このほか貝殻が出土した。遺物から18世紀後半の廃棄土坑である。

SK10（第30図 図版16）

調査区中央部よりも南側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.50m、短軸1.58m、深さ0.65mの不整円形である。確認した断面は皿状である。埋土は11層に分けられた。東側は近代の建物跡によって削られている。また西側は現代の整地によって失われている。遺物は陶磁器27点をはじめ土師質土器、瓦、焼締めが出土した。遺物から18世紀前半の廃棄土坑である。

SK12（第30図 図版16）

調査区中央部よりも南側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.99m、短軸0.95m、深さ0.15mの不整円形である。確認した断面形状は浅い箱形である。埋土は1層に分けられた。遺物は陶磁器10点が出土した。遺物から19世紀代の性格不明の土坑である。

SK13（第30図 図版17）

調査区中央部よりも南側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.65m、短軸0.55m、深さ0.26mの不整円形である。確認した断面は底面が「U」字状となる。埋土は1層である。18世紀前半のSK41を切っている。遺物は陶磁器4点が出土した。18世紀前半以降の性格不明の土坑である。

SK14（第30図 図版17）

調査区中央部よりも南側、4E・4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.72m、短軸0.72mのほぼ円形である。確認した断面は深さ0.14mの浅い皿状である。埋土は1層である。SV07を切っている。

遺物は陶磁器5点のほか土師質土器、焼締めが出土した。遺物は少量であるが18世紀後半である。性格は不明土坑である。

SK15（第30図 図版17）

調査区中央部よりも南側、4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.55m、短軸0.53m、深さ0.05mのほぼ円形である。埋土は1層である。遺物は土師質甕1個体が出土した。「埋甕」土坑である。時期は不明である。

SK16（第31図 図版17）

調査区中央部よりも南側、5E・4Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.13m、短軸0.43m、深さ0.40mの不整梢円形である。確認した断面は箱形である。埋土は3層に分けられた。SE05に切られている。遺物は陶磁器17点、土師質土器、土師質甕が出土した。遺物から18世紀前半の土坑である。性格は不明土坑である。

SK17（第31図 図版18）

調査区中央部よりも南側、4D・4Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.66m、短軸1.52m、深さ0.29mの不整円形である。確認した断面は箱形である。埋土は1層である。埋土中に瓦が多数堆積していた。近代の建物跡に切られている。遺物は陶磁器51点、瓦、焼締め、土師質土器、土師質皿、瓦質土器、土師質甕片、土人形が出土した。遺物から19世紀前半の廃棄土坑と判断される。

SK19・20（第31図 図版18）

SK19・20は調査区南端、4Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.40m、短軸0.89m、深さ0.29mの不整梢円形である。確認した断面は箱形である。埋土は2層に分けられた。埋土中に瓦が多数堆積していた。遺物は陶磁器4点、焼締め、土師質皿、瓦質土器、土師質甕片、瓦、貝殻が出土した。SK20に切られており、SK19が先行する。SK20は長軸0.22m、短軸0.15m、深さ0.31mである。埋土は1層である。陶磁器7点、土器片、瓦が出土した。遺物から、SK19は18世紀前半で廃棄土坑と判断される。SK20は19世紀前半頃と思われ、性格は不明である。

SK22（第31図 図版18）

調査区南側、4Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.35m、短軸0.95m、深さ0.12mのくびれのある梢円形ないし瓢箪形である。確認した断面の形状は皿形である。埋土は2層に分けられた。遺物は瓦が多数出土した。瓦溜りと判断される。時期は不明である。

SK23（第31図 図版18）

調査区中央部よりも南東側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.40m、短軸0.55m、深さ0.12mである。埋土は1層である。遺構の北側を残し、他は現代の整地によって失われている。明確な形状は不明である。遺物は陶磁器7点、瓦質土器、土師質皿が出土した。遺物から19世紀頃の廃棄土坑と判断される。

SK25（第31図 図版18）

調査区中央部よりも南東側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.65m、短軸0.44m、深さ0.10mの不整円形である。確認した断面は近代の建物跡によって遺構の半分ほど削平されているため不明である。遺物は出土していない。また本遺構はSV08と重複し、SV08よりも新しい。性格は不明である。

SK26（第31図 図版18・19）

調査区中央部よりも南東側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.35m、短軸0.34m、深さ0.19mの不整円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器7点、土師質土器、瓦、瓦質土器が出土した。遺物は少量であるが19世紀頃と判断される。性格は不明である。

SK27（第31図 図版19）

調査区中央部よりも南東側、6Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.76m、短軸0.70m、深さ0.21mの不整円形である。確認した断面はレンズ状である。埋土は2層に分けられた。当初は瓦溜りとの重複関係のある2基として確認する。調査の結果、重複部分の切り合いに明確な境界が確認されないことから単独の遺構と判断した。遺物は陶磁器29点、瓦質土器、土師質皿、甕、瓦が出土した。遺物から18世紀後半～19世紀代の瓦の廃棄土坑である。

SK29（第31図 図版19）

調査区中央部よりも南東側、4E・5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.78m、短軸0.62m、深さ0.32mの不整円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は1層に分けられた。SK26（19世紀代）を切っている。遺物は瓦が出土した。性格は不明である。

SK31（第31図 図版19）

調査区中央部よりも南東側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.69m、短軸0.53m、深さ0.15mの不整円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。P129・P128に切られている。遺物は磁器1点、土師質甕片、瓦質壺片が出土した。1点のみではあるが端反碗からおよそ18世紀後半～19世紀頃と判断される。性格は不明である。

SK34（第6図 図版20）

調査区中央部よりも南東、5Eグリッドで確認する。瓦の纏まりを確認した。規模は（現存長）長軸1.50m、短軸1.21mである。破片状態の金箔瓦、鬼瓦が出土しており、整地に伴う瓦溜りと判断した。時期は不明である。

SK36（第32図 図版20）

調査区中央部よりも東側、5Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.58m、短軸0.56m、深さ0.21mのほぼ円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。遺物は瓦が出土した。

瓦溜りと判断した。時期は不明である。

SK39（第32図 図版20）

調査区中央部よりも南側、4Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.39m、短軸0.69m、深さ0.13mである。瓦の堆積層を除去後に確認した。南北に長い長方形である。確認した断面は皿状である。南側は調査区外へ延びている。遺物は瓦が出土した。整地層に伴う堆積層の堆みの可能性も考えられる。重複するSK41よりも新しいことから下限は幕末までと判断される。

SK41（第32図 図版20）

調査区中央部よりも南側、4E・5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸5.99m、短軸1.30m～3.22m、深さ0.70mで、南側が調査区外へ延びている。いびつな瓢箪型である。確認した断面は皿状である。埋土は7層に分けられた。5層は植物遺体層と遺物を含む。4層も植物遺体と陶磁器、瓦、木製品が出土した。遺物は陶磁器3点、瓦、焼締め、土師質土器、土師質甕、火鉢、焼塩壺、サイコロ等が出土した。遺物から18世紀前半の廃棄土抗と判断される。

SK46・47（第32図 図版20）

調査区中央部よりも東側、5D・6Dグリッドで確認する。SK46の規模は（現存長）長軸0.44m、短軸0.43m、深さ0.11mの不整円形である。SK47と共に上半分を大きく削平されている。埋土は漆喰のブロックを含む。SK47は長軸0.78m、短軸0.69m、深さ0.21mの不整円形である。土抗中央に陶器甕とその脇に磁器が伏置された状態で出土した。甕外周には瓦片を打ち込んで補強しており、SE14との関連が強い。SE14は18世紀後半の遺物が確認されている。「埋甕」土抗と思われる。

SK48・49（第32図 図版20）

調査区中央部よりも東側、4Cグリッドで確認する。SK48の規模は（現存長）長軸1.92m、短軸0.97m、深さ0.28mの不整円形である。SK49は長軸1.20m、短軸1.11m、深さ0.27mの不整椭円形である。確認した断面は皿状である。埋土はいすれも1層である。隣接するSV11・14との関連遺構の可能性が強い。遺物は陶磁器15点、瓦、土師質土器、焼締めが出土した。幕末頃の構造物基礎に伴う整地に由来する土抗と判断される。

SK51（第33図 図版21）

調査区中央部側、4C・4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.52m、短軸1.24m、深さ0.24mの長方形である。確認した断面は皿状である。埋土は4層に分けられた。上位に赤色ブロックを含む。埋土中に、人頭大角礫の配置が確認された。遺物は陶磁器30点、土製品、硯、瓦が出土した。SV11によって切られている。陶磁器は纏まっており17世紀代の廃棄土抗である。

SK57（第33図 図版22）

調査区中央部よりも東側、5D・5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸4.72m、短軸1.48m、深さ0.54mの不整椭円形である。確認した断面は皿状である。埋土は5層に分けられた。埋土中は瓦を主体に礫、焼土、粘土ブロック、多数の遺物を含む。上面は近代の攪乱と建物跡の土抗に切られている。遺物は陶磁器204点、石製品、瓦、土師質皿、焼締め、瓦質土器、焼塩壺、土人形、硯が出土した。19世紀代の瓦の廃棄土抗である。

SK60（第33図 図版22）

調査区中央部よりも東側、6D・5Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.14m、短軸0.97m、深さ0.14mの不整円形である。埋土は2層に分けられた。SK52に切られている。遺物は陶磁器6点、瓦、土師質皿片、焼締め片、瓦質土器が出土した。19世紀代のSK52より先行する。性格は不明である。

SK62（第33図 図版22）

調査区中央部よりも南側、4E・4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.60m、短軸0.90m、深さ0.25mの楕円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。西側はSK143によって切られ、北側はSV17（18世紀代）を切っている。また東側はP198によって切られている。遺物は陶磁器17点、瓦、土師質皿、焼締め、瓦質土器、土人形が出土した。遺物から18世紀中頃の廃棄土坑と判断される。

SK63（第33図 図版22）

調査区東側、6Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.27m、短軸0.88m、深さ0.28mの楕円形である。確認した断面は皿状である。遺物は陶磁器77点、土師質土器、瓦が出土した。遺物から19世紀頃と判断される。性格は不明である。

SK64（第34図 図版22）

調査区東側、5Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.87m、短軸0.79m、深さ0.72mの楕円形である。確認した断面は「U」字状である。埋土は3層である。遺物は陶磁器13点、瓦、土人形が出土した。遺物から19世紀代の土坑である。性格は不明である。

SK66（第34図 図版22）

調査区東側、5D・6Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.95m、短軸1.60m、深さ0.62mの不整円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は2層である。遺物は陶器4点、土師質甕、瓦質土器片、瓦、土人形が出土した。遺物は少量であるが19世紀代の土坑である。性格は不明である。

SK73（第34図 図版23）

調査区東側、5Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.61m、短軸1.38m、深さ0.48mの不整円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は1層である。遺物は陶磁器35点、瓦、焼締め、土師質甕、瓦質土器片、土師質皿片、土人形が出土した。遺物から19世紀代の廃棄土坑と判断される。

SK74（第34図 図版23）

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.79m、短軸0.84m、深さ0.21mの不整円である。確認した断面は皿状である。埋土は2層に分けられた。近代の建物跡に切られている。遺物は陶磁器5点、瓦、瓦質系が出土した。遺物は少量であるが19世紀代の廃棄土坑と判断される。

SK76（第34図 図版23）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.63m、短軸0.51m、深さ0.10mの不整円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。遺物は陶磁器10点、土師質土器、土師質皿、瓦、瓦質系土器が出土した。遺物は少量であるが18世紀代と判断される。性格は不明である。

SK77（第34図 図版23）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.84m、短軸0.90m、深さ0.29mのいびつな楕円形である。断面は逆台形状である。埋土は1層である。SV18に切られている。遺物は陶磁器38点、土師質土器、土師質皿、焼塙壺、瓦、瓦質土器、土人形が出土した。遺物から18世紀前半の廃棄土坑と判断される。

SK80（第34図 図版23）

調査区中央部よりも南側、3D・3Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.55m、短軸1.00m、深さ0.23mの楕円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は1層である。多数の瓦をブロック状に含む。遺物は陶磁器22点、土師質土器片、土師質皿片、土師質甕片、瓦質土器、瓦、焼締めである。遺物から19世紀前半の廃棄土坑と判断される。

SK81（第34図 図版24）

調査区中央部よりも南側、3Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.12m、短軸1.11m、深さ0.20mのほぼ円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は1層である。上部は現代の整地によつて失われている。確認した埋土は底面直上の20cmほどである。底面では樽底と瓶を検出した。瓶は幅0.02mで、樽板は長さ0.97mのものと短いもので0.75mのものである。陶磁器6点が出土している。遺物から18世紀後半～19世紀前半の埋桶土坑と判断される。

SK84（第35図 図版24）

調査区中央部よりも西側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.60m、短軸3.14m、深さ0.23mである。北側は攪乱のため形状は不明瞭である。確認した断面は皿状である。埋土は2層に分けられた。2層はSV18起源の黒褐色砂が主体である。SV18を切っている。遺物は陶磁器64点、瓦、瓦質土器、土師質皿、焼締め、土人形、貨幣が出土した。遺物から19世紀第2四半期の廃棄土坑である。

SK88（第34図 図版24）

調査区中央部よりも西側、3Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.13m、短軸1.62m、深さ0.80mの不整円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は4層に分けられた。底面は砂層で湧水となる。比較的大きな石が検出された。SV39を切っている。遺物は陶磁器44点、瓦が出土した。遺物から19世紀第2四半期の井戸の可能性が高い土坑である。

SK89（第34図 図版24）

調査区中央部よりも西側、3Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.79m、短軸1.33m、深さ0.13mの不整円形である。確認した断面は皿状で、底面は凹凸を有している。埋土は1層である。SK90を切っている。遺物は陶器2点、瓦が出土した。整地層に伴う窪みの可能性もある。SK90は19世紀代であるから、それよりも新しい。

SK90・101（第35図 図版24・25）

調査区中央部よりも西側、3C・4C・3D・4Dグリッドで確認する。SK90の規模は（現存長）長軸3.35m、短軸2.73m、深さ0.70mの方形である。SK101の規模は4.10m、短軸2.65m、深さ0.55mのやや三角状である。埋土はSK101と合わせて7層に分けられた。埋土は瓦片、礫、陶磁器破片、炭化物、木製品、植物遺存体など多数混在し乱れた堆積となっていた。SK89に切られている。遺物はSK90が陶磁器37点、

SK101は陶磁器96点、いずれも焼締め、土師質甕、土師質皿、瓦質壺片、瓦、焼塙壺、木製品、人形が出土した。SK90・101は遺物から19世紀代の廃棄土坑と判断される。

SK91（第35図 図版25）

調査区の中央部よりも北西側、3Bグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.96m、短軸1.62m、深さ0.42mの方形状である。確認した断面は逆台形である。埋土は4層に分けられた。人頭大～拳大の礫を主体に埋められている堆積状況から井戸の埋め戻しと類似しているが、井戸であった痕跡を認めるることはできなかった。遺物は陶磁器37点、土師質土器、焼塙壺、硯、瓦、土人形等が出土した。遺物から18世紀後半の廃棄土坑と判断される。

SK92（第35図 図版25）

調査区中央部よりも北西側、2Bグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.60m、短軸1.16m、深さ0.42mの楕円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は4層に分けられた。SK102を切っている。遺物は陶磁器24点、土師質甕片、瓦質壺片、瓦、焼締め、焼塙壺、土人形、貨幣等が出土した。遺物から18世紀後半～19世紀代の廃棄土坑と判断される。

SK95（第35図 図版25）

調査区中央部よりも北西側、2Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.62m、短軸0.94mである。平面は不整円形である。大きさ約1.50mの大型礫が存在する。これと同様の大型礫が遺構の外周西側にも存在するが本土坑との関連については不明である。近代の建物跡によって切られている。遺物は陶磁器13点、土師質甕、土師質土器、瓦質土器、焼締めが出土した。遺物から18世紀後半～19世紀代である。性格は不明である。

SK97（第36図 図版25）

調査区南端、2Dグリッドで確認する。多数の礫が確認された。規模は（現存長）長軸0.87m、短軸0.65m、深さ0.50mである。上面は現代の整地によって失われている。また南半分は調査区外となる。0.30m～0.20mの亜角礫および亜円礫によって埋められた状態である。遺物は陶磁器8点、瓦質土器5点が出土した。性格は不明である。

SK99（第36図 図版10）

調査区中央部よりも北西側、2Cグリッドで確認する。東側がSV24によって失われている。規模は（現存長）長軸2.95m、短軸1.32m、深さ0.27mの楕円形である。確認した断面は皿状である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器7点、瓦、土師質皿が出土した。重複関係から本土坑が18世紀前半のSV24より先行する。性格は不明である。

SK100（第36図 図版26）

調査区中央部よりも西側、2Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.59m、短軸0.57m、深さ0.16mのほぼ円形である。遺物は瓦が出土した。時期、性格は不明である。

SK102（第36図 図版25）

調査区北西隅、2Bグリッドで確認する。北側をSK92によって切られている、北端は現代の整地によつて失われている。規模は（現存長）長軸1.60m、短軸1.03m、深さ0.50mの長方形である。確認した断面は逆台形である。埋土は5層に分けられた。遺物は陶磁器9点、土師質皿片、焼締め、瓦、金属製品が

出土した。遺物から17世紀頃の廃棄土坑と判断される。

SK104（第36図 図版26）

調査区西側、2Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.32m、短軸0.67m、深さ0.32mの不整長方形である。確認した断面は逆台形である。埋土は4層に分けられた。埋土に角礫、炭化物を含んでいる。SV27の北端を切っている。遺物は陶磁器2点、瓦、土師質土器1点が出土した。遺物は少量あるものの切り合い関係から、18世紀前半のSV27より新しい土坑と判断される。性格は不明である。

SK105（第36図 図版26）

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。確認した配石の規模は長軸1.25m、短軸1.10mの「コ」字形である。掘り方は確認されなかった。間知石によって区画された配石遺構である。配石は長さ0.50m～0.40m、幅0.40m～0.22mの間知石を2段積に組まれている。埋土は2層に分けられた。遺物は染付け蓋1点、瓦が出土した。

SK106（第37図 図版26）

調査区中央部よりも北側、3C・4Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.30m、短軸3.35m、深さ0.49mの梢円形である。確認した断面は皿状である。南側は現代の整地によって失われている。埋土は6層に分けられた。4層に炭化物と遺物を多数含んでいる。遺物は陶磁器49点、焼締め、土師質土器、土師質皿、瓦、瓦質土器、焼塩壺、土人形、貨幣が出土した。遺物から17世紀中頃から後半の廃棄土坑である。

SK107（第37図 図版26）

調査区南端、3Eグリッドで確認する。規模・形状は（現存長）長軸1.25m、短軸0.85m、深さ0.40mの梢円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は1層である。SV18（18世紀後半）、SK111（18世紀代）を切って構築されている。遺物は陶磁器7点（細片）、瓦、瓦質土器が出土した。遺物は少量であるが切り合いから19世紀代である。性格は不明である。

SK109（第37図 図版26）

調査区中央部よりも南側、3D・4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.40m、短軸1.87m、深さ0.35mの不整円形である。確認した断面はやや乱れた皿状である。埋土は2層に分けられた。

SK118（18世紀後半）・SK101（19世紀代）を切っている。遺物は陶磁器31点、焼締め、土師質片、焼塩壺、瓦、瓦質土器、土人形が出土した。埋没後のSK143を掘り込んでいることから追加的な廃棄の可能性を窺わせる。重複関係から19世紀以降である。

SK110（第37図 図版27）

調査区中央部よりも南側、3E・3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸6.71m、短軸4.31m、深さ0.47mの不定形である。確認した断面は箱形状である。埋土は3層に分けられた。SV42を切っている。遺物は陶磁器18点、焼締め、土師質土器、瓦、瓦質土器が出土した。19世紀頃と判断される。

SK111・SK112（第37図 図版27）

調査区南側、3Eグリッドで確認する。SK111の規模は（現存長）長軸0.94m、短軸0.65m、深さ0.07mの梢円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。遺物は陶磁器18点、焼締め、焼塩壺、瓦、瓦質土器である。SK112の西側はSV18によって切られ、東側は近代建物跡によって切られている。

確認した規模は（現存長）長軸2.01m、短軸1.13m、深さ0.18mである。平面・断面ともに不定形である。埋土は1層である。埋土中には多量の炭化物を含んでいた。遺物は陶磁器12点、焼締め片、瓦、土師質皿、焼塙壺が出土した。SV18は18世紀後半であるからこれよりも先行する。いずれも廃棄土坑である。

SK114（第38図 図版27）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.05m、短軸1.44m、深さ0.35mの梢円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器3点、瓦、土人形が出土した。遺物は少量であるが、土層の状況から幕末頃のものと判断される。

SK115（第37図 図版27・28）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.43m、短軸1.41m、深さ0.24mのほぼ円形である。確認した断面は箱形である。埋土は1層である。埋土中に瓦および礫が多数混在する。遺物は陶磁器34点、土師質甕、瓦質系土器、瓦、土人形が出土した。19世紀代の瓦溜りと判断される。

SK116（第37図 図版28）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.89m、短軸0.55m、深さ0.29mの長方形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は3層に分けられた。遺物は陶磁器4点、土師質甕片、瓦が出土した。18世紀後半～19世紀代のもので近隣の構造物とほぼ同軸方向でありSV18関連施設の可能性も考えられる。

SK118（第38図 図版28）

調査区中央部よりも南側、3D・4Dグリッドにまたがって確認する。規模は（現存長）長軸1.45m、短軸1.35mの円形である。確認した断面は深さ0.92mの箱形である。埋土は4層に分けられた。SK109（19世紀）に切られている。遺物は陶磁器26点、瓦、焼締め、土師質土器、土師質皿、瓦質土器、焼塙壺、土人形、石製品が出土した。遺物から18世紀後半以降の廃棄土坑である。

SK119（第38図 図版27）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。南北に長い長方形を呈し、規模は（現存長）長軸2.05m、短軸0.62m、深さ0.30mの長方形である。確認した断面は逆台形である。埋土は2層に分けられた。SK110（19世紀代）に切られている。遺物は陶磁器10点、瓦、焼締め、瓦質土器、土師質甕、木片が出土した。遺物は少量のため、切りあい関係から18世紀後半の土坑である。性格は不明である。

SK122（第38図 図版27）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.71m、短軸0.68m、深さ0.35mの不整円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は1層である。SK110（19世紀代）に切られている。遺物は陶磁器4点、瓦が出土した。SK110より先行する。性格は不明である。

SK128（第38図 図版28）

調査区中央部よりもやや西側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.44m、短軸0.89m、深さ0.26mの梢円形である。確認した断面は箱形である。埋土は1層である。P490に切られ、P490はSK115に切られている。遺物は陶磁器4点と瓦、貨幣が出土した。SK115は19世紀代であるからそれ以前の性格不明土坑である。

SK130（第38図 図版28）

調査区中央部よりもやや西側、4Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.85m、短軸0.73m、深さ0.08mのほぼ円形である。遺物は陶磁器2点が出土する。上部構造が削平されていたため、詳細は不明であるが、遺物は17世紀後半の呉器手碗が出土していることから本遺構の北東に隣接するSK51と一連の遺構と思われる。

SK132（第38図 図版29）

調査区中央部よりも南西側に位置する。2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.85m、短軸0.77m、深さ0.11mの円形である。確認した断面は皿状である。埋土は1層である。遺物は出土していない。時期性格は不明である。

SK133（第38図 図版29）

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.67m、短軸0.62m、深さ0.14mの円形である。埋土は1層である。確認した断面は皿状である。遺物は瓦が出土した。時期性格は不明である。

SK134（第38図 図版29）

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.18m、短軸0.80m、深さ0.31m～0.60mの楕円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は4層に分けられた。1層は暗オリーブ褐色土が主体で赤化色ブロックを含む。4層は暗オリーブ褐色砂質土が主体で遺物を含む。遺物は陶磁器18点、土師質甕、土師質皿、焼塙壺、瓦、土人形が出土した。遺物から19世紀頃の廃棄土抗である。

SK135（第39図 図版29）

調査区北西隅の西端、2Bグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.33m、短軸1.25m、深さ0.20mの円形である。確認した断面は逆台形状である。埋土は1層である。人頭大～拳大の角礫を多数含む。

遺物は陶磁器3点、瓦、土師質甕が出土した。少量の遺物から、19世紀頃と判断される。性格は不明である。

SK137（第38図 図版30）

調査区中央部よりやや南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.40m、短軸1.02m、深さ0.30mの楕円形である。確認した断面は深い皿状である。埋土は2層に分けられた。遺物は陶磁器3点、焼締め、土師質土器が出土した。SK114によって上部を削られている。19世紀のSK114より先行する土坑である。性格は不明である。

SK138（第39図 図版30）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.12m、短軸0.88m、深さ0.18mの円形である。確認した断面は皿状である。埋土は2層に分けられた。遺物は瓦、土師質土器1点、土師質皿片1点が出土した。SK114・SK137によって南半分を切られている。重複関係から18世紀代のSK137より古い。性格は不明である。

SK140（第39図 図版30・31）

調査区中央部よりも西側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.43m、短軸1.86m、深さ

0.42mである。北側は攪乱によって削平され、西側はSV18によって切られている。形状は本来梢円形だったと思われる。確認した断面は箱形である。埋土は4層に分けられた。4層から遺物（金箔瓦）が出土した。遺物は陶磁器3点、土師質土器、瓦、瓦質土器が出土した。SV18との重複関係から18世紀後半より古く、少量の遺物から17世紀後半を主体とする廃棄土坑と判断される。

SK143 (第39図 図版30)

調査区中央部よりも南側、4D・3Dグリッドで確認する。SK115・128・118・109・SV21に切られている。

規模は（現存長）長軸1.64m、短軸5.13m、深さ0.20～0.77mの不定形である。遺物は陶磁器31点、土師質甕、瓦、焼塩壺、土人形が出土した。重複する遺構との関係から18世紀後半よりは古く位置づけられる瓦溜りと判断される。

SK144 (第40図 図版31)

調査区中央部よりも北側、4Cグリッドで確認する。SB05の直下で確認した。規模は（現存長）長軸1.28m、短軸1.14m、深さ0.28mの円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は2層に分けられた。

遺物は陶磁器16点、焼締め、土師質甕、瓦が出土した。遺物から19世紀第2四半期を主体とする瓦溜りと判断される。

SK145 (第40図 図版31)

調査区中央部よりも南側、3Eグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.68m、短軸0.63m、深さ0.27mの円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は3層に分けられた。遺物は陶器皿1点、瓦が出土した。遺物は少量であるが18世紀代と判断される。性格は不明である。

SK146 (第40図 図版31)

調査区中央部よりも北側、4Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.76m、短軸1.00m、深さ0.28mの平面・断面ともに不定形である。埋土は4層に分けられた。SV22によって切られている。遺物は陶磁器18点、瓦質土器、土師質皿、瓦、土人形が出土した。SV22よりも古い廃棄土坑である。

SK147 (第38図 図版29)

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.68m、短軸0.56m、深さ0.65mの円形である。確認した断面は箱形である。埋土は1層である。遺物は陶磁器18点、瓦質土器、瓦が出土した。時期は19世紀代である。性格は不明である。

SK148 (第40図 図版11)

調査区中央部よりも南西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.48m、短軸0.10m、深さ0.26mの平面・断面ともに不定形である。埋土は1層である。SK134に切られている。遺物は出土していない。19世紀のSK134によって切られ、18世紀後半のSV33を切っている。性格は不明である。

SK149 (第40図 図版31・32)

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.20m、短軸0.50m、深さ0.40mの不定形である。確認した断面は逆台形である。埋土は1層である。SK114に切られている。遺物は出土していない。SK114が幕末であるから、それよりも古い段階での整地に伴うものと判断される。性格は不明である。

SK150（第40図 図版32）

調査区中央部よりも南側、3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.89m、短軸2.26m、深さ0.70mの不定形である。確認した断面は逆台形を呈する。埋土は4層に分けられた。遺物は陶磁器15点、瓦、瓦質土器が出土した。SV18によって切られている。遺物から17世紀後半と判断される。

不明遺構

SX01（第41・42図 図版32）

調査区北側から中央部にかけて広く確認する。4B・4C・4D・5B・5C・5Dグリッドで確認する。黒色土層の範囲をSX01とした。規模は（現存長）長軸16.31m、短軸13.34mである。北側は調査区外へ延びている。黒色土層を主体の炭化した植物遺体層からなり、シダ類が部分的に厚く残る。シダ類の上には直接盛砂したような状態である。シダ類を主とした黒色層直下はグライト化した粘土層になっている。この層から筆、木製品、金箔瓦片などが出土した。また植物の蔓を輪にしたものを多量に確認した。遺物は陶磁器29点、瓦、金箔瓦、瓦質土器、焼締め、土師質皿、木製品、植物遺体、貨幣、鉛玉が出土した。遺物からは18世紀から19世紀代である。

SX02（第41・42図 図版32）

調査区北側から中央部にかけて広く確認する。4C・4D・5C・5Dグリッドで確認する。SX01の内の砂層範囲である。壁面の立ち上がりを確認できない。規模は（現存長）長軸9.14m、短軸6.19mである。遺物は陶磁器4点、瓦、焼締めが出土した。少量の遺物であるが18世紀後半である。

SX03・04（第41・42図 図版32・33）

調査区中央部から北側、4C・3Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸2.88m、短軸2.28mである。不整円形である。遺物は出土していない。植物遺体層はシダ類からなる。SX04は調査区中央部から南側に位置する。4D・3Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸9.20m、短軸6.66m、深さ0.10mである。不整円形である。遺物は土師質皿1点が出土した。植物遺体層はシダ類である。

SX05（第41図 図版32）

調査区中央部から北側、3B・3Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸7.78m、短軸3.46m、深さ0.09mである。不整椭円形である。遺物は陶磁器4点、土師質皿、瓦質土器が出土した。植物遺体層である。

硬化面（第43図 図版33）

調査区南東端の6E・6Fグリッドで確認する。南北に長く（現存長）長軸7.10m、幅3.60mである。北側は現代の整地によって失われている。南側と東側は調査区外へ延びている。確認された断面では6層に分けられた。1層から5層までは表土もしくは一部が近代の構造物の埋土である。6・6'層が硬化面に相当する。遺物は陶磁器9点、瓦、焼締め、壺が少量出土した。6層から染付の仏飯器（18世紀後半）、6'層から呉器手碗（17世紀後半）が出土している。

杭跡

SK56（第33図 図版21）

調査区中央部よりも南側、5Eグリッドで確認する杭である。杭の長さは0.50m、幅0.10mで、地山面に打ち込まれた状態で確認された。掘り方はみつからず、ほかに列をなす同様の杭は確認されなかった。

遺物は出土していない。性格、時期等の詳細は不明である。

柱穴跡

P600(SK52) (第33図 図版21)

調査区中央部よりも東側、5D・6Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.56m、短軸1.27m、深さ0.63mの楕円形である。確認した断面は皿状である。埋土は4層に分けられた。埋土除去後の底面にはほぼ円形のプランが確認された。平石が配置されていた。遺物は陶磁器42点、土師質土器、甕、瓦質土器、瓦、土師質皿、焼締めが出土した。19世紀代の柱材抜き取り跡の柱穴と判断される。

P601(SK55) (第6図 図版21)

調査区中央部よりも北側、5Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.81m、短軸0.75mの不整形である。遺構を掘削中に崩落したため記録はとれなかつたが現存した部分の記録に留まる。底面より平石を確認する。遺物は出土していない。時期は不明である。柱材抜き取り跡の柱穴と判断される。

P602(SK70) (第34図 図版23)

調査区北側、4C・5Cグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.94m、短軸0.77m、深さ0.06mの不整形である。埋土は2層に分けられた。遺物は出土していない。上層から掘り込まれたもので柱穴の可能性が高い。時期は不明である。

P603(SK93) (第35図 図版25)

調査区中央部よりも北西側、2Bグリッドで確認する。北側は搅乱によって削平され、消失している。推定される規模は長軸1.13m、短軸0.97m、深さ0.38mの円形である。確認した断面は逆台形である。埋土は1層である。埋土中に人頭大の礫が出土し、根石に使用された可能性が高い。遺物は陶磁器2点、土師質甕、瓦質土器が出土した。遺物から19世紀代の柱穴の可能性が高い。

P604(SK131) (第38図 図版28)

調査区中央部よりも西側、2Dグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸0.40m～0.35m、短軸0.30m～0.25m、深さ0.15mの不定形である。遺物は出土しない。根石の掘り方の可能性もある。時期は不明である。

P605(SK136) (第39図 図版29)

調査区北西、3Bグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.08m、短軸0.66m、深さ0.55mの円形である。断面は逆台形状である。埋土は2層に分けられた。埋土中に平石、切石、桂状角石による三段積が確認された。SK91に切られている。遺物は陶磁器3点、瓦質土器が出土した。遺物は少量であるが重複からSK91は18世紀後半であるからそれよりも先行する柱穴の根石かと思われる。

P606(SK142) (第39図 図版31)

調査区中央部よりも北側、3C・3Bグリッドで確認する。規模は（現存長）長軸1.10m、短軸0.94m、深さ0.50mの円形である。確認した断面は箱形である。埋土は2層に分けられた。遺物は出土していない。規模から柱穴の可能性がある。時期は不明である。

2. 遺物

(1) 陶磁器、土師質瓦質土器、土人形、金属製品、石製品他

SV42 土師質瓦質土器（第49図 11表 図版37）

15は焼塙壺の身である。口縁部直下から底部にかけては膨らみをもつ。輪積による成形で胴部前面に指頭圧痕がみられる。16は焼塙壺の蓋である。頭部から側面にかけては緩やかに折り曲げられている。内外面ともにナデ調整され、さらに内面には指頭圧痕がみられる。

SV01 陶磁器（第50～53図 5表 図版38）

17～29は磁器である。17世紀後半から18世紀後半までにおさまる。

17は辰砂染付碗である。18は中国福建省の染付碗である。外面は植物文を施す。外面口縁直下と内面には二重圈線を巡らす。19は白磁である。20は染付小杯で外面型紙摺りの植物文を施す。ともに高台釉刺ぎである。21・22は染付碗である。21の外面には丸文が施される。22の高台は広く、丸みをもつ。ともに高台疊付は無釉である。23は白磁の碗である。24は鉢で外面染付けは植物文である。見込みには二重圈線を巡らせている。25は高台脇から屈曲し、口縁にむかって直線的に開く青磁の朝顔形碗である。26は染付の仏飯器で、高台内削りだしがやや深く、杯部は口縁が上方に向かつて垂直に伸びている。27は手塙皿である。

28・29は染付皿である。28は見込みにいわゆる「こんにゃく印判」の五弁花文、二重圈線を巡らす。高台内は一重圈線である。29には目積み跡がある。高台は無釉である。

30は砥部焼と思われる染付碗である。外面は多重圈線と花文が施される。19世紀代である。

31～39は陶器である。31～36までは17世紀後半から18世紀前半までにおさまる。

31は碗である。外面灰釉で高台は無釉である。32～34は京焼風碗である。32は外面には山水文が描かれている。高台は無釉である。33の胴部は欠損している。高台内に清水の「水」刻印がある。34は色絵の平碗である。35は刷毛目の碗である。白化粧後に透明釉を施すが、高台は無釉である。36は折縁皿である。37は江戸後期の土瓶である。

38は上部が欠損している甕である。外面は灰釉を施し、底部は無釉である。丹波産と思われる。

39は腰白茶壺である。右回転のクロコ成形で、胴部下半が並白釉、上部が鉄釉掛けである。3箇所に耳が付けられる。

42～44は擂鉢である。42の底部には「〇に×」印がある。43の擂目は11条一単位である。44は底部が一部欠損しているが高台付の擂鉢である。現存する高台には3箇所に穿孔がみられる。擂目は16条一単位である。

45～48は陶器甕である。45は外面灰釉を施し、底部は無釉である。17世紀代～18世紀代である。中国産と思われる。46は外面肩部に貼付文を配置する。口縁部は外反する。瀬戸・美濃産と思われる。47の外面肩部にも46と同様の貼付文があり、外面に鉄釉が施される。48は大甕である。内外面に鉄釉が施された底部は無釉である。

55・56は陶器の皿である。55は灯明受皿である。口縁内部に環状の突帯の持つもので色調は内外面とも灰色である。外面にススの付着が見られる。56は口縁内部に突帯の無いもので、内外面の色調は赤褐色である。口縁部外面にススが付着する。

SV01 土師質瓦質土器（第51・53図 11表 図版38）

40・41は土師質の内耳土器である。いずれも体部は内湾し、口縁部は外反する。内耳は穿孔され貫通している。49～54は土師質皿である。ろくろ成形で右回転糸切り底である。53のみ底部が摩滅し不明瞭である。49以外はスヌが付着する。

57～59は焼塩壺の身である。いずれも刻印を持つ。18世紀代である。

SV01 土人形（第53図 16表 図版38）

60は恵比寿である。61は合わせ成型の顔である。

SV01 金属製品（第53図 17表 図版38）

62はキセルの吸い口である。

SV06 陶磁器（第54～56図 5・6表 図版39）

63～71は磁器である。17世紀後半～18世紀中頃までにおさまる。63は染付小杯で口縁は端反りである。高台は無釉で墨み付けには砂が溶着している。64は染付碗で見込みに変形文字がある。65も染付碗で外面に四方襷を巡らす。66は白磁碗である。67は青磁碗である。68は染付の角型の向付けである。69は染付で外面銅線釉、内面染付、見込みには2重圈線と花弁が描かれている。明代と思われるが詳細は不明である。70は染付皿で見込みに鉄絵を施した蛇の目高台皿である。71は染付鉢である。口縁は端反になっている。外面には唐草を描いている。

72～77は陶器である。17世紀後半～18世紀前半にまとまる。72は陶胎染付碗、73は刷毛目碗である。

74は皿で見込みに鳥（鳳凰）が描かれ、高台墨付と高台内に砂が溶着する。中国福建省である。75は高台脇から口縁にかけて丸みをもつ。口縁部は玉縁状に結ぶ、片口鉢である。76は二彩手の鉢である。78は刷毛目の大皿である。77は灰釉の施される折縁皿である。見込みに砂目が見られる。

79は焼締めの灰落しで、内外面とも鉄釉である。

80・81は陶器の壺である。17世紀代におさまる。80は口縁から胴部中央部まで沈線を巡らせていく。内外面ともにロクロナデ調整が見られる。外面に灰釉、内面に鉄釉が施され、底部は無釉である。81は胴部肩に紐状の突帯を持つ。口縁部断面はT字状である。

89・90は擂鉢である。89の擂目は8条一単位、90の擂目は7条一単位である。

SV06 土師質瓦質土器（第56図 11表 図版39）

82～88は土師質皿である。全てロクロ成形で、84をのぞきスヌが付着している。91・92は焼塩壺である。92は身で輪積成形、91は型作りの蓋で内側に布目痕が見られる。刻印は不明瞭ながら一重の枠線が認められる。

SV06 石製品（第56図 19表 図版39）

93は長方形の硯である。

SV06 金属製品（第56図 17表 図版39）

94は錠前である。

SV17 土師質瓦質土器（第56図 12表 図版39）

95～97は土師質皿である。内外面ともナデ調整である。95・97にはスヌが付着している。

SV17 金属製品（第56図 17表 図版39）

98は工具の一部と思われる。

SV18 陶磁器（第57・58図 6表 図版39・40）

99～112は磁器である。17世紀後半～18世紀半までにおさまる。

99・100は染付碗である。101は波佐見の「くらわんか手」碗、102は外面文様に若松文がある染付碗である。103は染付小壺で、104は白磁の小壺である。105は染付碗である。内面に四方樺、見込みに2重圓線と松竹梅が見られる。106は蓋付段重と思われる。107は碗である。内面口縁直下に四方樺が巡る。108は染付碗である。見込みに2重圓線と手書きの五弁花が描かれている。109～111は染付皿である。109の高台畳み付けに砂が溶着する。110は型打成形による皿で見込みに「こんにゃく印判」の五弁花がある。111は110と同じく見込に五弁花を持つがこちらは手描きである。112は染付瓶である。

113～122は陶器である。113～117・120・121は17世紀後半～18世紀中頃までにおさまる。

113は色絵の平碗である。114は高台に刻印がみられる碗。115は外面に鉄絵が施されている。116も碗である。117は陶器の大皿である。内面は緑釉、外面は透明釉掛けが施されている。118は瀬戸・美濃系の碗である。高台内に「人」の墨書がある。119は関西系土瓶である、外面に鉄絵が施される。18世紀後半～19世紀前半である。120は刷毛目の片口鉢で高台脇から口縁にかけて丸みもつ。口縁部は玉縁状となる。121は壺蓋である。内面は右回転の糸切り痕がみられる。122は関西系の鍋である。18世紀代である。

SV18 土師質瓦質土器（第58図 12表 図版40）

123・124は土師質の内耳土器である。体部は内湾し、口縁は外反する。内耳を有し、穿孔は先細りしているが貫通している。125～129は土師質皿である。内外面とも回転ナデ調整で、底部は回転糸切りである。128以外はスヌが付着する。130は土師質壺である。底部から口縁部まで、丸みを帯び、口縁断面は肥厚し、折曲げられる。外面に一条の沈線を巡らせている。調整はヨコナデである。131は輪積成形の焼塙壺の身で、刻印がある。

SV18 土人形（第58図 16表 図版40）

132は高台付の童子である。133は合わせ成型の顔である

SV18 金属製品（第58図 17表 図版40）

134はキセルの吸口である。135は和釘である。

SV22 陶磁器（第59・60図 6表 図版40）

136～140は磁器である。19世紀～明治時代までにおさまる。

136は染付の小壺、137は染付の碗である、外面に福の字が見られる。138は染付の端反碗、139は染付碗である。140は西洋コバルトを使用した染付の蓋である。141～149も磁器である。17世紀後半～18世紀前半までにおさまる。141は染付碗で見込みに「平」が見られる。142・143は染付碗である。144は染付碗で高台畳付けには砂が溶着している。145は染付の手塙皿である。146・147は染付の皿である。148は染付鉢である。149は青磁皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎである。150は青磁の袋物である。高台畠付けは釉剥ぎで大粒の砂が溶着する。

151～162は陶器である。151～158は17世紀後半～18世紀前半までにおさまる。

151は外面に山水文を描いている。152は上部が欠損している。内外面とも鉄軸を施し、高台は無軸である。153～156は陶器の具器手碗である。156の高台疊付は砂が溶着する。157は碗で底部を欠損している。158は縁軸の折縁皿である。見込みは蛇の目である。高台疊付けは軸剥ぎである。

159・160・162は18世紀後半～19世紀代である。159土瓶蓋で、外面は縁軸掛けである。160は二彩手皿である。161は色絵の油壺の頸部と思われる。162は行平鍋である。163は焼締めの灰落しである。170・171は擂鉢である。

SV22 土師質瓦質土器（第60・61図 12表 図版40）

164～169は土師質皿である。内外面ともナデ調整で底部は回転糸切りである。164・165・168以外の皿にはススが付着する。172は瓦質で内側に突起を配する焜爐である。173は土師質の内耳土器である。口縁は外反し、内耳は穿孔され、貫通している。

SV22 土人形（第61図 16表 図版40）

174は首が欠損する童子である。175は鎧武者で軟質施釉陶器である。176は猿で底部は穿孔されている。

SV22 石製品（第61図 19表 図版40）

177は長方形の硯である。硯面はよく使用したためか滑らかである。

SV22 金属製品（第61図 17表 図版40）

178はほぼ円形の鉛玉である。

SV24 陶磁器（第61図 6表 図版41）

179～181は陶器である。179は天目型の碗、180は陶胎染付碗である。17世紀前半から17世紀後半である。181は土瓶蓋である。18世紀後半～19世紀代である。

SV24 土人形（第61図 16表 図版41）

182は手びねりのさるである。

SV26 土師質瓦質土器（第61図 12表 図版41）

183は焼塙壺の身である。輪積み成形で胴部は厚く内面に指頭圧痕が認められる。ヨコナデの調整が施される。製作年代は17世紀代である。

SV27 陶磁器（第61図 7表 図版41）

184～186は17世紀後半～18世紀前半までにおさまる。184は磁器の染付碗である、外面は重菊で高台は釉剥ぎである。185は陶器の具器手碗である。186は陶器の油壺である。外面白釉掛けの上に色絵を施している。187は磁器の染付瓶である。外面唐草である。18世紀代と思われる。190は擂鉢である。擂目14条一単位である。

SV27 土師質瓦質土器（第61図 12表 図版41）

188・189は土師質土器である。188は焰烙である。外面は平行叩きのちナデ整形、内面はナデ調整である。外面にはススが付着する。189は土師質の内耳土器である。口縁は外反する。内耳は穿孔し貫通する。191は焼塙壺の身である。内面布目痕で外面は刻印が認められる。製作年代は18世紀中頃である。

SV29 陶磁器（第62図 7表 図版41）

192は磁器で染付皿である。17世紀後半である。193は陶器の小坏である。灰釉掛けで高台無釉である。見込みに胎土目跡がある。17世紀前半である。

SV30 陶磁器（第62図 7表 図版41）

194・195・196は磁器の染付碗である。18世紀前半から19世紀代におさまる。

194は外面口縁直下に2重圈線を巡らす。195は磁器の鐘か。外面は染付で内面は無釉である。196は外面に「小町」の文字が描かれる。197は陶器の呉器手碗である17世紀後半である。198は陶器の甕か鉢か、体部は白泥釉を掛けたもの。

SV30 土師質瓦質土器（第62図 12・13表 図版41）

199は瓦質の火鉢である。200は土師質皿である。口縁部にスス付着する。

SV30 土人形（第62図 16表 図版41）

201は鳥型である。

SV30 金属製品（第62図 17表 図版41）

202はキセルの吸口で緑青がみられる。203・204は雁首である。

SV33 陶磁器（第62図 7表 図版41）

205～207は磁器の染付端反碗である。19世紀代である。

208・209は陶器である。19世紀代である。208は蓋で、糸切り痕跡が浮かんで残る。209は土瓶の口で褐釉掛けである。215は陶器の皿、ススが付着していない。

SV33 土師質瓦質土器（第62・63図 13表 図版41）

210～214・216は土師質皿である。いずれもロクロ成形で右回転糸切りである。210はススが付着しているがそれ以外は付着していない。217～221は土師質内耳土器である。体部はいずれも内溝する。口縁端部は218・219は水平に外反する。220から221は外反し内側に曲る。内耳はすべて穿孔している。218だけ先細りして開いている。

SV33 土人形（第62図 16表 図版41）

222は仏像である。合わせ口成型である。底部に4mmの穴があいている。

SE01 陶磁器（第64図 7表 図版41）

223は陶器の急須である。口縁は欠損する。18世紀以降と思われる。224は陶器の通徳利である。外面灰釉で文字はイッチン掛けである。227は擂鉢である。高台付で体部は外上方に直線に立ち上がる。底部の擦目は放射状になる。

SE01 土師質瓦質土器（第64図 13表 図版41）

225は土師質焜炉である。五徳部部分か。口縁部は肥厚する、肥厚したところに亀甲状の型押しが2カ所遺存する。内外面ともススが付着する。226は土師質の七輪である。内面突起を巡らしている。ロクロナデ調整である。外面はススが付着する。

SE14 陶磁器（第65図 7表 図版41）

228は陶器の皿。見込み蛇の目釉剥ぎである。18世紀後半である。229は擂鉢である。

SE15 陶磁器（第65図 7表 図版42）

230・231は磁器である。230は染付のくらわんか手碗である。231は染付の徳利片である。いずれも

19世紀代である。232は陶器の土瓶口である。

SE15 土師質瓦質土器（第65図 13表 図版42）

233は焼塙壺の蓋である。内面に布目痕がみられる。

SE17 陶磁器（第65図 7表 図版42）

234は磁器の染付碗である。18世紀代である。235は陶器の破片か。底面に墨書が描かれている。

SE17土師質瓦質土器（第65図 13表 図版42）

236は焼塙壺の身である。刻印は不明瞭である。

SE18 陶磁器（第65図 7表 図版42）

237・238は磁器の染付碗である。237は内面が四方擗で外面にみじん唐草である。238は内面に四方擗がある。いずれも焼継痕が見られる。239は染付仏飯器である。240は陶器の土瓶口である。18世紀後半から19世紀代である。

SE18 土師質瓦質土器（第65図 13表 図版42）

241は土師質の釜である。

SE20 陶磁器（第66図 7表 図版42）

242は白磁の小壺である。高台は砂が溶着する。17世紀後半である。243は磁器で型打ち成型の染付皿である。

SE20 土師質瓦質土器（第66図 13表 図版42）

244は土師質皿である。口縁部にススが付着する。

SE20 石製品他（第66図 19表 図版42）

245は簪である。耳かきが付く。

SE21 陶磁器（第66図 7表 図版42）

246は青磁の油壺である。247は陶器の蓋である。19世紀代である。248は灯明受皿である。内面に突帯がつくものである。249は陶器甕である。外面は長石を含まない鉄釉を施している。底部は無釉である。

SE21 金属製品（第66図 17表 図版42）

250は釘である。断面は正方形である。

SE22 陶磁器（第66図 7表 図版42）

251・252は陶器である。251は壺か茶入である。252は行平鍋である。外面は鉄泥が塗られ、飛び鉢が施される。いずれも18世紀代～19世紀代である。

SE22 土師質瓦質土器（第66図 13表 図版42）

253・254は瓦質で253は釜である。254は焜炉である。

SK04 陶磁器（第67図 7表 図版42）

255～259は磁器である。18世紀中頃から19世紀前半におさまる。

255は染付小碗である。256は「くらわんか手」碗である。257は外面青磁、内面染付の碗である。

258は染付の蓋で、見込み四方擗を施す。259は染付皿である。

260・261・262・263・264は陶器である。18世紀代から19世紀代におさまる。

260は壺と思われる。外面は鉢釉で内面は無釉である。261は不明である。底部無釉で内外面は鉄釉である。262は土瓶の口である。263は土瓶の蓋である。264は鍋である。内外面とも褐色を施す。

265は擂鉢である。擂目5条一單位である。17世紀始めごろである。

SK04 土師質瓦質土器（第67図 13表 図版42）

266は焼塩壺の蓋である。内面に布目痕を認められる。

SK04 石製品他（第67図 19表 図版42）

267は骨製品である。長方形で穴を3列に並列さし貫通している。

SK12 土師質瓦質土器（第67図 13表 図版42）

268は瓦質の五徳である。

SK15 土師質瓦質土器（第67図 13表 図版42）

269は土師質の甕である。底部は欠損する。体部は内湾し口縁部に至り、口縁部は内側に傾斜する。口縁端部は肥厚する。外面タタキ、内面円形叩きの調整を施す。

SK16 土師質瓦質土器（第67図 13表 図版42）

270は土師質の釜である。調整は外面ヨコナデ、内面同心円の当具痕跡残り、ナデを施している。

SK17 陶磁器（第68図 7表 図版42）

271・272は磁器である。17世紀中頃～18世紀代におさまる。

271は染付の猪口である。272は染付碗である。273は陶胎染付碗である。17世紀後半である。

SK17 土師質瓦質土器（第68図 14表 図版42）

274は土師質甕である。外面はナデ調整、内面は同心円の当具痕跡残る。

SK19 陶磁器（第68図 7表 図版42）

275は磁器で染付の猪口である。18世紀中頃である。

SK19 土師質瓦質土器（第68図 14表 図版42）

276は土師質の内耳土器で、口縁部は外反する。内耳は穿孔し貫通している。

SK27 陶磁器（第68図 7表 図版42）

277は磁器の中国福建省の染付碗である。17世紀後半である。278は陶器の甕である。内面は同心円状当具痕が残る。

SK41 陶磁器（第68図 7表 図版42）

280は染付の皿である。16世紀代である。

SK41 土師質瓦質土器（第68・69図 14表 図版42）

281は土師質土器である。胴部片である。沈線を施す。

282～286は土師質の皿である。いずれも内外面ヨコナデ調整である。スス付着は285だけである。

287は瓦質土器である。体部は外面ナデ、内面ヨコ方向の刷毛目の調整である。突起部分は布目痕と指頭圧痕が見られる。288・289は焼塩壺である。288は身で刻印が見られる。289は蓋で内側に指頭圧痕が見られる。17世紀代である。

SK41 石製品他（第69図 19表 図版42）

290は木製の賽子である。291は筒型である。

SK47 陶磁器（第69図 7・8表 図版43）

292は上部欠損する白磁の瓶である。18世紀後半～19世紀初である。

293は陶器である。肥前の京焼風陶器の碗、見込みに刻印が見られる。17世紀後半から18世紀前半である。294は陶器の壺である。体部のみ遺存する。内外面ともナデ調整で、鉄軸掛けである。

SK51 陶磁器（第70図 8表 図版43）

295は磁器の染付小壺である。17世紀前半である。

296～301は陶器である。296～300までは17世紀前半から17世紀後半におさまる。296は筒型碗である。297は呉器手碗である。298は色絵の平碗である。299・300は折縁皿である。299は鉄絵を描き、300は高台に砂の溶着が見られる。301は行平鍋の蓋である。18世紀代～19世紀代である。

SK51 土人形（第70図 16表 図版43）

303は合せ口成型の猫である。

SK51 石製品他（第70図 19表 図版43）

302は硯である。長方形を呈する。

SK52 陶磁器（第70図 8表 図版43）

304～309は磁器である。18世紀中ごろから19世紀前半までにおさまる。

304は紅皿である。305は染付の端反小壺である。306は染付碗である。307は広東碗である。308は染付碗である。309は染付蓋である。

310・311・312・313は陶器である。18世紀後半から19世紀代におさまる。

310は碗である。311は上部が欠損している水注である。312は土瓶の蓋である。313は水甕である。底部は欠損しているが体部は垂直に立ち上がり口縁部に至り、口縁部は内側に肥厚し折り返をつける。

SK57 陶磁器（第71図 8表 図版43）

314～319は磁器である。18世紀後半から19世紀中頃までにおさまる。

314は染付猪口である。315は染付碗である。316は染付の端反碗である。317は外面青磁の碗である。内面は四方擗を巡らし、高台内に二重の枠のなかに変形文字がはいる。318は染付け蓋である。見込みに松竹梅の変形したものが見られる。319は染付の段重である。

320は陶器の焼縮めの徳利である。上部は欠損する。321は陶器の土瓶で、外面に軸を流し掛けする。いずれも18世紀後半から19世紀代である。326・327は擂鉢である。326は擂目5条一単位である。18世紀中頃である。327は擂目9条一単位である。

SK57 土師質瓦質土器（第71図 14表 図版43）

322～325は土師質皿である。いずれもススが付着する。

SK57 土人形（第72図 16表 図版43）

331は人形の顔である。頭部だけ遺存する。

SK57 金属製品（第72図 17表 図版43）

330はキセルの吸口である。

SK57 石製品他（第72図 19表 図版43）

328はU字状の使用痕が見られる。329は砥石である。磨り面が残り滑らかである。

SK63 陶磁器（第72図 8表 図版43）

332は陶器の蓋である。鉄釉掛けである。19世紀代である。

SK63 土師質瓦質土器（第72図 14表 図版43）

333は土師質の火鉢である。

SK73 陶磁器（第72図 8表 図版43）

334は磁器の染付皿である。高台は蛇の目釉剥ぎである。18世紀前半ごろにおさまる。

335・336は17世紀前半から17世紀後半におさまる。335は陶胎染付の碗である。336は溝縁皿で砂が溶着する。337は肥前の土瓶口である。

SK73 土師質瓦質土器（第72図 14表 図版43）

338は土師質の火鉢である。口縁は内湾して肥厚する。

SK74 陶磁器（第72図 8表 図版43）

339は磁器の染付の端反碗である。19世紀代である。

SK77 陶磁器（第72図 8表 図版43）

340・341は磁器である。18世紀前半から18世紀中頃までにおさまる。

340は染付碗である。341は染付の猪口である。

342は陶器の碗である。高台内に墨書「ろ」が見られる。17世紀後半から18世紀前半である。

SK77 土師質瓦質土器（第72図 14表 図版43）

343・344は焼塙壺である。343は蓋で内面に布目痕みられる。344は身で板状成形である。刻印がみられる。

SK80 陶磁器（第73図 8表 図版43）

345～348は磁器である。345・348は18世紀後半から19世紀代におさまる。

345は広東碗である。348は「くらわんか手」の染付け皿である。346・347は染付の碗である。いずれも中国とおもわれる。

349・350・351は陶器である。いずれも19世紀代である

349は土瓶蓋である。350は行平鍋で内外面とも褐釉を施す。351は植木鉢である。

SK81 陶磁器（第73図 8表 図版43）

352・353は磁器の染付蓋である。いずれも18世紀後半から19世紀代である。354は陶器の灯明受皿で、内面に突帶を持つもので、ススが付着する。

SK84 陶磁器（第73図 8表 図版43）

355は陶器の碗で高台内に刻印が見られる。17世紀後半～18世紀前半である。

356～358は磁器である。18世紀後半～19世紀代におさまる。

356は染付端反碗である。358は染付の鉢蓋である。357は色絵の蓋である。359は陶器の土瓶である。

SK88 陶磁器（第74図 8表 図版43）

360・361・362は磁器である。19世紀から幕末までにおさまる。

360は染付の端反碗で、内外面コバルトで描いている。361は染付の碗である。362は染付の皿で、内

面は山水文が見られる。363は陶器の同脚付油受皿である。19世紀代である。

SK90 陶磁器（第74図 8・9表 図版43・44）

364・365・366は磁器である。いずれも18世紀後半～19世紀代おさまる。

364は染付の広東碗である。365・366は波佐見の「くらわんか手」碗である。366は見込みに蛇の目が見られる。

367・368は陶器である。19世紀代である。367は行平鍋である。内外面ともに褐釉で、底部には「八」と思われる文字が見られる。368は陶器の火鉢で瓶掛型である。底部外面緑釉を施し、底部に1ヶ所穿孔があるが貫通していない。

SK90 土師質瓦質土器（第74図 14表 図版44）

369は土師質の焜炉でカマド型である。19世紀代である。

SK91 陶磁器（第74・75図 9表 図版44）

370～377は磁器である。18世紀中頃から18世紀後半におさまる。370は染付碗である。371は外面が色絵、口縁内側に四方襷の筒型碗である。372・373は染付碗である。373は高台は低く釉剥ぎをしている。374は染付蓋である。いわゆる望料碗蓋である。375は口縁が口紅付で染付の向付けとおもわれる。376は型打ち成形の手塙皿である。377は波佐見の「くらわんか手」の皿である。378・379・380は陶器である。18世紀代におさまる。378は京・信楽の碗である。379は刷毛目の鉢である。380は鍋である。

SK91 土師質瓦質土器（第75図 14表 図版44）

381は焼塩壺の身である。板作り成形で、外面に刻印が見られる。

SK91 石製品他（第75図 19表 図版44）

382は砥石である。磨り面が3面残る。

SK92 陶磁器（第75図 9表 図版44）

383は陶器の甕である。底部から体部の肩部まで欠損する。口縁端部は肥厚し平になる。肩部には貼付文が見られる。

SK92 土師質瓦質土器（第75図 14表 図版44）

384は土師質の内耳土器である。口縁部は外反し、内耳は穿孔して貫通している。385は瓦質の焜炉である。部位は隅切り部分である。

SK92 土人形（第75図 16表 図版44）

386は土鈴である。鳥を具象化したものか。

SK95 陶磁器（第75図 9表 図版44）

387・388は磁器である。いずれも18世紀後半以降である。387は染付の碗で外面に「寿」の文字がみられる。388は型打ち成形の皿である。見込みに福寿が見られる。

SK97 陶磁器（第76図 9表 図版44）

389は磁器で染付の碗である。18世紀前半である。

SK97 土師質瓦質土器（第76図 14表 図版44）

390は瓦質土器の七輪である。391は土師質甕である。

SK99 土師質瓦質土器（第76図 15表 図版44）

392は土師質の皿である。口縁部と底部内面にススが付着する。

SK101 陶磁器（第76・77図 9表 図版44）

393～400は磁器である。18世紀中頃から19世紀代におさまる。

393・394は染付の「くらわんか手」碗で内面が蛇の目釉剥ぎである。395は染付の端反碗である。

396は染付の碗である。外面文字が描かれている。397は染付の蓋付き碗である。蛇の目付き高台である。398は染付の端反碗の蓋である。399は染付の皿である。高台は蛇の目で見込みは手書きの五弁花である。400は染付の仏飯器で高台内は浅い削りである。

401～409は陶器である。401・407・408は19世紀代におさまる。

401は平碗である。402は茶入である。内外面は鉄釉で高台は無釉である。403は油壺である。外面白泥で高台は無釉である。404・405・406は灯明受皿である。404・405は内面に突帯を巡らし、U字型の口が見られる。外面は無釉である。405はススが付着する。406は赤泥の灯明受皿である。407・408は土瓶である。407は底部が欠損する。409は植木鉢である。外面線釉掛け流し、低部中央穿孔し貫通する。410・411は焼締めの擂鉢である。410は擂目が8条一単位で、19世紀前半である。411は擂目が11条一単位で18世紀前半である。

SK101 土師質瓦質土器（第77図 15表 図版44）

412は土師質の火鉢である。内外面ともロクロナデ調整である。内面はススが付着する。

SK102 金属製品（第77図 17表 図版44）

413は飾り金具か。

SK106 陶磁器（第78・79図 9表 図版45）

414～424は磁器である。16世紀後半から18世紀前半までにおさまる。

414・415は染付碗である。416は染付の皿で外面は花卉である。417は中国景德鎮の碗である。418・419は染付皿である。419は内外面が花卉で口縁直下には一重の円線が巡る。420は瓶である。外面瑠璃釉が見られる。421～423は染付皿で、421は高台に一重円線を巡らせる。422は重ね焼である。

424は青磁の皿で見込みに草花文を片切り彫で施文している。獸足が付く。

425～429は陶器である。425・426・427は16世紀後半から17世紀第2四半期までにおさまる。425は溝縁皿である。外面鉄釉、内面無釉である。426は壺である。調整はロクロナデ成形である。外面鉄釉である。削り高台である。427は瓶である。外面は鉄釉掛け流しである。

428は尿瓶である。内外面ともロクロナデ調整で高台は削りである。外面は鉄釉を掛けている。

429は甕でロクロナデ調整で体部に貼付文を張り付ける。430は擂鉢である

SK106 土師質瓦質土器（第79図 15表 図版45）

431・432は土師質皿で、いずれもススが付着する。433は土師質の内耳土器である。口縁は外反する。内耳は穿孔し貫通している。434は土師質の土器である。外面ロクロナデ成形を施している。

SK106 土人形（第79図 16表 図版45）

435は型打ち成形の顔である。

SK109 陶磁器（第79図 9表 図版45）

436・437は磁器である。いずれも染付の小壺である。18世紀代におさまる。

438・439は陶器である。19世紀以降におさまる。438は筒形碗。439は底部が欠損する土瓶である。

SK109 土師質瓦質土器（第79図 15表 図版45）

440は焼塩壺の蓋である。

SK110 陶磁器（第79図 9・10表 図版45）

441は染付の端反碗の蓋である。442は陶器の二探手の皿である。18世紀後半から19世紀代におさまる。443は体部から底部にかけて欠損する擂鉢である。擂目9条一単位である。

SK115 陶磁器（第80図 10表 図版45）

444は磁器である。19世紀中頃におさまる。444は染付の皿である。見込みに簡略して描く松竹梅がある。高台は蛇の目である。445は行平鍋である。19世紀代である。

SK115 土人形（第80図 16表 図版45）

446は手びねりの狐である。

SK116 陶磁器（第80図 10表 図版45）

447・448は陶器の瓶である。いずれも鉄釉掛である。調整はロクロナデである。

SK118 陶磁器（第80図 10表 図版45・46）

449～454は磁器である。18世紀前半から19世紀前半までにおさまる。

449は白磁の小壺である。450は染付の端反碗である。451・452は染付の碗である。453・454は染付の皿である。454は見込みにこんにゃく印判がみられ、高台内は変形文字が見られる。453は高台上に砂が溶着する。

455～458は陶器である。18世紀前半から19世紀前半までにおさまる。455は色絵の碗である。

456は灰釉の砂目皿である。457は土瓶の蓋である。458は陶器の植木鉢で鉄釉に白泥掛けである。

SK118 土師質瓦質土器（第80図 15表 図版45・46）

459は土師質の内耳土器である、口縁部は外反し、内耳は穿孔する、穴は貫通する。460～465は土師質皿である。いずれもロクロナデ調整で右回転糸切り底である。460・461以外は口縁にススが付着す。

SK118 土人形（第80図 16表 図版46）

467・468は犬と馬である。いずれも合わせ口成型である。

SK118 石製品他（第80図 19表 図版46）

466は石臼の破片である。

SK134 土師質瓦質土器（第81図 15表 図版46）

469～471は土師質皿である。いずれもロクロナデ調整で右回転糸切り底である。470以外はススが付着する。472・473は焼塩壺である。472は蓋で内面に布目痕が認められる。473は身で板作成形である。

SK143 陶磁器（第81図 10表 図版46）

474・475・476は磁器である。474・475は18世紀前半から18世紀後半までにおさまる。

474は染付の小壺である。475は色絵である。口紅が見られる。476は「くらわんか手」碗である。見込みは蛇の目である。

477は底部が欠損する陶器の鉢である。478は底部から胴部に掛けて欠損する擂鉢である。擂目は7条一単位である。

SK144 陶磁器（第81図 10表 図版46）

479・480・481は磁器である。19世紀代におさまる。

479は染付の端反碗である。480は染付の碗である。見込みには簡略した松竹梅がみられる。

481は染付の型打ち成型の皿である。陽刻を施す。482は陶器の土瓶の口である。

SK146 陶磁器（第81図 10表 図版46）

483は染付小壺で高台内に「雅」の吉祥字がみられる。17世紀中頃におさまる。484・485擂鉢である。いずれも底部は欠損する。484は18世紀後半におさまる。

SK150 陶磁器（第81図 10表 図版46）

486は磁器で染付の皿である。17世紀代におさまる。487は筒形碗の香炉か。内外面鉄釉である。

488は陶器の具器手碗である。17世紀後半におさまる。

SX01 陶磁器（第82図 10表 図版46）

489～492は磁器である。18世紀前半から19世紀代おさまる。

489は染付の碗である。490は広東碗である。491は型打ち成形の皿である。492は鉢である。蛇の目高台がみられる。

493・494・495は陶器である。

493は内外面が灰釉で高台は無釉である。外面は鉄絵が描かれている。494は刷毛目の碗である。495は陶器の蓋である。496は擂鉢である。底部は欠損している。17世紀代におさまる。

SX01 土師質瓦質土器（第82図 15表 図版46）

497は土師質の火鉢で、外面が花のスタンプを施している。内面は刷毛目調整である。498は土師質の内耳土器である。底部は欠損する。口縁部は外反する。内耳は穿孔し穴は貫通している。499は角型の火鉢である。外面ミガキ調整で内面はナデ調整である。

SX01 金属製品（第82図 17表 図版46）

500は円形の鉛玉である。

SX02 陶磁器（第82図 10表 図版46）

501・502は磁器の染付碗である。いずれも丸碗で18世紀後半におさまる。

PIT

P171 陶磁器（第83図 10表 図版47）

504は白磁である。18世紀後半～19世紀前半である。505は陶器碗である。17世紀後半である。

P181 陶磁器（第83図 10表 図版47）

506は肥前の青磁染付碗である。18世紀後半である。507は擂鉢である。底部は欠損している17世紀代である。

P198 陶磁器（第83図 10表 図版46）

508は陶器のひょうそくである。

P346 陶磁器（第83図 10表 図版46）

509・511・512は磁器である。18世紀中頃から幕末におさまる。509は染付碗である。511は染付蓋である。512は染付端反碗である。510は陶器の馬の目皿である。

P346 土師質瓦質土器（第83図 15表 図版47）

513は焼塙壺の蓋である。

P351 土師質瓦質土器（第83図 15表 図版47）

514は土師質の甕である。

P347 陶磁器（第83図 10表 図版47）

515は磁器で染付碗で、17世紀後半～18世紀前半である。516は擂鉢で、17世紀代である。

P415 陶磁器（第83図 10表 図版47）

517は磁器の染付碗である。17世紀後半～18世紀前半である。518は陶器の碗である。

P591 陶磁器（第83図 10表 図版47）

519は磁器の染付碗である。18世紀代である。

P12・580 石製品他（第83図 19表 図版46）

503はL状に加工されているが、用途不明である。520は楕円形の墓石である。

3D・4Dグリッド 陶磁器（第84図 10表 図版46）

521は陶器の盤である。19世紀代である。522は陶器の盥水皿である。530は陶器の瓶である。

3C・4Cグリッド 土師質瓦質土器（第84図 15表 図版46・47）

523は焼塙壺である。524は土師質甕である。

2D・4E・5E 金属製品（第84図 17・18表 図版46）

525・526・527はキセルの雁首である。525は小口に補強体が付く。529は錠前か。528は金属製の簪である。耳かきが付く。

(2) 木製品

SA04-P14 (第85図 21表 図版48)

1は木杭である。断面は梢円状を呈す。胴部の下半から底部にかけて削って先端を作り出している。

SV06 (第85・86図 21表 図版48)

2・3は下駄である。2は小判型である。指の所は窪んでいる。3は長方形である。歯は磨り減っている。

4は羽子板状製品である。5は楔型の部材である。6の形状は角型である。断面は正方形で、側面と頭部面に木釘跡が伺える、組み物の部材か。7は刷毛の部材である。下部に3条の筋彫がある。

8・9・10は箸である。8は上端部が正方形で下端にかけて細くなる。9は中央部が肥厚する。10は両端部が同じ形状である。いずれも面取りが見られる。11は組物の側板である。内外面に漆塗りである。外側面は丸窓に花文、内面は腐食が著しい。12は全面に茶漆塗りで、指物の一部か。13・14は櫛である。13は断面六角形である。14は断面五角形である。櫛の歯の部分が欠損している。15は杓子で全面茶漆を塗る。16は円盤状である。桶の底か、腐食が著しい。17は人形とおもわれる。顔の部分か。端部に穿孔がある。18は縄である。棕櫚か。

SV17 (第86・87図 21表 図版48)

19は漆碗で磨耗が激しく内外面に丸窓の一文が確認できる。20は漆碗で外面に赤漆で松文を描く。

21～27は墨書である。

21は部材に墨書がかかっている。22は板材である。上端部分に墨書がかかっている。

23も板材で、墨書がかかっている。24は木箇か。25は木札である。両面に墨書がかかっている。

26は木札である。片面に墨書がかかっているが不明瞭である。27は木札で両面墨書がかかっている。

28は下駄である。半分欠損する。連歯で高下駄である。茶漆を塗る。29は長方形の木札である。墨書の痕跡があるが、薄く不明である。上部に穿孔がある。30は栓である。円形で頭部から下にかけて窄む。側面は面取りする。31は部材である。側面に漆を塗る。32は断面が蒲鉾形である。凹部分に黒漆を塗る。裏面に墨書がかかっているが不明瞭である。33は刃物で胴部を刺り込み、底部を丸くした栓か。34・35は長方形の櫛である。35は歯を欠損する。36はヘラである。37は竹で埋蔵時に圧迫され変形が著しい。38は部材である。幅は薄く、一側面に刻みを多数入れる。39は頭部が刃物で切断された痕跡が有り、先き細りした端部は面取されている部材である。40は羽子板状である表面に多数擦痕がのこる。

SV18 (第87図 21表 図版48)

41は板状の部材である。42は長方形の手桶の側板か、ほぞ穴が貫通し、横棒を通す穴が見られる。

SV22 (第87～91図 21・22表 図版49)

43～47・49・51までは外面黒漆、内面赤漆の碗である。遺存しているものはいずれも胴部が内湾する。43は半分以上欠損する。外側面は赤塗で丸文に花文が描かれている。44は胴部から口縁にかけて欠損する、底部は肥厚し、中心部に穿孔し貫通している。外側面の文様がのこる。45は胴部から

口縁にかけて欠損する。底部はハの字に開く、外側面に赤漆で草花文である。46・47は胸部から口縁にかけて欠損する。47は外側面に赤漆の花文である。48は漆碗の蓋である。潰れて変形しているが、外側面に丸窓に菱形文が見られる。49は半分欠損する。外側面に鶴文が見られる。50も底部から半分欠損する。内外側面赤漆、外面に丸の文様である。51は外側面に丸窓に鍔形文である。52は木簡である。下部は破損している。片面に墨書がかかっている。53は木札である。下部は破損して、片面に墨書がかかっている。薄く不明瞭である。54は瓢箪形である。

55～62は下駄である。55は長方形の連歯下駄、前歯部分を穿孔している。壊れて補修したものか、後ろの歯は良く使用した結果、磨耗し、変形している。56は丸型で差歛の陰卯である。後歯部分に穿孔が並ぶ補修跡か。57は長方形の連歯下駄である。歯が擦り切れて磨耗している。58は露卯の下駄である。歯が欠損している。歯を接合する為に穿孔している。

59・61は丸型で差歛の陰卯である。59は歯が欠損している。前部分に指の圧痕が残る。右足か。60は露卯で肌理の細かい木を使用している。61はやや細長い丸型である。歯が欠損している。62は連歯の下駄である。正方形に近く、子供用か。63は樽の栓である。側面に穿孔貫通している。64は中央部分に抉りをいたれた部材である。65は樽の蓋である。中央部に穿孔が並ぶ。66は曲げ物の側板である。67は桶蓋である。断面に木釘用穴が2箇所ある。68は円形で底面の中心部に焦げ跡がある、提灯の底か。69・70は部材である。71は外面赤塗りで中空になっている。刃物の柄か。72・73は部材である。72は中央部に凹がある。73は両端部に凸がある。74は敷居である。75は桶の側板で金箔が付着する。76は羽子板状で上部に木釘跡が2ヶ所見られる。77・78は曲げ物の底である。79は部材である。80は刀形である。81はへら形状で擦痕が見られる。82は樽の栓である。83は棒状で擂粉木である。84は漆布、金箔が残存する部材である。85は目の粗い黒漆布を巻いて、飾り金具痕が残る小刀の柄である。

SE22 (第91図 22表 図版50)

86は柄杓である。曲げ物の底面の裏面に「ね」字と焼印がある。

SK41 (第91・92図 22表 図版50)

87・88は漆碗である。87は外側面に丸窓の二の文字がみられる。88は内外面に漆が付着する。漆容器に転用したものか。

89は木札で墨書が薄くかかれている。90は折敷か、三宝か、墨書が不明瞭に残る。91も墨書が不明瞭に残る。92は曲げ物である。93は円形の中心部に小さい穿孔がある紡錘車か。94は断面が蒲鉾形で漆を塗っている。95は両面に歯を作りだしている槍状の部材である。

SK88 (第92図 22表 図版50)

97は連歯の駒下駄である。小判型である。

SK101 (第92図 22表 図版50)

98・99は曲げ物の底である。98は樹皮で4ヶ所留めが確認できる。柄杓か。99は板面に穿孔と焼き跡が見られる。提灯の底か。100・101は一対のもので栓と樽蓋である。

SK143 (第93図 22表 図版50)

102は栓である。

SX01（第93・94・95図 22表 図版50）

103は漆碗の蓋である。内外面赤塗である。104は外面赤塗で、半分欠損する。内面黒漆で胴部は内湾する。底部は腐食している。105は半分欠損する。内外面黒漆で高台は肥厚し、胴部は内湾する。106は木札で両面墨書がかかっている。107も木札で両面墨書がかかっている。108・109は連歯の下駄でいずれも半分欠損し、黒漆塗りである。歯は台形状で丁重な面取りをしている。110・111は用途不明。112は部材である。113は縁に木釘痕がある部材である。114は両面に擦痕が残り、まな板に転用か。115は桶の底か。116～118は部材である。119はリース状に編んだつるである。120は小判型の樽底で、擦痕が見られることからまな板に転用したものか。121は片面には黒色の塗りがある。擦痕の跡がある。用途は不明である。122は樽の側板で、面取りをしている。123はシロである。

SX05（第95図 22表 図版50）

124は折敷の底板である。

P566（第95図 22表 図版50）

125は内面赤塗で外面黒漆の碗である。口縁部が欠損している。底部は肥厚しハの字状となる。

P576（第95図 22表 図版50）

126は上部欠損、断面四角形の柱である。

（3）近世の遺構から出土した瓦

SA01（第99図 23・29表 図版51）

26は軒丸瓦である。瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴の頭部は比較的大きく尾が長く、珠数は16個とみられる。凹面はコビキBである。瓦当径は5寸である。

27は軒平瓦である。瓦当文様は均整唐草文で唐草文は下一上の二転とみられる。中心飾文様は不明である。瓦当上端部が面取りされる。

SV40（第99図 23表 図版51）

28は軒丸瓦の瓦当部の破片で瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で珠径は0.9cmと比較的小振りで珠数は16個とみられる。

SV42（第99図 23・29表 図版51）

29は鳥食瓦である。瓦当部を僅かに残しており、瓦当文様は珠文三巴文であるが巴部は僅かに遺存するのみである。珠数は不明である。

30・31は軒平瓦である。5が瓦当文様は桐文（三二桐）・均整唐草文で唐草文は二転とみられる。瓦当上端部は面取りされる。6が瓦当文様は菊花文（8弁）・均整唐草文で唐草文は下一上の二転である。

SV01（第99図 23・27・29・30・34・35・36表 図版51・52）

32は軒丸瓦の瓦当部である。瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴の尾が長い。珠数は15個である。瓦当径は5寸1分である。

33～35は丸瓦である。いずれも厚手で凹面がコビキBであり、33・34の内面には吊紐痕を残す。

いざれも凸面がナデ調整であるが、33・35の凸面縁部には未調整箇所を残す。35は釘穴があり軒丸瓦の可能性もある。

36～40は軒平瓦である。36～38が瓦当文様は桐文・均整唐草文で唐草文はいざれも上-下の二転である。中心飾の桐文は36・38が三二桐、37が三三桐である。38は金箔押瓦で瓦当部凹部に朱漆が遺存している。39が瓦当文様は劍花菱文・均整唐草文で唐草文は下一上一不明の三転とみられる。40が瓦当文様は三葉文・均整唐草文で唐草の反転数は不明である。三葉文は葉脈の残る古いタイプと見られるが、範型の磨耗により僅かに葉脈の痕跡を残す。

41・42は平瓦である。凹面はいざれもナデ調整である。17が幅8寸8分とやや大きめである。

43は箱熨斗瓦である。鬼台ないしはえぶり台の可能性も考えられる。凹面は強い指ナデにより整形され、凸面はナデ調整である。

44は鬼瓦である。京型・海津型・切据型とみられる。右側の先端部のみ遺存しており、内面は例取り成形による。

SV04 (第100図 27・30・36表 図版52)

45は丸瓦である。凸面調整はナデ、凹面がコビキAで吊紐痕を残す。長さは9寸3分である。

46は軒平瓦である。瓦当文様が均整唐草文で中心飾は欠失して不明である。唐草文は下一上の二転であるが瓦当面の大きさから考えて本来は三転であった可能性が高い。唐草文は立体的で突出が高く凸部には範型の木目が残る。

47は平瓦である。凹面はナデ調整である。長さは9寸3分である。

SV05 (第101図 27表 図版52)

48は丸瓦である。凸面はナデ調整、凹面がコビキAで吊紐痕を残す。長さは1尺である。

SV06 (第101図 23・30・36表 図版52)

49は軒丸瓦の瓦当部で、尻部および玉縁部を欠く。瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で、巴頭部は大きく尾も太く長い。珠数は20個とみられる。凸面はナデ調整で調整幅は細く、凹面がコビキBである。瓦当径は5寸4分である。

50は軒平瓦での瓦当部で、瓦当文様が三葉文・均整唐草文である。唐草文は下一上の二転である。

瓦当上端部は面取りされる。

51は水切り瓦で突帯部は右下がりで、粘土帯を貼付した後に指ナデされる。

52は平瓦である。縦半分がきれいに遺存しており、熨斗瓦として使用された可能性もある。凹面はナデ調整である。長さ10寸である。

53は鳥衾瓦である。円筒形であり、粘土板を筒型に成形し瓦当面を貼付している。瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で、凸部には範型の木目がよく残る。珠数は15個である。瓦当直径は4寸8分である。凸面調整はナデである。

SV07 (第101図 23表 図版52)

54は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で、凸部には範型の木目がよく残る。珠数は16個とみられる。

SV11 (第101図 23表 図版52)

55は軒丸瓦で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）である。殊数は16個とみられる。凸面は幅の狭いナデ調整で、凹面がコビキBである。

SV17（第102図 23・27・30・35・36表 図版52）

56は軒丸瓦で尻部を欠く。瓦当面も周縁部の一部が遺存するのみで瓦当文様は不明である。釘穴が開けられ、凸面はナデ調整、凹面がコビキBで吊紐痕を残す。瓦当面との接合部には櫛状工具による線刻が認められる。

57～59は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整、凹面がコビキBで吊紐痕を残す。57・58は玉縁～尻部にかけて遺存しており、釘穴が開けられ、軒丸瓦の可能性も考えられる。59の長さは1尺である。

60・61は軒平瓦である。瓦当文様が三葉文・均整唐草文（一転）で60が上向き、61が下向きである。61の三葉文は大きく左右の葉も外反する。60の瓦当幅は6寸7分である。

62は敷平瓦で、凹面はナデ調整である。裏面中央に三葉状の刻印（陰刻）が認められる。

63は鬼瓦である。外面に葉の表現が認められ、桐文になるものとみられる。遺存状況から桐文の三葉のうち向かって左葉側が遺存しているものとみられる。中央部に方形の釘穴が1孔開けられる。基部外面にはヘラ状工具による線刻が7条認められる。

SV18（第103図 23・27・36表 図版52）

64・65は軒丸瓦である。64は尻部を欠き、65は瓦当面である。いずれも瓦当文様が珠文三巴文（左巻）である。64の凸面調整は幅の狭いナデ調整で、内面がコビキBである。

66～69は丸瓦である。凸面調整は幅広のナデ調整、内面がコビキBで吊紐痕が認められる。長さはいずれも9尺5寸である。

70・71は平瓦である。いずれも凹面はナデ調整で、長さは70が9寸7分、71が8寸4分である。

SV22（第103・104図 27・30・34・36表 図版52・53）

72・73は丸瓦である。72は側縁部内面の面取りではなく端部が直線的に切られる。凸面は幅広のナデ調整である。長さ8寸4分である。73は釘穴が認められ軒丸瓦の可能性もある。凸面はミガキ調整であるが、ミガキが粗く未調整箇所が残る。凹面はいずれもコビキBである。

74は谷丸瓦（左）で頭部が斜めに切られ閉塞される。凸面はミガキ調整、凹面がコビキBである。

75は平瓦で頭部を欠失する。凹面はナデ調整である。

76は軒棧瓦で、小丸が付かない鎌軒瓦で、瓦当文様は唐草文であるが中心飾は欠失して不明である。

77は棟瓦で伏間瓦である。箱冠型で凸面はナデ調整。玉縁状に突出を持つようであるが欠失しており不明である。凹内面がコビキBである。

SV24（第104図 30表 図版53）

78は軒平瓦で、瓦当文様は菊花文（7弁）・均整唐草文で唐草文は下一上の二転である。瓦当上端部に僅かに面取りが認められる。瓦当幅は7寸2分とみられる。

SV25（第104図 23・30表 図版53）

79は軒丸瓦で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で珠数は16個とみられる。凸面は比較的幅の狭

いナデ調整である。凹面がコビキBで吊紐痕が認められる。尻部に釘穴が開けられる。瓦当径は5寸である。

80は軒平瓦で、瓦当文様は均整唐草文で下上の二転、中心飾は不明である。唐草文は突出が高くシャープである。凹面調整はナデ調整で、瓦当上端部が面取りされる。

SV26 (第104図 23・36表 図版53)

81は軒丸瓦で、瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で巴の頭は大きく尾も長い。珠文は径0.9cmとやや小振りで珠数は17個とみられる。凸面はナデ調整で、凹面がコビキAである。瓦当径は5寸である。

82は平瓦ではほぼ完形である。凹面はナデ調整、長さは1尺である。

SV27 (第105図 30・35表 図版53)

83・84は軒平瓦である。83が瓦当文様は花菱文・均整唐草文で唐草文は下上の二転である。凹面は幅広のナデ調整である。84が瓦当文様は桐文（三二桐）・均整唐草文で唐草文は上一下の二転である。凹面はナデ調整で瓦当上端が面取りされる。

85は鰐瓦で顔左側の口髭部とみられる。髭を表現する鋸歯状突起は粘土紐の貼付により成形されている。外面はミガキ調整、内面がユビナデ調整である。

SV30 (第105図 27・30表 図版53)

86は軒平瓦で、瓦当文様は桐文・均整唐草文で、桐文は花部が不明瞭であるがSV27出土軒平瓦（第105図84）と同范であることから、三二桐で、唐草文は上一下の二転とみられる。凹面ナデ調整で、瓦当上端が面取りされる。

87は谷丸瓦（右）で頭部が斜めに切られ閉塞される。凸面が比較的幅の狭いナデ調整で、凹面にはコビキAが認められる。

SV33 (第105図 23表 図版53)

88は軒丸瓦の瓦当面で瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で珠数は19個である。瓦当径は5寸3分である。

SE01 (第105・106図 23・27・30・36表 図版53)

89は軒丸瓦で瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で突出が高い。珠径は1.2cmで珠数は14個である。

凸面は幅の狭いナデ調整で、凹面がコビキBである。瓦当径は4寸9分である。

90・91は丸瓦である。90が頭部を、91が玉縁部を僅かに欠失している。いずれも凸面ナデ調整でコビキBである。

92は平瓦で、頭部のみ遺存する。凹面はナデ調整である。

93～95は軒棧瓦で、いずれも小丸が付かない鎌軒瓦であるが鎌部は欠失している。瓦当文様は93が三葉文・均整唐草文であるが、三葉は中心葉が太い。唐草文も太く、二転を意図したものとみられるが、第二唐草と子葉と連続して表現されている。94が五葉文・唐草文であるが唐草文は五葉文から派生し葛状に連続している。95が三葉文・均整唐草文であるが、三葉文は点状に表現され、唐草文は二転を意図したものとみられるが、第二唐草と子葉が連続して表現されている。

96は棧瓦である。凹面ナデ調整である。

SE05 (第106図 30表 図版53)

97は軒棧瓦で、瓦当文様は五葉文(半菊文)・唐草文である。凹面はナデ調整である。

SE10 (第106図 36表 図版53)

98は水切瓦で突帯部は左下がりで、粘土帯を貼付した後に指ナデされる。凹面はナデ調整である。

SE11 (第106図 27表 図版53)

99は丸瓦で頭部が消失する。凸面ナデ調整で釘穴が開けられる。凹面がコビキBで吊紐が認められる。

SE12 (第106図 30表 図版53)

100は軒平瓦の瓦当部で瓦当文様が桐文(三二桐)・均整唐草文(二転?)である。金箔押で瓦当面の凹面に朱漆と部分的に金箔が遺存している。

SE14 (第106図 35表 図版53)

101は鬼瓦で丸張型と推定される。内面はケズリ調整である。

SE21 (第107図 23・27表 図版53)

102は軒丸瓦で瓦当部を僅かに遺存し、尻部・玉縁部は消失する。瓦当文様は珠文三巴文(左巻)で珠数は不明である。凸面がナデ調整でコビキB、吊紐が認められる。釘穴が開けられる。

103・104は丸瓦である。いずれも凸面ナデ調整であるが104が幅は狭い。凹面は103がコビキBで吊り紐が認められ、104には棒状圧痕が認められる。長さは103が9寸7分で104が8寸4分である。

SE22 (第107・108図 23・27・31・34・36表 図版53)

105は軒丸瓦で瓦当文様が珠文三巴文(左巻)で巴・珠文とも突出が高く太い。珠数は16個とみられる。瓦当径は4寸9分である。凸面はナデ調整で釘穴が開けられる。

106・107は丸瓦である。106は頭部を消失するが全体に厚い。玉縁平面が外反気味に立ち上がる。

106・107共に凸面ナデ調整でコビキBである。82は長さが8寸である。

108は平瓦で完形である。凹面ナデ調整、長さ9寸である。

109・110は軒棧瓦である。いずれも小丸が付かない鎌軒瓦である。瓦当文様が109は七葉文・均整唐草文で下-上の二反転(子葉?)、110が五葉文・均整唐草文で下-上の二転(子葉?)である。

110は瓦当上端部に「〇に吉」の刻印が認められる。長さは109が9寸7分で110が8寸4分である。

111は棧瓦で棧部の尻側に切込みが1箇所認められる。長さは8寸6分である。

112は箱熨斗瓦で凹面はナデ調整。側面に幅4.5cm程の鰐部がつく。

SE23 (第108図 23表 図版53)

113は軒丸瓦の瓦当面で、瓦当文が珠文松皮菱文(松皮菱I類)である。瓦当径は4寸7分である。

SK04 (第108図 23・31表 図版54)

114は軒丸瓦で瓦当文様が珠文三巴文(左巻)である。瓦当外区部に范型の木目の痕跡が認められる。凸面はナデ調整、凹面がコビキBである。瓦当径は5寸1分である。

115は軒平瓦で瓦当文様は唐草文で中心飾は不明である。唐草文は下-上の二転とみられる。

SK10（第108図 23・36表 図版54）

117は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）である。珠数は15個である。丸部との接合面に櫛状工具による線刻が認められる。瓦当径は5寸である。

116は平瓦で、厚さが4.3cmと厚い。凹面はナデ調整である。

SK17（第108図 23表 図版54）

118は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）である。巴部の突出は高く尾も長い。珠数は16個と推定される。丸部との接合面に櫛状工具による線刻が認められる。

SK22（第108図 27表 図版54）

119は丸瓦で、凸面は幅広のナデ調整で、凹面がコビキBである。

SK27（第109・110図 23・24・31・35・36表 図版54）

120～122は軒丸瓦である。120が瓦当部で瓦当文様が珠文松皮菱文（松皮菱II類）、121・122が珠文三巴文で珠数が16個とみられる。凸面調整は121・122がナデ調整で、内面がコビキBである。瓦当径は120が4寸5分、121が4寸9分である。

123・124は軒平瓦である。123は瓦当部が欠失しており不明である。124は瓦当文様が三葉文・均整唐草文である。唐草文は下上の二転であるが三葉文の元より派生している。凹面はナデ調整で瓦当上端部が面取りされる。

125は平瓦である。凹面はナデ調整であるが、裏面は全面に4本/1cmのハケ（原体幅5cm以上）が認められ、第126図262と同様なものとみられる。

126～128は鬼瓦である。126は隅鬼とみられ、丸張型・跨型で板状である。中心飾文様は釘抜文である。釘抜文の右肩に平面長方形の釘穴が開けられている。127は京型である。内面はケズリ成形である。128は雲型で丸頭型になるものとみられる。外面はナデおよびミガキ調整、内面がケズリ成形である。

SK34（第110・111図 31・35表 図版54）

129・130は軒平瓦である。瓦当文様は129が宝珠文・均整等唐草文で唐草文は上下の二転、130が花卉文・均整唐草文で唐草文は下上の二転である。中心飾は三弁の花を中心に下側および両側に葉の表現があるが意匠は不明である。

131は鰐瓦で差込式の鰐である。形状からみて左鰐とみられる。鰐部はヘラ状工具により襞が形成されており、差込部は円筒形でナデの後ミガキ調整である。

132は鬼板で跨ぎ型である。金箔押瓦で跨ぎの突部の凸面には朱漆と金箔が僅かに残されている。中心飾の一部を僅かに残すが意匠は不明である。内面はケズリ成形である。

133は大型の棟込瓦である。一辺29.4cmの正方形で、中心飾は「○に三銀杏文」で粘土帶貼付成形である。4隅に釘穴が開けられる。裏面はナデ調整である。

134は板状瓦で海鼠壁用の平瓦とみられる。屏瓦になる可能性もあるが通有の棟部は付属していない。単軸方向は平坦であるが長軸方向には湾曲が認められる。外面はナデ調整で短辺側に寄って2孔の釘穴が開けられる。

SK39（第111～113図 24・27・31・35・36表 図版54・55）

135～140は軒丸瓦である。瓦当文様は135が珠文松皮菱文（松皮菱I類）、136～138が珠文三巴文、140が釘抜文、139は瓦当部脱落のため不明である。135の凸面調整はナデ調整であるが幅が狭い。凸面調整は135・137～139はともにナデ調整であるが、135・139は調整幅が狭い。凹面は135・139がコピキA、137・137がコピキBである。139には釘穴が開けられる。瓦当直径はそれぞれ135が4寸7分、136が5寸2分、137が4寸9分、138が5寸3分、140が5寸6分である。

142は丸瓦で凸面はナデ調整で、内面がコピキBで吊紐痕が認められる。

141～146は軒平瓦である。141は滴水瓦の系統を引くもので岡山城中の段二や大阪城三の丸・伏見城（いずれも金箔押瓦）に類似例が確認できる。ただし、唐草文（二股唐草）に連続して三角形の張出しが表現され、脇区は閉じないなど異なる点もある。瓦当上端部は大きく面取りされる。瓦当文様は143・145が桐文・均整唐草文で唐草文は上下の二転である（143が三三桐、145が三二桐）。

144が下向きの二葉文（笪文？）・均整唐草文で唐草文は下上の二転である。146は均整唐草文であるが中心飾は范型損傷のため欠落している。損傷部の形状から三葉文であった可能性が高い。

144・146は瓦当幅がいずれも7寸5分で146は長さが8寸2分である。

147は平瓦で尻部が欠失する。凹面はナデ調整である。

148は棟瓦で完形である。頭部の小口面に「山卯改」の刻印が認められる。尻部と頭部に切込みをもつ。凹面はナデ調整である。

149は鰐瓦で顔左侧の口髭部とみられ本体より脱落している。髭は突帯状に粘土紐を貼付し成形されている・凸面はナデ調整、内面はユビナデ調整である。

SK41（第113図 27・35・36表 図版55）

150は丸瓦でほぼ完形である。凸面は幅の狭いナデ調整であるが、凸面縁部に未調整箇所を残す。内面がコピキBで吊紐痕を残す。長さ9寸4分である。

151は平瓦でほぼ完形である。凹面はナデ調整である。長さ1尺である。

152は鬼瓦で鬼の右側角部とみられ本体より脱落する。全体にナデ調整であるが、成形時の指痕跡が明瞭に認められる。

SK47（第113図 31表 図版55）

153・154は軒棟瓦である。153は小丸が付かない鎌軒瓦で、154は不明である、瓦当文様は153が三葉文・均整唐草文、154が五葉文（半菊文）・均整唐草文である。153の唐草文は蔓状に連続している。

SK48・49（第113図 36表 図版55）

155は平瓦で、尻部の両端を欠失する。凹面は幅の狭いナデ調整である。長さは9寸9分である。

SK52（第113図 24表 図版55）

156は軒丸瓦の瓦当面で、瓦当文様は珠文三巴文（右巻）で、珠数は16個と見られる。瓦当裏面周縁部は強いユビナデである。

SK57（第114図 24・27・28・31・36表 図版55）

157～160は軒丸瓦である。瓦当文様は158が珠文松皮菱文（松皮菱I類）、157・159・160が珠文

三巴文である。157は巴の尾も短く珠径も1.3cmと大きく、珠数は10個である。全体に薄手であり縁部も直線的に切り落とされている。159は巴文が右巻きで尾も長い。珠数は16とみられる。SK73出土軒丸瓦（第115図169）と同範である。160は縁部が斜めに切り落とされており、隅巴と推定されるが、丸部は瓦当面に対し右方向に斜めに伸びるものとみられる。瓦当径は157が4寸5分、158が4寸7分、159が5寸6分、160が5寸3分である。

161・162は丸瓦で凸面ナデ調整、内面がコビキBで吊紐痕が認められる。161は玉縁凸面中央に花弁状の刻印が認められる。長さは162が9寸3分である。

163・164は軒平瓦である。瓦当文様は163が三葉文・均整唐草文とみられるが、中心飾の三葉の左右の葉は唐草文と同様に大きく外方に開いている。唐草文も三葉文の根元より波状に派生しており反転も弱い。164が菊花文（8弁）・均整唐草文で唐草文は下上の二転である。

165は平瓦で、頭部は欠失する。凹面はナデ調整である。

SK62（第114図 36表 図版55）

166は平瓦で、縦方向に半分が遺存する。凹面はナデ調整である。

SK64（第115図 24表 図版55）

167は軒丸瓦で瓦当文様は珠文三巴文である。珠数は16個とみられる。

SK73（第115図 24表 図版55）

168・169は軒丸瓦である。瓦当文様は共に珠文三巴文である。169の三巴文は右巻きでありSK57出土軒丸瓦（第114図159）と同範である。巴部分にヘラ状工具による線刻が認められる。168は内面にコビキBが認められる。

SK74（第115図 24表 図版55）

170は軒丸瓦であるが、瓦当中心部が欠失しており、珠文部分のみ確認できる、丸部は全体に厚い。凸面はナデ調整で、凹面がコビキBで吊紐痕が認められる。

SK76（第115図 28表 図版55）

171は丸瓦で、凸面がナデ調整、凹面がコビキAで吊紐痕が認められる。

SK80（第115図 24表 図版55）

172は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文である。瓦当裏面周縁が強くナデられる。

SK84（第116図 28・35・36表 図版55）

173は丸瓦で玉縁～尻部を一部欠失する。凸面がナデ調整、凹面がコビキBで粗い布痕跡が認められる。長さ9寸5分である。

174は平瓦で頭部を残す。凹面がナデ調整で、頭部端に布痕跡を残す。

175は金箔押瓦で、鬼瓦ないしは飾瓦の桐文の花部とみられる。全体はナデ調整で、全面に朱漆が遺存しており部分的に金箔が認められる。

SK88（第116図 24表 図版55）

176は軒丸瓦で瓦当周縁部の一部と文様区の珠文1点を残すのみである。珠文三巴文と見られるが不明である。凸面がナデ調整、内面がコビキBである。

SK90（第116図 28・31・35表 図版55）

177は幅3寸程の小型の丸瓦で、尻部から玉縁にかけて遺存する。凸面がナデ調整、内面がコビキBで布痕が認められる。

178は軒棧瓦で、小丸が付かない鎌軒瓦である。瓦当文様は三葉文・均整唐草文であるが、三葉文は宝珠形状を呈している。小口部中央上部には□に「七松」の刻印（陽刻）が認められる。

179は軒平瓦で、中心飾は不明で、均整唐草文である。唐草文は上一下の二転である。

180は直方形の瓦製品で用途は不明である。一端が欠失しているため長さは不明である。

SK91 (第116図 24・36表 図版56)

181は軒丸瓦で瓦当文様は珠文三巴文（左巻）である。巴の尾はきわめて短く、珠文も径が1.1cmと大振りで珠数も9個である。凹凸面ともにナデ調整である。瓦当径は4寸3分である。

182は平瓦で、尻部が欠失する。凹面はナデ調整である。

SK92 (第117図 28・35表 図版56)

183は丸瓦で尻部から玉縁部にかけて遺存する。凸面がナデ調整、凹面がコビキAで棒状工具によるタタキが認められる。

184は鬼瓦である。丸張型・数珠掛型・跨ぎ型で連珠溝内には現存7個の連珠が配置される。中心意匠は損傷が著しいが口唇部の輪郭や牙、頸髄の表現が看取され鬼面であるものとみられる。口の内側などには燐が入ることから、中空の鬼面である。外面はナデ調整、内面はケズリ調整である。

なお、跨ぎ部は磨耗が顕著であり使用によるものとみられる。

SK93 (第117図 28表 図版56)

185は丸瓦で、尻部から玉縁部にかけて遺存する。凸面がナデ調整、凹面がコビキBで吊紐痕が認められる。

SK95 (第117図 31表 図版56)

186は軒棧瓦の瓦当面の破片で、瓦当文様から鎌軒瓦とみられる。瓦当文様は三葉文・均整唐草文である。凹面はナデ調整である。

SK99 (第117図 24・31表 図版56)

187は軒丸瓦で瓦当面のみ遺存する。瓦当文様が珠文三巴文（左巻）で珠数は現存8個であるが本来16個であると推定される。瓦当径は5寸である。

188は軒平瓦で、瓦当文様は三葉文・均整唐草文で唐草文は下ー上の二転である。範型の磨耗欠損により中心飾が不明瞭で内区全体に板目痕を残す。凹面はナデ調整である。

SK100 (第118図 24・28表 図版56)

189は軒丸瓦で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴文の尾は長く、珠数は推定16個である。瓦当面にはヘラ状工具による線刻が認められる。釘穴が開けられ、凸面がナデ調整で凹面がコビキBで布痕・吊紐痕が認められる。全長は1尺で瓦当径は5寸である。

190は丸瓦で頭部の一部を欠失する。全体に厚手であり、凸面がナデ調整、凹面がコビキBで布痕が認められる。全長は9寸9分である。

SK101 (第118図 24・28・31表 図版56)

191は軒丸瓦で、瓦当部のみ遺存する。瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で巴文の尾は短く、珠数

も11個である。瓦当径は4寸6分である。

192・193は丸瓦である。192が全長1尺を超える大型で凸面がナデ調整、凹面がコビキBで布痕・吊紐痕が認められる。193は小型で凸面がナデ調整、凹面には布痕が認められる。

194は軒桟瓦である。瓦当文様が五葉文（半菊文）・均整唐草文である。唐草文は上一下の二転である。凹面がナデ調整である。

SK104 (第118図 24表 図版56)

195は軒丸瓦で、瓦当部のみ遺存する。瓦当文様は珠文三巴文（左巻）で珠数が14個推定される。

丸部との接合面には櫛状工具による線刻が認められる。瓦当径は4寸9分である。

SK105 (第118図 28表 図版56)

196は丸瓦で尻部から玉縁部にかけて遺存する。凸面はナデ調整、凹面がコビキBで布痕・板状工具によるタタキが認められる。

SK106 (第119図 24・28・32・36表 図版56)

197・198は軒丸瓦の瓦当部である。197の瓦当文様は珠文三巴文で、珠径1.2cmで珠数は13個である。瓦当径は4寸5分である。198の瓦当文様は珠文三巴文で、巴文は頭部が屈曲し尾も長い。珠数は16個とみられる。瓦当径は5寸3分である。

199は丸瓦で完形である。凸面が幅広のナデ調整で、凹面はコビキB、吊紐痕、棒状工具によるタタキが認められる。長さ9寸4分である。

200は軒平瓦で瓦当部の1/2を残す。瓦当文様は花菱文・均整唐草文で唐草文は下ー上の二転である。凹面はナデ調整である。

201は平瓦で尻部側1/2が遺存する。凹面は幅の狭いナデ調整である。

SK109 (第119図 32表 図版56)

202は軒桟瓦である。瓦当文様は三葉文・均整唐草文である。瓦当文様から鎌軒瓦とみられる。凹面は丁寧なナデ調整である。

SK110 (第119図 24・35・36表 図版56)

203は軒丸瓦で瓦当部のみ遺存する。瓦当文様は珠文三巴文で巴文は尾が長く他の尾と密接して圓線状を呈している。珠数は15個とみられる。丸部との接合面は櫛状工具による線刻が認められる。

瓦当径は4寸7分である。

204は平瓦で頭部側1/2が遺存する。凹面はナデ調整である。

205は金箔押瓦で、第21図175と同様に鬼瓦ないしは飾瓦の桐文の花部とみられる。全体はナデ調整で、部分的に朱漆が遺存しており僅かに金箔が認められる。

SK112 (第119図 24・32表 図版56)

206は軒丸瓦で瓦当部のみ遺存する。瓦当文様は珠文三巴文で巴文は尾が長い。珠数は16個とみられる。丸部との接合面は櫛状工具による線刻が認められる。瓦当径は5寸1分である。

207は軒平瓦で瓦当部の一部が遺存する。瓦当文様は均整唐草文で中心飾は欠失しているため不明である。凹面はナデ調整である。

SK115 (第119図 24・28表 図版56)

208は軒丸瓦で瓦当文様は珠文三巴文で巴文は大きく尾が短く、珠径も径1.3cmと大きく珠数は16個である。凸面がナデ調整である。瓦当径は4寸9分である。

209は丸瓦で、尻部に釘穴が開けられることから軒丸瓦の可能性も考えられる。全体に厚手で凸面がナデ調整、凹面がコビキB、布痕・吊紐痕が認められる。

SK116 (第120図 28表 図版56)

210は丸瓦で玉縁部が欠失する。凸面がナデ調整、凹面がコビキB、布痕・吊紐痕が認められる。

SK118 (第120図 28表 図版56)

211は玉縁部をもたず、尻部が窄まるいわゆる行基瓦状であるが掛巴瓦とみられる。尻部には釘穴が開けられ、釘穴の脇には「ニ」状の刻印（陰刻）が認められる。凸面はナデ調整、凹面はコビキB・布痕が認められる。

SK119 (第120図 25表 図版56)

212は軒丸瓦で瓦当部のみ遺存する。瓦当文様は珠文三巴文で巴文は大振りである。瓦当径は5寸5分である。

SK122 (第120図 32表 図版56)

213は軒平瓦で瓦当部の1/2が遺存する。瓦当文様は均整唐草文で中心飾は不明である。唐草文は下ー上の二転である。凹面はナデ調整で瓦当上端部が僅かに面取りされる。

SK128 (第120図 28表 図版56)

214は丸瓦で玉縁部が欠失する。凸面が幅の狭いナデ調整で、凹面がコビキB・布痕・吊紐痕が認められる。

SK136 (第120図 32表 図版56)

215は軒平瓦で、瓦当文様は三葉文・均整唐草文で、三葉文は左右の葉文は下部で連結する。唐草文は下ー上の二転であるが第1唐草は中心飾下で左右が連結している。凹面がナデ調整である。

SK140 (第120・121図 25・28・32・35表 図版57)

216は軒丸瓦で、瓦当文様は珠文「王」字銘である。中心飾は内区圈線内に「王」一字が陽刻されており、全体に造りは丁寧である。内区圈線径が3寸5分、瓦当径が7寸で、珠数は16個と見られる。SK39と接合関係にある。広島城跡太田川河川事務所地点SK(84)出土のものと酷似しており同范であると考えられる。

217は丸瓦で、凸面がナデ調整、凹面がコビキB、布痕、吊紐痕が認められる。

218は軒平瓦で全体の1/2が遺存する。瓦当文様は中心飾が不明で均整唐草文である。唐草文は下ー上の二転である。凹面がナデ調整で部分的にコビキBの痕跡を残す。

219は鬼板ないしは飾瓦で、桐文である。両側に葉が取り付くことから中心葉の部分と見られる。葉脈部は立体的に表現されており、主脈は突帯状に側脈は階段状に成形される。金箔押瓦であり箔下の朱漆が明瞭に遺存しており、部分的に金箔も遺存する。朱漆上には箔足が明瞭に残されており、一辺3cm程の箔を押したものとみられる。

220は鰐瓦で、右側の顎鰐部とみられる。鰐を階段状に表現しており5段確認される。端部は大きく上方に湾曲する。本体から脱落しており、接着面にはクシ状工具による線刻が認められる。

SK143（第121～123図 25・32・36表 図版57）

221～229は軒丸瓦である。瓦当文様は221が珠文松皮菱文(松皮菱I類)、222～229が珠文三巴文(左巻き)である。229の松皮菱文に関しては第108図113・第111図135・第114図158と同范である。珠文三巴文のものに関してはSK143内において同范関係は確認されない。いずれも巴文の尾は長く、珠数は221が12個、222が15個、229が16個、223・224が17個、227・228が18個とばらつきがある。229は瓦当裏面にヘラ状工具による縦位の線刻が1条認められる。凸面の遺存する221～226はいずれも幅の狭いナデ調整で、凹面はコビキの確認できるもののうち221がコビキA、225・226がコビキBである。瓦当径は227が4寸6分、221が4寸7分、225が4寸8分、222・224・229が5寸1分、223・226が5寸2分、228が5寸3分である。

230・231は丸瓦である。長さに対して玉縁部が短い特徴をもつ。凸面はナデ調整で側縁部に未調整箇所を残す。凹面がコビキBで230には吊紐痕が認められる。長さは230が9寸3分、231が8寸2分である。

232～239は軒平瓦である。瓦当文様は232・233が桐文(三二桐)・均整唐草文で唐草文は上一下の二転。

234・235が桐文(三三桐)・均整唐草文で唐草文は上一下の二転、236が宝珠文・均整唐草文で宝珠側面より唐草文に沿って2条派生しており唐草文は下-上の二転、237が六葉文・均整唐草文で唐草は二転の唐草の間に下向および斜め上向の三葉状の文様が配されるものである。

238が笹文?・均整唐草文で上一下の二転、239が三葉文・均整唐草文で唐草文は下-上の二転とみられる。

237を除くと瓦当上端部が面取りされている。208・213は瓦当接合部に強いナデが認められる。

240・241は平瓦である。240は厚手で大型の平瓦になるものとみられる。凹面はいずれもナデ調整である。

SK144（第123図 32表 図版57）

242・243は軒棧瓦で小丸が付かない鎌軒瓦とみられる。瓦当文様は242が三葉文・均整唐草文で243は瓦当面が欠失しており不明である。243は瓦当接合面に棒状工具による刺突が認められる。凹面はいずれもナデ調整である。

SK146（第123図 28・32表 図版57）

244は丸瓦である。尻部から玉縁にかけて遺存している。凸面はナデ調整で、凹面はコビキB・布痕・吊紐痕が認められる。

245・246は軒平瓦である。245が均整唐草文で中心飾は不明である。唐草文は下-上の二転である。246桐文・均整唐草文である。唐草文は上一下の二転である。246は瓦当上端が面取りされ、中央部に「○に王」の刻印(陽刻)が横位に認められる。

SK150（第123図 25表 図版57）

247は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文(左巻き)で、珠径は1.3cmと大きく、珠数は16個である。瓦当径は5寸3分である。

SX01（第124～127図 25・28・32・33・34・35・36表 図版57・58）

248～253は軒丸瓦である。瓦当文様は248～250、252・253は珠文三巴文（左巻）、251が珠文松皮菱文（松皮菱I類）、254は不明である。珠文三巴文に関しては248と249が同範関係にある。巴文の尾は250をのぞくといずれも長く、珠数については248・249・251が12個、250が13個、252が16個である。凸面の遺存する248・249・251はいずれも幅の狭いナデ調整で、凹面のコビキ痕跡は確認できるもののうち249がコビキA、248・251がコビキBである。254は瓦当周縁部においても凸面と同様にナデ調整で行われている。瓦当径は250が4寸6分、251が4寸7分、249が4寸9分、248が5寸1分、252が5寸2分、247が5寸3分である。

255～258は丸瓦である。調整はいずれも凸面がナデ調整で、凹面がコビキB・布目が認められ、258を除くと吊紐痕が認められる。257は粗布痕跡が顕著に認められる。258は通常の丸瓦の頭部を切断し短くしたものである。長さは256が9寸5分、255が9寸6分、257が8寸7分、258が6寸6分である。

259～261は軒平瓦である。瓦当文様は259が桐文（三二桐）・均整唐草文で唐草文が上-下の二転、260が菊花文（8弁）・均等唐草文で唐草文が下-上の二転、261が三葉文・均整唐草文で中心飾の三葉文は下部より簪状に派生し先端は菱状の突起となり、唐草文が下-上-下の三転で子葉付である。

凹面はいずれもナデ調整で260のみ斜め方向のナデが加えられる。瓦当幅は259が8寸、261が7寸2分である。

262～268は平瓦である。外面がナデ調整であるが263・266は調整幅が狭い。264・266・267については凹面にコビキBの痕跡が認められる。262は小口板工具によるハケが凸面全面に認められる。

267は狭端部の小口面にヘラ状工具による刻印が認められる。長さは266が9寸、262が9寸1分、265が9寸2分、264が9寸4分、263が9寸8分である。

269～270は敷平瓦である。凹面はナデ調整で、長さは269が4寸9分、270が4寸7分である。凹面の調整状況からみて9寸物の平瓦を二分割し成形しているものとみられる。270は狭端部の小口面中央にヘラ状工具による縱位の線刻が3条認められる。

271・272は面戸瓦である。いずれも4辺が面取りされ成形されており、凸面はナデ調整、凹面は271にはコビキB、272には吊紐痕が認められる。

273は鰐瓦で、尾鰐の破片である。階段状に鰐の表現が認められ、外面は丁寧なミガキ調整である。

274は飾瓦ないしは鬼瓦で、中心飾は松皮菱文とみられる。外面および側面に部分的に金箔が遺存しており全面が金箔押であったものとみられる。SK143と接合関係が認められる。

SX02（第127図 25・28表 図版58）

275は軒丸瓦で瓦当文様は珠文三巴文（左巻き）で巴文は尾が長く他の尾と密接して圓線状を呈している。珠数は16個とみられる。凸面は幅の狭いナデ調整で、凹面はコビキA・布痕・吊紐痕が認められる。瓦当径は5寸3分である。

276・277は、丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整、内面はコビキB・布痕・吊紐痕が認められる。長さは276が1尺1寸6分と大型で、277が9寸7分である。

硬化面（第128図 33表 図版58）

278は軒平瓦である。瓦当文様は三葉文・均整唐草文で唐草文は中心飾の下部より薦状に伸びる。凹面はナデ調整である。

P228 (第128図 33表 図版58)

279は軒平瓦である。瓦当文様は剣花菱文・均整唐草文で欠失のため唐草文の転数は不明である。

P415 (第128図 35表 図版58)

280は直方形の瓦製品であるが用途は不明である。一端が欠失しているため長さは不明である。

P495 (第128図 33・35表 図版58)

282・283は軒平瓦で瓦当文様は均整唐草文で同範である。中心飾は欠失するが三葉文とみられる。凹面はナデ調整である。

284は鰐瓦である。形状からみて腹部側とみられる。円錐状の鱗状突起が痕跡含めて5箇所認められ、外面は鱗に覆われている。鱗は花頭状のスタンプ施文であり、概ね下方から上方に向かって順次施文される。側面には別造の鱗を差し込む孔が認められる。

グリッド出土瓦 (第129~137図 25・26・28・33・34・35・36表 図版59・60)

288・289・292・293・300~303・311・315・316・322~325・337は軒丸瓦である。瓦当文様は288・289・300~302・311・315・322が珠文三巴文、292・293・316・323・324・325・337が珠文松皮菱文で、292・324・325・337が松皮菱Ⅰ類、293・316・323が松皮菱Ⅱ類に分類される。323・337は金箔押瓦である。珠文三巴文については巴の尾が長いものがほとんどであるが、尾同士が密接して圓線状を呈しているものは認められない。珠数は289が12個、293が13個、301が14個、311・332が16個、300・302・315が17個、288が19個である。松皮菱文は珠の配置からⅡ類に大別されるが、Ⅱ類としたもののうち松皮菱の形状からさらに2類に細分される。Ⅰ類は292・324・325が同範でありⅡ類には同範関係は認められない。315は中央部に「〇に王」の刻印（陽刻）が横位に認められる。

294・301・317は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整で凹面はコビキBが認められる。317の凹面には棒状工具によるタタキが認められる、釘穴も開けられる。294は丸瓦としたが、丸瓦の頭部で切断されたものであり玉縁部は存在しない。全体の造りは丸瓦と変わらない。

326は鳥衾である。瓦当部は欠失しているため瓦当文様は不明である。凸面はナデ調整、凹面はコビキA?・布目・吊紐痕が認められる。尻部には釘穴が開けられている。

290・295・296・305・306・314・318・327・328は軒平瓦である。瓦当文様は290・295・306が桐文(三二桐)・均整唐草文(上-下、二転)、318が桐文(三三桐)・均整唐草文(上-下、二転)328が六葉文・均整唐草文(上-上、二転)、296・327が菊花文・均整唐草文(下-上、二転)、305が宝珠文・均整唐草文(下-上、二転)、314は均整唐草文(下-上、二転)であるが中心飾は範型の欠損のため不明である。328は二転の唐草の間に下向および斜め上向の三葉状の文様が配されるものである。

297・298・319~321・329は平瓦である。凹面はいずれもナデ調整で、273凸面にヘラ状工具による線刻が認められる。297・329は完形で長さがそれぞれ9寸1分、9寸9分である。319は大型の平瓦で長さが1尺2寸である。320・321は幅に対して厚みがあるので320が3.2cm、321が3.5cm

ある。

291・307は水切り瓦である。いずれも尻部に右下りの突帯を貼付している。突帯部は強くナデ付けされる。

308は輪違いで、尻部は面取りされている。凸面がナデ調整、凹面にはコビキBが認められ、通常の丸瓦と同様である。

285・287・290・313・331～335は鬼瓦である。285は中心意匠については不明であるが、葉状の表現が2枚認められる。287は京型・海津型とみられる。右側の先端部のみ遺存しており、内面は削り出し成形による。290は龍頭部の破片であり本体より脱落している。外面は細かなナデ調整である。313は海津型・跨ぎ型で無文である。内区上方に釘穴が認められ隅鬼とみられる。331は丸張型・数珠掛型・連珠溝内には現存2個の連珠が配置されるが中心意匠は不明である。332は丸張型とみられるが洋梨形を呈している。跨ぎ型であるが大きく切れ込んでいる。内区上方に長方形の釘穴が開けられている。333～335は同一個体と考えられ組合せ型の大棟鬼瓦である。蕉状の主脈を中心両脇に葉状表現が認められる。ハート型の突部には花弁様のボタン状付文が2個一対で付けられている。側面や上方には組み合わせに用いるとみられる長方形の切り込みが認められる。なお、335の外面には「二」のヘラ描文字が認められ組み立て時の符丁と考えられる。

312は飾瓦である。釘抜き文を中心意匠にもつ。釘抜文はヘラ状工具による切り出しである。内面はケズリ調整である。

286・299・309・330・336は鰐瓦である。286は胸鰐部の破片で大きく弧を描き階段状を呈する。上方には鱗の表現が認められるが、三角形の粘土板を貼付しており、本体との接合面には線刻が認められる。299は尾鰐の破片であり大きく前後に分かれる部位である。2枚の粘土板を貼り合わせて成形している。外面はナデ調整である。309は顎部である。左側部で複数の粘土板を接合しアーチ状に成形されている。口部はヘラにより切り込まれているが、周囲を切り出しによって成形された口鬚が覆っている。眼は円形粘土板を貼付した後に穿孔している。眼の上方には、粘土紐を貼り付けた上に押引きにより線刻表現されている。330は顎部分で口唇部は突帯により、口鬚は切り出しにより成形される。336は鬼瓦の牙の可能性も考えられるが、連続せず前面で開放されることから、鰐瓦と判断した。牙は円形台上に円錐形に成形されており、ミガキ調整である。内面には指頭痕が顕著である。

表土出土瓦（第137図 35表 図版60）

338は飾瓦である。桐文とみられ、SK140出土の飾瓦（第121図219）に類似する。葉脈部は立体的に表現されており、主脈は突帯状に側脈は階段状に成形される。金箔押瓦であり箔下の朱漆や金箔が遺存している。箔足が明瞭に確認され、一辺3cm程の金箔を押したものとみられる。

339・340は鰐瓦である。339は胸鰐部であり階段状に成形されている。胸鰐部の脇には剥落した痕跡が残っており、顎部とみられる。剥落部にはクシ状工具による線刻が認められる。胸鰐上には鱗表現が認められるが半裁竹管状のスタンプを用いて逆「U」字形に連続施文している。340は耳部と見られる。本体に粘土紐を貼付し表現しているが耳孔部は穿孔されていない。周辺には鱗の表現が認められるが、339同様に半裁竹管状のスタンプを用いて逆「U」字形に連続施文している。

VI まとめ

1. 近代

(1) 建物1 (SB06) 建物2 (SB07)

基本層序I層の除去後に赤化色ブロックを含む硬くしまった層から $5 \times 5\text{m}$ 間隔に並ぶ建物跡が確認された。この2基の建物跡は前後関係が不明で、遺物からもSB06・SB07は昭和期の遺物が出土している。

文献によると明治8年頃に武家屋敷の解体がほぼ終わり、調査区を含めた一帯は西練兵場として利用される。敷地範囲を確認したところ明治以降の地図には、空白地帯になっている、当時を写した写真および記事によると(2009『広島城の近代』)産業博覧会等が開催され、この西練兵場の敷地が一時的に使用されたことが載っている。SB06・SB07は、この一時的な建物の跡とも考えられる。

(2) 建物3 (SB01) (図版61)

確認された遺構は、石列、2基の基壇と8基の柱穴である。

本調査区は京口御門の北側、現在の京口門公園の西側にあたるところである。遺構はこの京口門公園との、境界のすぐ西側で、基本層序I層で確認する。今回確認された建物跡は西側には広がりではなく、限られた範囲での確認である。近代資料によるとこの地点で該当するものは「北清事変記念碑」がある。明治39年、西練兵場の東端、京口御門の土壘上に立てられたことが載っている(2009『広島城の近代』)それを窺がわせるもので出土した遺物に石碑片があり、断片であるが「第五師団□□」「陸軍歩兵□□」とした文字が刻まれている。ただし調査区は土壘より西側にあり、一連のものであれば、一部基盤部が付随する土木基礎部の可能性がある。

2. 近世

遺構の変遷について

当地点からは、石列を伴う区画溝も含め溝状遺構34基、井戸18基、土坑85基の外、広範囲に及ぶ湿地状の窪地などの不明遺構や建物跡、柵跡等の遺構を検出している。

特に特徴的な遺構として、想定される土壘と並行乃至は直行する方向に幾条も掘られた屋敷境となるであろう溝状遺構及び、一部地域に集中して分布している井戸があげられよう。

これらの遺構は、ある時期を境として、異なる様相を示しており、時期的に武家屋敷地内の土地利用のうえで大きな変化があったことを示すものとして注意される。全体に遺存状態が悪く、遺構の検出も断続的な状態であり、検出面の把握も不完全な状態であったため、遺構内に遺存する遺物を参考に考察せざるを得ないが、概要は把握しうるものとして取り扱うこととする。

まず特徴的な状況について整理しておこう。①調査区南側1/4程度、東西方向で1/2程度、SV07及びSV18に囲まれた部分とその他の部分の様相の違いである。すなわち、南側中央部分が遺構の密度が比較的高いのに対して、その他の地域は比較的まばらである。②不明遺構であるSX01の南東方向を取り囲むように井戸が数多く分布している。③調査区西側5m~10mあたりについてでは、特に南北方向に溝状遺構及び柵跡等屋敷地との境界を示す遺構が集中する地点である。

以上のような特徴を指摘することができよう。

以上のような遺構の分布状況がどのようにして形成されたのか、考察してみたい。まずは、瓦が多く出土した遺構の時期について着目してみたい。瓦によって埋められた瓦溜りとも言うべき遺構としては、SK143、SK22、SK19、SK34、SK27、SK17、SK57などあげられる。これらには、SK143に代表される18世紀代のものとSK57に代表される幕末あたりのものがあるようである。これは、18世紀代のどこかの時点で一度大量に瓦等の廃材が大量に出る状況が出来たことを示すものであり、主にSK143より前の時期と後の時期に分けられることを予想させるものである。

また、南北方向の溝状遺構の時期を出土遺物のみから見る限り、その新旧は定かではないが、少なくとも18世紀代に限定されるもののみであり、SA04が19世紀代の柵跡と想定されるだけに上述の状況の変化との関連を伺わせ興味をひかれるものである。その場合、SA12についても同様な様相を考えることもできよう。一方で、東西方向の溝を見る限り、SK143自体溝状遺構の一部であった可能性が考えられ、石列の伴う区画溝SV40外も含めて、石列を伴う伴わないの違いはあるとしても築城当時から北と南を区画する必要のある地域として位置づけられていたものと考えられる。ただ、その場合、前述する南北方向の溝状遺構と比して、敷地を明らかに分ける意図を持った施設というよりは視覚的な効果を意図したものと考えられ、敷地的には同一区画内の区分を表している可能性が高い。ただSV40自体が後述するSX01に関連する井戸により切られていることを考えると、SX01が機能していた時期には、すでにこの区画は存在せず一連の広い空間であった可能性が高い。

次に井戸と不明遺構SX01との関係であるが、SX01の周辺からは近世の井戸跡が10基確認されている。これらは検出面の標高から分類すれば、1.3m前後のもの4基(SE11, 08, 05, 15)、1.1m前後のもの4基(SE16, 14, 09, 22)、1m以下のもの2基(SE10, 12)となる。分布状況から見れば、最下層の2基については別にして、上層の2種類4基ずつの井戸については、それぞれ2基ずつが関連する位置関係を取っており、SX01との機能的な関連を強くうかがわせ、その性格を考える上で極めて示唆的である。SX01については、湿地状態にあった蘿地を埋め立てるために、様々な工夫を行い砂まで使用している状況が確認されている。出土遺物から見れば19世紀段階のどこかの時点で埋め立てられたと考えられるが、武家屋敷の屋敷地内に湿地状態の蘿地が存在していること自体が奇異であり、井戸との関係から考えても、この地に水を大量に使用する必要のある大規模な施設が存在し、それをおそらく幕末になって埋め戻したものと考えられる。また、SX01の西側の柵跡と考えられるSA04が、その延長線上の北側に存在する建物跡4と同一時期に構築されたものと考えられるが、18世紀後半の遺構と考えられるSK91よりも後出であり、19世紀の遺構であるSK88によって切られていることから、ほぼ19世紀代の遺構と考えられ、その場合はSX01が遺構として機能していた時期は、この地は柵跡SA04及び建物跡4等に囲まれ、南北方向の調査区間いっぱいに広がる、多くの井戸とSX01関連の施設のみの存在した広い空間であった可能性が高い。

以上のような状況を総合的にみると、次のような点が指摘できよう。①18世紀後半から19世紀にかけてのどこかで、土地利用の点で大きな変化があった。②変化としては、深い溝で仕切られた比較的狭い敷地の空間から、おそらく柵等で仕切られた広い空間への変化である。③溝状遺構であるSV33や柵跡と考えられるSA04の西側については、一貫して遺構が少なく生活の痕跡の希薄な地域であり、屋

敷地割の主軸をなす道路等の通路的役割を持った空間である可能性が高い。この他、SX01の性格については、当地域を特徴づける遺構であるだけに大いに興味を喚起されるが、明確にしえなかつた点に悔いが残る。類例を待って、検討していきたい。

3. 瓦について

今回の調査において、瓦は遺物収納コンテナ（27ℓ入）換算で66箱分が出土している。ただし、調査段階において、全体形状を留めるもの、瓦当面、鬼瓦、鰐瓦、その他役物などの基準に基づき一定の取捨選択を行っているため全体量を示しているわけではない。したがって、統計的な処理については意味をなさないため行っていないことをあらかじめ断っておく。なお、瓦の実測作業にあたっては特徴的なものを抽出するように努め、特に軒瓦にあたっては可能な限り瓦当文様の各類型を提示できるよう抽出を行った。したがって、瓦に関しては必ずしも遺構の年代観を示しているものではない。さらには、瓦当面について全点資料化を目論み拓影図の作成を行ったが、紙幅の関係で掲載することができなかった。瓦の部分名称については主に坪井2003によったが、調整技法や瓦当文様の名称については各所の発掘報告書を参考とした。遺物観察表における計測部位については例言のとおりである。

出土した瓦については、広島城築城時の毛利期から近代に至る時代的に幅広いもので、その中でも金箔押瓦を含むことが特筆される。また、鰐瓦や鬼瓦を多く含む点で特徴的であり、鰐瓦については時期的な幅があるにしても確実なものでも10個体以上に及んでいる。基本的な状況は隣接する太田川河川事務所地点と同様な傾向がみてとれる。本稿では、主に毛利期の瓦を中心に扱いまとめとしたい。

①瓦の分類

今回の調査により出土した瓦のうち瓦当文様を扼りどころとして分類を試みることとする。軒丸瓦については瓦当文様が珠文三巴文のものについては資料数も多いことから、細分は避け、珠文松皮菱文のもののみ分類を行っている。また、軒平瓦においても、中心飾の不明なものや棟瓦については一部のものを除き分類を避けた。なお、各分類については同型での分類ではなく、細分類のあるものは細分類の単位で同範関係を示しており、細分類のないものについては大分類が同範関係を示している。したがって分類の数がそのまま範の数を示している。

(a) 軒平瓦

桐文 中心飾である桐文の花数で大きく2類に分類しそれぞれの范型により細分を行った。文様は凸線の陽刻で、中心飾に桐文を配し上-下二転の均整唐草文を持つ点において意匠は同様である。

(各分類の括弧内には遺物番号示し、太田川河川事務所地点における分類と同範のものはその分類を明示した)

I類 三三桐のものを一括する。金箔押瓦は確認されていない。

-1 3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で側脈は「ハ」字状である。唐草文の第一唐草が桐文の上部より派生するもので古相をしめすが、第二唐草は密着しない。上-下の転である。(37)

-2 中心葉が心葉型を呈する。3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で、側脈は中心葉の

文様名	類型	瓦当拓影圖	
桐文	I-1類		37
	I-2類		143
	I-3類		235
	II-1類	 	259 100 (金箔押)
	II-2類	 	233 38 (金箔押)
	II-3類	 	306 246
宝珠文	I類		236
	II類		129
六葉文		 	328 237
花卉文			130
二葉文(雀文)	I類		144
	II類		238

0 10cm
(1:5)

第139圖 軒平瓦瓦當文樣分類(1)

ものが平行に側葉のものが僅かに「ハ」字を呈する。唐草文の第一唐草は中心飾下部より派生する。上-下の二転である。(143, 318・太田川2類-1)

- 3 中心葉が僅かに心葉型を呈する。3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で、側脈は中心葉のものが平行に側葉のものが僅かに「ハ」字を呈する。なお中心葉の主脈は左に傾く。唐草文の第一唐草は中心飾下部より派生する。上-下の二転である。(235)

II類 三二桐のものを一括する。細分-1、-2において金箔押瓦が確認されている。

- 1 中心葉・側葉とともに心葉型を呈しほぼ同形である。3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で、側脈はいずれも「ハ」字を呈する。唐草文の第一唐草は中心飾の中央部より派生する。唐草文は緩やかに波打つ。上-下の二転である。金箔押瓦を含む。出土量は最も多く桐文では主体的である。(30, 36, 86, 100, 145, 232, 259, 290, 295・太田川1類-1)
- 2 中心葉が心葉型を呈し側葉の方がやや長い。3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で、側脈は中心葉のものが平行に側葉のものが「ハ」字を呈する。唐草文の第一唐草は中心飾の下部より派生する。上-下の二転である。金箔押瓦を含む。(38, 233, 234・太田川1類-4)
- 3 中心葉が僅かに心葉型を呈し側葉の方が大きく、外側が湾曲する。3葉とも葉脈が表現されるが主脈は1本で、側脈はいずれも「ハ」字を呈する。唐草文の第一唐草は中心飾の下部より派生するが直線的で巻きも短く立ち上がる。上-下の二転である。「王」銘の刻印をもつものがある。(246, 306・太田川1類-2)

宝珠文 中心飾である宝珠文の形状で2類に分類した。文様は凸線の陽刻で、均整唐草文が二転である点は同様であるが反転方向が異なっている。(各分類の括弧内には太田川河川事務所地点における分類を明示した)

- I類 宝珠は円形で上方に短く凸線が立つ。中心飾の両脇より子葉が2本対で立ち上がる。唐草文は中心飾の下部より派生し下-上の二転である。内区幅が狭い。(236, 305・太田川2類)
- II類 宝珠は卵形で凸線が2本認められる。唐草文は中心飾の下部より派生し上-下の二転である。(129)

六葉文 中心飾が横向きの三葉文を左右に配置したような六葉文である。唐草文はいわゆる花唐草で唐草の先端に三葉状の花がついている。なお唐草文は左右対称ではない。(237, 328)

二葉文(笹文) 中心飾の形状で2類に分類した。文様は陽刻で、均整唐草文が二転である点は同様であるが反転方向が異なっている。

- I類 二葉文は凸線状の陽刻で表現される。唐草文は中心飾りの下側より派生し下-上の二転である。(144)

- II類 二葉文は中実のもので中央部が窪む。また上部に逆「ハ」字状に凸線が認められ雪持笹の意匠にも見える。唐草文は中心飾の下側面より派生し上-下の二転である。(238)

花卉文 中心飾は花文で両脇に葉状の表現が認められる。文様は凸線の陽刻で、唐草文は中心飾の下側より派生し二転で下-上の二転である。他での類例に乏しいものである。(130)

花菱文 中心飾が剣先花菱文で中心飾の形状で2類に分類した。文様は凸線の陽刻、下-上二転の均

文様名	類型	瓦当拓影図	
花菱文	I類		279
	II類		83
菊花文	I類		260
	II類		327
三葉文?			282
滴水瓦			141

0 10cm
(1:5)

第140図 軒平瓦瓦当文様分類(2)

整唐草文を持つ点において意匠は同様である。

I類 花菱文は対角線方向に放射状に凸線をもつものである。唐草文は中心飾の下側より派生する。(39, 80, 200, 279)

II類 花菱文はI類と異なり放射状の凸線をもたないものである。唐草文は中心飾の下側より派生するがやや離れている。(83)

菊花文 中心飾である菊花文の形状で2類に分類した。文様は陽刻で、均整唐草文が上一下の二転である点は同様である。

I類 菊花文は8弁で涙滴状の凸線表現である。唐草文は中心飾の側面中央より派生する。(15, 31, 164, 260, 296)

II類 菊花文は8弁で点状の凸線表現である。唐草文は中心飾の側面中央より派生する。(78, 327)

三葉文? 中心飾が欠失しているが三葉文と推定される。均整唐草文は突出が高く瓦当面からの立ち上がりは直線的でシャープであり特徴的である。菊花文の形状で2類に分類した。文様は陽刻で、均整唐草文が上一下の二転である。(46, 282, 283)

滴水瓦 破片のため全容が不明確であるが、中心飾りがなく両側に幅広の唐草文(二股唐草)とそれと連続する三角形の張出しが表現される。また、脇区は閉じない。瓦当上端部は大きく面取りされる。広島城においては初見のものである。(141)

文様名	類型	瓦当拓影図
松皮菱文	I類	 221
	II-1類	 323(金箔押)
	II-2類	 120
	II-3類	 316

第141図 軒丸瓦瓦当文様分類

0 10cm
(1:5)

(b) 軒丸瓦

松皮菱文 中心飾である松皮菱文の形状と珠文との配置関係で2類に分類した。

I類 松皮菱文の上下・左右の先端部と珠文が干渉しない配置関係にあり、中心飾により4分割された範囲に珠文をそれぞれ3個ずつ配置する。珠数は12個である。松皮菱文のうち上下の菱文の各辺は内湾する。金箔押瓦が認められる。松皮菱文の中では最も多く主体を占める。
(3, 13, 18, 113, 135, 158, 221, 251, 292, 324, 325 · 太田川2類)

II類 松皮菱文の中央の菱文により上下に分割された範囲に珠文をそれぞれ7個ずつ配置する。珠数は14個である。松皮菱文はI類に比し縦に潰れた形状をもち、中央の菱文に対し上下の菱文は極端に小さい。範型の違いにより細分される。

-1 松皮菱文の上下の菱文が2, 3に比し大きく表現されるものである。金箔押瓦である。

(9, 323 · 太田川1類-3)

-2 松皮菱文の中央の菱文の上辺は外反気味に湾曲し、下辺は逆に内湾気味に湾曲する。

(太田川 1類-2) (120, 303)

-3 1に比し松皮菱文の中央の菱文の先端が鋭角であり上下辺ともに僅かに内湾気味に湾曲する。

(316・太田川 1類-1)

王字銘 中心飾が「王」1字であり、内区圈線に囲まれる。外区には16個の珠文がめぐる。瓦当文様は切り出しや貼り付けではなく範型によるものである。(216)

②毛利期と想定される瓦について

以上、軒平瓦を中心に瓦当面の分類を行ったが、このうち瓦当文様やヨビキ技法等の成形・整形技法の特徴から毛利期と想定される瓦について触れておきたい。これまで広島城の調査において該期の瓦資料については散発的であり全体の様相が不明確であった。しかし、太田川河川事務所地点においてまとめた資料が報告され、今回の調査においても同様にまとめた資料を提示することができた。また、2009年度において調査された上八丁地点においては井戸より1対の朱彩金箔押鰐瓦や金箔押鬼板（板屋貝）などと共に一括性の強い資料が出土しており、徐々に資料の蓄積が行われている。

今回の調査において出土した毛利期の瓦の瓦当文様の構成については、軒平瓦が桐文（金箔押あり）、宝珠文、六葉文、二葉文（笠文）、花卉文、二股唐草（滴水瓦）であり、軒丸瓦が松皮菱、三巴文である。なお、図示できなかったが若干量の三葉文も含んでいる。軒丸瓦と軒平瓦との組み合わせについては、金箔押瓦において松皮菱と桐文が組み合わさると想定される以外は不明確である。太田川河川事務所地点と合わせての傾向としては、軒平瓦の文様構成としては桐文の比率が高く、三葉文の少なさが特徴として上げられる。これは上八丁堀地点の朱彩金箔押鰐瓦が出土した井



広島城跡八丁堀地点



広島城跡太田川河川事務所地点



厳島神社千畳閣
(山崎 2008 より)



厳島神社千畳閣
(修理報告書より)



0 10cm
(1:5)

第142図 王字銘軒丸瓦瓦当面集成図

戸の軒平瓦の文様組成は三葉文が主体的である点と対称的であるが、瓦当文様の構成については想定される使用者や建築物、供給する瓦工人の問題など多岐な問題を含んでいるため単純には説明できない。瓦工人の問題で言うならば、広島周辺には慶長期以前において播磨英賀の瓦工人の製品が散見される。福山市素盞鳴神社の天正11年銘の鬼瓦、厳島神社千疊閣の天正17年銘の鬼瓦などは記年銘からも英賀の瓦工人の手によるものが明らかなものであり、広島城の築城以前より播磨系瓦工人の足跡が認められる地域である。当然、広島城の築城に当たっての瓦供給にこれら播磨英賀の瓦工人の関与は想像に難くない。このことは播磨英賀の瓦工人の手による瓦が上げられる厳島神社千疊閣と同形の「王」字銘の軒丸瓦が確認されることからも裏付けられるものである。

コビキについては最初に触れた理由により統計的な整理が出来ないため不確定ではあるものの、毛利期においては一定期間混在する状況であり、全国的に見てもコビキBの転換の早い地域であるとされる（註1）。厳島神社千疊閣においては創建瓦とされる「王」字銘の軒丸瓦がコビキBであることと考え合わせて、少なくとも天正17年にはコビキBへの転換が始まっていることとなる。このことは、コビキBの技法が播磨系瓦工人によりなされた可能性を示唆するものであり、より想像を逞しくするならば、厳島神社千疊閣の造営を契機とし全国的な転換へと波及した可能性も十分に考えられるのである。さて、この厳島神社千疊閣（国指定重要文化財 厳島神社末社豊國神社本殿）の軒丸瓦の文様は圓線の内区に「王」の一字を中心意匠とし、外区に18個の珠文を配するものである。厳島神社千疊閣においては桐文の軒平瓦と組んで軒を飾っておりいずれも金箔押瓦である。平成元年に完了した屋根葺替修理の際に瓦当面の金箔押も復元されており全面に金箔押が施されている。しかし、該期の金箔押瓦から想定しても本来は周縁部および文様の凸部のみに施されたものとみられる（註2）。同様のものについては、今回の調査と太田川河川事務所地点においてそれぞれ1点ずつ出土しており、金箔押であったか否かについては明らかではないものの、瓦当径やそれ以外の意匠については全くの同型である。瓦当文様は切取りや貼付けによるものではなく範型が用いられているが、これら2点は実見の結果同範である可能性が高い（註3）。一方、厳島神社千疊閣の「王」字銘の軒丸瓦で現在報告されているものは3点存在するが（第142図3～5）、いずれも範が異なるもので複数の範型が用いられている。広島城出土の2例もこれらとは範が異なっており、少なくとも4点の範が存在していることが明らかである。厳島神社千疊閣と同形の軒丸瓦が何ゆえ広島城内に持ち込まれたかは非常に興味深いが、少なくとも広島城の築城期の瓦供給にあたり厳島神社千疊閣に瓦を供給した瓦工人、すなわち播磨英賀の瓦工人が関与した可能性を示唆するものである。今回の調査で出土した瓦においてもう一つ特筆すべ



第143図 各地出土の滴水瓦と

広島城出土滴水瓦復元案

きは、二股唐草を意匠もつ滴水瓦の存在である（第143図）。岡山城中の段二や大坂城三の丸・伏見城（いずれも金箔押瓦）に類似例が確認できるものであるが、二股唐草が太く、それに連続して三角形の張出しが表現され、脇区は閉じないなど異なる

点もある。伏見城や岡山城のものは軒丸瓦と重なる個所については大きく切り取られており、軒丸瓦と組み合わさり瓦当面が揃う状況となっている。ただし、岡山城においては脇区が閉じるタイプのものも出土していることから建物や部位に応じて変えている可能性もある。金箔押で形状に類似性の強い岡山城の滴水瓦については大坂城や伏見城との直接的な関連を想定させるものであるが、広島城出土の滴水瓦については異なる点もあり、直接的な系譜を持たない可能性も考えられる。いずれにせよ、広島城の瓦の系譜を考える上では興味深い資料である。

③金箔瓦について

広島城における金箔押瓦は、本報告の地点とあわせ、現在のところ5地点において報告されている（第37表）。既に指摘されているところではあるが、本丸においては未確認で二の丸、三の丸などの周辺部での確認例が多いことが特筆される。これは既往の調査例が周辺部に多いことに起因するものであり、本丸に金箔押瓦が使用されていない証左にはならず、当然本丸においても使用されていたであろうことは想像に難くない。広島城内・城下においては市街地化されているにもかかわらず、関係部署の努力により現在のところ17地点の発掘調査が行われているが、金箔押瓦は万遍なく出土しているわけではなく、外堀と中堀に囲まれた大手郭（浅野期の呼称）の東側に分布の中心を認めることができる。本丸を中心とする場所に金箔押瓦が用いられる例が多い中で、その周辺部においても使用される広島城の特殊性は特筆できる。同様の状況は岡山城においても確認されるが、大坂城や聚楽第、江戸城など周辺に大名屋敷が林立する場合は別としても、家臣等の武家屋敷においてまで金箔押瓦が使用された可能性が想定されることは興味深い。従来、金箔押瓦については織田政権下においては織田家の占有として厳格に管理され、豊臣政権化においては政策の道具の一つとして許可のもとに使用されたとの指摘が一般的ではあるが（註4）、広島城下においてその家臣にまでが使用を許可されたとは考えにくい。豊臣政権化において金箔押瓦の使用を許可された各地の大名にさらに自身の家臣らに使用を許可する権限まで付与されたとみるのもいささか困難である。さらには、金箔押瓦使用の許可に関わる文献資料も現在のところ確認されないなど許可制を示す物的証拠に乏しいことや、近年の調査において江戸城下の大名屋敷においても金箔瓦が出土していること、徳川家との関係の深い伊達政宗の仙台城などにおいての出土例もあることから考えても（註5）、少なくとも豊臣政権化における金箔押瓦の使用に一定の規制があったとしても、それはかなり緩いものであったものであるとみるほうが妥当ではないだろうか（註6）。

本報告の八丁堀地点においては、軒丸瓦、軒平瓦、鬼板、飾瓦において金箔押が確認されている。いずれにおいても文様の凸部に金箔が押されるものであり、豊臣期の特徴を示すものであることか

地点名称	所在地	城内の位置	軒丸	軒平	鬼	鬼瓦(板)	飾瓦
二の丸	中区基町	二の丸	-	-	-	○	○
太田川河川事務所地点	中区八丁堀	大手郭	○	○	-	○	-
八丁堀地点	中区八丁堀	大手郭	○	○	-	○	○
上八丁堀地点	中区上八丁堀	三の丸	-	-	○	○	-
紙屋町・大手町地点	中区紙屋町・大手町	外堀	-	-	○	-	-

*城内の位置については浅野期の名称を用いた。

第37表 広島城における金箔押瓦出土地点

ら広島城築城期の毛利期に用いられたものである可能性が強い。軒丸瓦においては珠文松皮菱文、軒平瓦においては中心飾が桐文のものに限定されており、必然的にこれらの組み合わせで屋根を飾っていたものとみられる。この状況は太田川河川事務所地点においても同様である。軒丸瓦の松皮菱文については一般的には家紋としての使用を示唆するものであるが、現在のところ松皮菱文の使用者については確認されていない。松皮菱文が家紋であるか単なる意匠であるかを含め、軒平瓦の桐文や金箔押の桐文の鬼板の使用とあわせ今後検討しなければならない課題である。ただし、瓦においては建物の解体・移築にともなう転用も十分考慮しなければならず、また廃棄による移動の問題も含むことから、単純に出土場所が本来的な使用場所であるか否かについては、出土状況や出土遺構の検証など発掘調査段階において十分な検討が不可欠である。

今回は他地域との直接的な比較検討を十分に行うことができず、可能性の指摘に終始したことは否めない。今後、大坂城や伏見城、岡山城（註7）などの主要な城郭出土瓦との直接的な比較・検討を行うことにより、広範な同范関係や供給関係を解明していくことが可能になるであろう。

（註1） 黒田1944による

（註2） 修理報告書によれば「軒瓦の当初瓦の瓦当の表面を水洗して調査した結果、巴瓦の珠文の下廻り、唐草瓦の桐文様の下線等にかすかであるが落の痕跡が約十本あまり発見された。」とあり、瓦当面全面に落押されたと考えるよりは凸部のみに施された可能性が大きい。大正製作瓦が全面金箔押であったために現在の復元となったものとみられる。

（註3） 財団法人広島文化財団高下洋一氏・荒川美緒氏のご好意により実見。

（註4） 中井氏や加藤氏の研究がある。

（註5） 東国における分布状況を「徳川家康包囲網」、西国における分布状況を「唐入り黄金道路」としている。（加藤2007）

（註6） 金箔押瓦の使用部位に関しては各城において差異が認められることは明らかであり、その点においては一定のルールや規制があった可能性は考えられる。

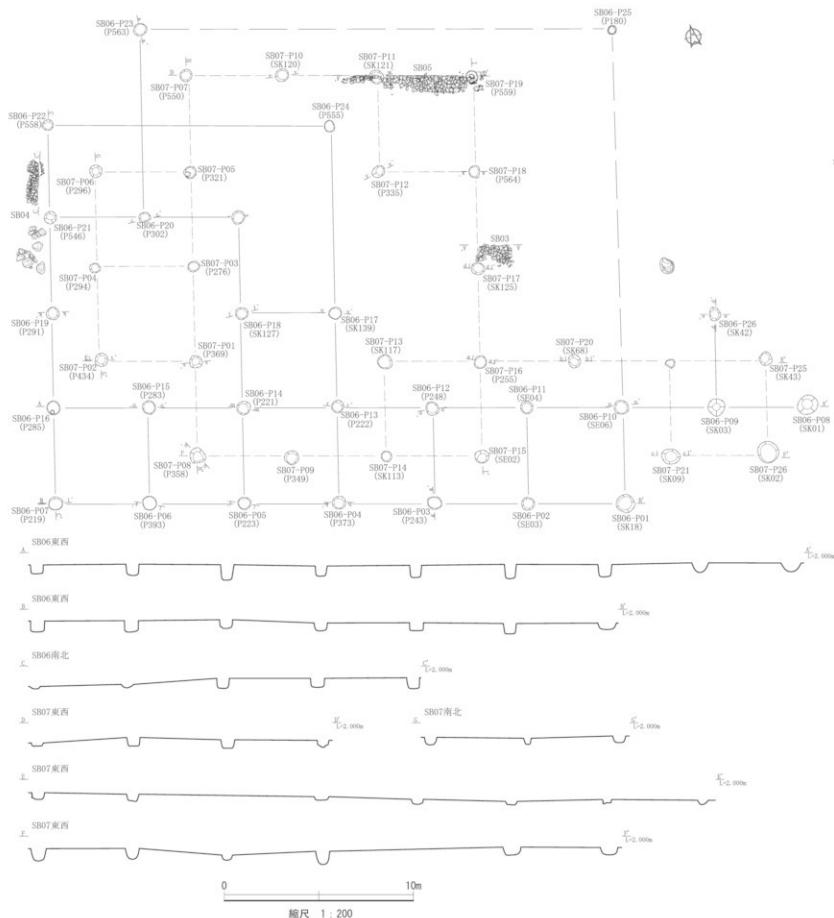
（註7） 岡山城との同范・同范的同文関係が指摘されている。（乗岡2001）

引用参考文献

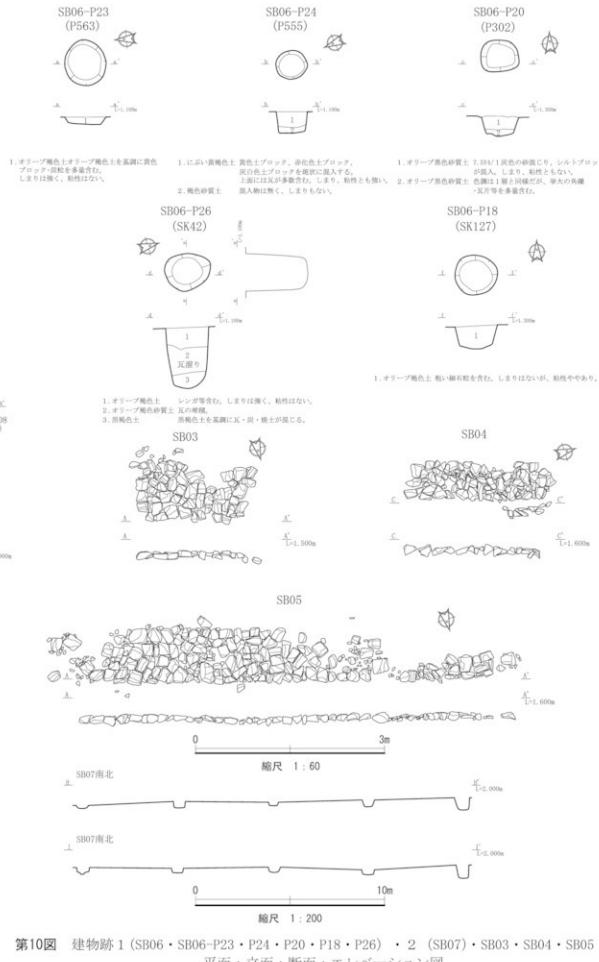
- 井上新太郎『本瓦葺の技術』 1974
- 上田市立博物館『金箔瓦の城』 1996
- 上原真人『歴史発掘11 瓦を読む』講談社 1997
- 江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001
- 江戸遺跡研究会『江戸の物流 陶磁器・漆器・瓦から』1999
- 大阪府立弥生文化博物館『大阪の宝物-出土品が歴史を語る』 2009
- 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社 1989
- 大橋康二『古伊万里の文様』「初期肥前磁器を中心に」 2006 理工学社
- 学習研究社『図説 城造りのすべて』歴史群像シリーズ 2006
- 学習研究社『【決定版】図説 よみがえる名城 漆黒の要塞 豊臣の城』歴史群像シリーズ 2006
- 学習研究社『名城物語 第2号 秀吉の城』歴史群像シリーズ 2009
- 加藤理文『瓦の普及と天守の出現』『戦国時代の考古学』高志書院 2003
- 加藤理文『金箔瓦使用城郭から見た信長・秀吉の城郭政策』『織豊城郭』第2号 1995
- 加藤理文『金箔瓦の出現と展開』『信長の城・秀吉の城』滋賀県立安土城考古博物館 2007
- 金子 智「資料紹介 江戸遺跡出土の金箔瓦』『江戸遺跡研究会第20回大会 江戸の大名屋敷』 2006
- 金森安孝ほか『仙台城本丸跡1次調査 出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集 仙台市教育委員会 2005
- 関西近世考古学研究会『関西考古学研究XⅠ』 2003
- 関西近世考古学研究会『土人形が見た近世社会』 2008
- 九州近世陶磁器学会『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』（中国・四国・関西編） 2007
- 九州近世陶磁器学会『九州陶磁の編年』 2000
- 近藤真佐夫『東北地方における城郭瓦の受容と展開』『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会 2005
- 黒田慶一「豊臣氏大阪城の瓦について」『織豊城郭』創刊号 1994
- 黒田慶一・乗岡 実「豊臣氏大阪城と宇喜多氏岡山城との同范瓦』『大阪城と城下町』思文閣出版 2000
- 芸備第32集『広島県の近世考古学』2005 芸備友の会
- 後藤洋一『広島城下町絵図修成』広島市立中央図書館1990
- 佐賀県立名護屋城博物館『秀吉と城』 2005
- 佐賀県立名護屋城博物館『秀吉と文禄・慶長の役』 2007
- 佐賀県立名護屋城博物館『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』 2009
- 佐藤 淳・佐藤好司ほか『若林城跡 -第5次発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第323集 仙台市教育委員会2008
- 財団法人広島市文化財団 広島城・吉田町歴史民俗資料館『毛利輝元と二つの城-広島築城と残された吉田郡山城-』2003
- 財団法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの』「生産と流通」 1999
- 財団法人東広島市教育文化振興事業団『四日市遺跡発掘調査報告書II』第5・6次調査 本文編、図版編 2005
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『廿日市町屋跡』 1999

- 財団法人広島市文化財団 広島城 「城郭シンポジウム」『毛利氏時代の広島城を考える』資料集 2008
- 財団法人広島市文化財団 広島城 『広島城の近代』 2008
- 財団法人広島市文化財団 広島城 『広島城と毛利氏の居城』 2009
- 財団法人広島市文化財団 『広島城跡太田川河川事務所地点』 2006
- 財団法人広島市文化財団 『広島城遺跡基町高校グランド地点』 1999
- 財団法人広島市文化財団 『広島城外堀跡紙屋・大手町地点』 1999
- 財団法人広島市文化財団 『広島城遺跡 西白島地点』 2005
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館『特別展示 京都 秀吉の時代』リーフレット京都No.251 2009
- 滋賀県立安土城考古博物館『安土城・1999』 1999
- 滋賀県立安土城考古博物館『信長の城・秀吉の城—織豊系城郭の成立と展開』 2006
- 滋賀県立安土城考古博物館『戦国の城-安土城への道』 2009
- 滋賀県教育委員会『発掘調査20年の記録 安土 信長の城と城下町』 2009
- 織豊期城郭研究会『織豊期城郭の瓦』 1994
- 宗教法人 嶽島神社『重要文化財 嶽島神社末社豊國神社本殿修理工事報告書』 1989
- 杉本 宏「棟瓦考」『考古学研究 第46巻第4号』考古学研究会 2000
- 第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』 1996
- 土山公仁「岐阜城の瓦について」『岐阜市歴史博物館研究紀要3』 1989
- 土山公仁「信長系城郭における瓦の採用についての予察—同範あるいは同型瓦を中心として-」『岐阜市歴史博物館研究紀要4』 1990
- 坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社 1976
- 坪井利弘『瓦屋根の納め方』理工学社 1979
- 坪井利弘『古建築の瓦屋根』理工学社 1981
- 坪井利弘『国鑑瓦屋根』理工学社 1997
- 中井 均「織豊系城郭の特質について-石垣・瓦・礎石建物-」『織豊系城郭』創刊号 1994
- 中井 均「織豊系城郭の地域的伝播と近世城郭の成立」『新視点 中世城郭研究論集』新人物往来社 2002
- 中尾芳治・鈴木秀典・八木久栄ほか『大坂城跡III』財団法人大阪市文化財協会 1988
- 中村博司「金箔瓦試論」『大阪城天守閣紀要6』大阪城天守閣 1978
- 中村博司「金箔瓦試論 補遺」『大阪城天守閣紀要8』大阪城天守閣 1980
- 中村博司「大坂城金箔瓦に関する基礎的考察」『大阪城の諸研究』名著出版 1982
- 乗岡 実『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
- 乗岡 実『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸九の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 2001
- 乗岡 実「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築-岡山市歴史的建造物 平成6・7年度調査報告』 1996
- 乗岡 実「岡山県下のコビキBの瓦を伴う城郭群」『西国城館論集I-河瀬正利先生追悼論集-』中国・四国地区城館調査検討会 2009
- 乗安和ニ三「岩国城跡出土の雲文瓦をめぐって」『考古論集-河瀬正利先生退官記念論文集』2003

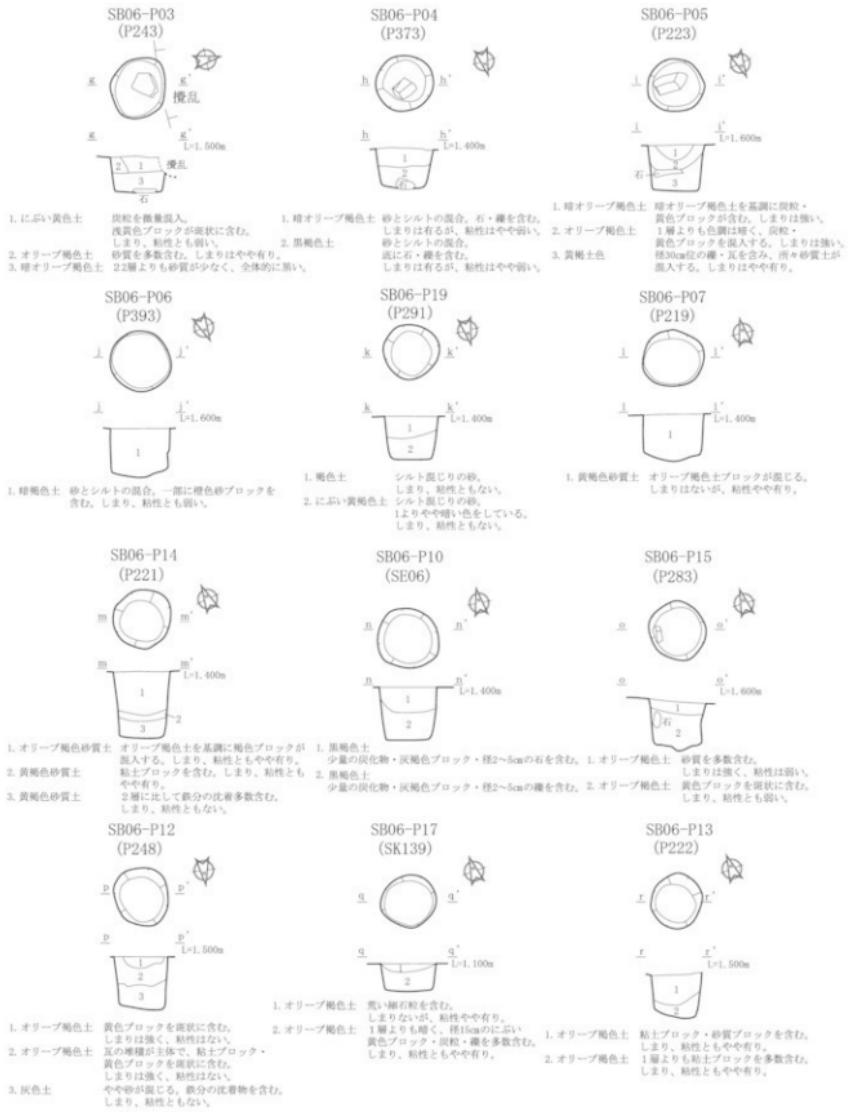
- 比毛君男「近世考古学と瓦研究－歴史考古学の瓦研究史回顧から－」『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会 2007
- 広島市教育委員会 『史跡広島城跡史料集成』第1巻 1989
- 福原茂樹「広島築城再考」『西国城館論集 I -河瀬正利先生追悼論集-』中国・四国地区城館調査検討会 2009
- 藤原勉・渡辺宏『和瓦のはなし』鹿島出版会 1990
- 渡辺誠 「焼塙壺」『江戸の食文化』 吉川弘文館 1991
- 間壁忠彦 『備前焼』 ニュー・サイエンス社 1991
- 宮里 学『県指定史跡 甲府城跡』-舞鶴城公園整備事業に伴う総合調査・整備報告書- 山梨県埋蔵文化財センター報告書第222集 山梨県 2005
- 宮本康治ほか『広島藩大坂藏屋敷跡II』財団法人大阪市文化財協会 2004
- 最上義光歴史館『発掘された山形城三の丸』“埋蔵文化財”からみる城の歴史 2005
- 森 郁夫『ものと人間の文化史 瓦』法政大学出版局 2001
- 森田克行『摂津 高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会 1984
- 山内淳司「麦島城の発掘調査－九州における初期織豊系城郭の構造－」『2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003年滋賀大会実行委員会 2003
- 山川 均「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『織豊城郭』第3号 1996
- 八木久栄・黒田慶一ほか『難波宮址の研究 第9』財団法人大阪市文化財協会 1992
- 山崎信二「四天王寺住人瓦大と播州英賀住人瓦大工」『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』2005
- 山崎信二「近世瓦におけるコビキB（鉄線切り）出現の年代」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』2007
- 横浜市歴史博物館『秀吉襲来－近世巻頭の幕開け－』 1999



第9図 建物跡1(SB06)・2(SB07)配置図・エレベーション図

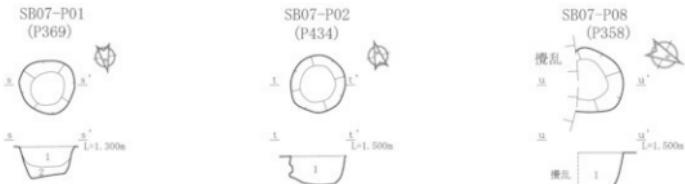


第10図 建物跡1(SB06・SB06-P23・P24・P20・P18・P26)・2(SB07)・SB03・SB04・SB05平面・立面・断面・エレベーション図



0 3m
縮尺 1:60

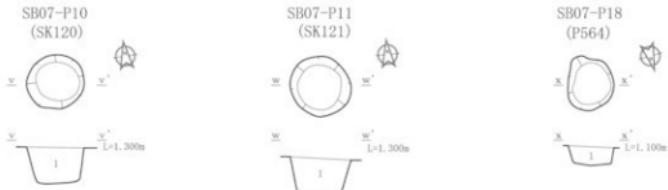
第11図 建物跡1 (SB06-P03・P04・P05・P06・P19・P07・P14・P10 P15・P12・P17・P13) 平面・断面図



1. オリーブ褐色土 シルト混じりの砂。
2. 褐色土

1. にがい黄褐色砂質土 黄色土ブロックが縦横に
混入し、断面を多量含む。
2. 墓室

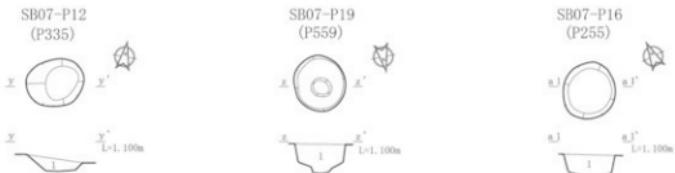
1. オリーブ褐色土 オリーブ褐色土を基調に黄色ブロック・
瓦粒を多量含み、所々砂質土が混入する。
2. 横乱



1. 墓室
瓦・小石が混じる。しまり有り。

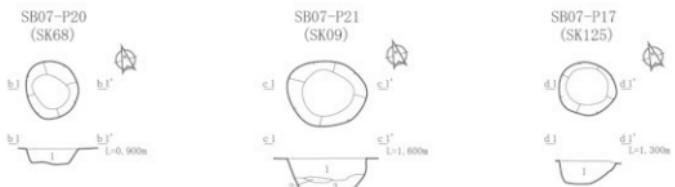
1. オリーブ褐色土 シルト混じりの砂。
2. 砂質・炭化物・赤色ブロック・
瓦・小石が混じる。しまり有り。

1. オリーブ褐色土 オリーブ褐色土を基調に褐色ブロックが
混入する。しまり、粘性ともやや有り。



1. オリーブ褐色土 瓦粒を多量含む。しまりは強い。
2. オリーブ褐色土 オリーブ褐色土を基調に黄色ブロック・
瓦粒を多量含む。しまりは強い。

1. 墓室
瓦が多量含む。しまり、粘性ともやや有り。



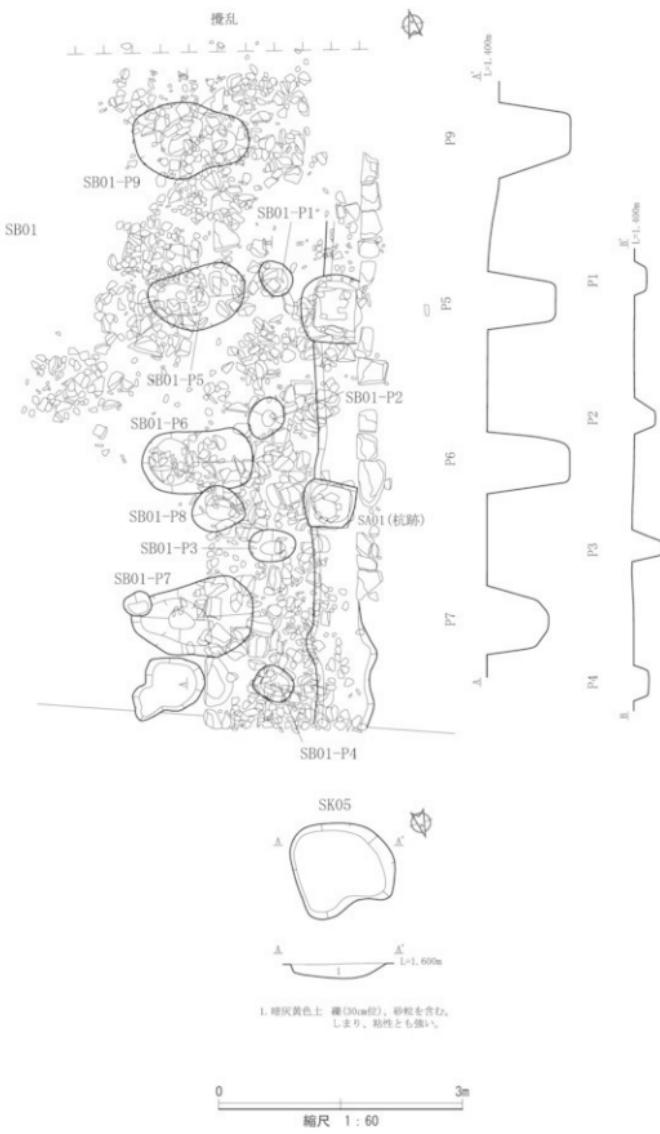
1. 黒褐色土 瓦粒・黄色ブロックを含む。
2. 粘土質土

1. 墓室
砂質。炭化物・赤色ブロック・瓦・
小石が混じる。しまり有り。
2. 墓室

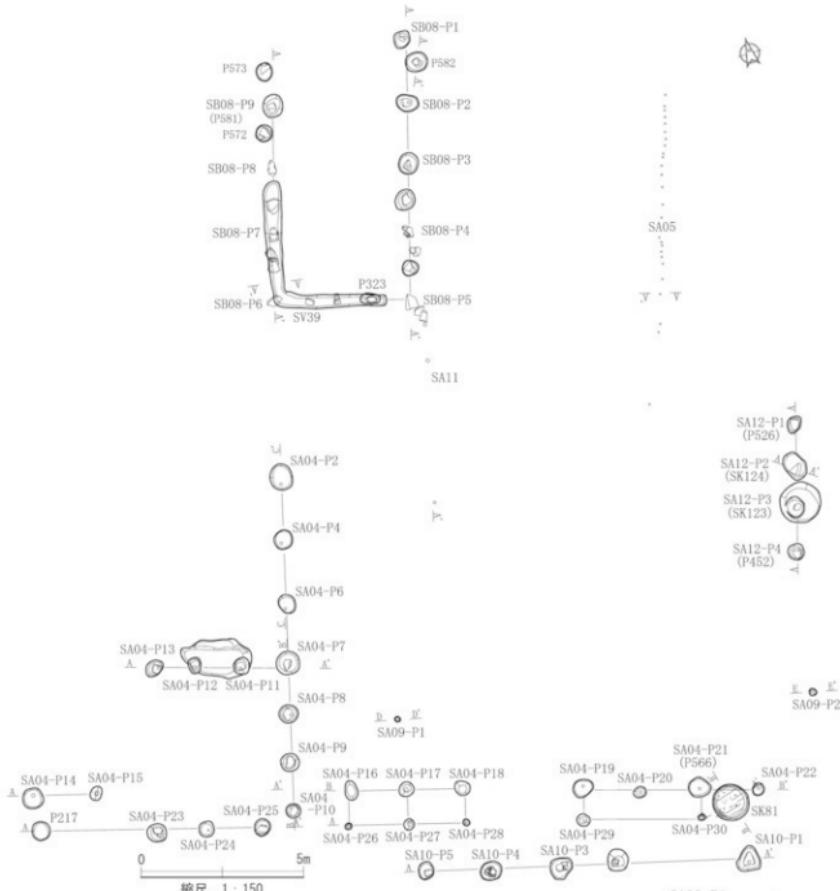
1. 黒褐色砂質土 程3cmの砂質の褐色ブロックがまだらに
混じる。少量の灰・瓦が混じる。
2. 黑褐色土

0 3m
縮尺 1:60

第12図 建物跡2 (SB07-P01・P02・P08・P10・P11・P18・P12・P19
P16・P20・P21・P17) 平面・断面図



第13図 建物跡3 (SB01)・SA01・SK05平面・断面・エレベーション図



第14図 建物跡4・5柱穴・柵列配置図



第15図 SA09・11平面・断面図

1. 黄褐色砂質土 しまりやや有り。

SA09-P1

II

L=0.800m

木杭

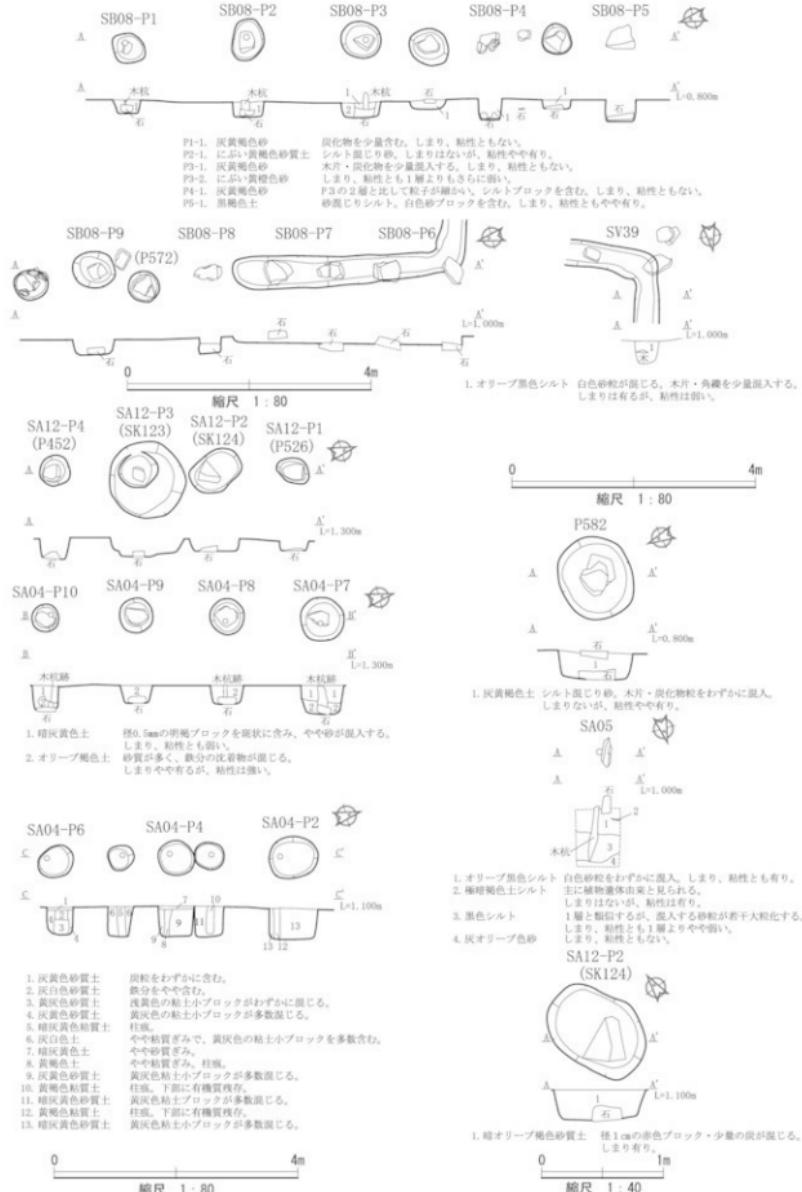
1. に赤い黄褐色砂質土 鉄分の沈着を含む。しまりやや有り。

SA09-P2

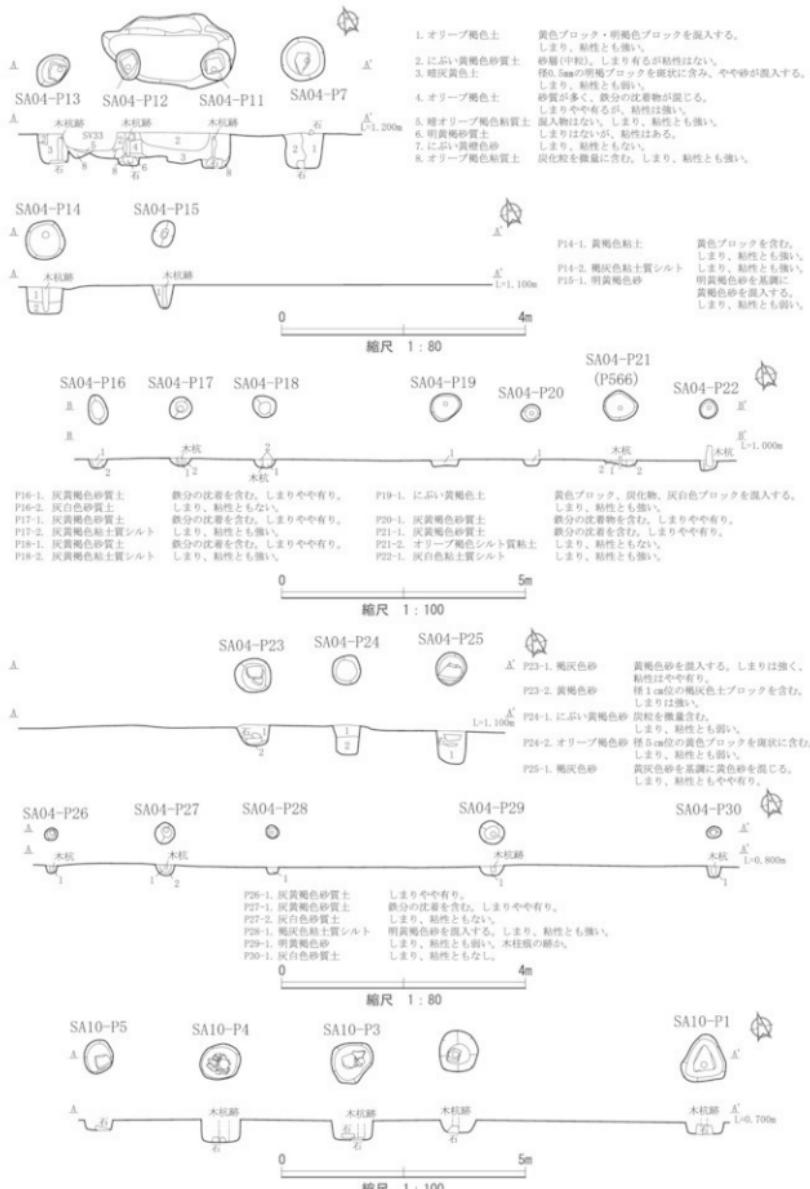
II

L=0.800m

木杭



第16図 建物跡4 (SB08)・SA04・05・12平面・断面図

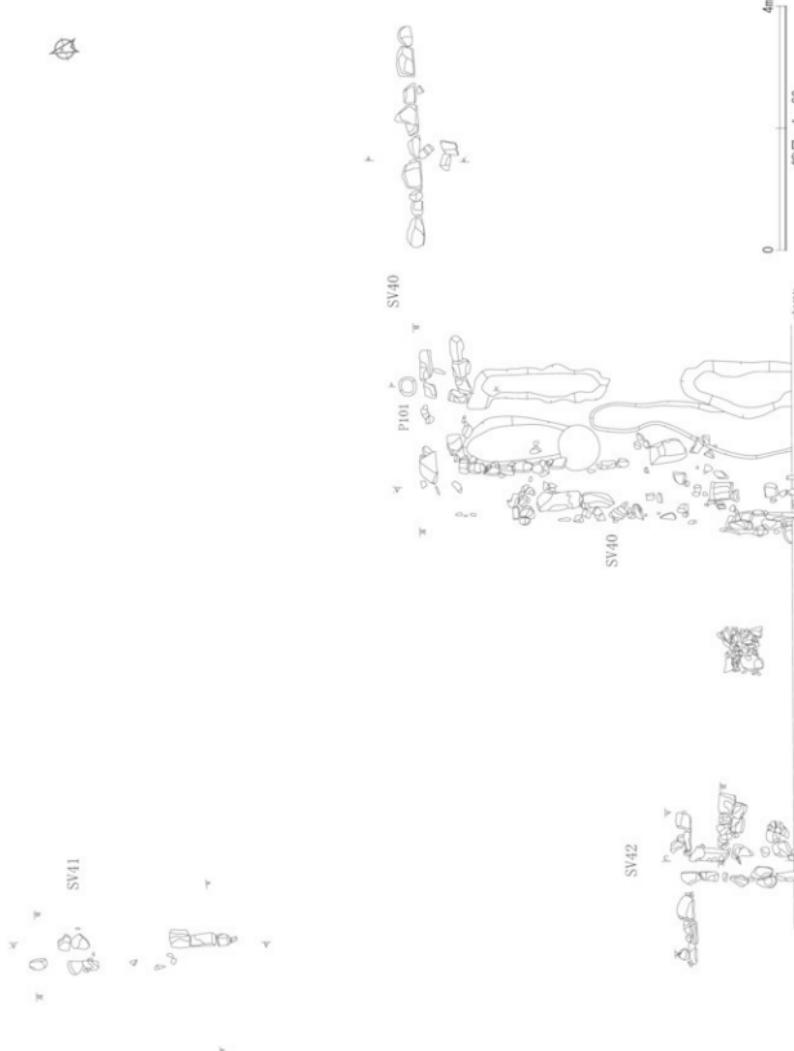


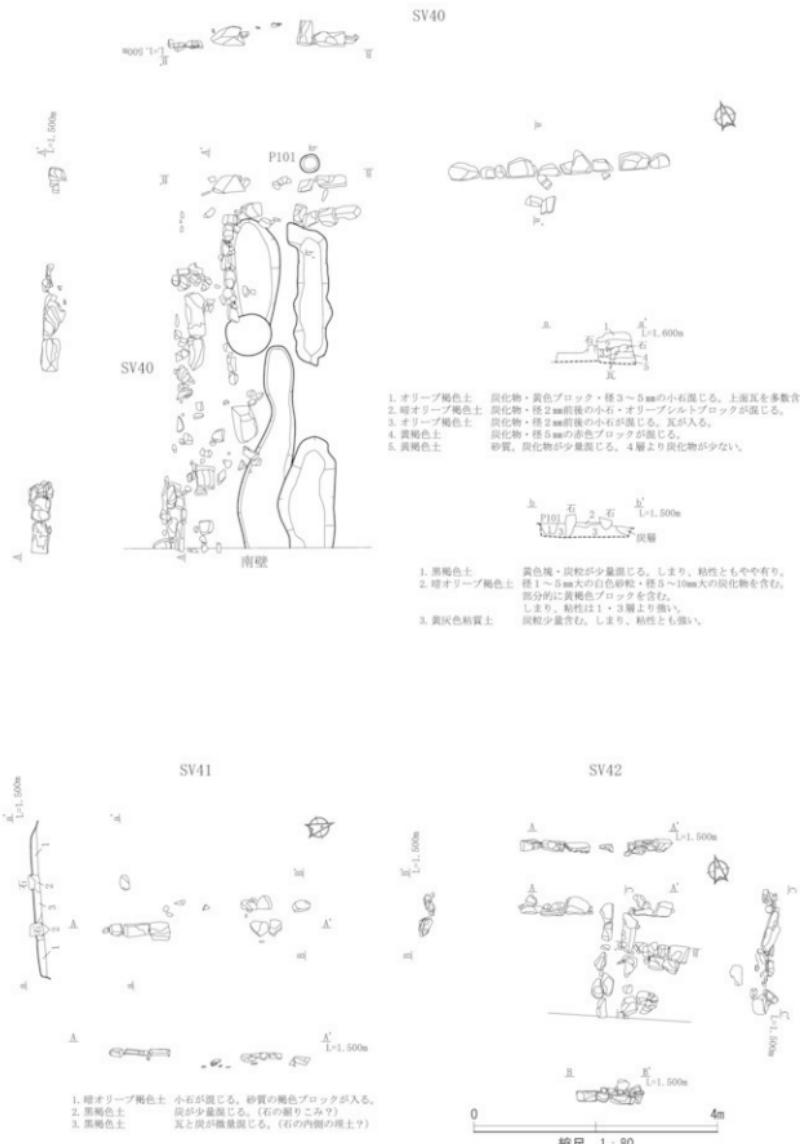
第17図 SA04・10平面・断面図

第18圖 SV40・41・42配置図

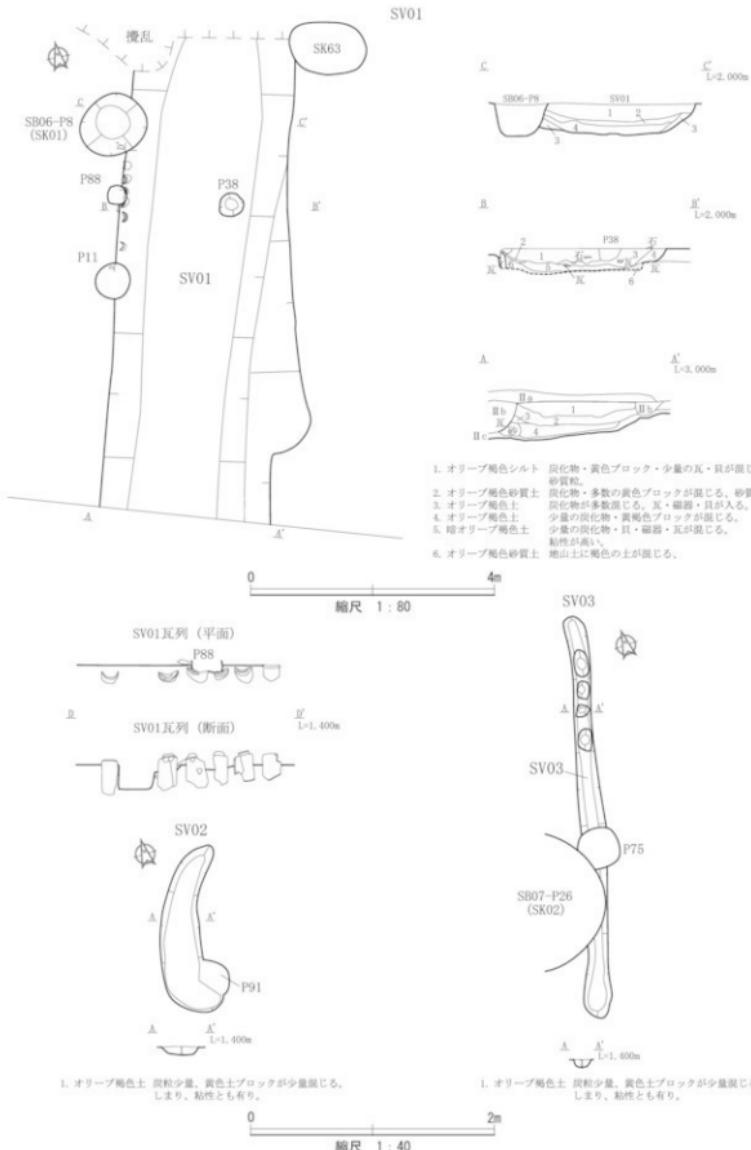
0 4m
縮尺 1:80

南端

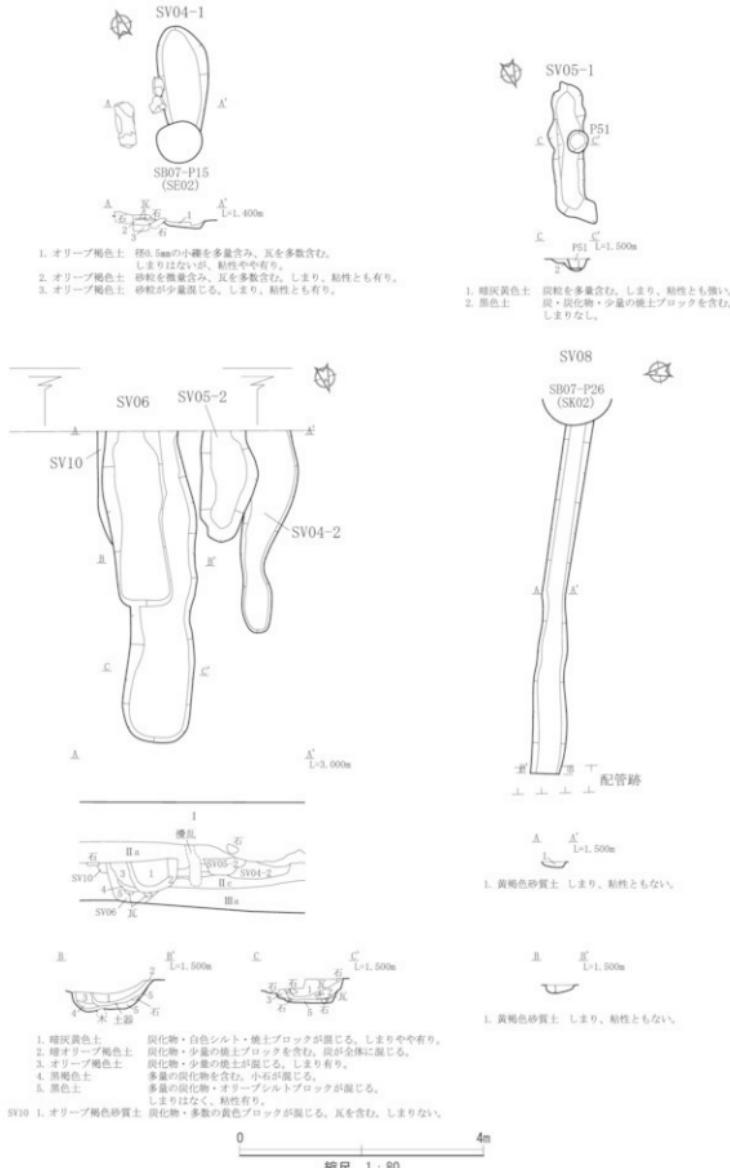




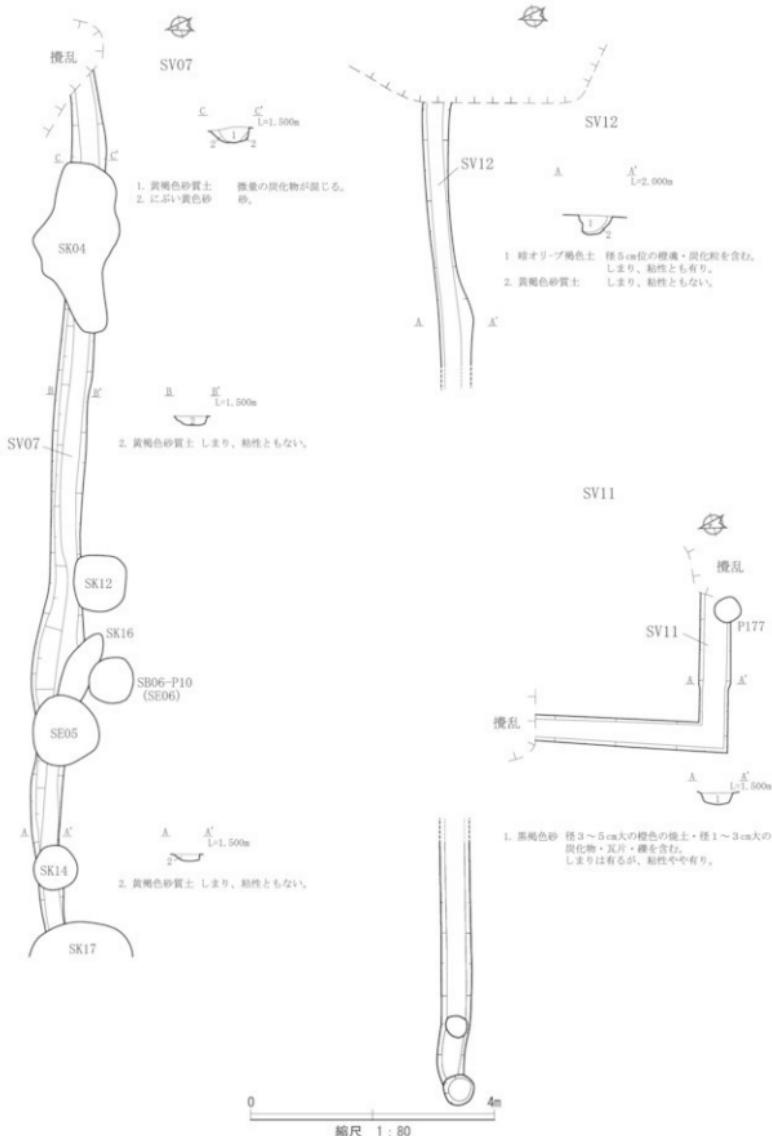
第19図 SV40・41・42平面・断面・立面図



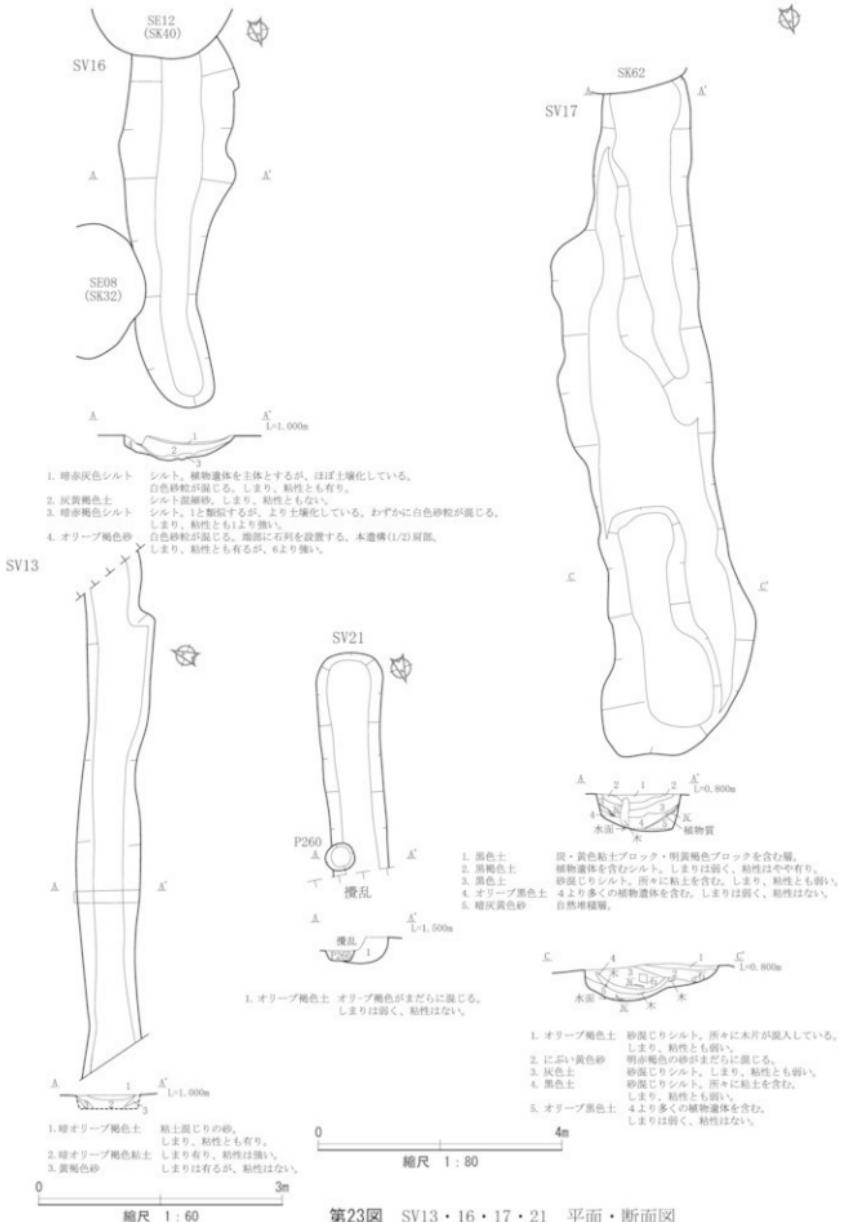
第20図 SV01・02・03 平面・断面・立面図



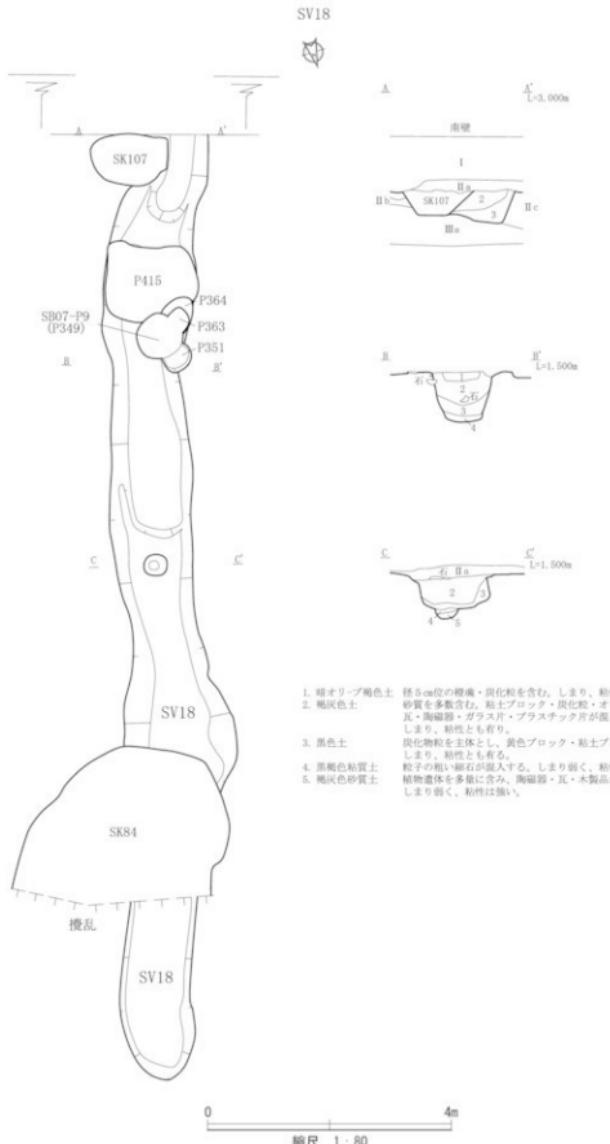
第21図 SV04-1・-2・SV05-1・-2・06・08・10 平面・断面図



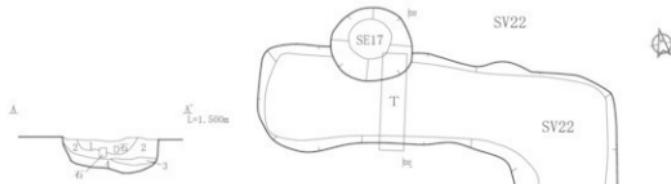
第22図 SV07・11・12 平面・断面図



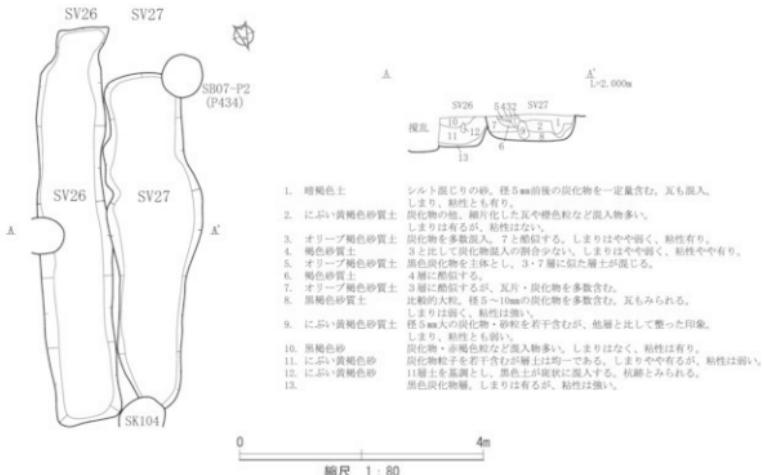
第23図 SV13・16・17・21 平面・断面図



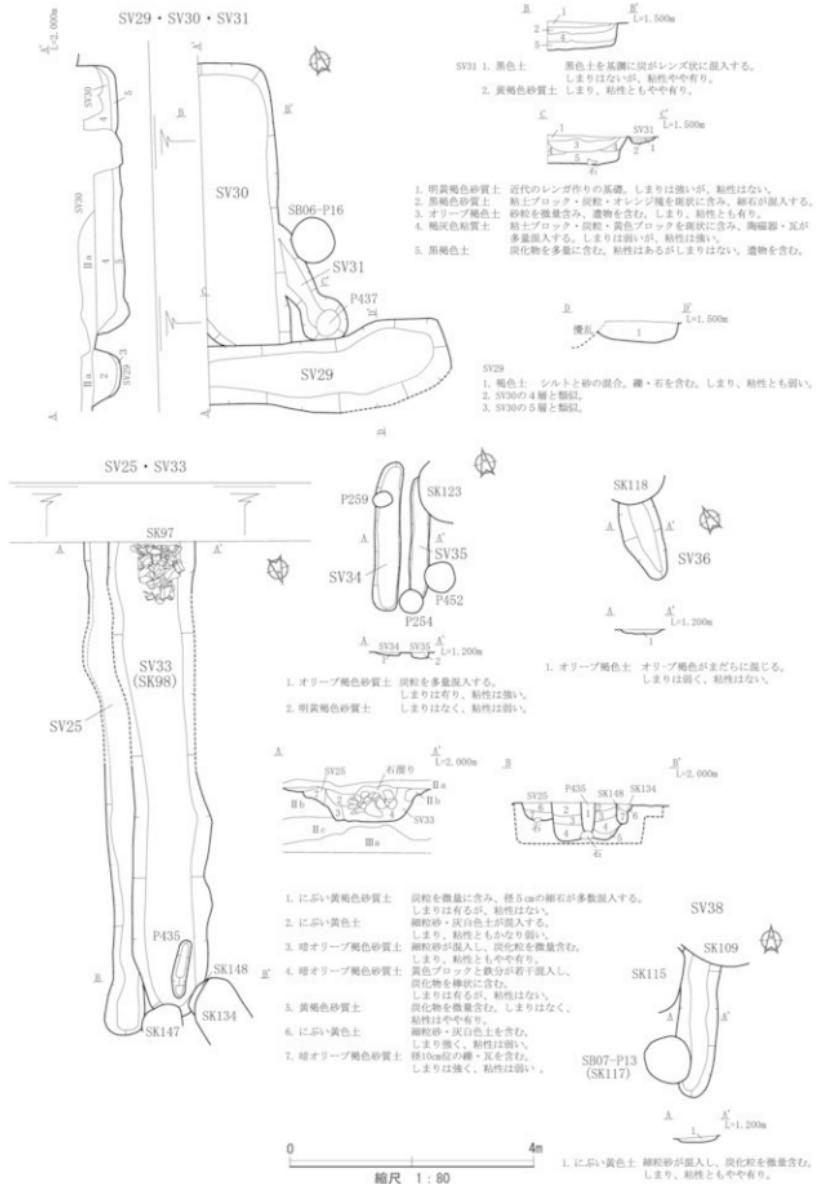
第24図 SV18 平面・断面図



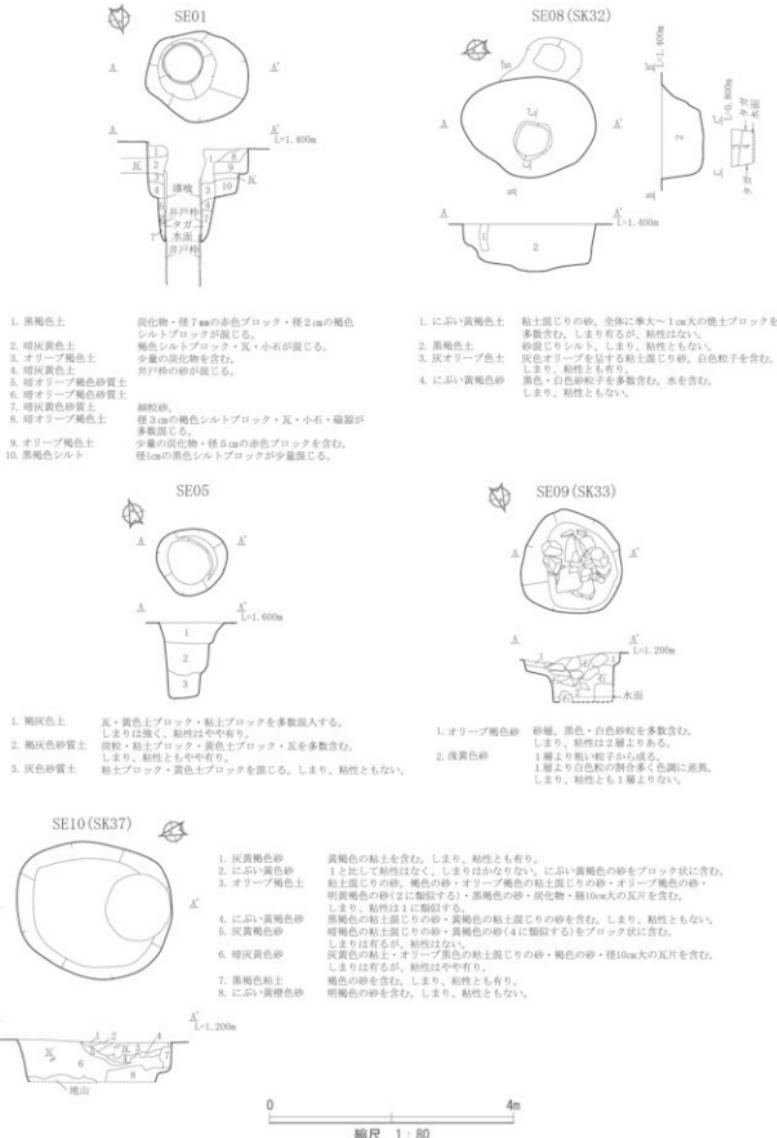
1. 黒褐色シルト
泥炭じるつ。角礁、珊瑚、陶器片、瓦片、供物化、黄褐色ブロック等を混入。
しまり有るが、耐性は高い。
 2. 黑色砂質土
シルトじるつ。砂岩化物多量混入し、瓦片、陶器片泥じるつ。
耐性は高くなりが、しまりは弱い。
 3. 黑褐色シルト
2層以上から明るい色調になってる。比較的大粒の供物化の他、瓦片、木片も少量含む。
耐性は層上高く、しまりも強い。
 4. 深灰色砂質土
砂とシメントの間の土。木片、製品等多量混入する。また、白砂粒を一定量含むことから、全体として土壌より明るい色調となっている。しまり、粘性ともかなり弱い。



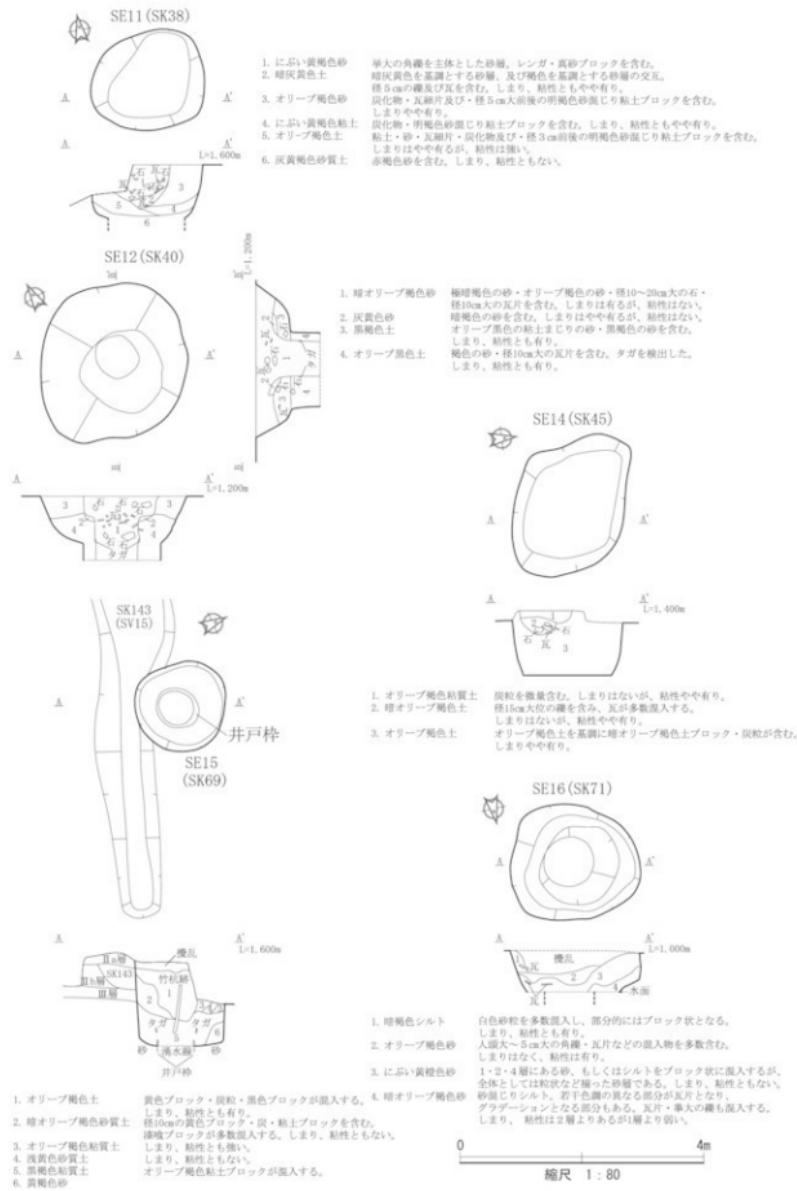
第25図 SV22・26・27 平面・断面図



第26図 SV25・29・30・31・33・34・35・36・38 平面・断面図



第27図 SE01・05・08・09・10 平面・断面図



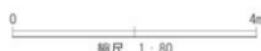
第28図 SE11・12・14・15・16 平面・断面図



1. オリーブ褐色土
2. 線オリーブ褐色砂質土
3. 黒褐色土粘土質シルト
4. 黄褐色土
5. オリーブ褐色粘土質シルト
6. 灰色砂質土
7. 黄灰色砂質土
- 泥炭
細粒砂
粗粒砂
- 泥炭
細粒砂
- 泥炭
植物遺体を多量含む。
1. 明黄色ブロックを底状に含む。
2. オリーブ褐色粘土
3. 黄褐色砂質土
4. オリーブ褐色粘土
5. 塩灰褐色土
6. オリーブ褐色砂質土
7. 浅黄色土
8. 灰色粘土
- 泥炭
植物遺体を底状に含む。
1. 明黄色ブロックを底状に含む。
2. オリーブ褐色粘土
3. 明黄色砂質土
4. オリーブ褐色粘土
5. 塩灰褐色土
6. オリーブ褐色砂質土
7. 浅黄色土
8. 灰色粘土



1. オリーブ褐色土
2. 線オリーブ褐色粘土
3. 黄褐色砂質土
4. オリーブ褐色粘土
5. 浅黄色砂質土
- 泥炭
砂
砂とシルトが混じる。
1. 黒褐色土
2. 黄褐色土
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
- シルト混じりの砂
砂とシルトが混じる。
層上の粒子や色調など岩質地質である。
径0.5mmの黒色砂粒、炭化物を一定量含む。
径0.5mmの黒色砂粒、炭化物を一定量含む。
5層と比較して炭化物の混入量がかなり少ない。
砂混じりシリル。混入物は少なう。
1. オリーブ褐色土
2. 黒褐色土
3. 黄褐色土
4. オリーブ褐色粘土
5. 浅黄色砂質土
- 黄褐色土ブロックを含む。
1. 黑褐色土粘土ブロックを混じる。
2. 黄褐色土
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
- 底より瓦が多数混じり、灰・貝が少量混入する。
やや灰土質。
1. 黄褐色土
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土



第29図 SE18・19・21・22・23 平面・断面図



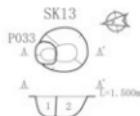
1. 普オリーブ褐色土 程5cmの大いの漆喰ブロックと程5cmの大いの瓦片と瓦・炭化物を含む。しまりは強い。
2. にじみ・褐色土 オリーブ褐色土を微状に含む。しまりは強い。
3. 普オリーブ褐色土 程5～6cmの大いの縞と程5～10cmの大いの瓦片・炭化物・漆喰ブロックを含む。しまりは強い。
4. 褐灰色土 3層と同じ混入物を含むが、様が半分位になる。しまりは強い。
5. オリーブ褐色土 炭化物・縞を少量含む。砂を混じる。しまりは強い。

0 3m
縮尺 1:60



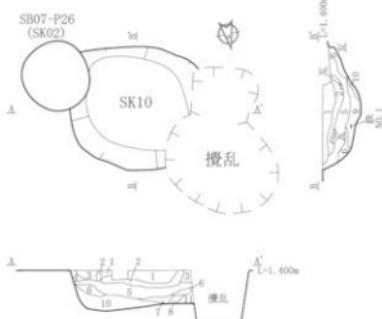
1. 黒褐色土 炭化物・赤色ブロックが混じる。砂を含む。しまりなし。

0 3m
縮尺 1:60



1. 黒褐色土 瓦・赤色土ブロックを含む砂が混じる。しまりやや有り。粘性は弱い。
2. 褐灰色土 炭化物・黃色土ブロックを含む。しまり、粘性ともやや有り。

0 3m
縮尺 1:60



1. オリーブ褐色土 炭化物・炭粒・黄色縞を少量含む。しまり、粘性ともやや有り。
2. 黄褐色砂質土 炭粒を少量混じる。しまりは弱いが、粘性はやや有り。
3. オリーブ褐色土 1層より炭粒・黄色縞が少ない。しまりは弱く、粘性はやや有り。
4. 黄褐色土 炭粒を少量含むが、粘性は弱い。
5. 普オリーブ褐色砂質土 磨耗を多量含む。しまり、粘性とも弱い。
6. 黄褐色土 磨耗を多量含む。しまりはやや有るが、粘性は弱い。
7. 褐灰褐色砂質土 5層より炭質が強くなる。しまりはやや有るが、粘性は強い。
8. にじみ・褐色砂質土 6層より粘性強い。しまりはやや有るが、粘性は強い。
10. 黄褐色砂質土 流入物なし。6層よりも明るい。しまり、粘性とも弱い。
11. オリーブ褐色砂質土 流入物なし。しまり、粘性ともない。

0 4m
縮尺 1:80

1. 黒褐色土 瓦・炭・黄色粒を含む。しまり、粘性とも弱い。

0 3m
縮尺 1:60



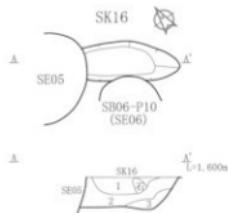
1. 黒褐色土 瓦・炭・黄色粒を含む。しまり、粘性とも弱い。



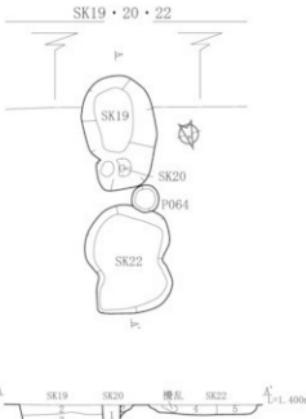
1. 黒褐色砂質土 炭化物・黄色粒が混じる。しまりなし。

0 2m
縮尺 1:40

第30図 SK04・10・12・13・14・15 平面・断面・土器出土状況図



1. オリーブ褐色砂質土
 2. 暗オリーブ褐色砂質土
 3. オリーブ褐色砂質土
- 炭化物・移1cmの小石が混じる。
黄色ブロック・炭化物が混じる。
炭化物が少量混じる。



1. 塗灰黃色土
 2. 黑褐色土
- 黄褐色・瓦が多量に混入する。しまりは強く、粘性は弱い。
瓦の堆積が主体で、炭鉱・礫・土塊等が混入する。
しまり、粘性ともやや有り。



1. オリーブ褐色土
 2. オリーブ褐色砂質土
- 炭鉱・粘土ブロックが複数に混入する。
しまりはやや有り、粘性は強い。
炭化物・オリーブシルトブロックが混じる。
しまりなし。

1. 黒褐色土
 2. 黑褐色土
 3. 黑褐色土
 4. 黒褐色土
 5. 黒褐色土
- 黒褐色土を基調に、黄色塊・炭鉱を若干混入。褐灰色粘土ブロックが多量含む。遺物は瓦を含む。しまり。粘性ともやや有り。
瓦を多量含み、炭鉱が多量混入する。しまりはないが、粘性やや有り。
貝殻を主体に炭が微量含む。しまり。粘性ともやや有り。
炭鉱・鉄分の化合物を若干混入する。黄色塊を微量含む。
しまりは強く、粘性は弱い。
4層より灰色が無い。前段を微量・僅2cm程の黄色ブロックを含む。
しまり、粘性とも有り。



1. 黄灰褐色砂質土
2. オリーブ褐色砂質土

マープル状にオリーブシルトブロックが
混入。炭物が多量混入。しまり有り。
オリーブシルトブロックが多量混入。
炭化物が少量混入。しまり有り。

1. オリーブ褐色土
 2. オリーブ褐色土
- 瓦を多量含む。
瓦・礫を多量含む。
炭を微量含む。
1層よりも少し明るい。



1. 黄灰褐色砂質土

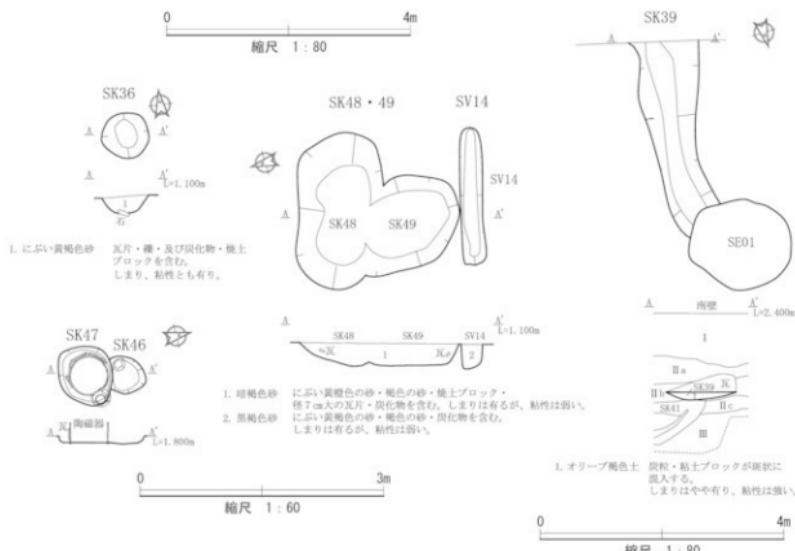
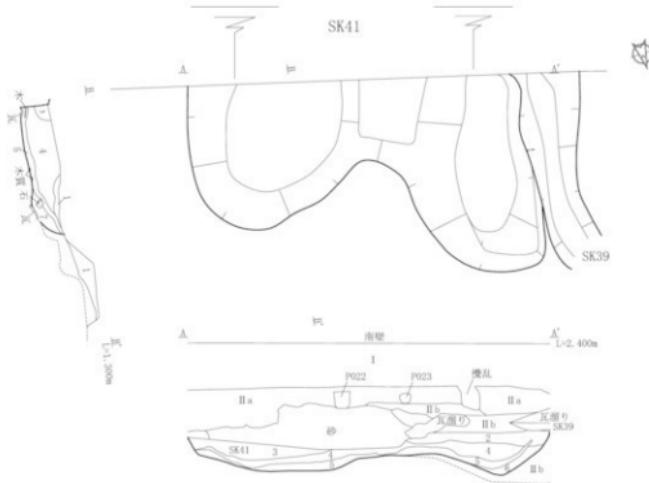
炭化物を含む。褐色シルトブロックが
マープル状に混入。しまり。粘性とも有り。



1. 黄灰褐色土
 2. オリーブ褐色砂質土
- 黄色ブロックを多量に含む。
しまり、粘性ともやや有り。
黄色ブロックを微量に含む。
しまりはやや有るが、
粘性はない。



第31図 SK16・17・19・20・22・23・25・26・27・29・31 平面・断面・エレベーション図



第32図 SK36・39・41・46・47・48・49・SV14平面・断面・土器出土状況図



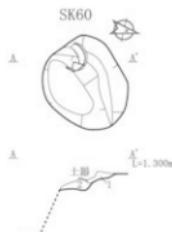
1. 黄褐色砂 シート罫。径5cmの大の明黄褐色ブロック及び炭化物が多数混入する。
泥質物の混入も立つが、全体的には均一な色調。
しかし、粘性とも1より少し。
2. 暗褐色砂 シート罫の砂。大粒の炭化物が多数混入することからも、
全体的に暗い色調を呈している。わずかに黄褐色の小ブロックも混入。
しかし、粘性とも1とはほぼ同じ。また多く人へ人骨の大の内縫を含む。
径5cmの大の黄褐色ブロックが多数混入する。
しかし、粘性とも1・3層と同等。
3. 黒褐色砂
4. 灰黄褐色砂



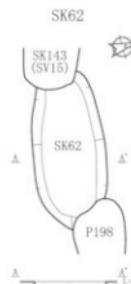
1. オリーブ黒色土 砂混じりシルト。しまりはやや有るが、粘性はない。
砂と砂混じりシルト。目地の細かい砂とやや粘性のある
砂混じりシルトがまだらに混じる。しまりではなく、
粘性や也有り。
2. オリーブ黒色土



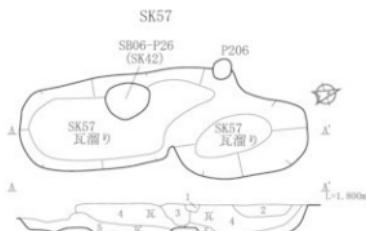
1. 暗褐色砂 黄褐色の砂・炭化物・径5~10cmの大の瓦片・石を含む。
しまりは有るが、粘性はない。
2. にい黄褐色砂 黄褐色の砂・オリーブ褐色砂・炭化物を含む。
しまりは有るが、粘性はない。
3. オリーブ褐色砂 硅土ブロック・炭化物を含む。しまりは有るが、粘性はない。
にい黄褐色の砂・褐色の砂を含む。
4. 褐色砂 しまりは有るが、粘性や也有り。



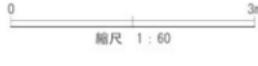
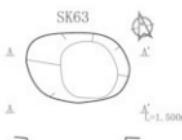
1. オリーブ褐色土 砂粒を微量含む。しまりはないが、粘性や也有り。
炭粒・黄色ブロックを多數含む。
2. 墓オリーブ褐色土 しかし、粘性ともや也有り。



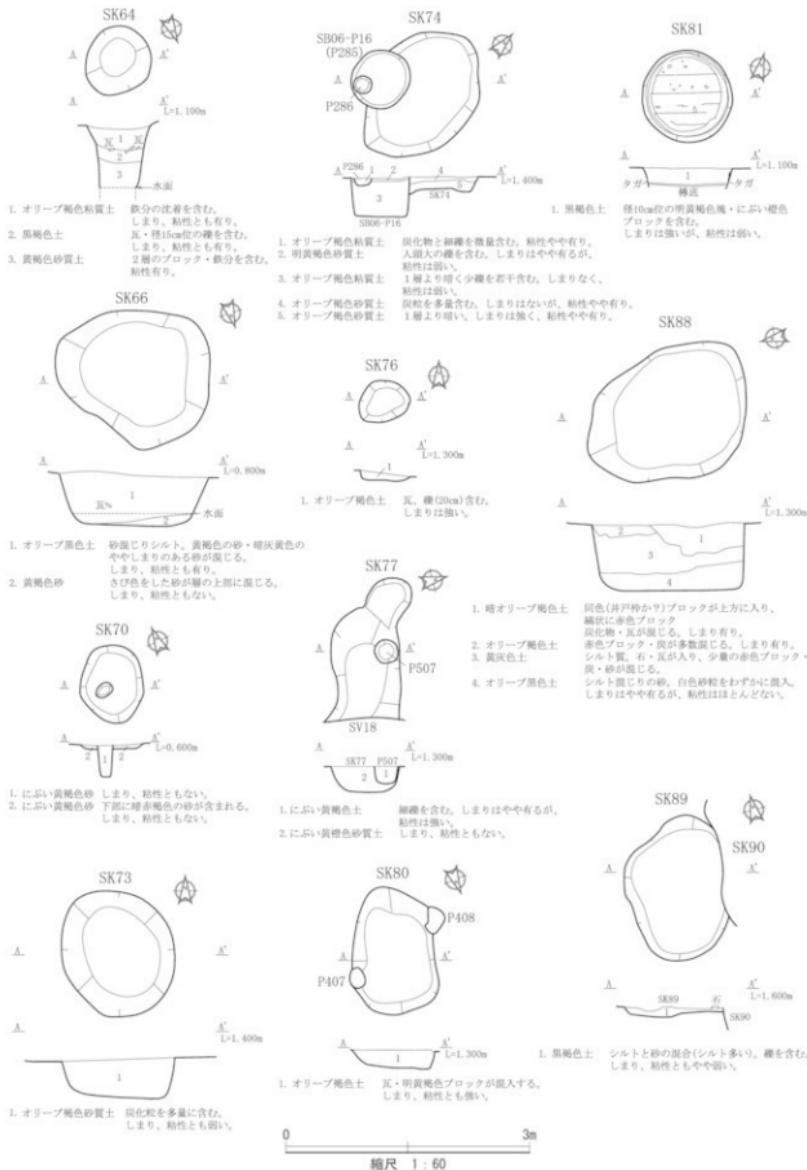
1. オリーブ褐色土 砂粒を微量含む。しまりはないが、粘性や也有り。



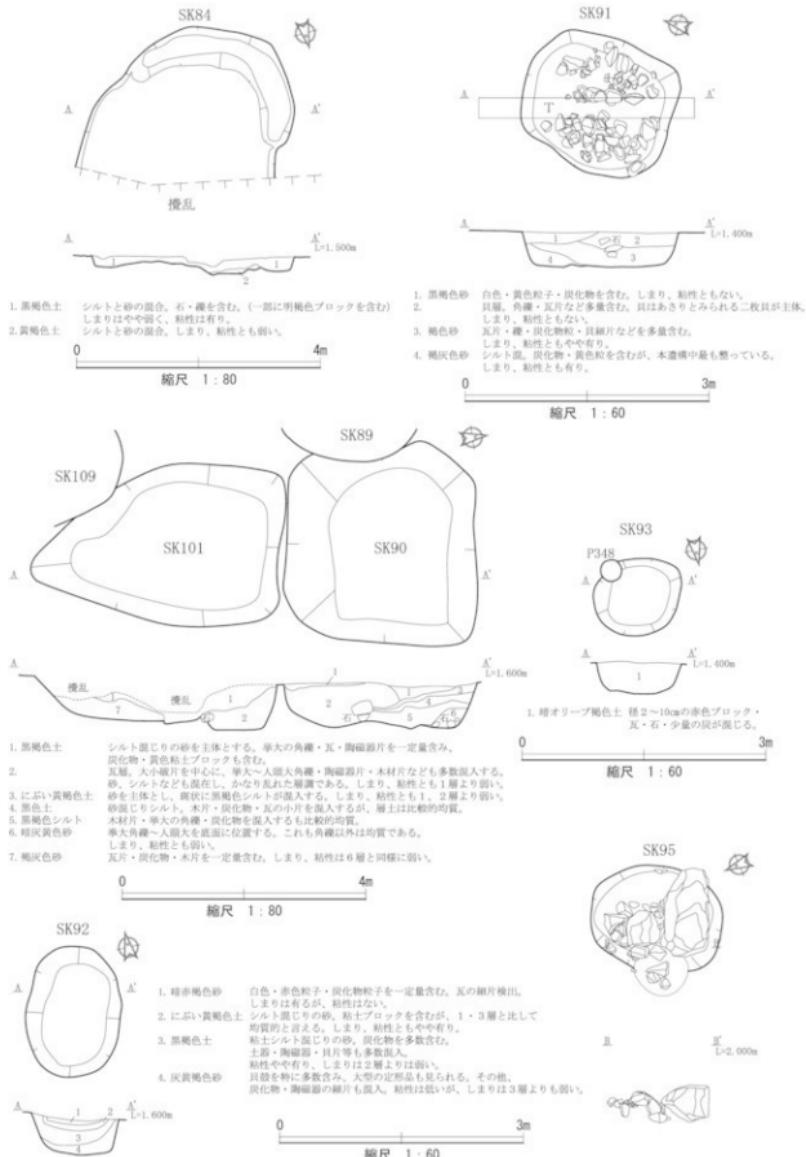
1. 暗褐色砂 にい黄褐色の砂を含む。しまりは有るが、粘性はない。
径5cmの大の土塊片・埴土ブロック・炭化物・径7cmの大の瓦片・
オリーブ褐色の砂を含む。3・4層に類似する。
2. にい黄褐色砂 しまりは有るが、粘性はない。
3. 暗褐色砂 径5cmの大の土塊片・埴土ブロック・径8cmの大の石・径10cmの大の瓦片を含む。
瓦が主体で、埴土・径5cmの大の炭化物・陶磁器を多數含む。
ところどころ、粘土塊・砂が混じる。
4. 灰黄褐色砂質土 粘土混じりの砂・径5~15cmの大の瓦片・石・埴土ブロック・炭化物・
オリーブ褐色の砂を含む。しまり、粘性とも強い。
5. 黑褐色土



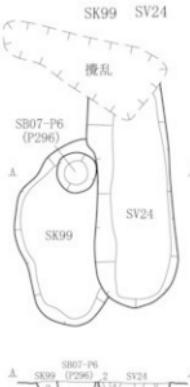
第33図 SK51・52・56・57・60・62・63 平面・断面・エレベーション図



第34図 SK64・66・70・73・74・76・77・80・81・88・89 平面・断面図



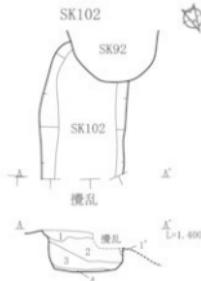
第35図 SK84・90・91・92・93・95・101 平面・断面・立面図



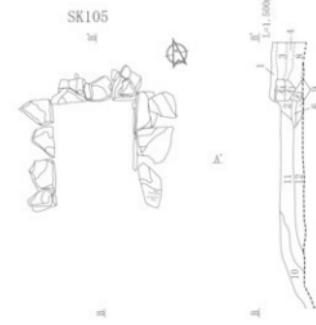
1. オリーブ黒色砂
 2. 黒色土
 3. 黒色土
 4. オリーブ褐色砂
 5. 黄褐色土
 6. 粘オリーブ色砂質土
 7. 粘オリーブ色
 8. 黏灰色土
- 事実上の外縁を混入する。しまりはあるが、粘性はない。
瓦片を混入。しまり、粘性ともやや有り。
黑色を呈する炭化物を主体とし、2層の褐色砂を一定量混入する。
しまりはあるが、粘性はない。
比較的風化物の少ない均質な層土。しまり、粘性ともやや有り。
黄褐色を呈調とし、オリーブ褐色土を斑状に混入する。
炭化物が少く、しまりは弱く、4層と比較して粘性はやや強い。
炭化物が少く、しまりは弱く、4層と比較して粘性はやや強い。
炭化物を若干混入する。しまり有り、粘性やや有り。
炭化物を主体とし、5層とはほぼ同様な層土が混入。
地山(オリーブ色砂)と3層の炭化物を起源とする。



1. 黏灰色土
 2. 黏灰色土
 3. 黏灰色土
 4. 黏灰色砂質土
- 明褐色土を含み、細繊維がレンズ状に含む。
しまりはないが、粘性有り。
1層よりも纏入多い。しまりは強く、粘性は弱い。
砂粒石・褐色ブロックを含む。しまりは強く、粘性やや有り。



1. オリーブ褐色砂質土
 2. 黄褐色砂質土
 3. 黑褐色シルト
 4. オリーブ褐色砂質土
- 径5mmのねずみ色のシルトブロックが混じる。しまり有り。
径1cmの赤色シルトブロックが混じる。しまり有り。
径1cmの赤色シルトブロックが少く混じる。瓦を含む。しまり有り。
径1cmの赤色シルトブロックが少く混じる。瓦を含む。しまり有り。
径5mmのねずみ色のシルトブロックが混じる。しまり有り。



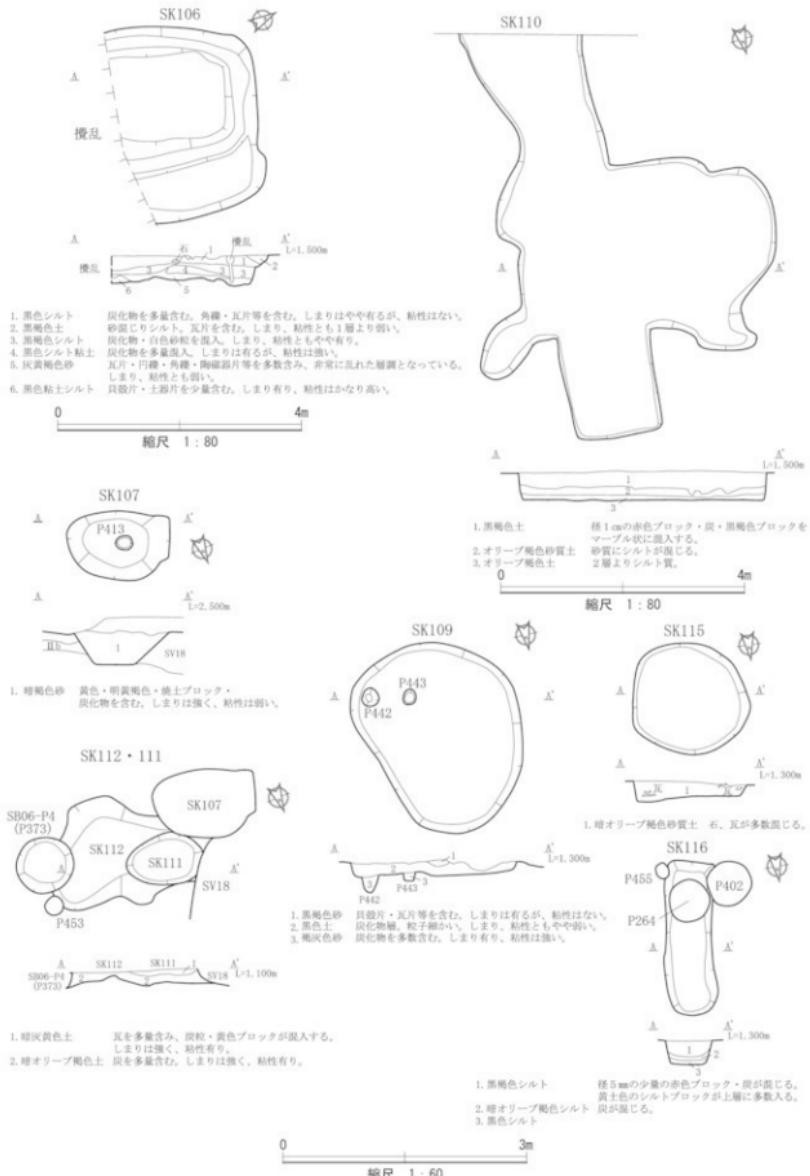
1. オリーブ褐色砂質土
 2. 黄褐色砂質土
 3. 黑褐色砂質土
 4. 黑褐色砂質土
 5. ぶどう黄褐色砂質土
 6. 黃褐色砂質土
 7. 黄褐色砂質土
 8. オリーブ褐色砂質土
 9. オリーブ褐色粘土質シルト
 10. オリーブ褐色粘土質土
 11. オリーブ褐色粘土質土
 12. ぶどう黄褐色砂質土
- 少量の赤色ブロック・径5mmを含む。しまり有り。
黒褐色砂質土・径2mmを含む。しまり有り。
小石を含む。しまり有り。
粘土ブロック・黄色ブロックを含む。粘性弱い。
粘性弱い。
2層よりも細粒。粘性弱い。
粘土ブロックを斑状に多量含む。しまり、粘性とも有り。
粗砂多量に混入する。しまり、粘性とも強い。
しまり、粘性とも強い。
しまり、粘性とも強い。
粘土・粗砂斑状に混入する。しまり強く、粘性弱い。
しまりはなく、粘性弱い。



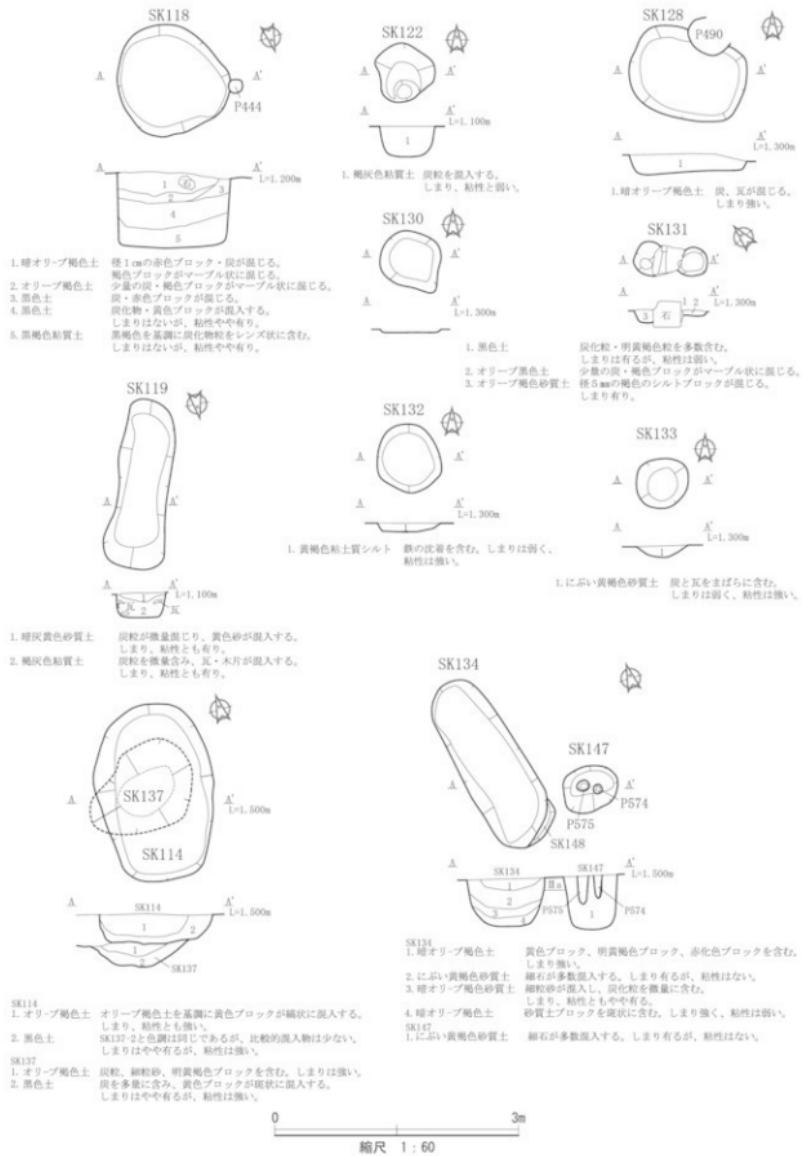
1. 黏灰色土
 2. 黏灰色土
 3. 黏灰色土
 4. 黏灰色砂質土
- 明褐色土を含み、細繊維がレンズ状に含む。
しまりはないが、粘性有り。
1層よりも纏入多い。しまりは強く、粘性は弱い。
砂粒石・褐色ブロックを含む。しまりは強く、粘性やや有り。



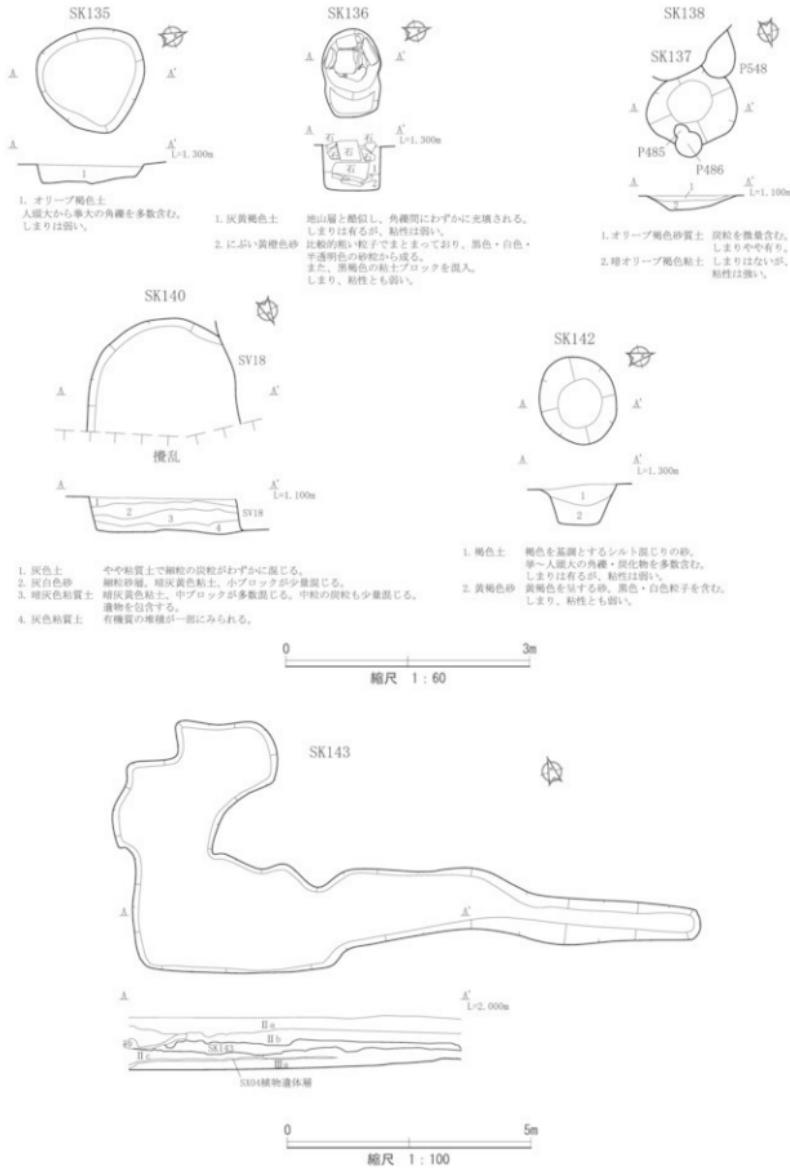
第36図 SK97・99・100・102・104・105・SV24 平面・断面図



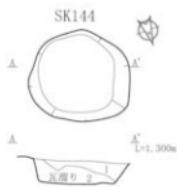
第37図 SK106・107・109・110・111・112・115・116 平面・断面図



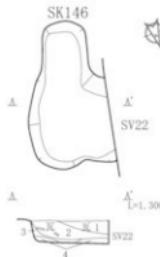
第38図 SK114・118・119・122・128・130・131・132・133
134・137・147 平面・断面・エレベーション図



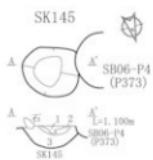
第39図 SK135・136・138・140・142・143 平面・断面・エレベーション図



1. 灰黃褐色土 シルト混じりの砂。礫塊・陶器片・瓦の小片・炭化物粒子を含む。
しまりは有るが、粘性はない。
2. 瓦層。1層に顕著な層が光沢される。瓦は小破片が多い。



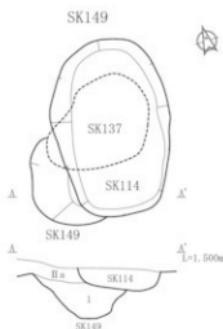
1. 黒褐色土
2. 粘褐色土
3. にがい黄褐色土 シルト混じりの砂。炭化物粒子を一定量含む。
しまりは有るが、粘性や有り。
比較的粒子が整い、日立った掘入物もない。
4. 浅黄色砂層



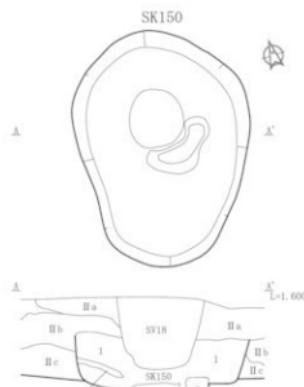
1. 黑褐色粘質土 粒物を多量含む。しまり、粘性とも強い。
2. オリーブ褐色砂質土 黑褐色粘質土を基盤に、1層のブロック状を混入。
しまり、粘性とも強い。
3. 黑色粘質土 黒色を基調に、炭鉱・砂を少量含む。しまり、粘性とも強い。



1. オリーブ褐色砂質土 灰粒を微量に混じる。しまりは無い。



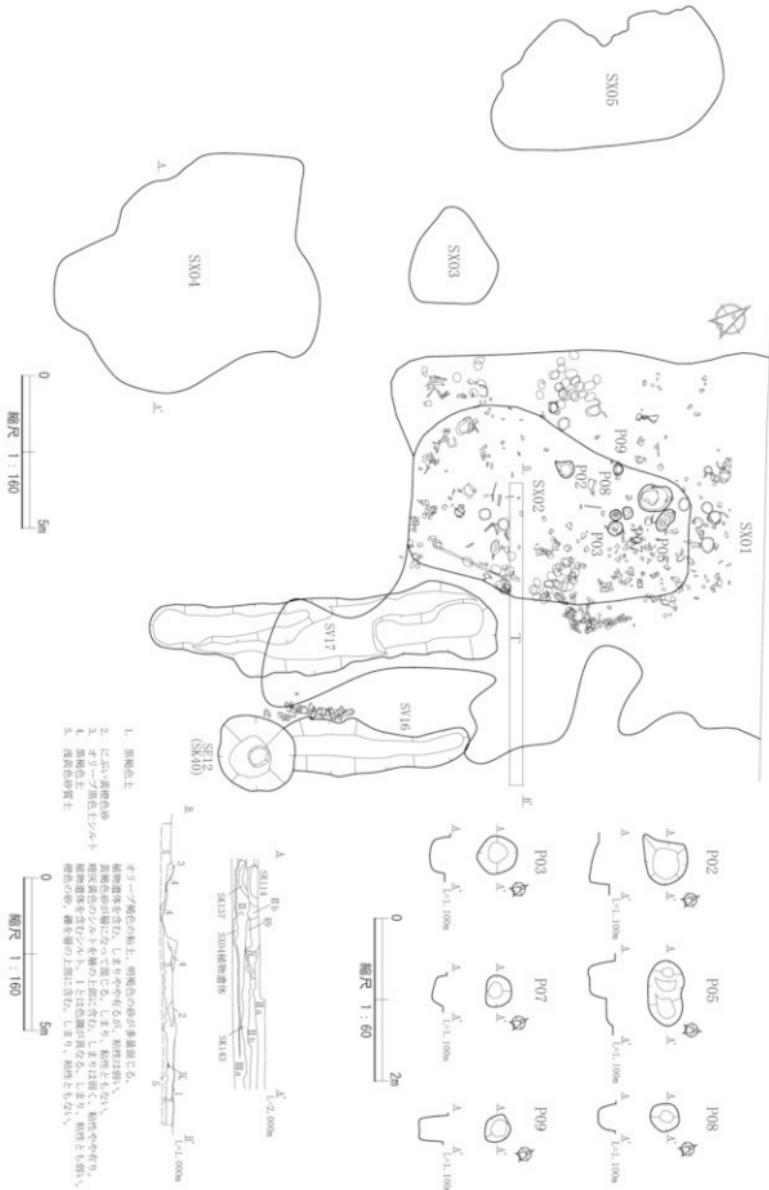
1. 灰白色砂質土 混入物はない。しまり、粘性ともない。



1. 黄灰粘土質シルト 土を少量含み。砂質ブロックが混入する。
しまりやや有り、粘性は無い。
砂が固まる。しまりなく、粘性は無い。
灰、鉄分を含む。しまりなく、粘性とも強い。
鉄分の沈着を多く含む。2層に比べて、
しまり、粘性とも弱い。
2. 灰黃色土
3. 粘オリーブ褐色粘土質シルト
4. 黄灰粘土質シルト

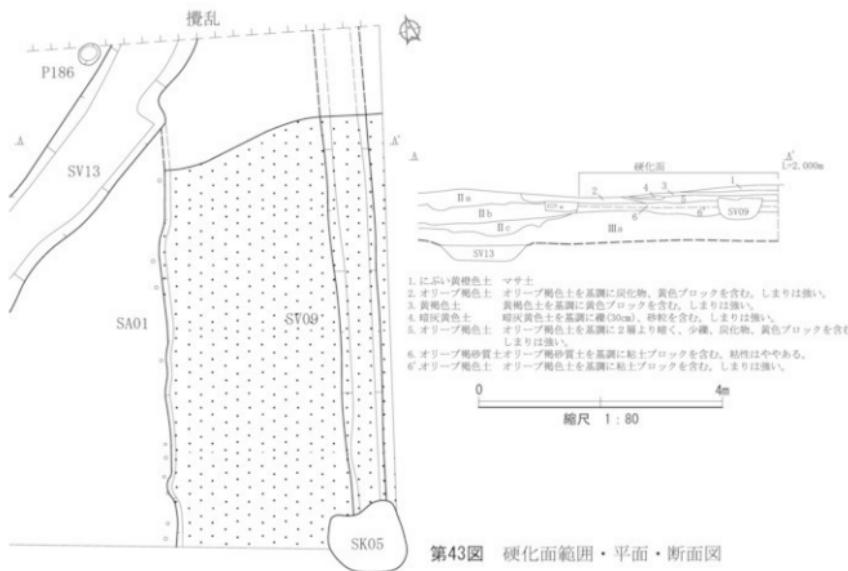
0 3m
縮尺 1:60

第40図 SK144・145・146・148・149・150 平面・断面図

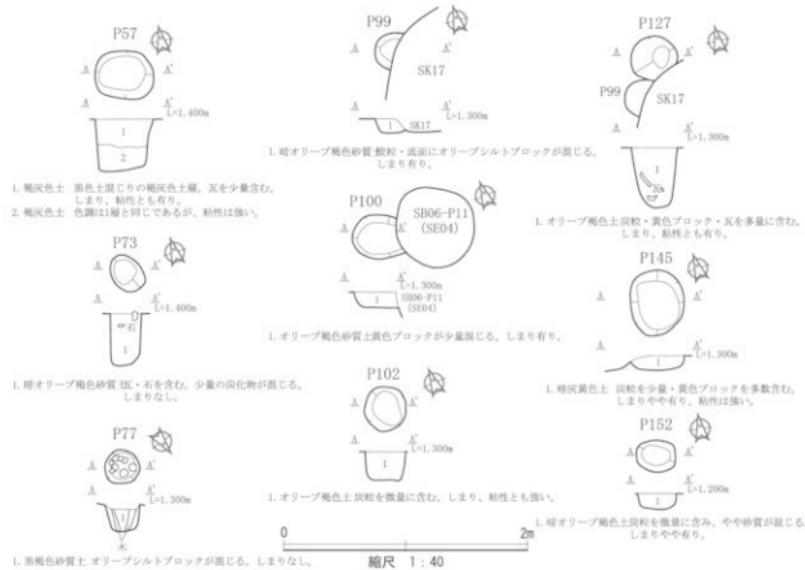


第41図 SX01・02・03・04・05配置図・遺物分布図

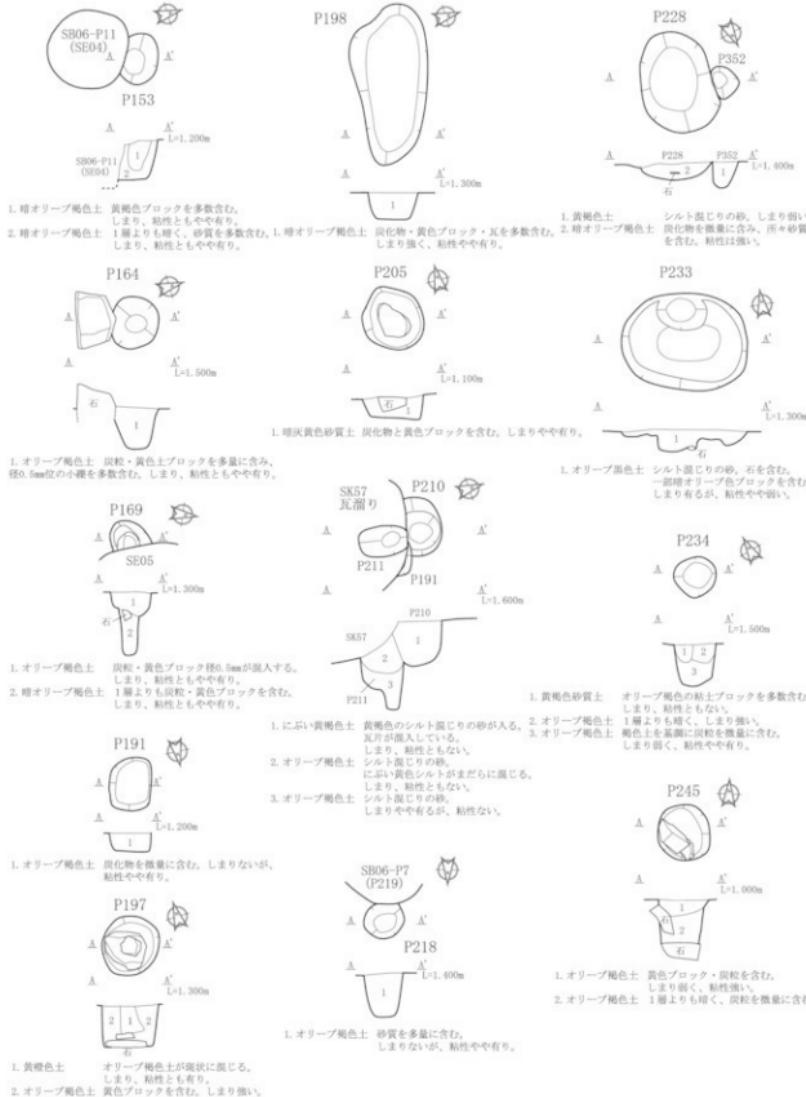
第42図 SX01・02・04・P02・P03・P05・P07・P08・P09
平面・断面・エレベーション図



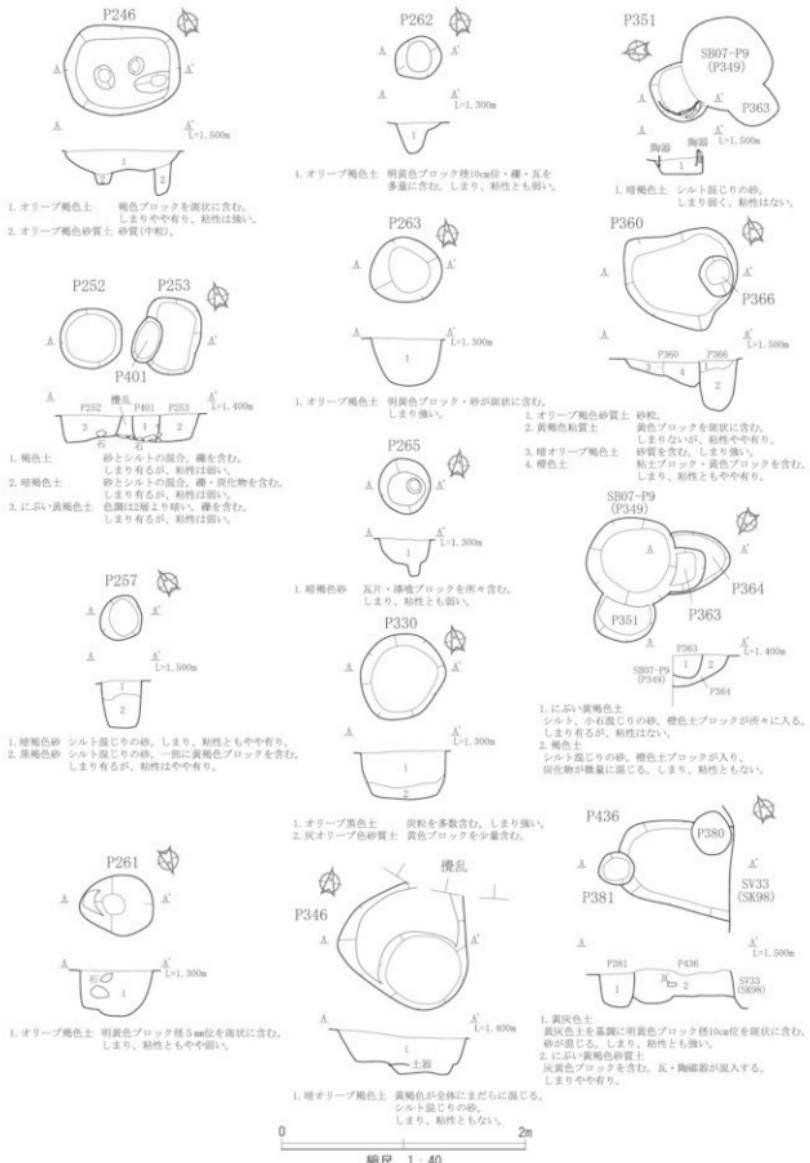
第43図 硬化面範囲・平面・断面図



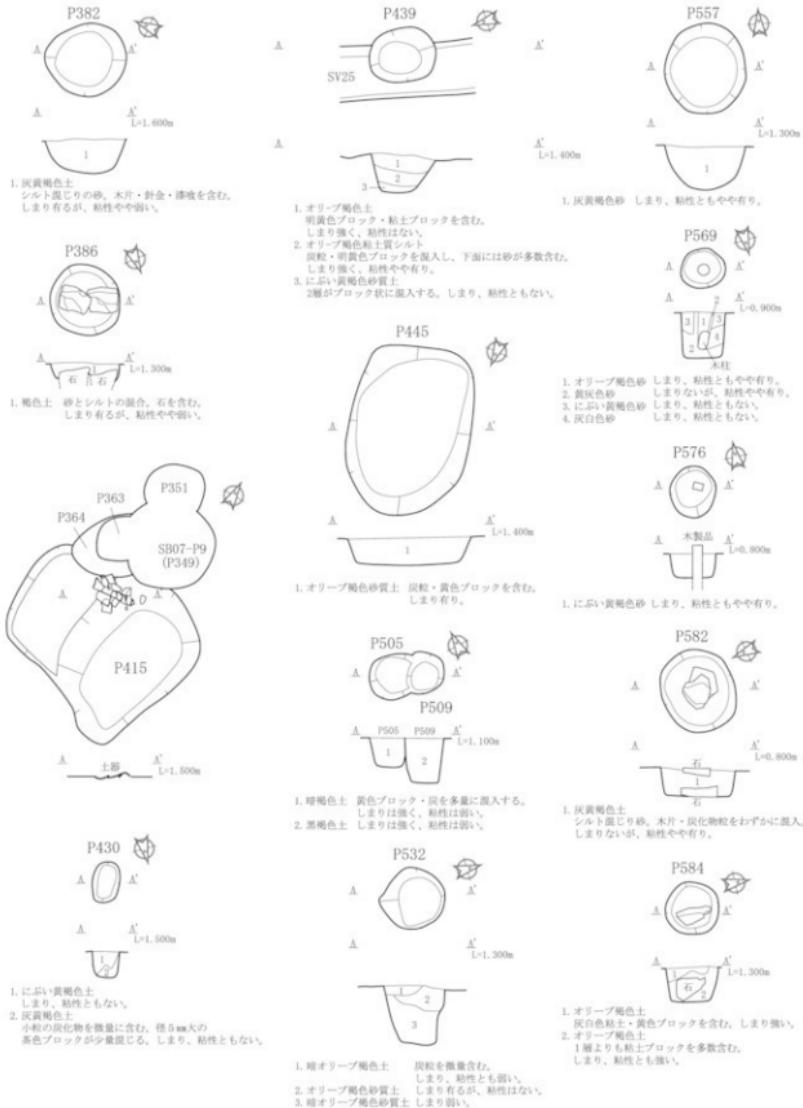
第44図 P57・73・77・99・100・102・127・145・152 平面・断面図



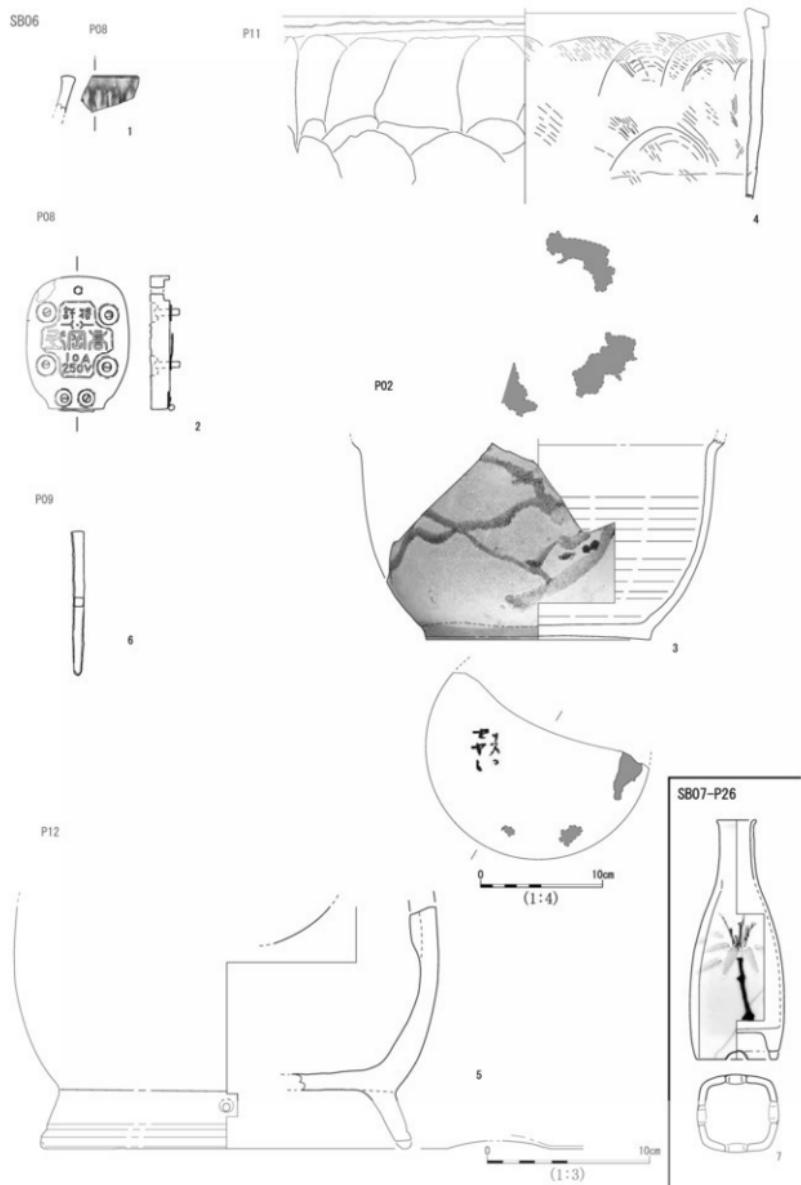
第45図 P153・164・169・191・197・198・205・210・211・218・228・233・234・245 平面・断面図



第46図 P246・252・253・257・261・262・263・265・330・346・351
360・366・363・364・381・401・436 平面・断面図

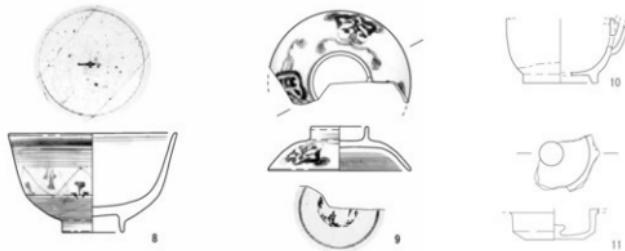


第47図 P382・386・415・430・439・445・505・509・532・557
569・576・582・584 平面・断面・土器出土状況図

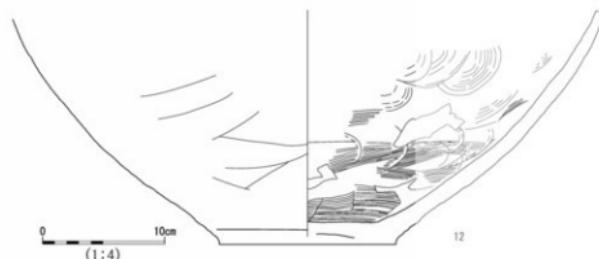


第48図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (1)
[SB06・07]

SB05



SB04



SB01



SV42



第49図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (2)
[SB01・04・05・SV42]

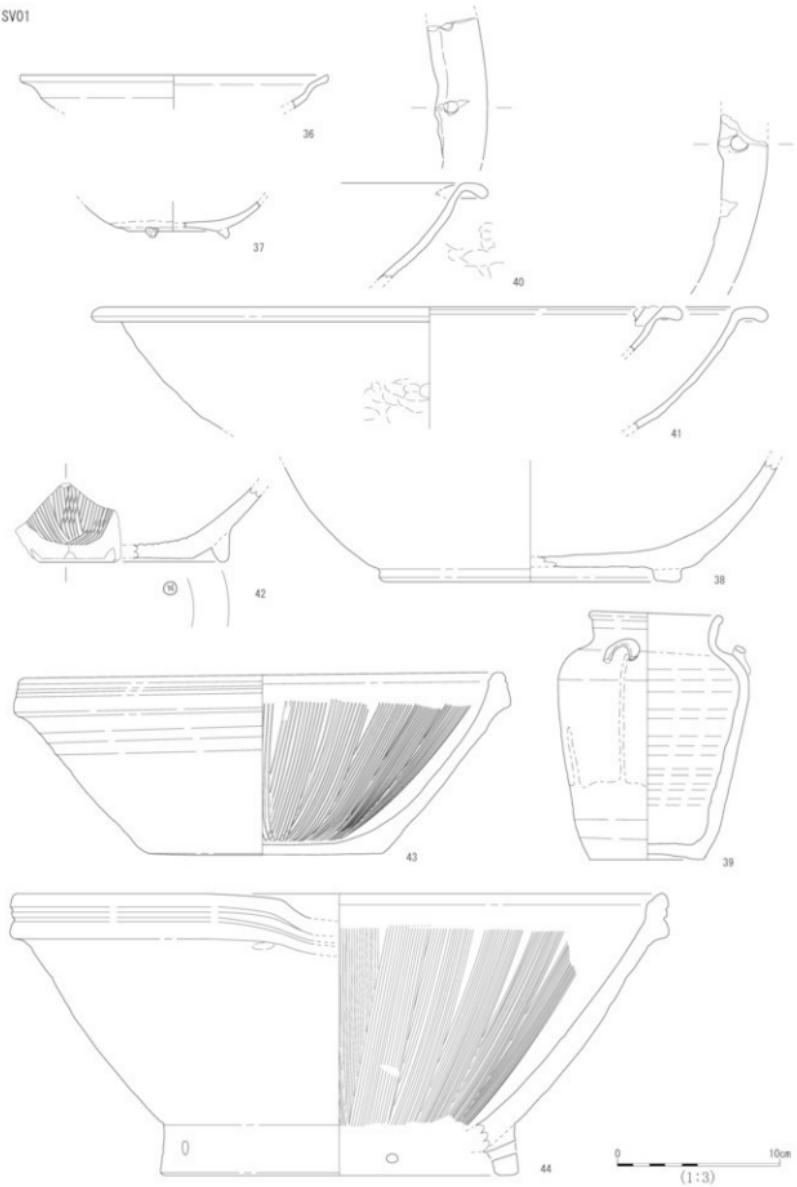
SV01



第50図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (3)

[SV01]

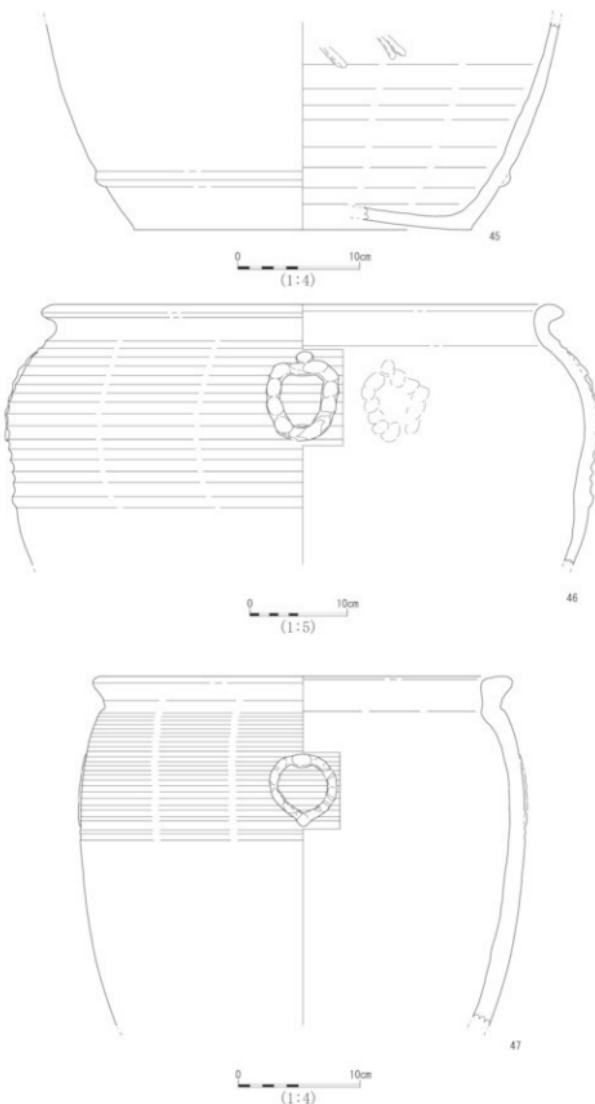
SV01



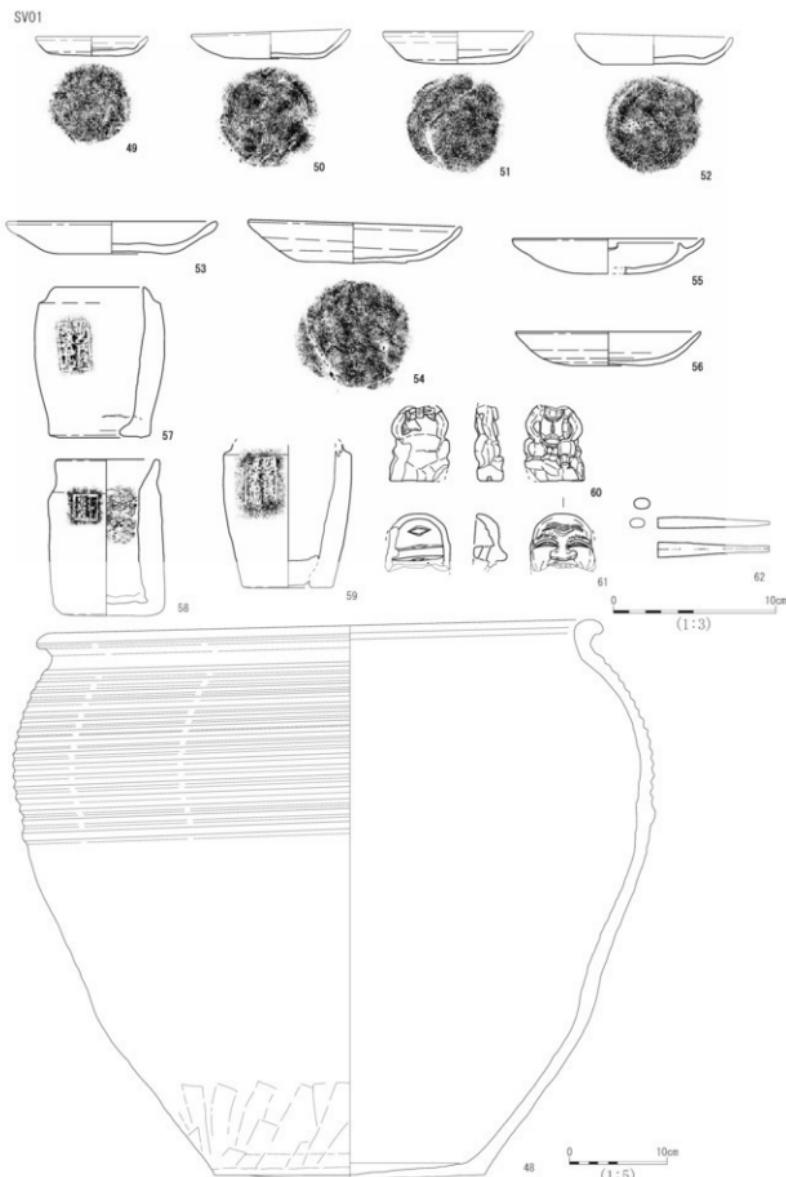
第51図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (4)

[SV01]

SV01

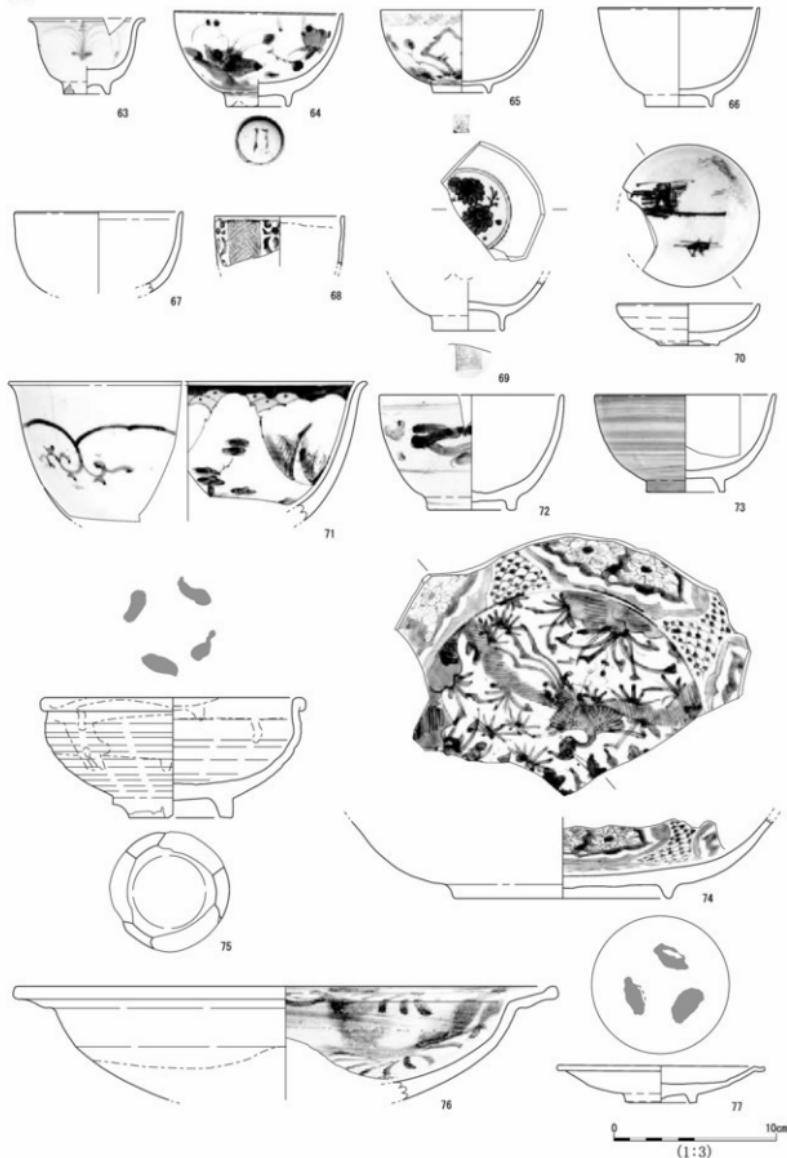


第52図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (5)
[SV01]



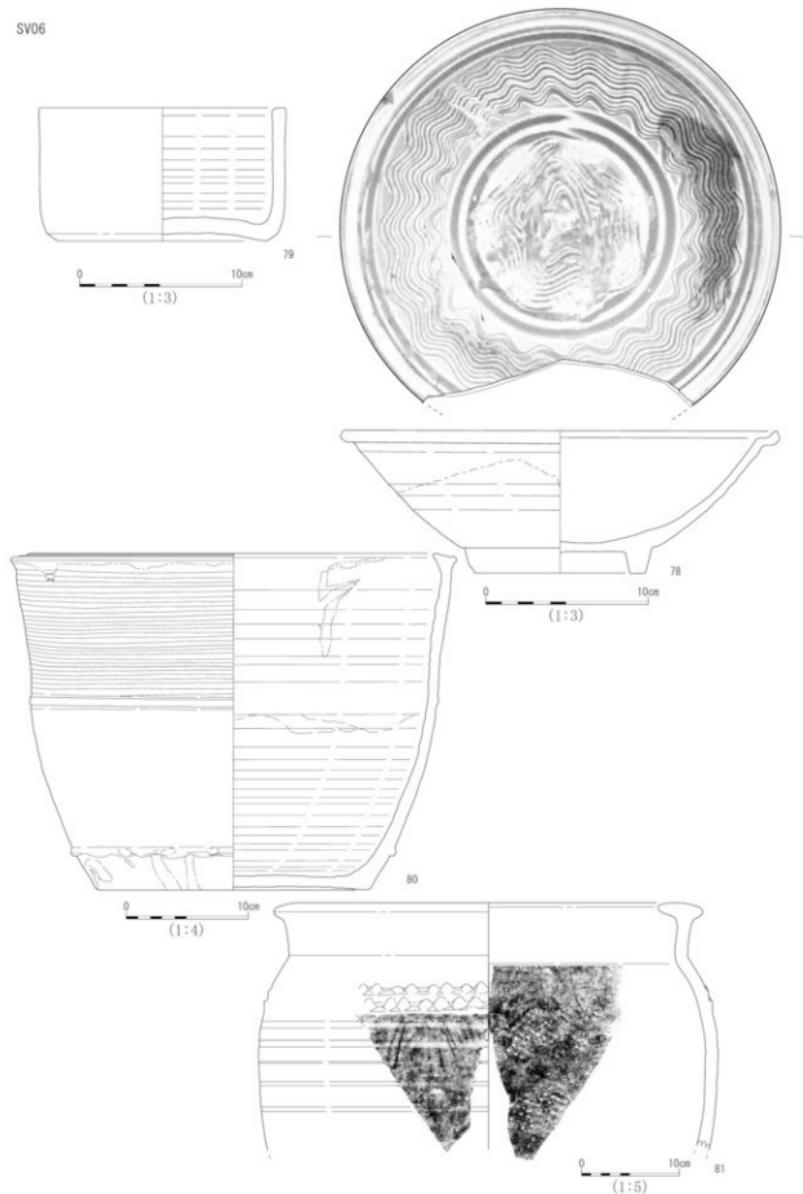
第53図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (6)
[SV01]

SV06



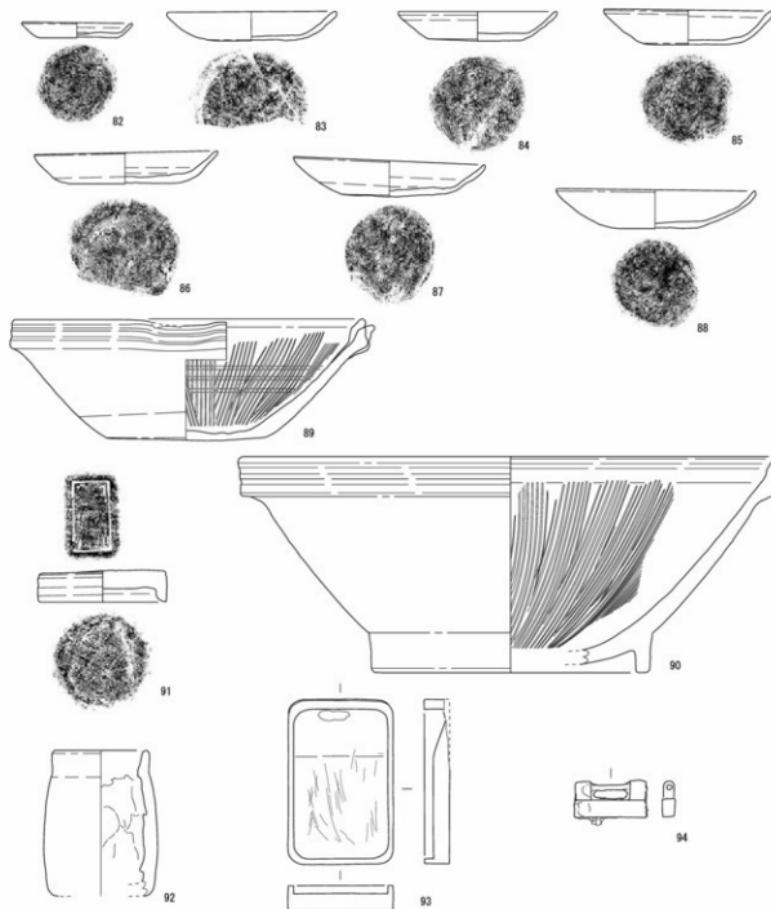
第54図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (7)
[SV06]

SV06

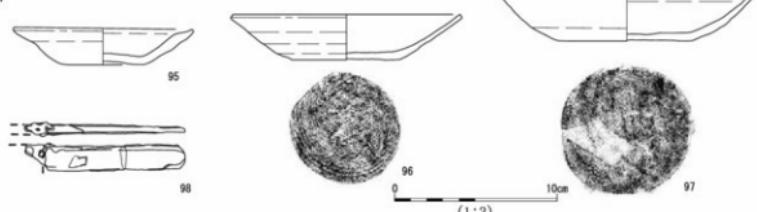


第55図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図（8）
[SV06]

SV06

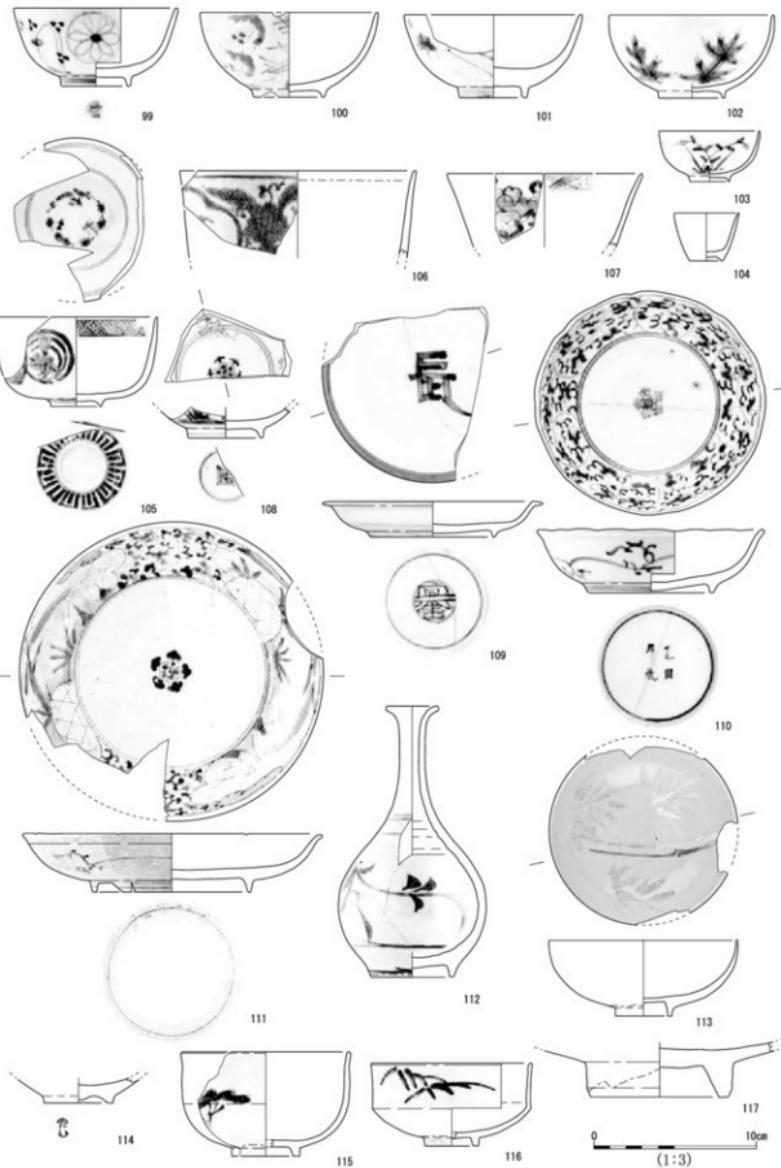


SV17



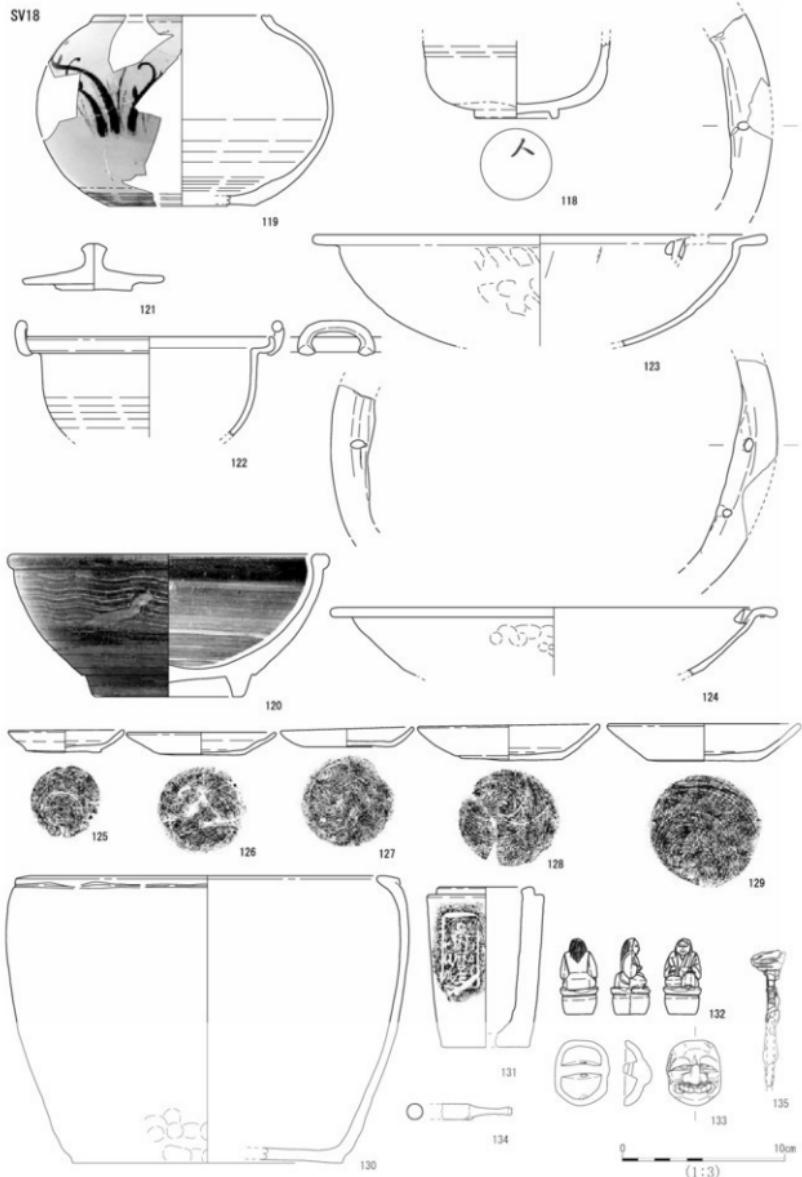
第56図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図 (9)
[SV06・17]

SV18



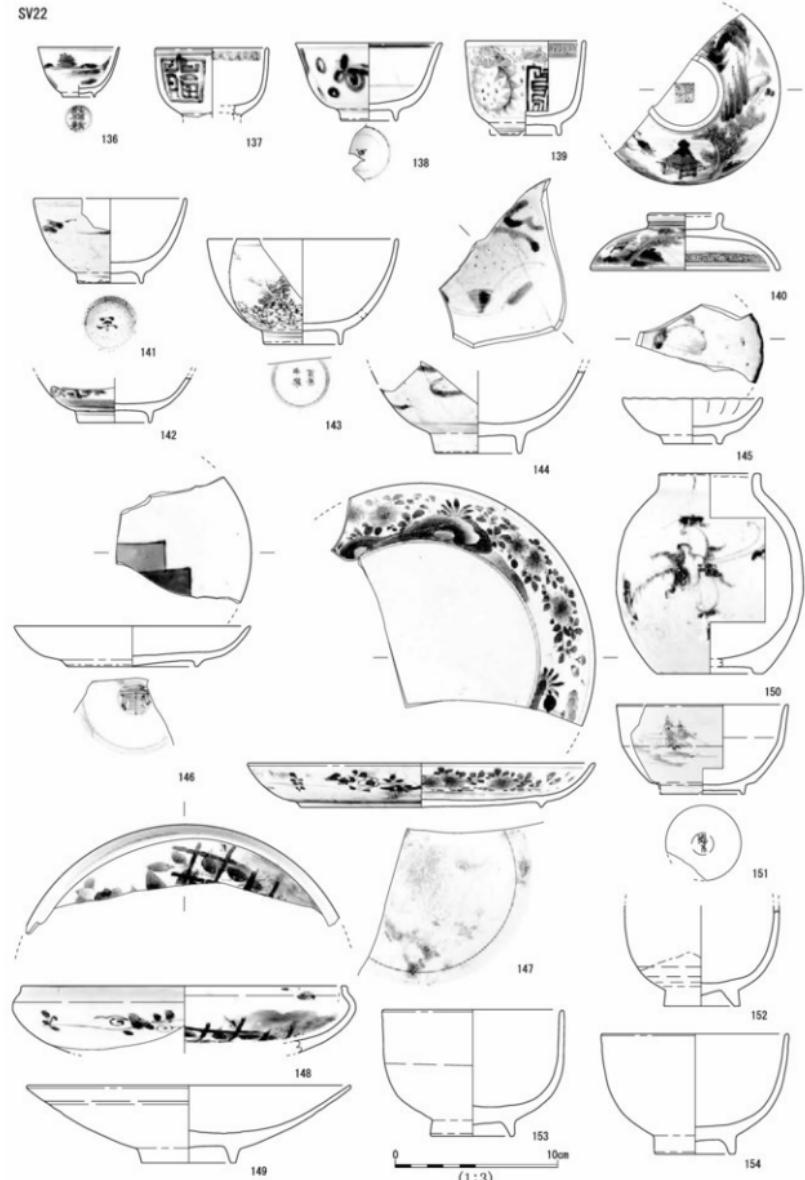
第57図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(10)

[SV18]



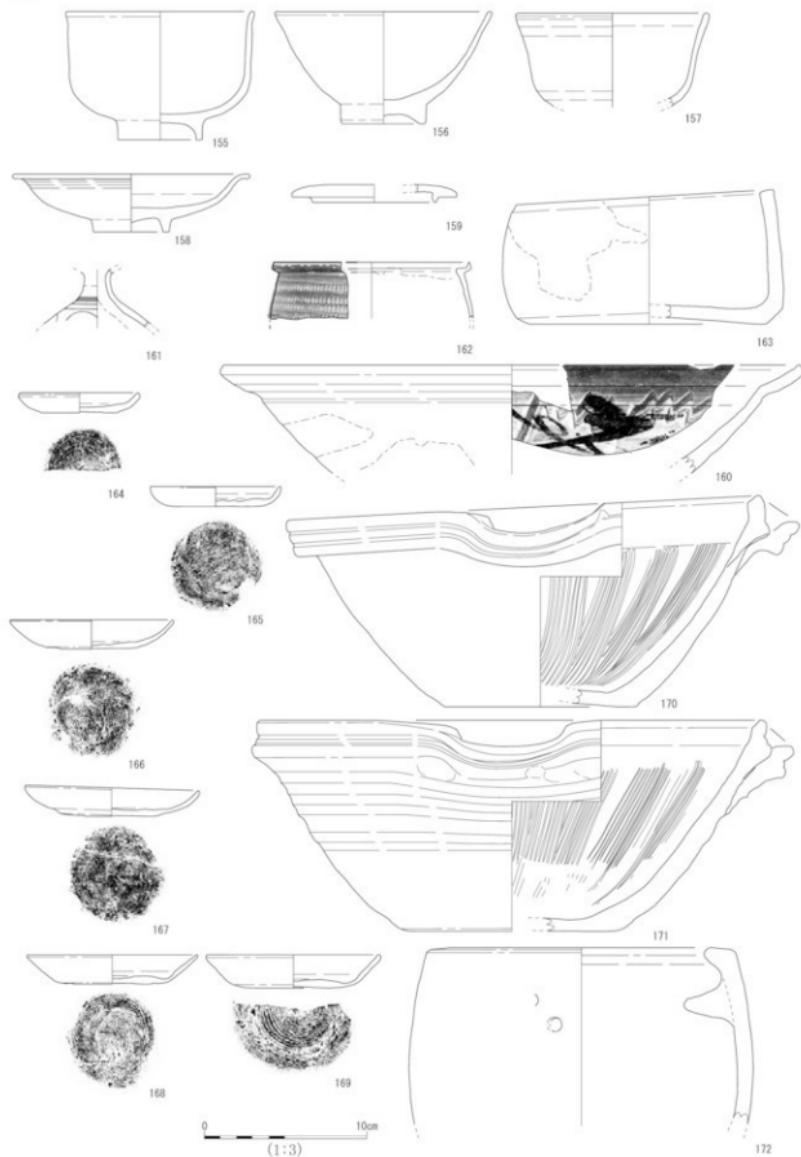
第58図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(11)

[SV18]



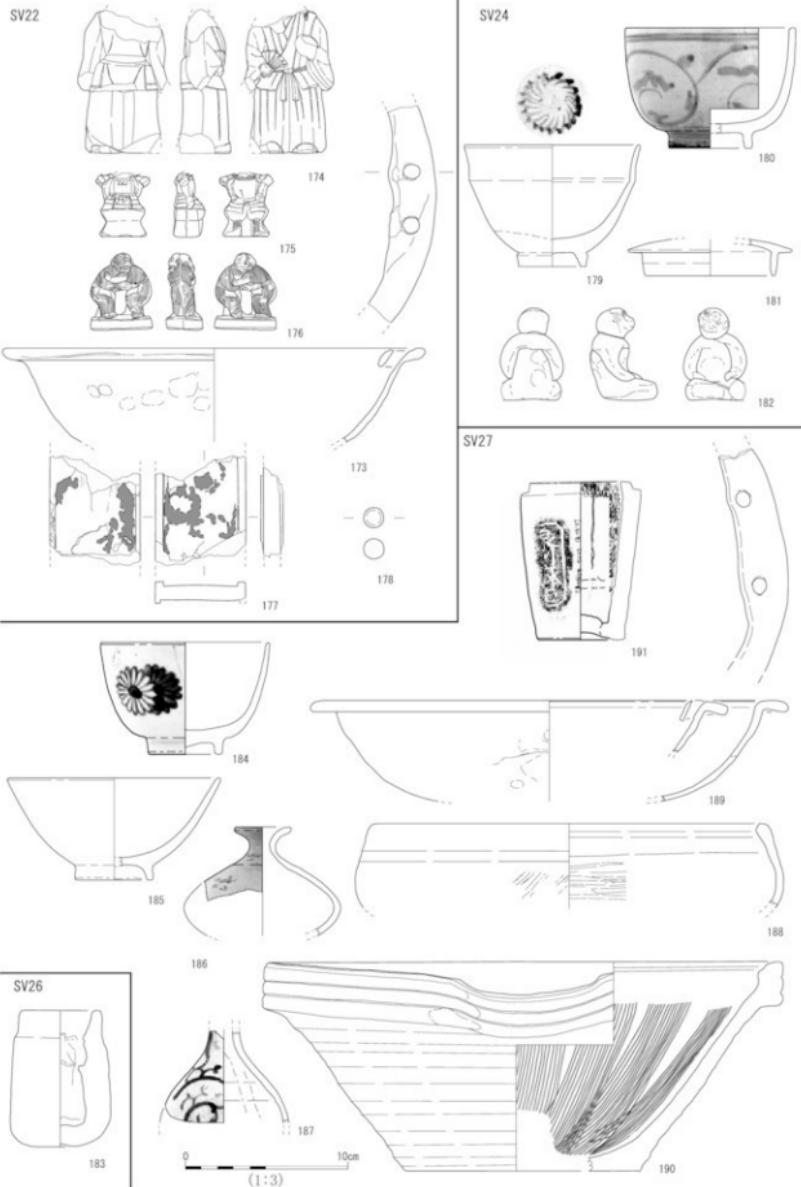
第59図 出土陶磁器・土師質瓦質器・その他 遺物実測図(12)
[SV22]

SV22

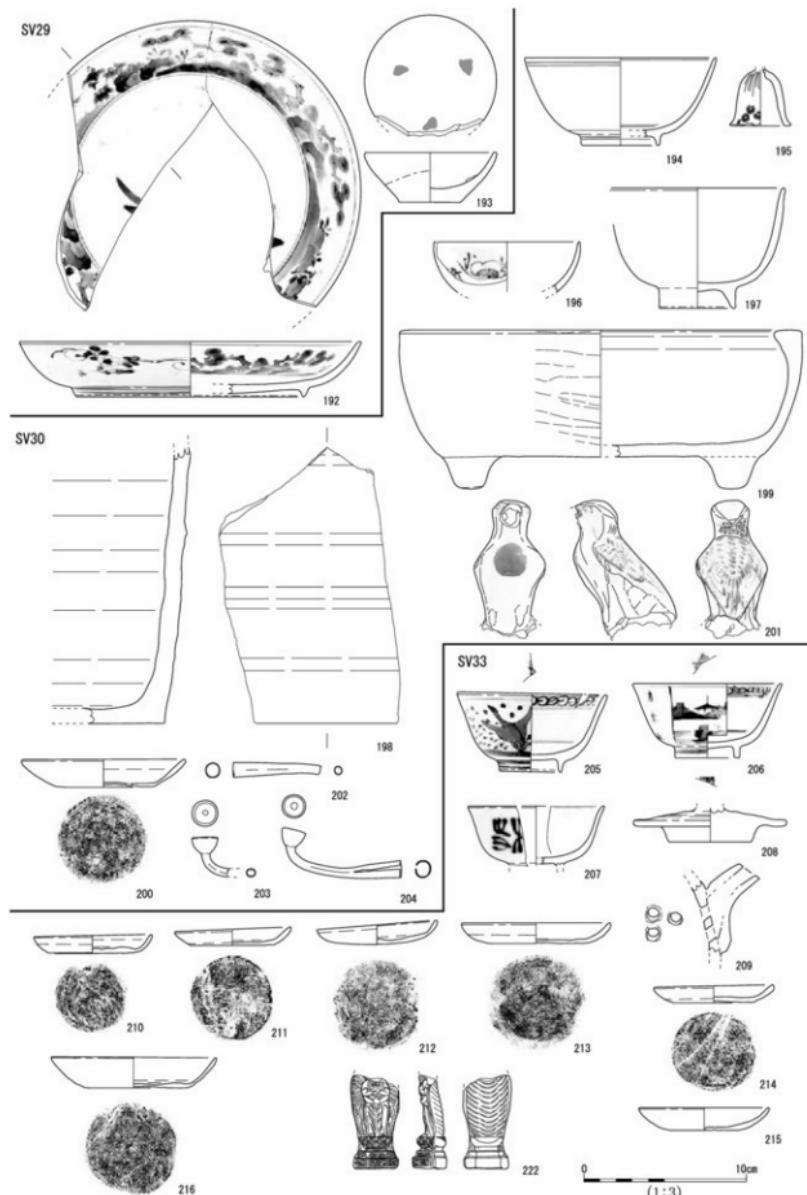


第60図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(13)

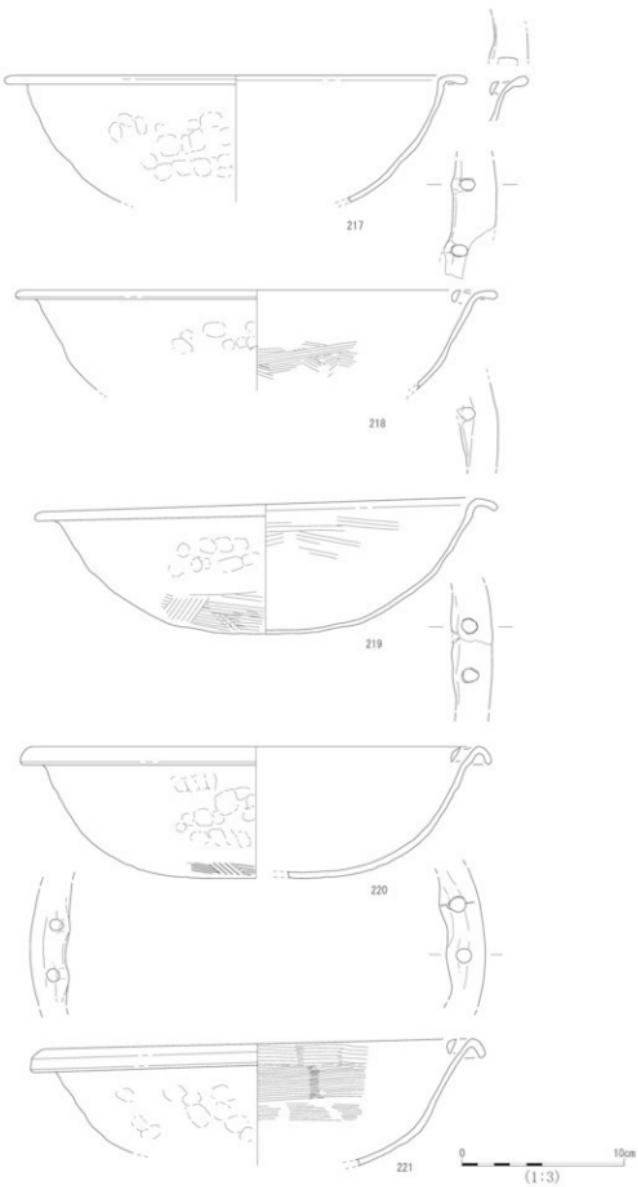
[SV22]



第61図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(14)
[SV22・24・26・27]



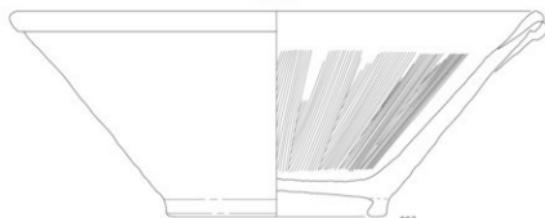
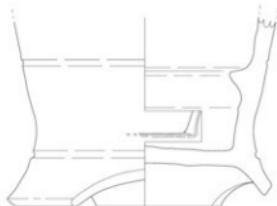
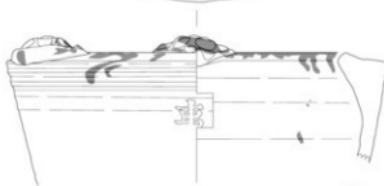
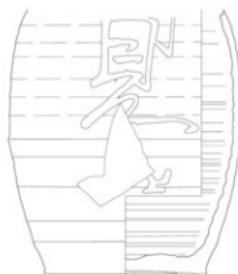
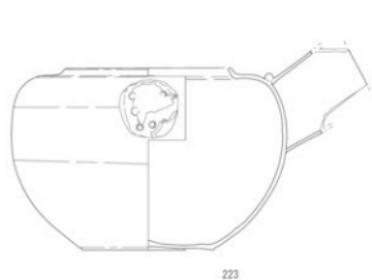
第62図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(15)
[SV29・30・33]



第63図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(16)

[SV33]

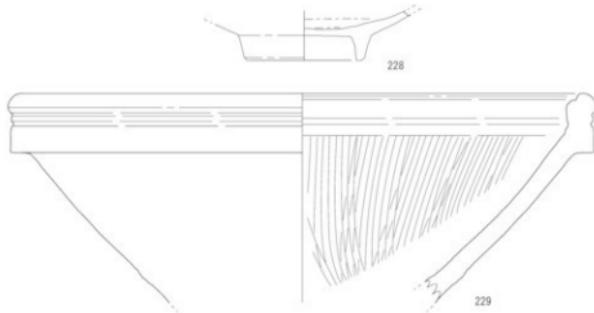
SE01



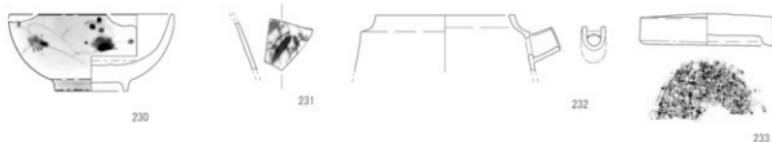
0 10cm
(1:3)

第64図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(17)
[SE01]

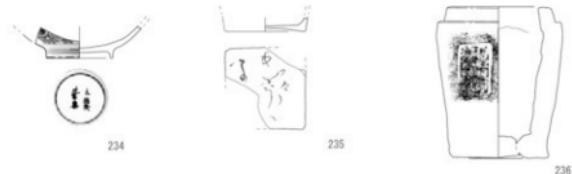
SE14



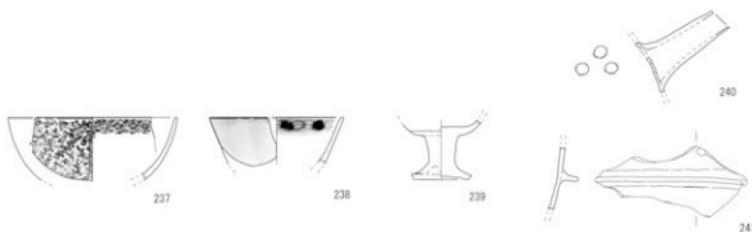
SE15



SE17



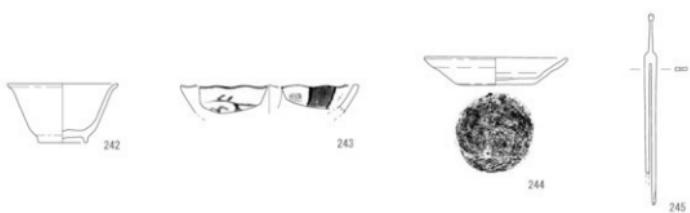
SE18



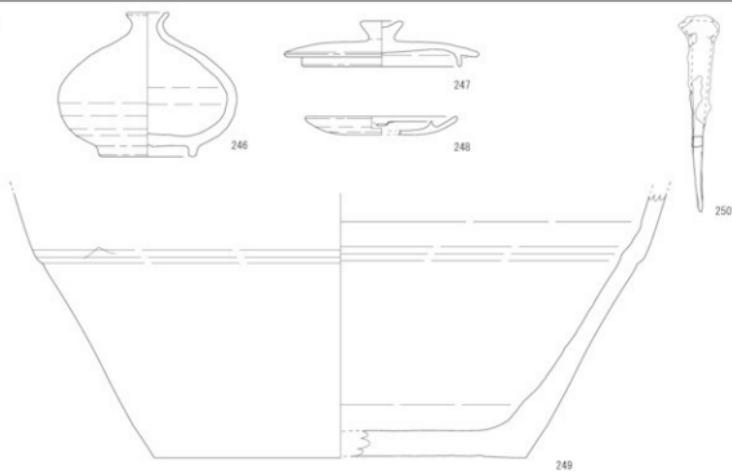
0 10cm
(1:3)

第65図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(18)
[SE14・15・17・18]

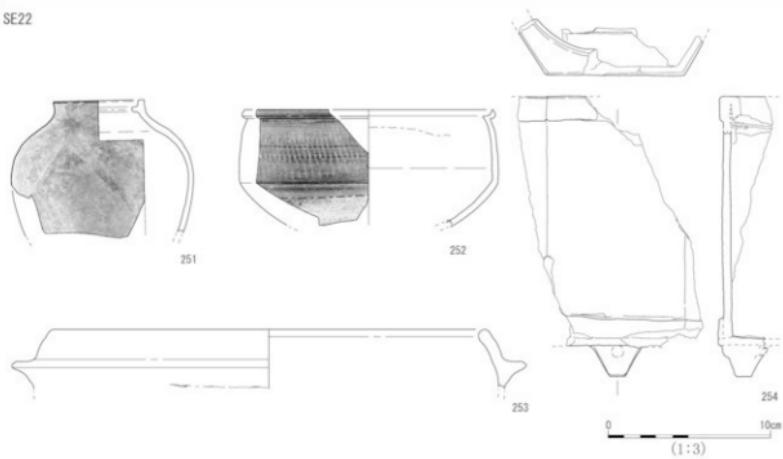
SE20



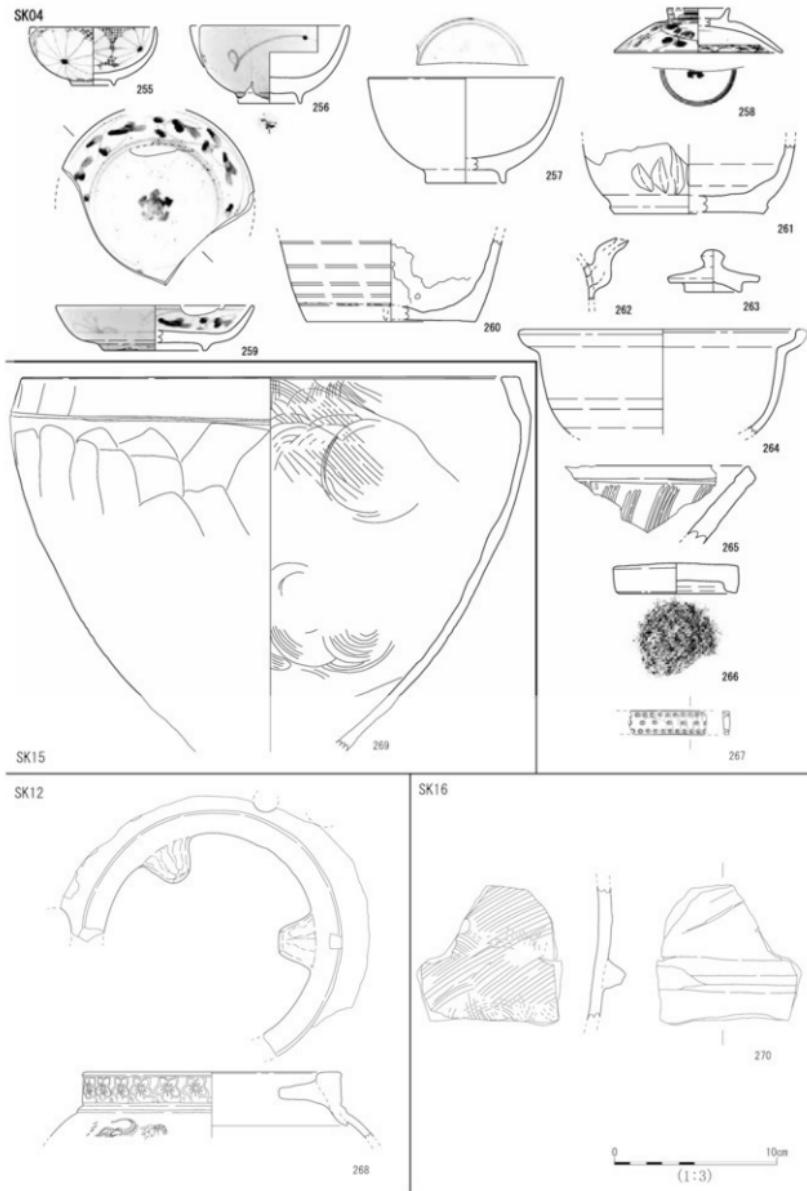
SE21



SE22

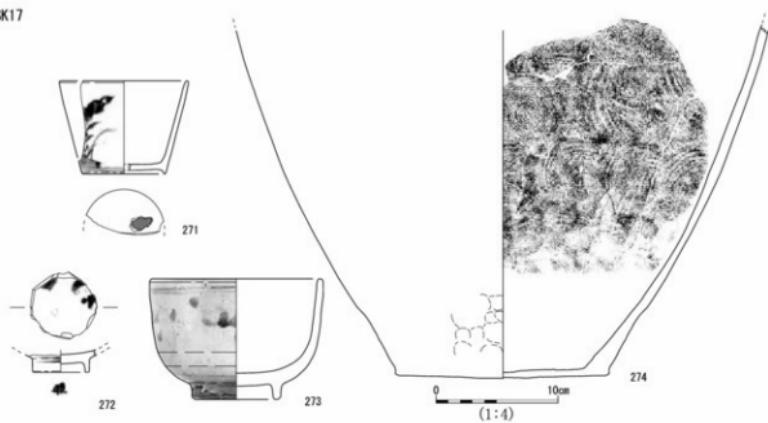


第66図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(19)
[SE20・21・22]

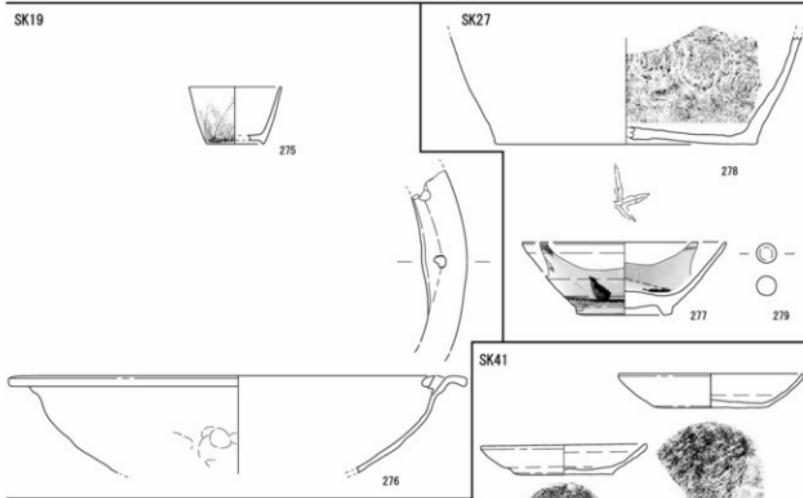


第67図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(20)
[SK04・12・15・16]

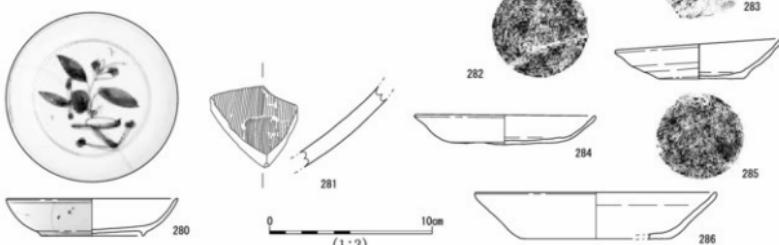
SK17



SK19

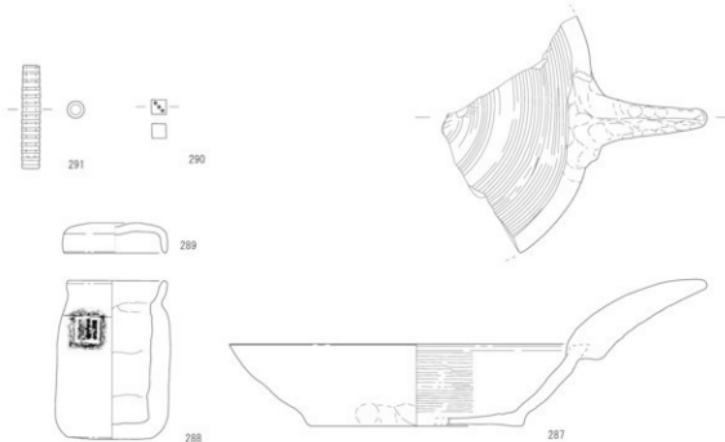


SK41

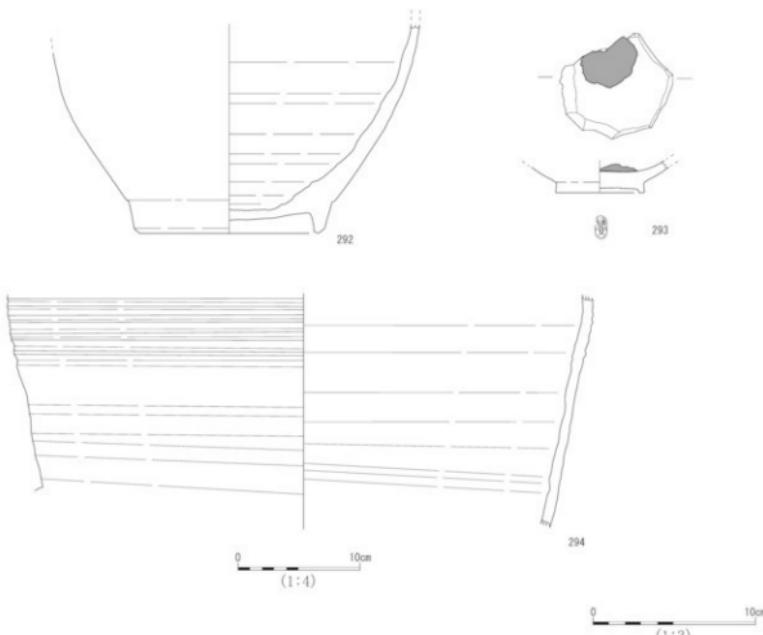


第68図 出土陶器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(21)
[SK17・19・27・41]

SK41

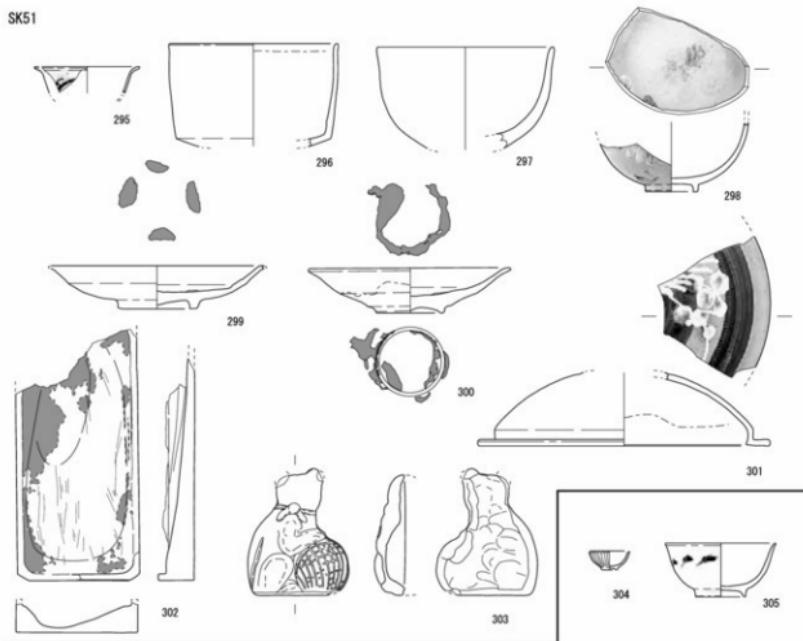


SK47

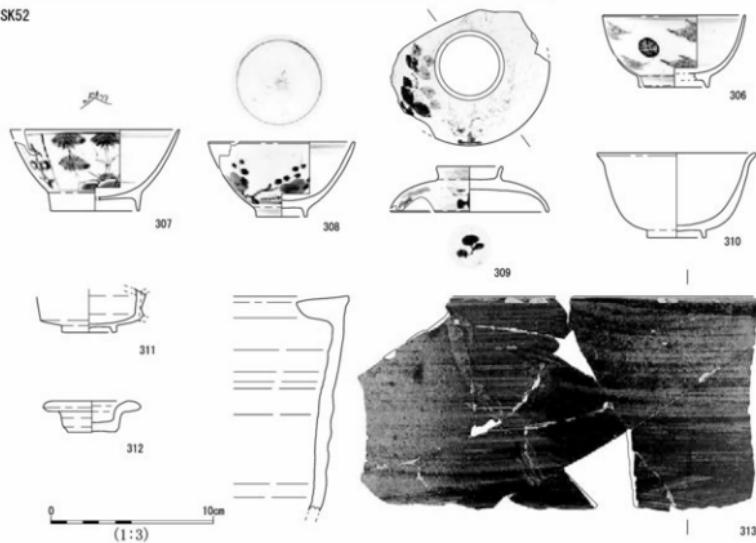


第69図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(22)
[SK41・47]

SK51

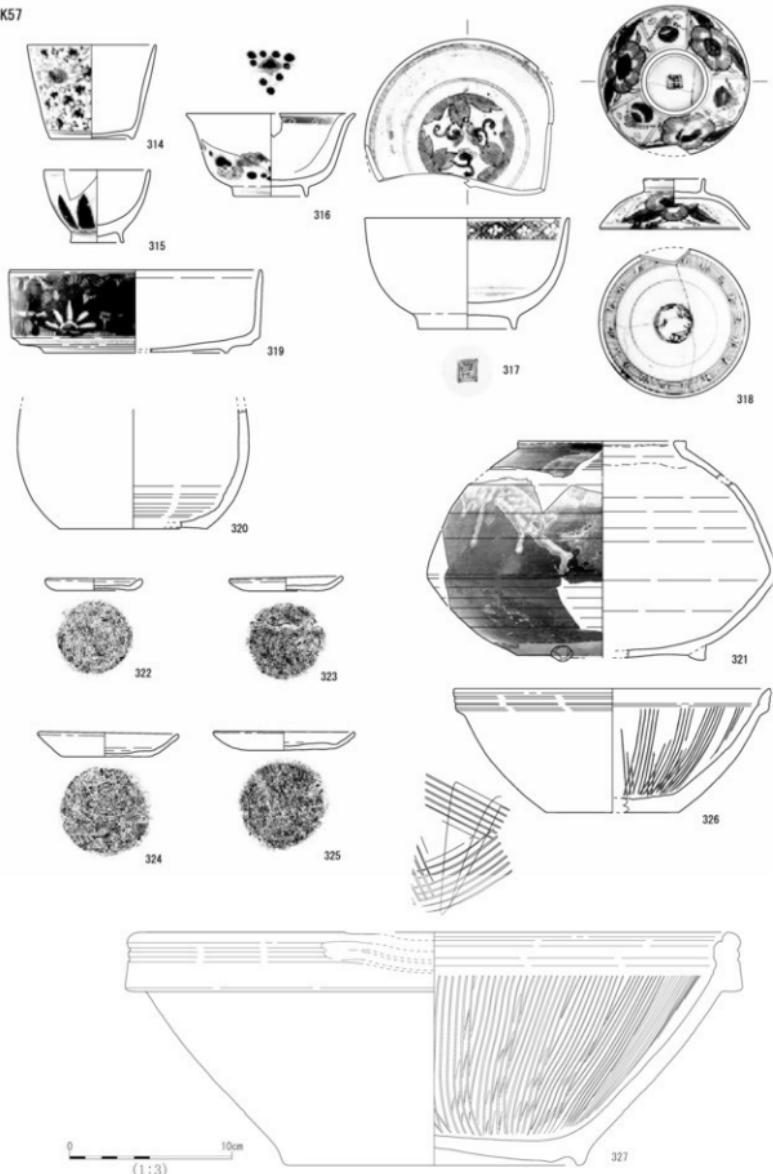


SK52

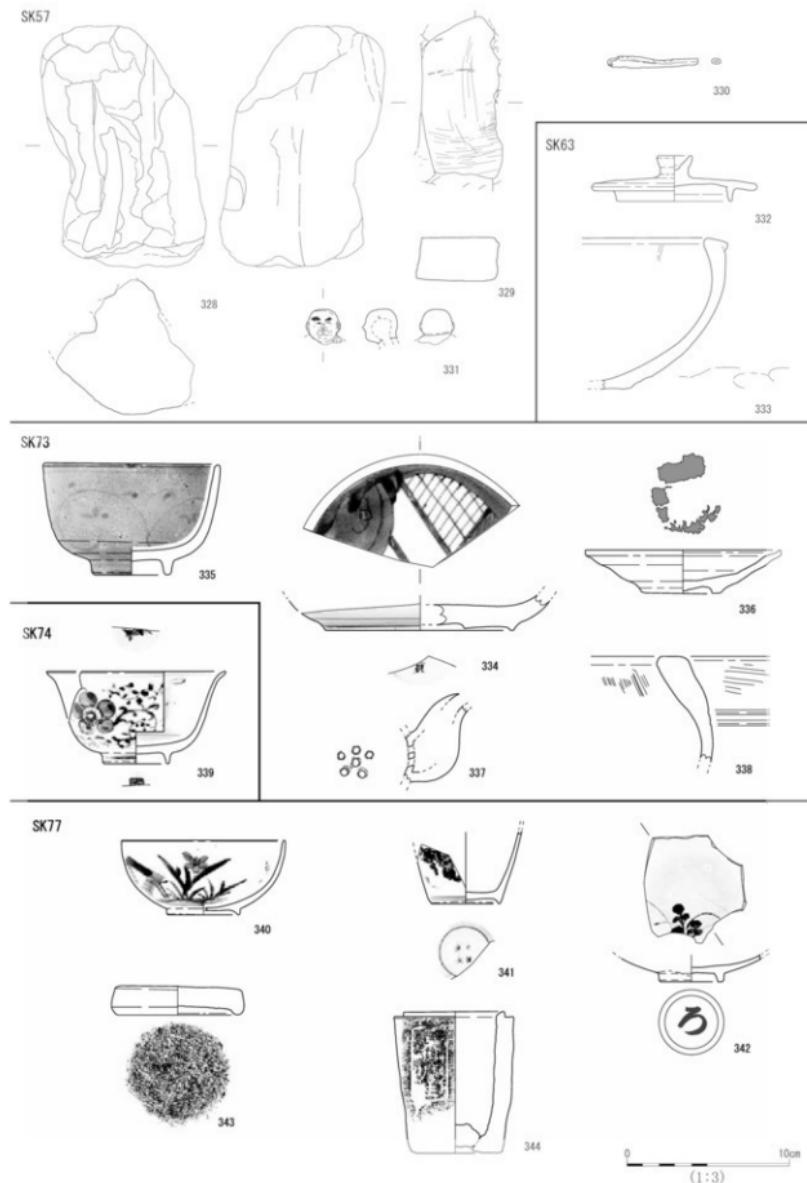


第70図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(23)
[SK51・52]

SK57

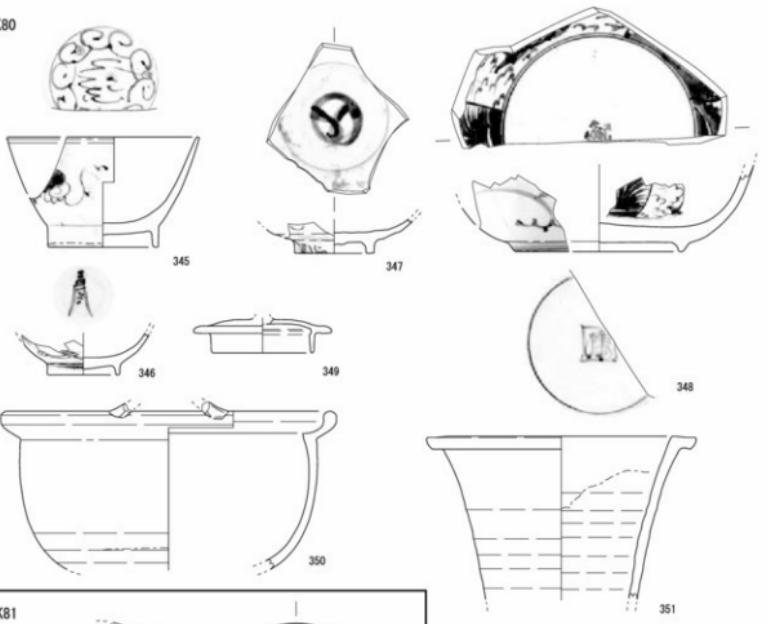


第71図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(24)
[SK57]

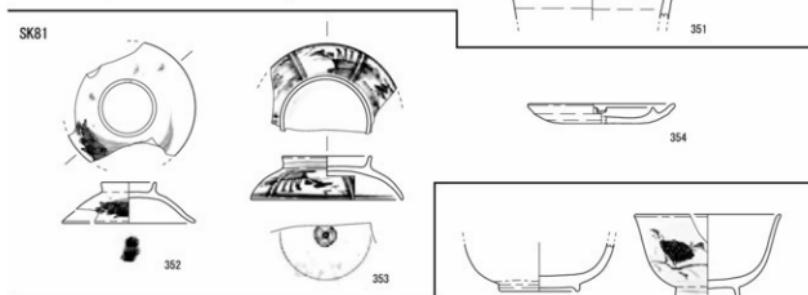


第72図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(25)
[SK57・63・73・74・77]

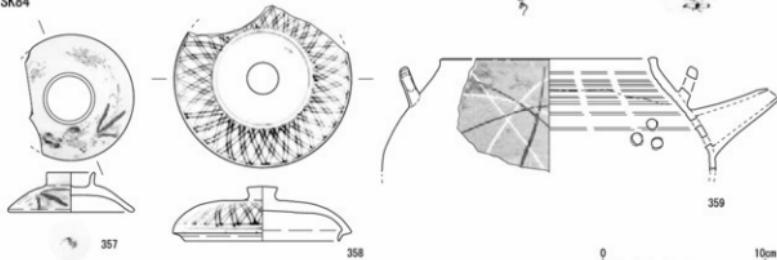
SK80



SK81



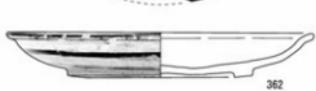
SK84



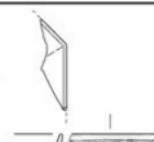
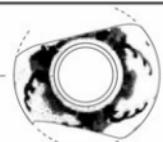
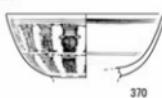
0 10cm
(1:3)

第73図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(26)
[SK80・81・84]

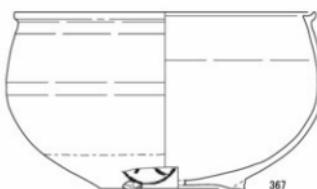
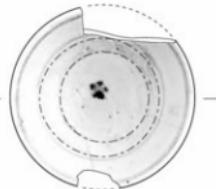
SK88



SK91

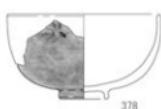


SK90

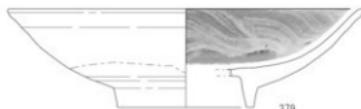


第74図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(27)
[SK88・90・91]

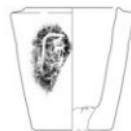
SK91



378



379



381



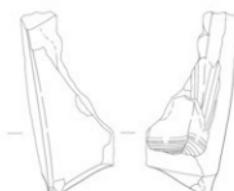
380



382



SK92



385



386

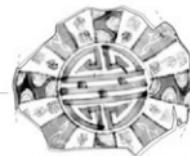


387

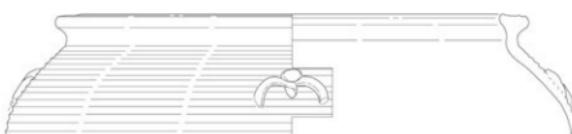
SK95



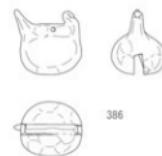
388



389



390



391



392



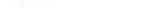
393



394



395



396



397



398

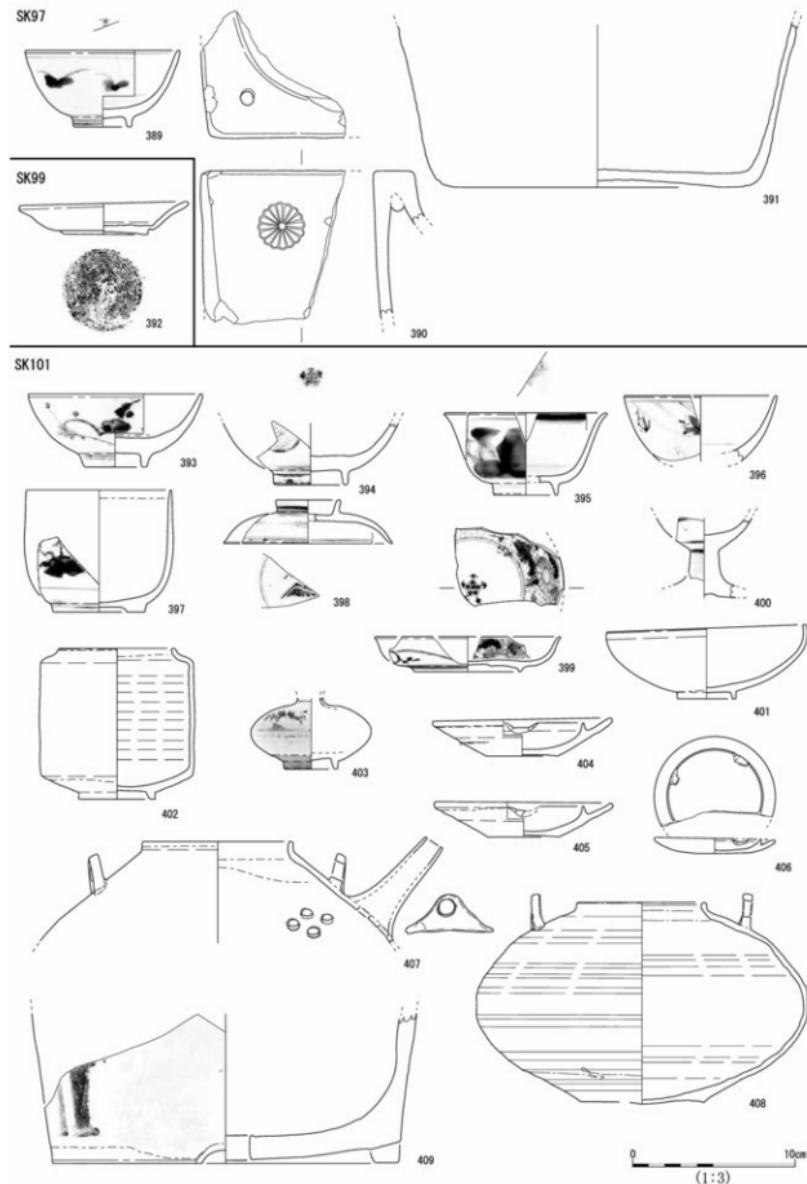


399

第75図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(28)

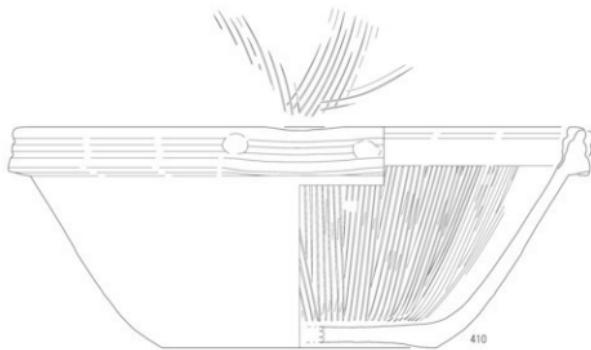
[SK91・92・95]

0
10cm
(1:3)

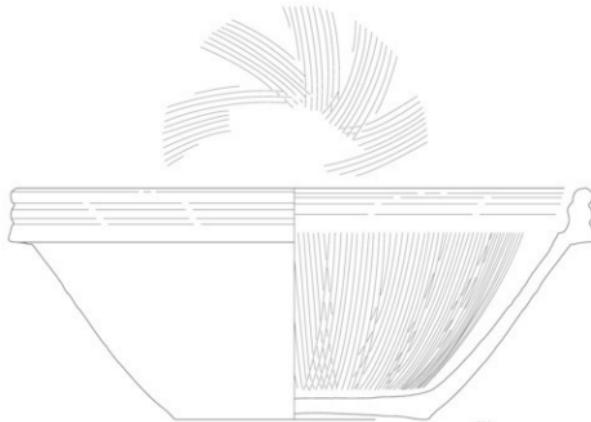


第76図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(29)
[SK97・99・101]

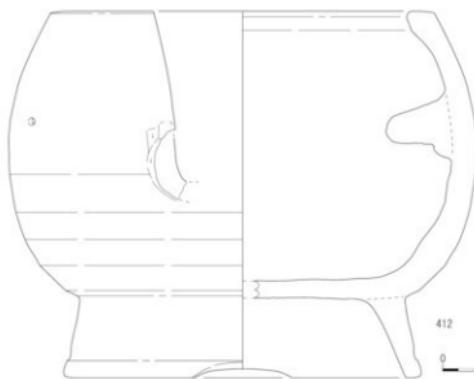
SK101



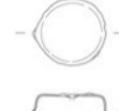
410



411



SK102



第77図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(30)
[SK101・102]

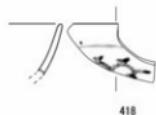
SK106



416



417



418



414



415



419



420



421



422



423



424



425

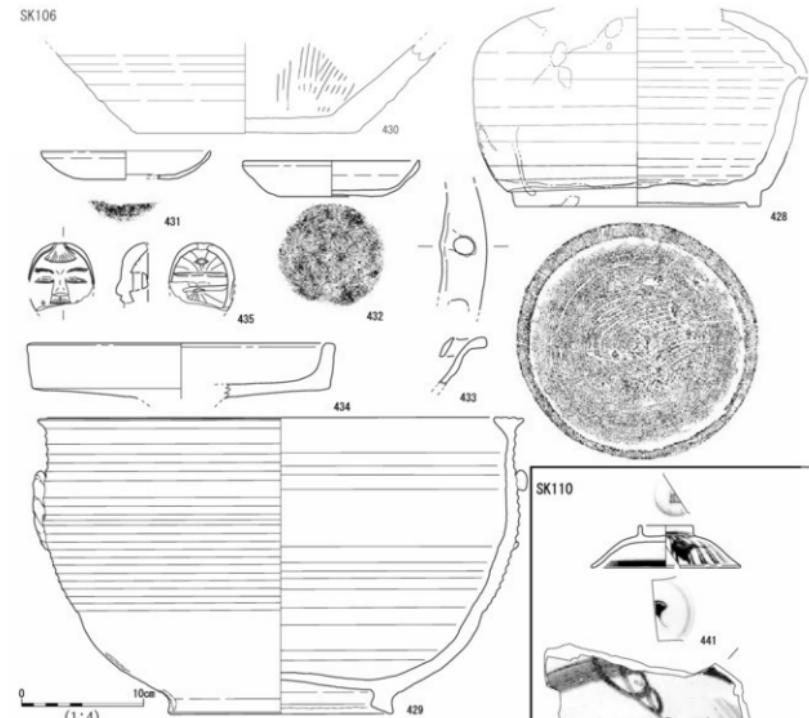


427

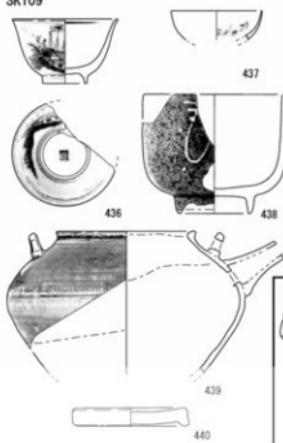
0 10cm
(1:3)

第78図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(31)
[SK106]

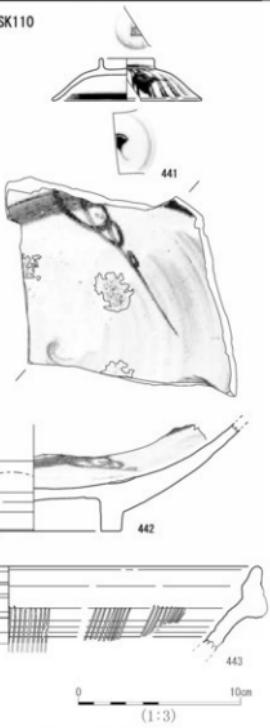
SK106



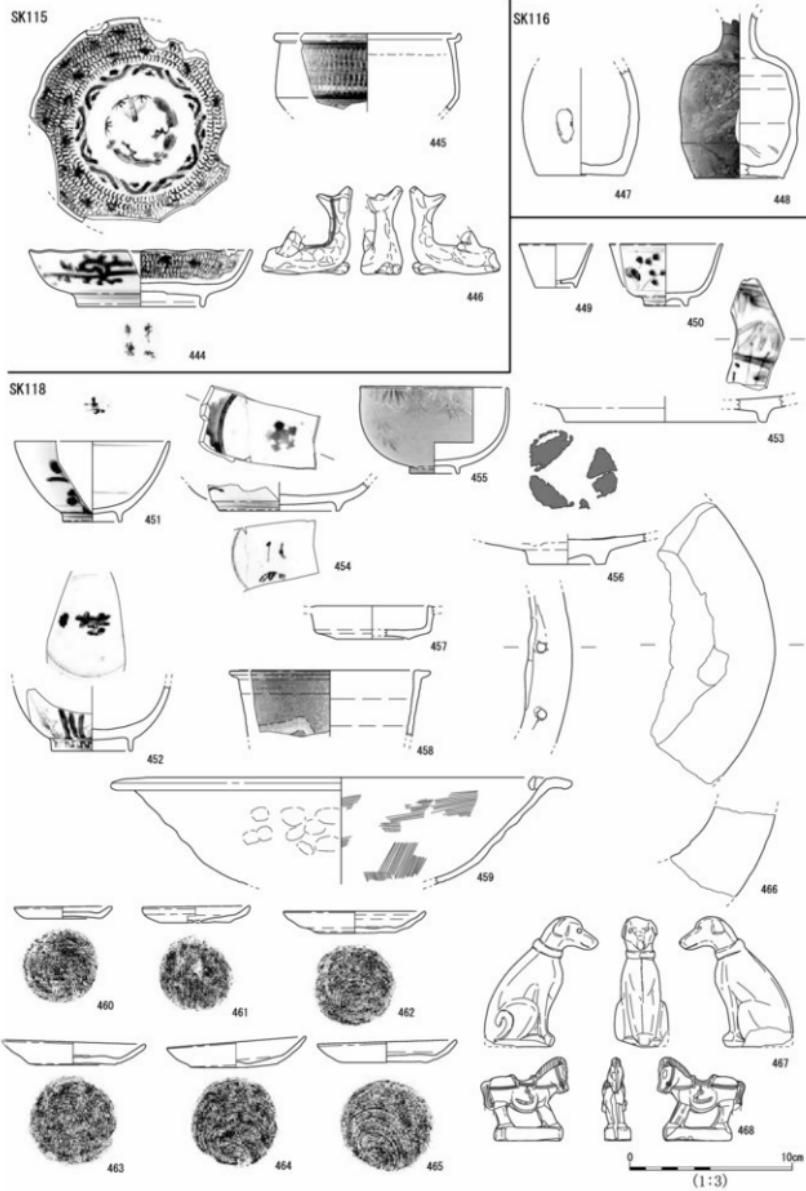
SK109



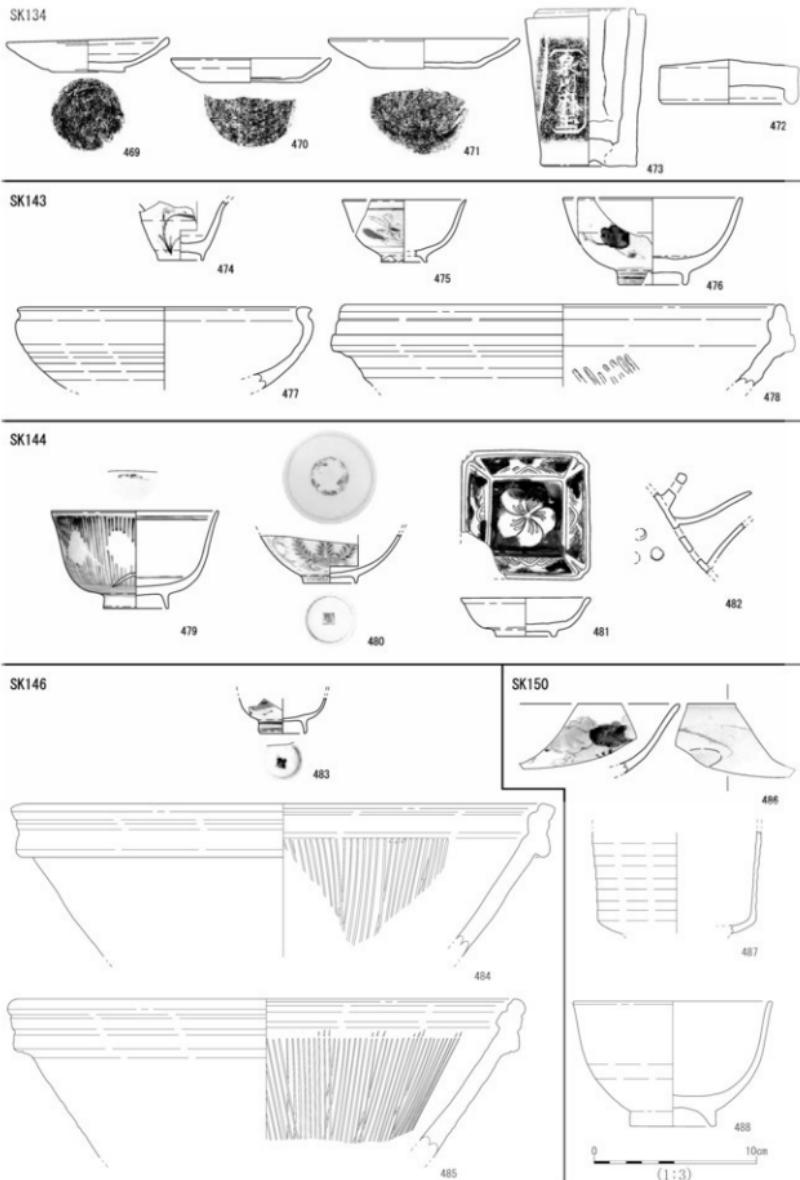
SK110



第79図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(32)
[SK106・109・110]

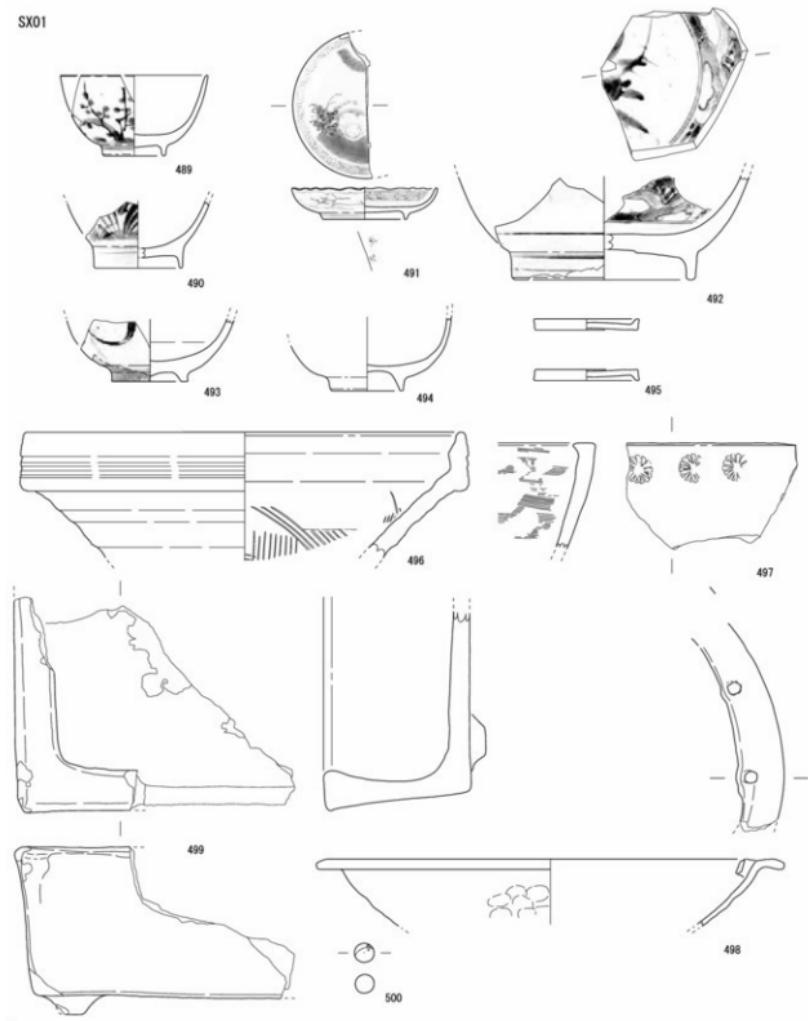


第80図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(33)
[SK115・116・118]

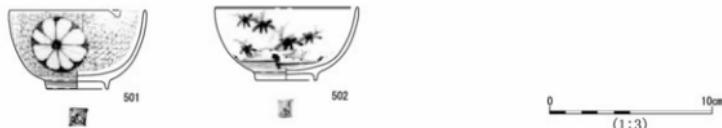


第81図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(34)
[SK134・143・144・146・150]

SX01



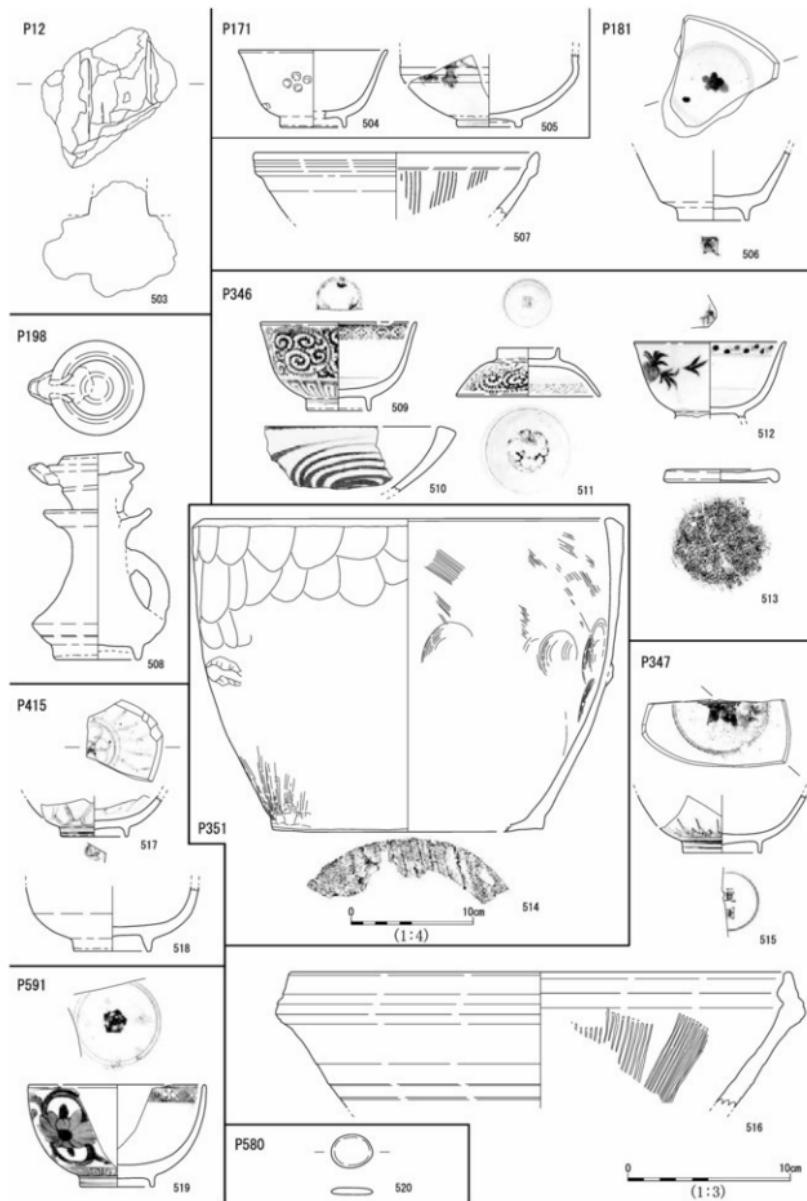
SX02



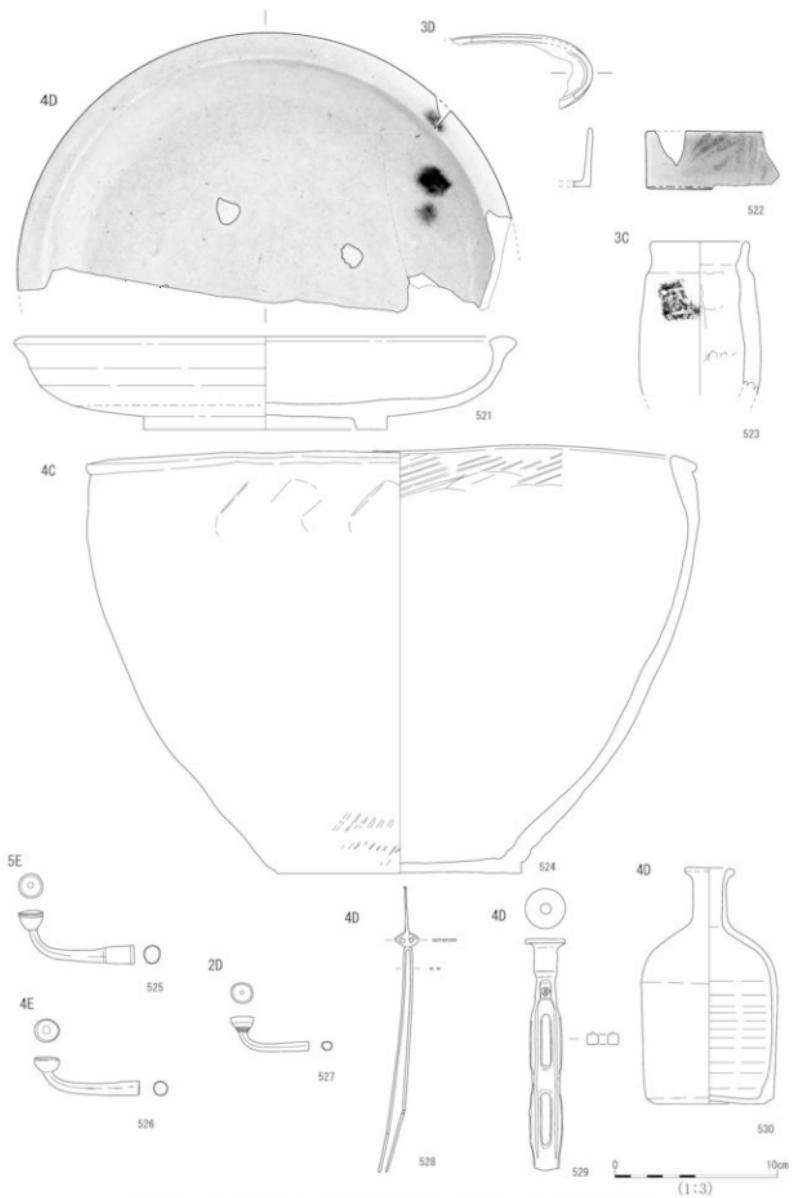
0 10cm
(1:3)

第82図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(35)

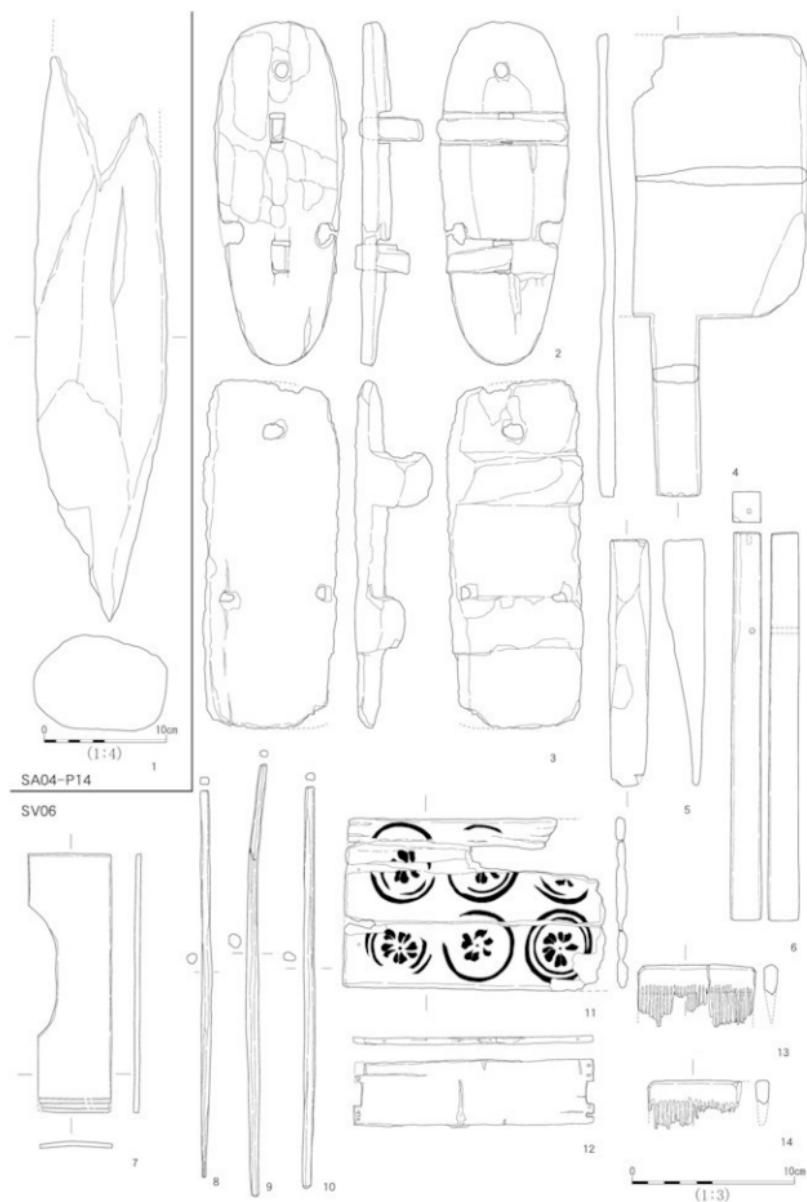
[SX01・02]



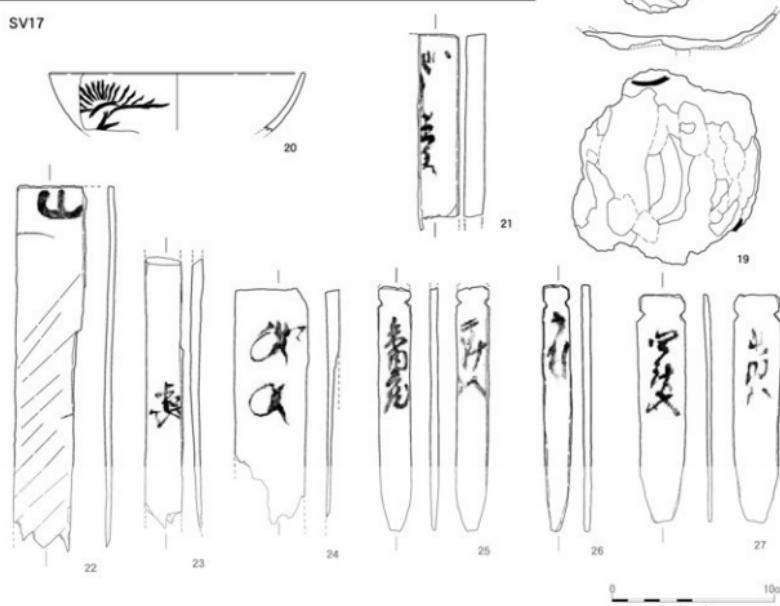
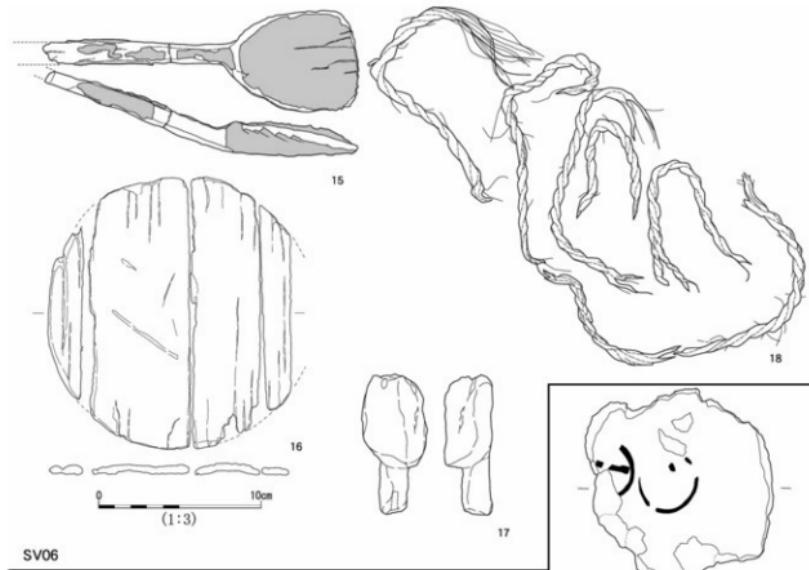
第83図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(36)
[P12・171・181・198・346・347・351・415・580・591]



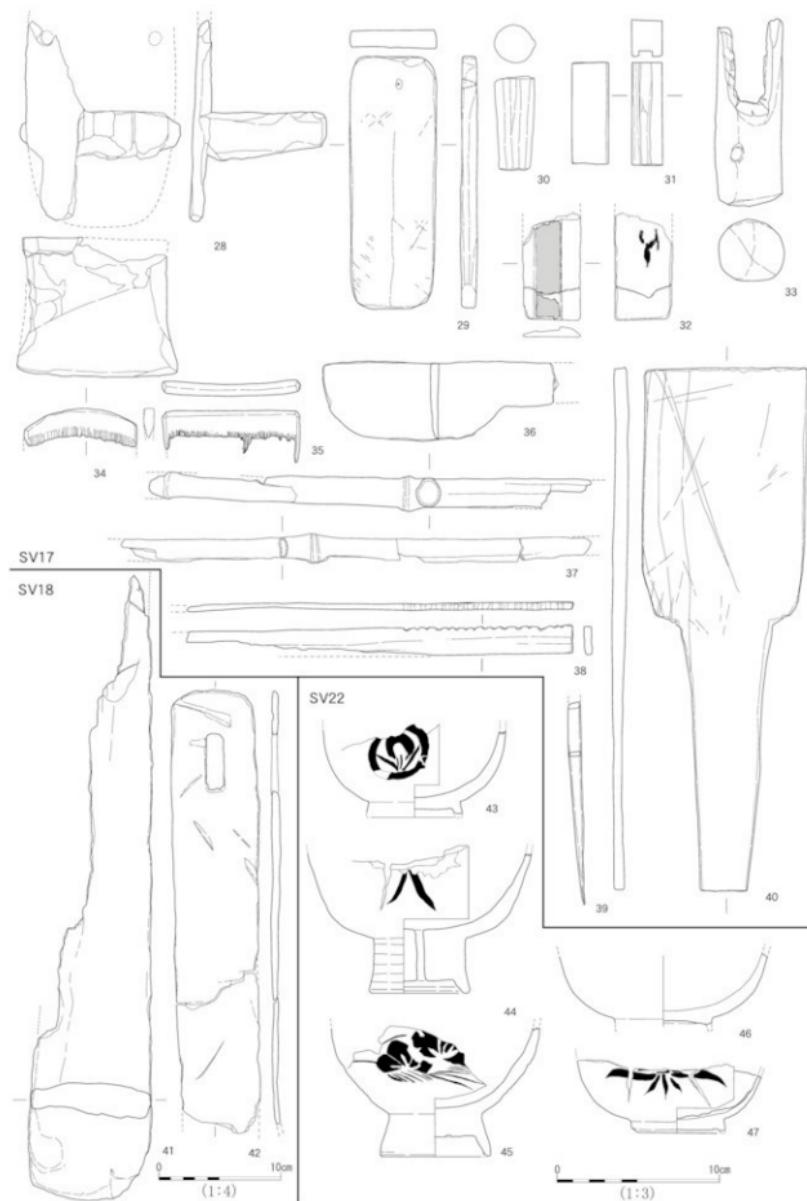
第84図 出土陶磁器・土師質瓦質土器・その他 遺物実測図(37)
[2D・3C・3D・4C・4E・4D・5Eグリッド]



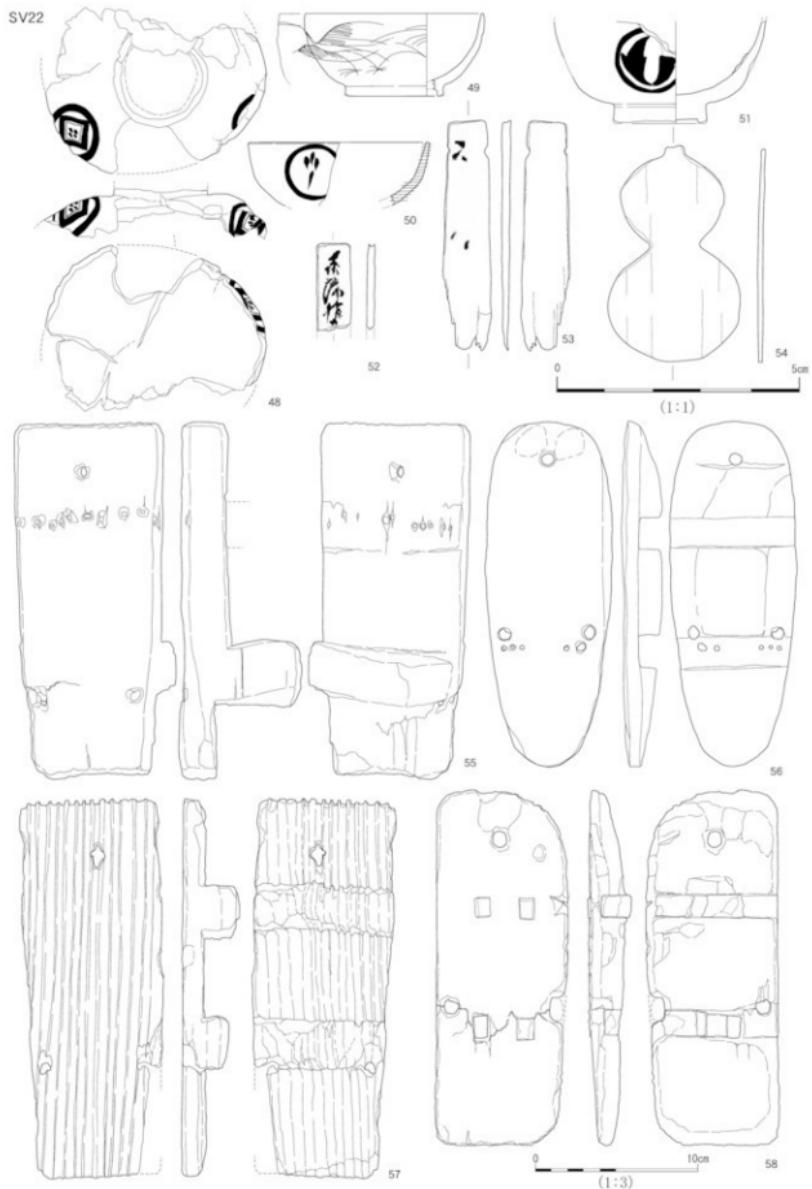
第85図 出土木製品 遺物実測図(1)
[SA04-P14・SV06]



第86図 出土木製品 遺物実測図(2)
[SV06・17]

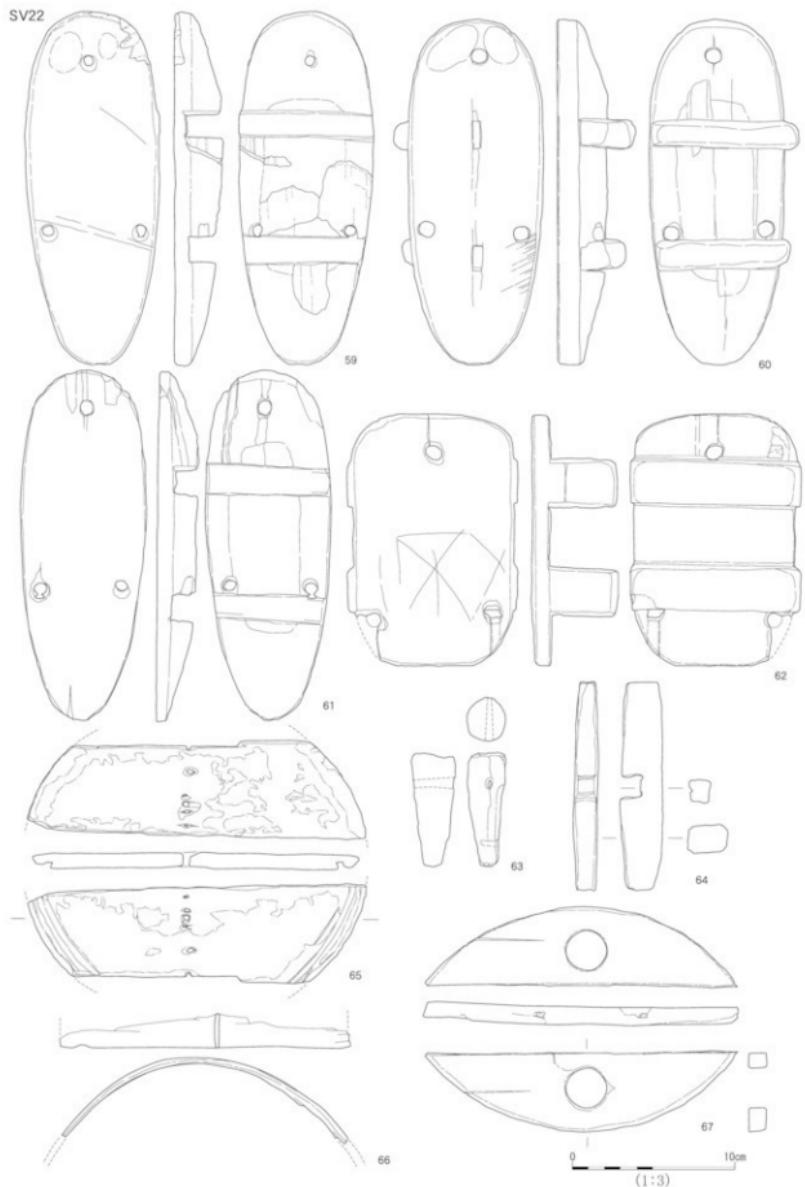


第87図 出土木製品 遺物実測図(3)
[SV17・18・22]



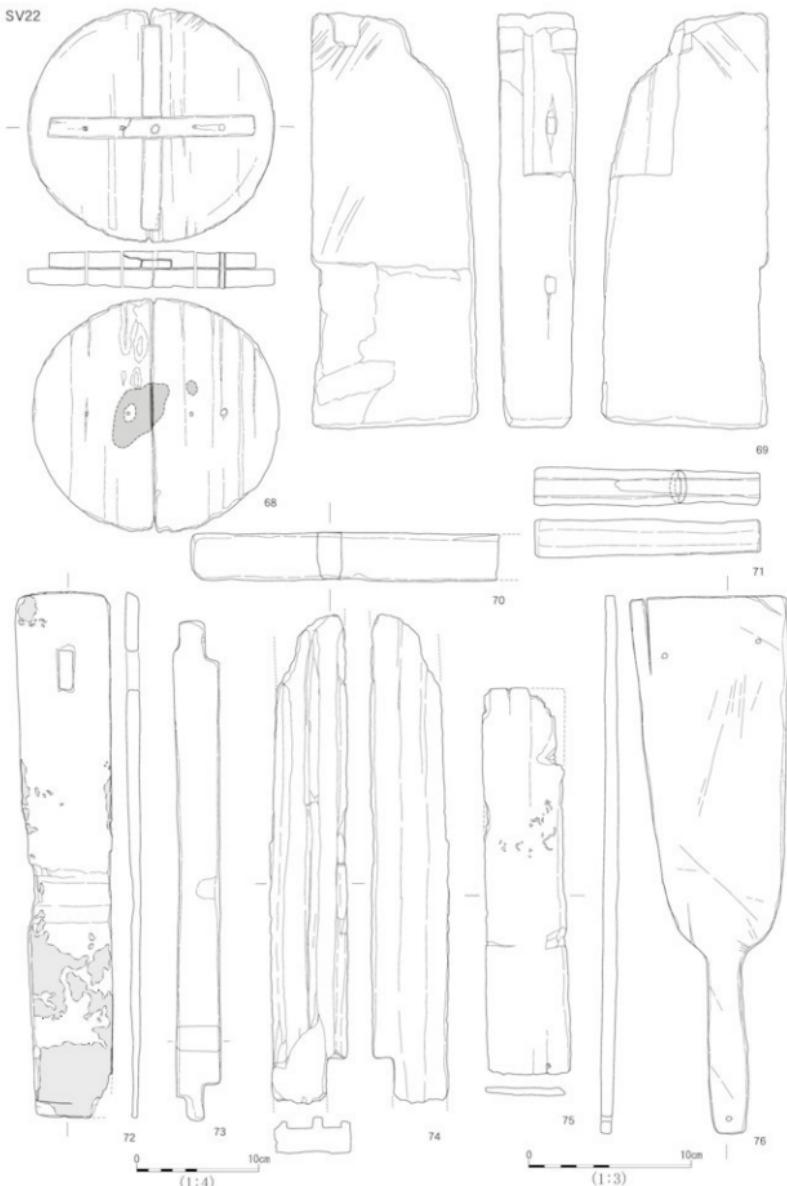
第88図 出土木製品 遺物実測図(4)

[SV22]



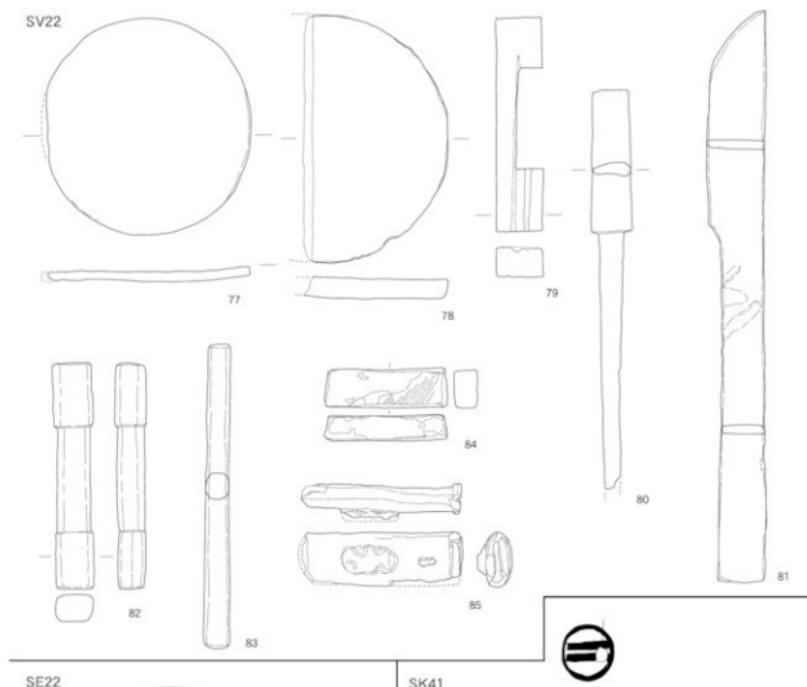
第89図 出土木製品 遺物実測図(5)

[SV22]

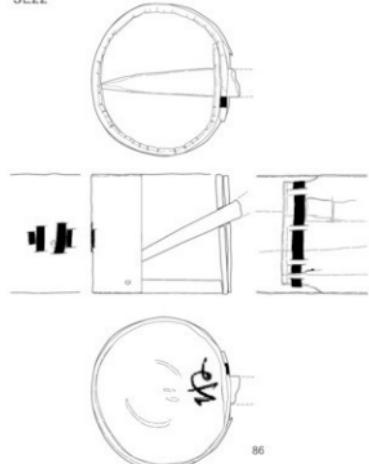


第90図 出土木製品 遺物実測図(6)

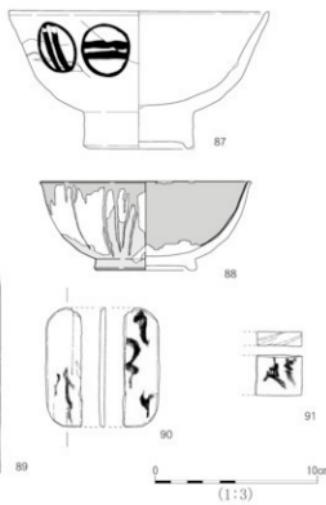
[SV22]



SE22

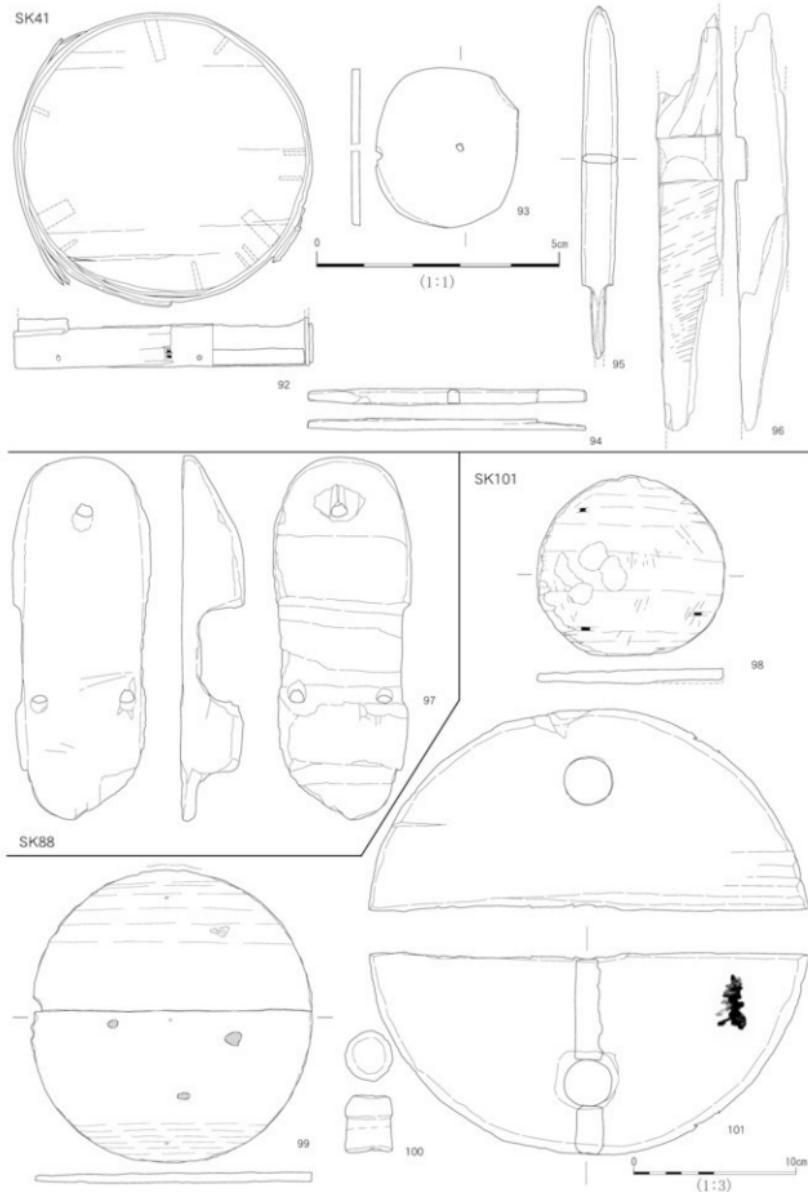


SK41

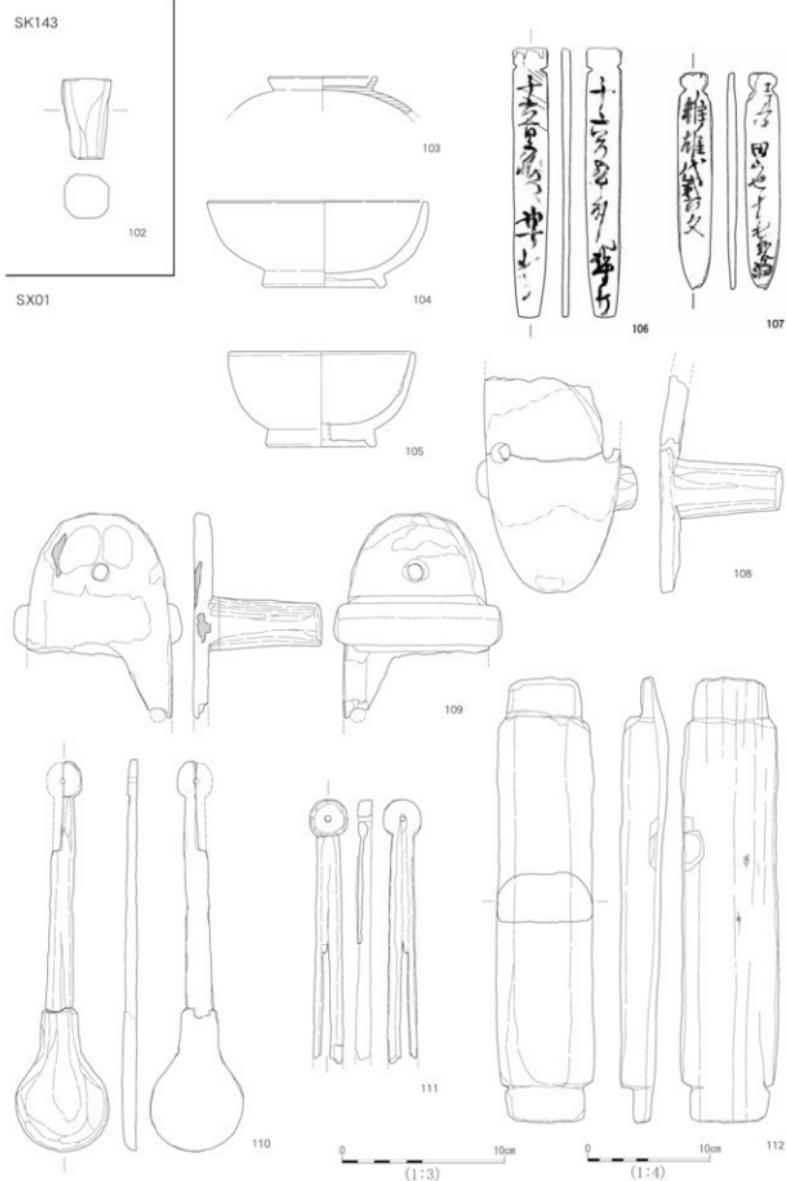


0 10cm
(1:3)

第91図 出土木製品 遺物実測図(7)
[SV22・SE22・SK41]



第92図 出土木製品 遺物実測図(8)
[SK41・88・101]

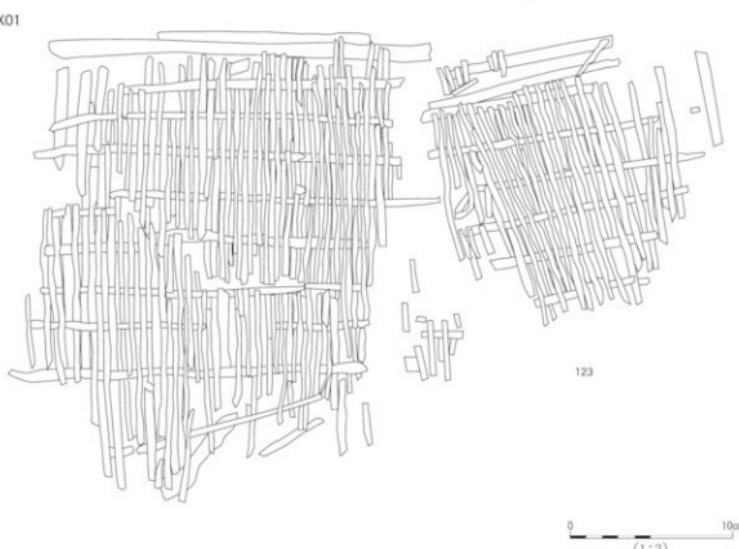
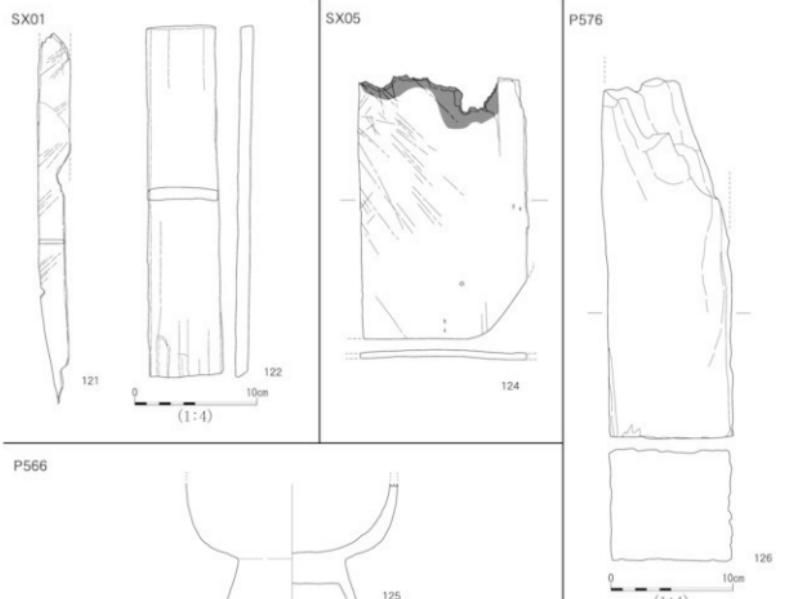


第93図 出土木製品 遺物実測図(9)
[SK143・SX01]

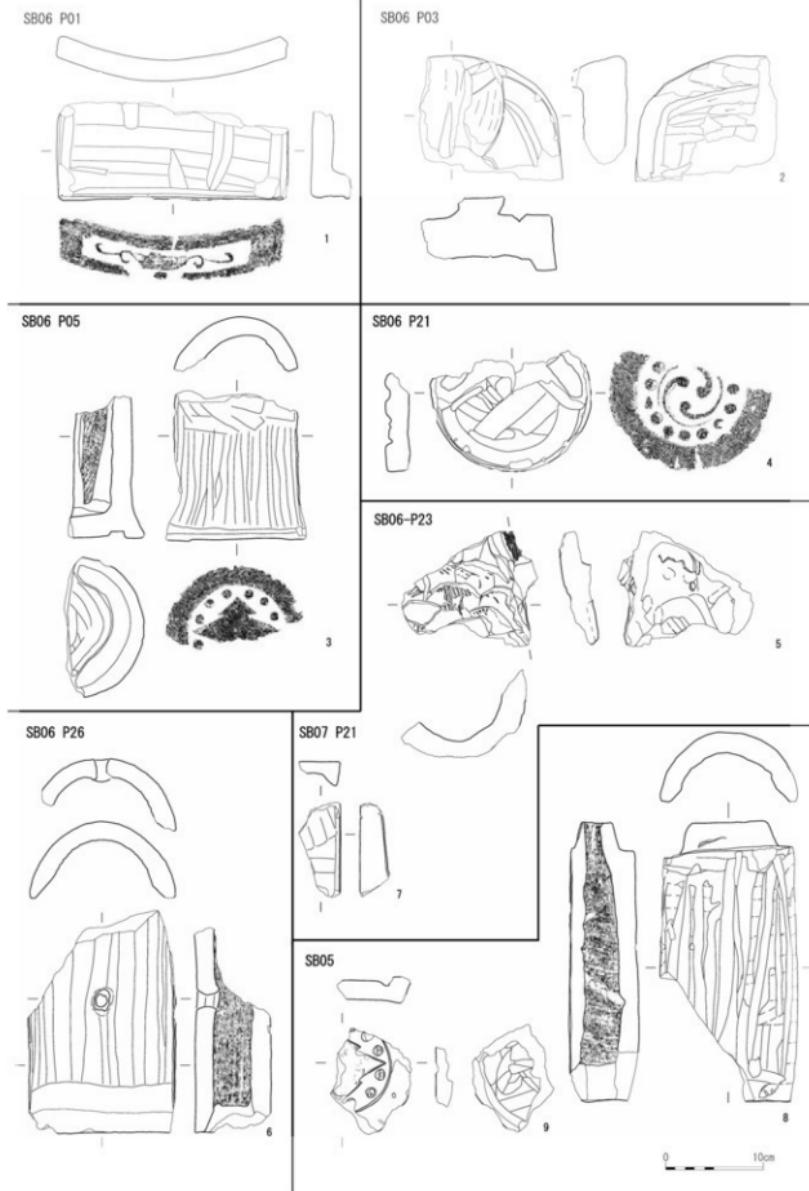


第94図 出土木製品 遺物実測図(10)

[SX01]

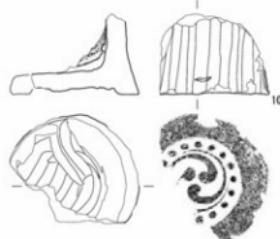


第95図 出土木製品 遺物実測図(11)
[SX01・05・P566・576]

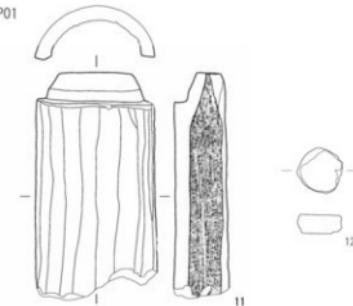


第96図 出土瓦 遺物実測図(1)

SB01



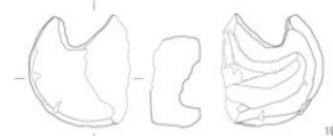
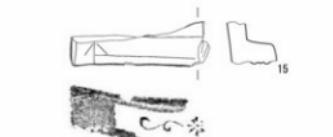
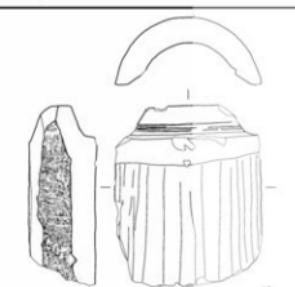
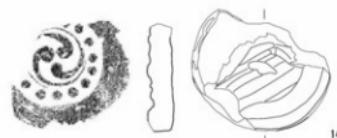
SB01 P01



SB01 P05

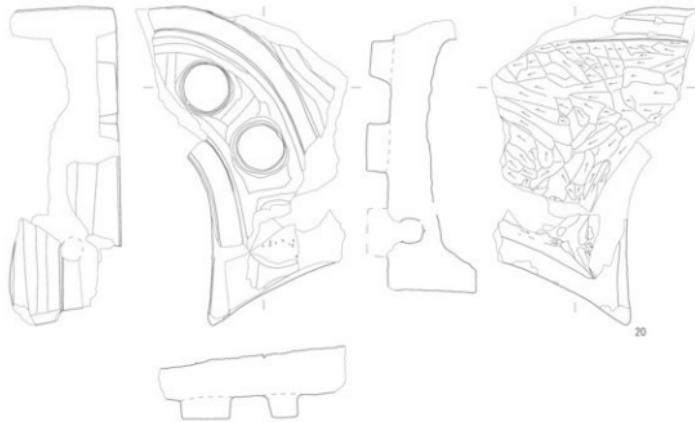


SB01 P06

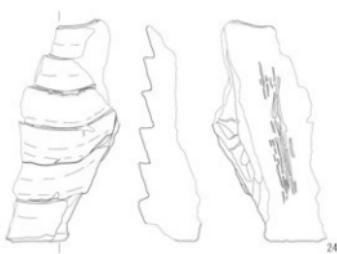
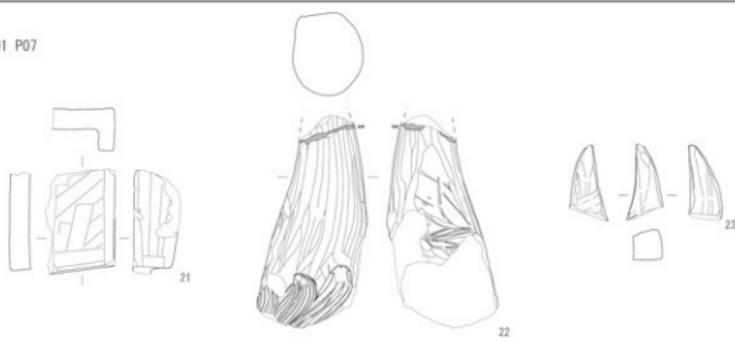


0
10cm
(1:5)

第97図 出土瓦 遺物実測図(2)



SB01 P07

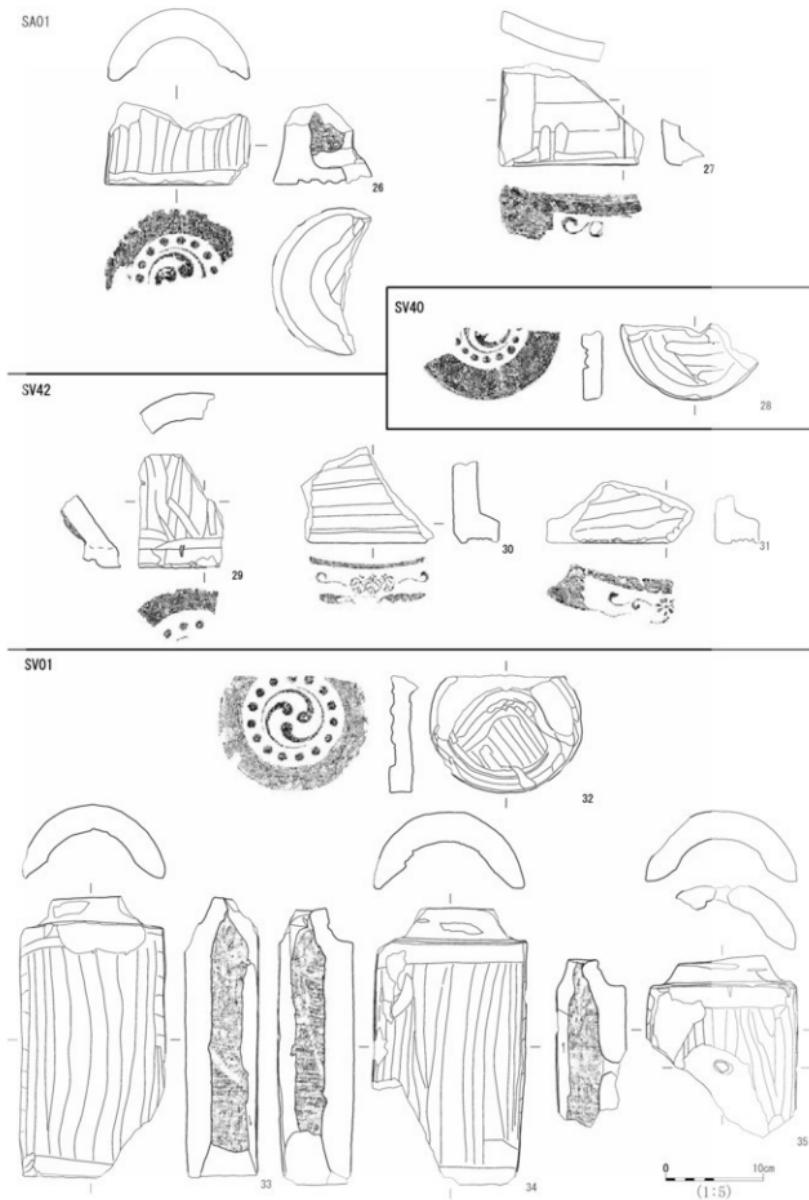


SB01 P09

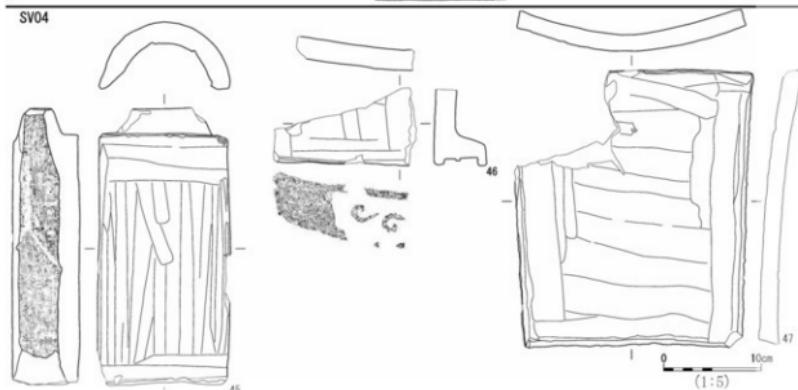
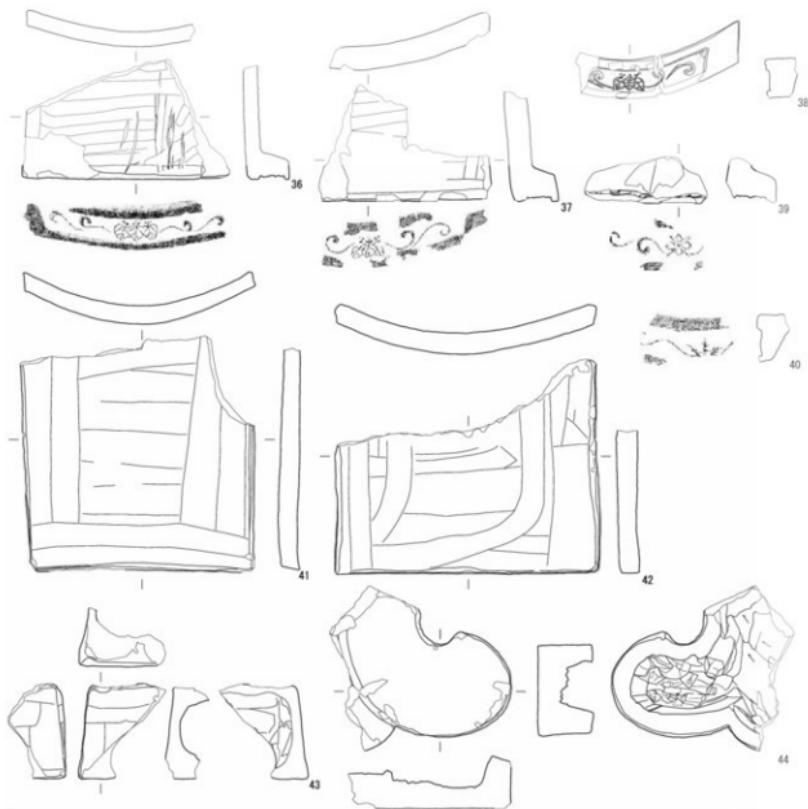


0
10cm
(1:5)

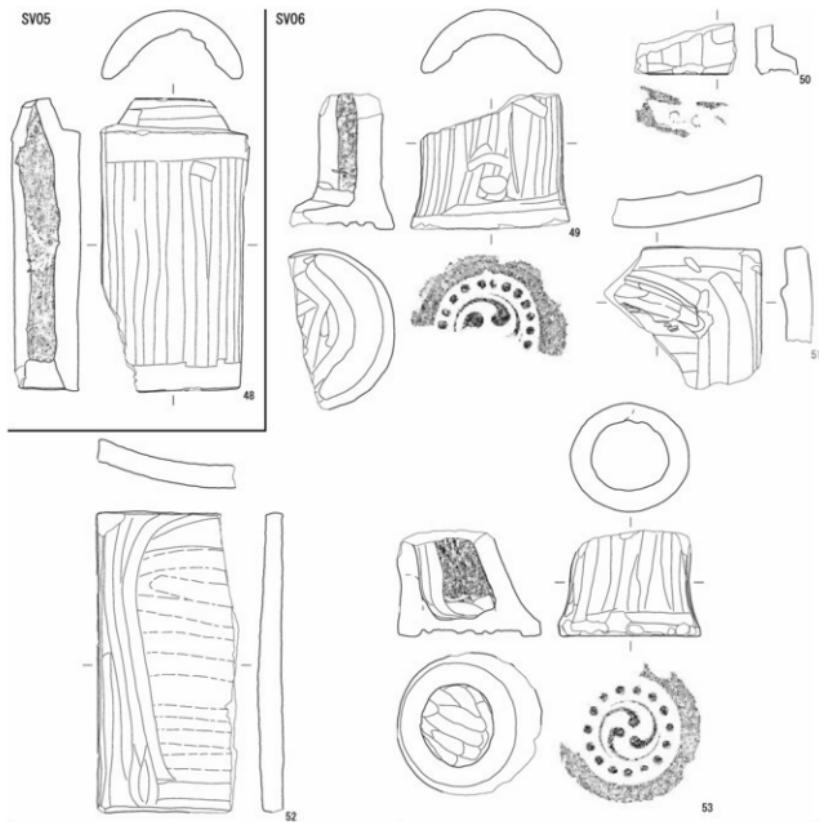
第98図 出土瓦 遺物実測図(3)



第99図 出土瓦 遺物実測図(4)



第100図 出土瓦 遺物実測図(5)

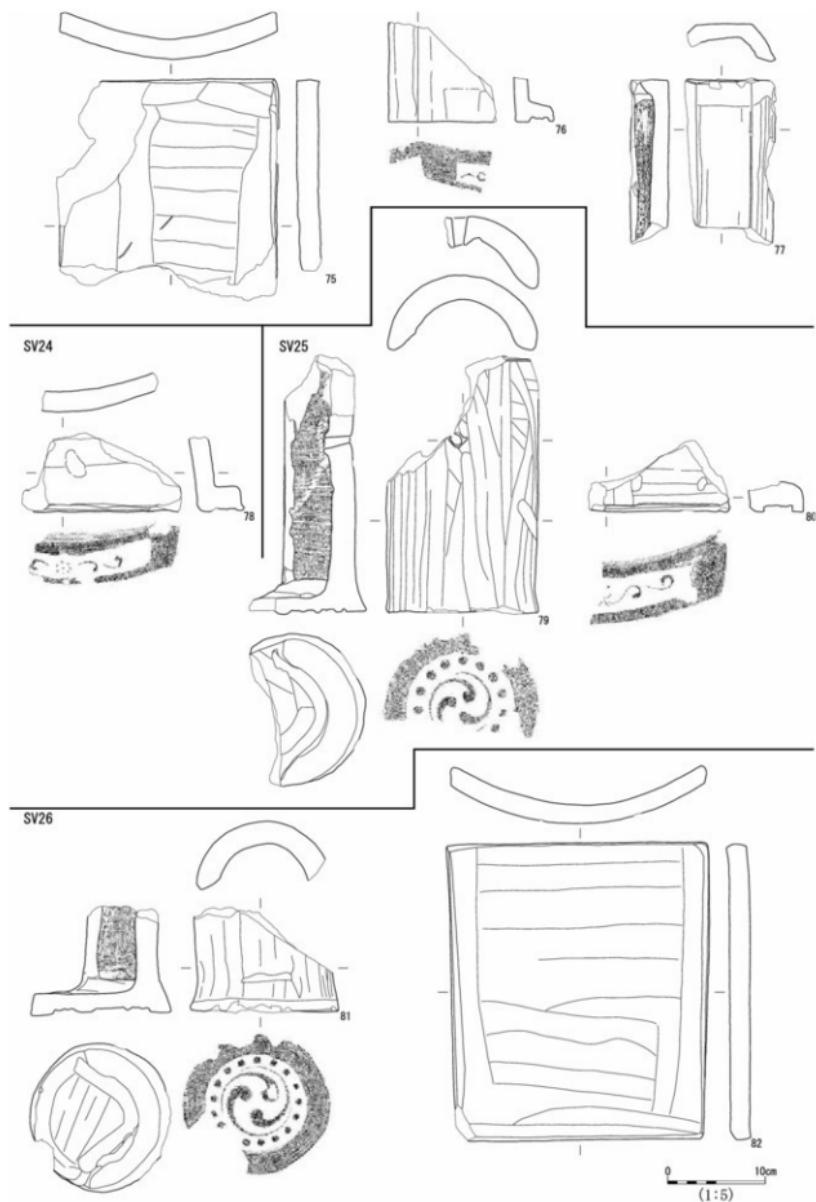




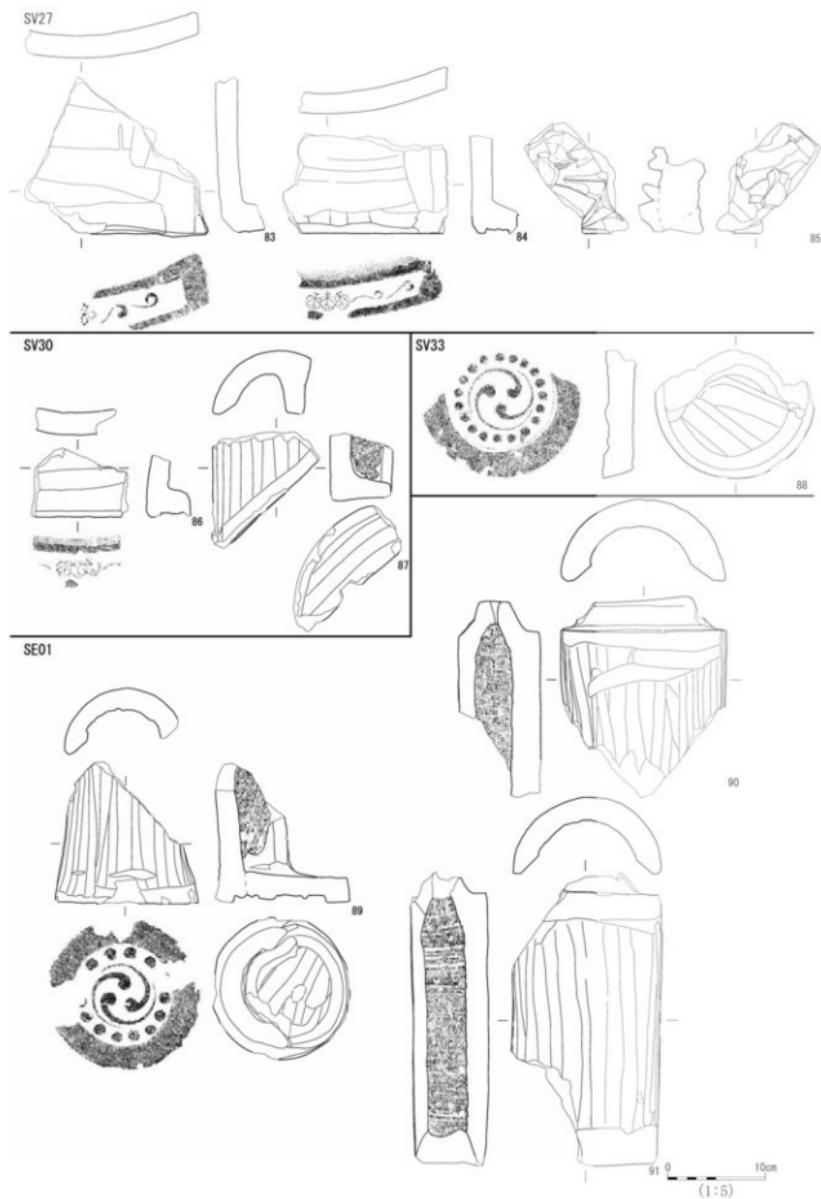
第102図 出土瓦 遺物実測図(7)



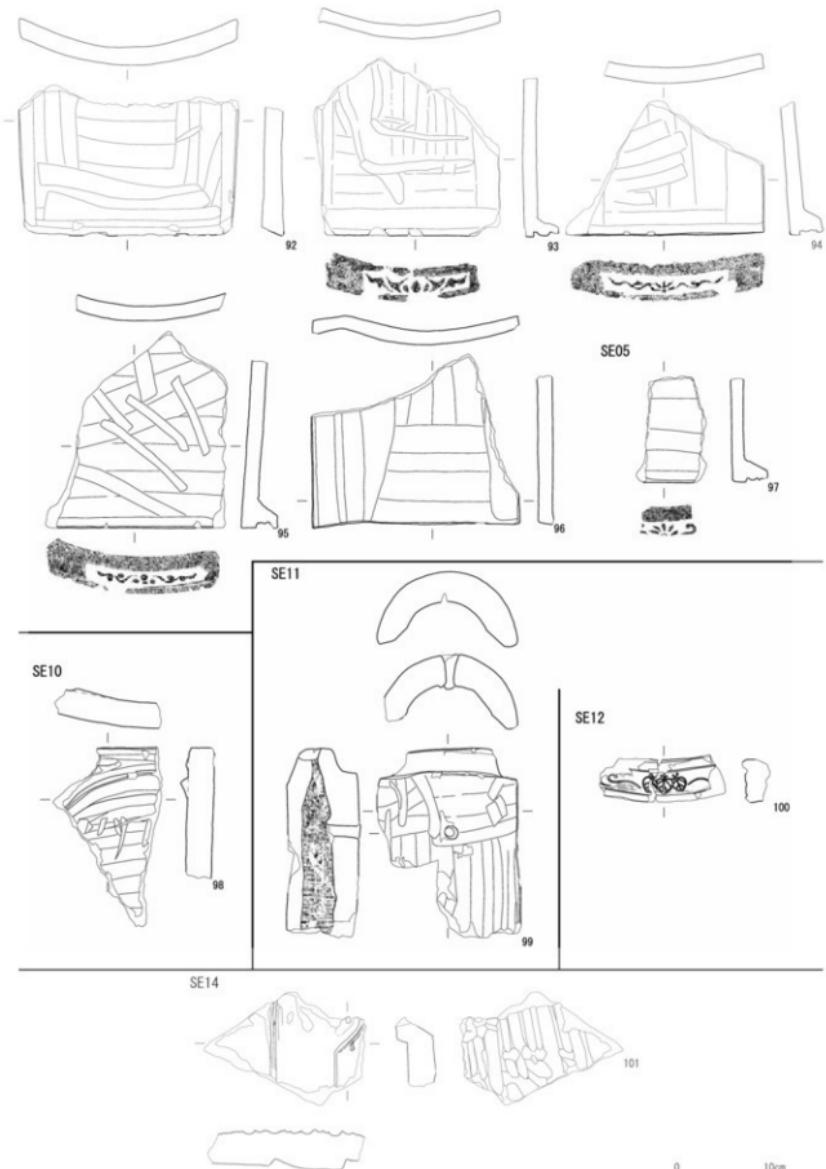
第103図 出土瓦 遺物実測図(8)



第104図 出土瓦 遺物実測図(9)

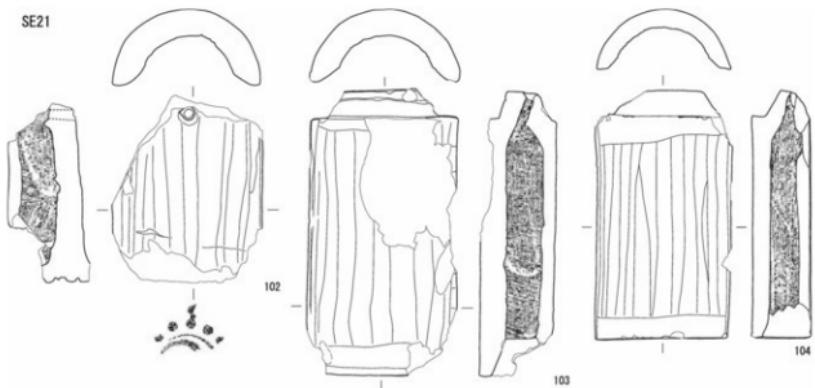


第105図 出土瓦 遺物実測図(10)

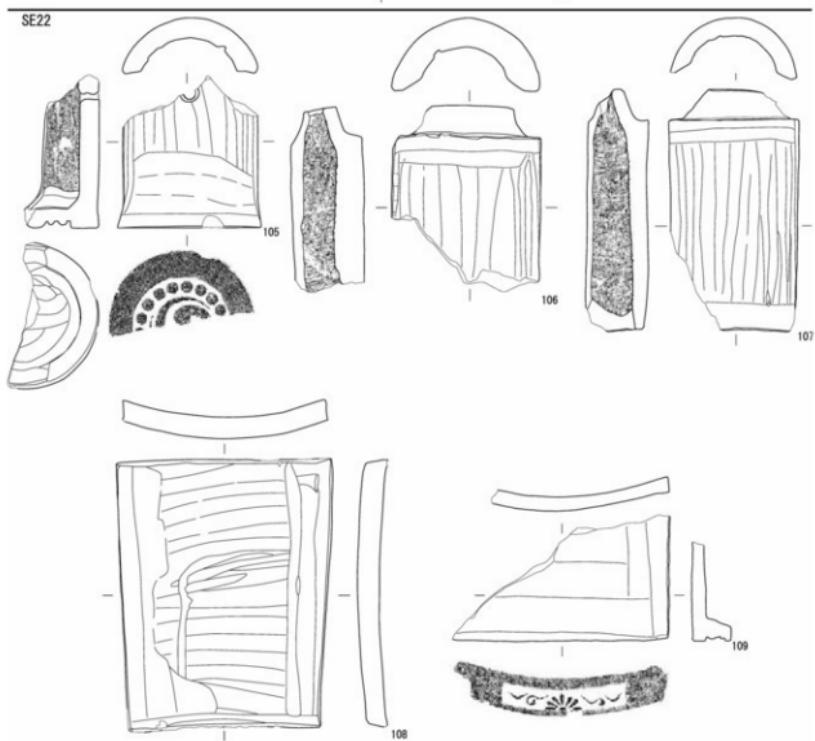


第106図 出土瓦 遺物実測図(11)

SE21

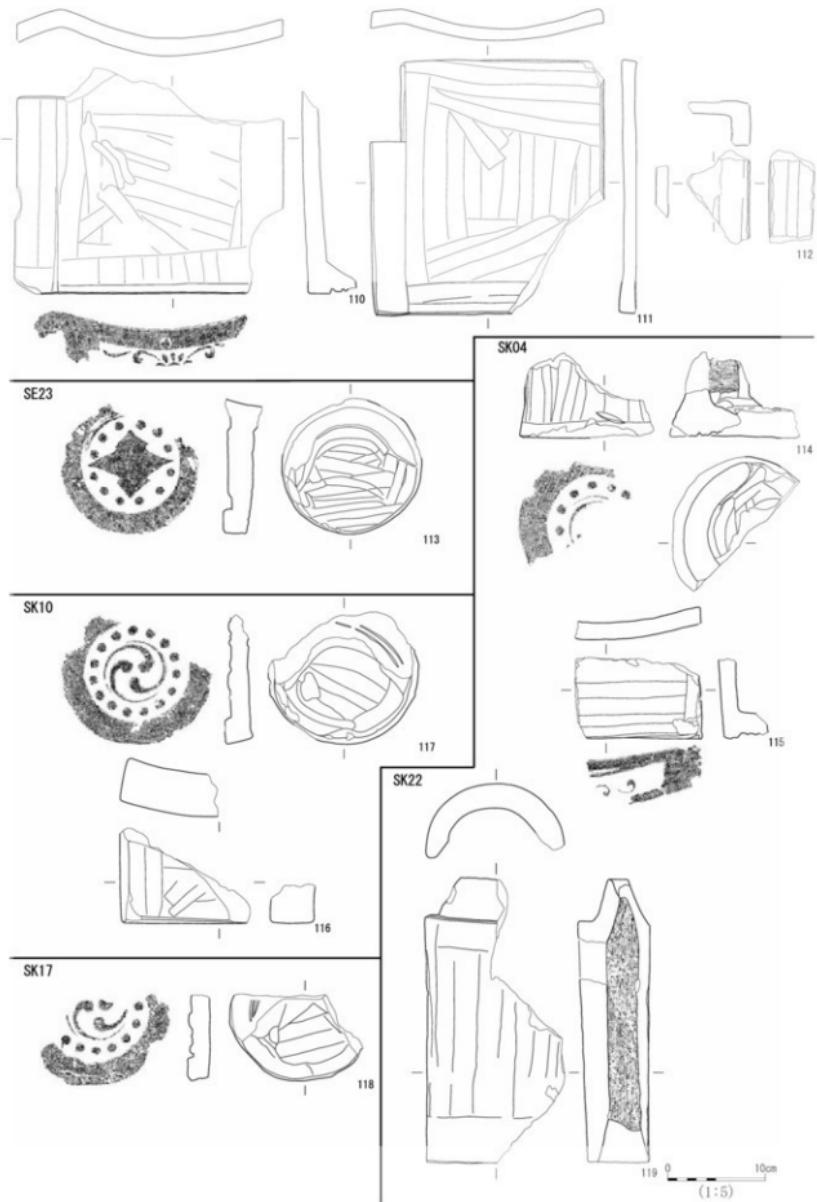


SE22



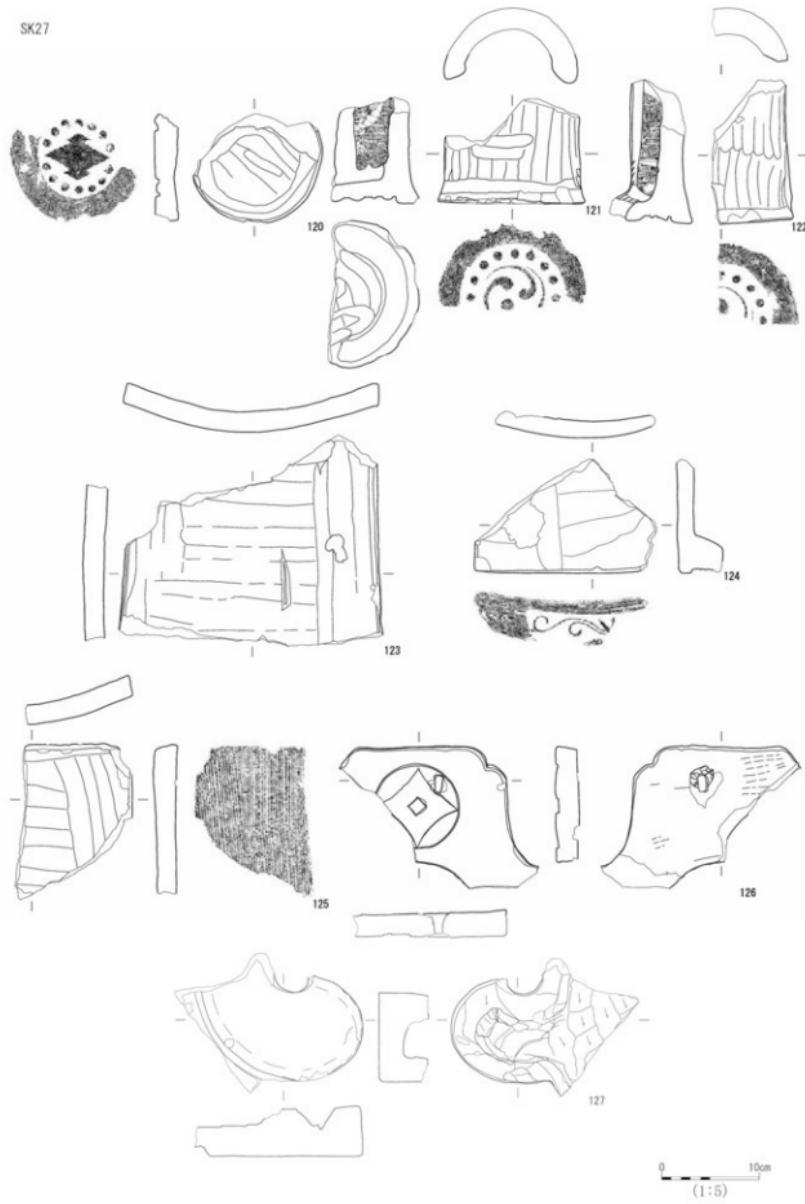
0
(1:5) 10cm

第107図 出土瓦 遺物実測図(12)

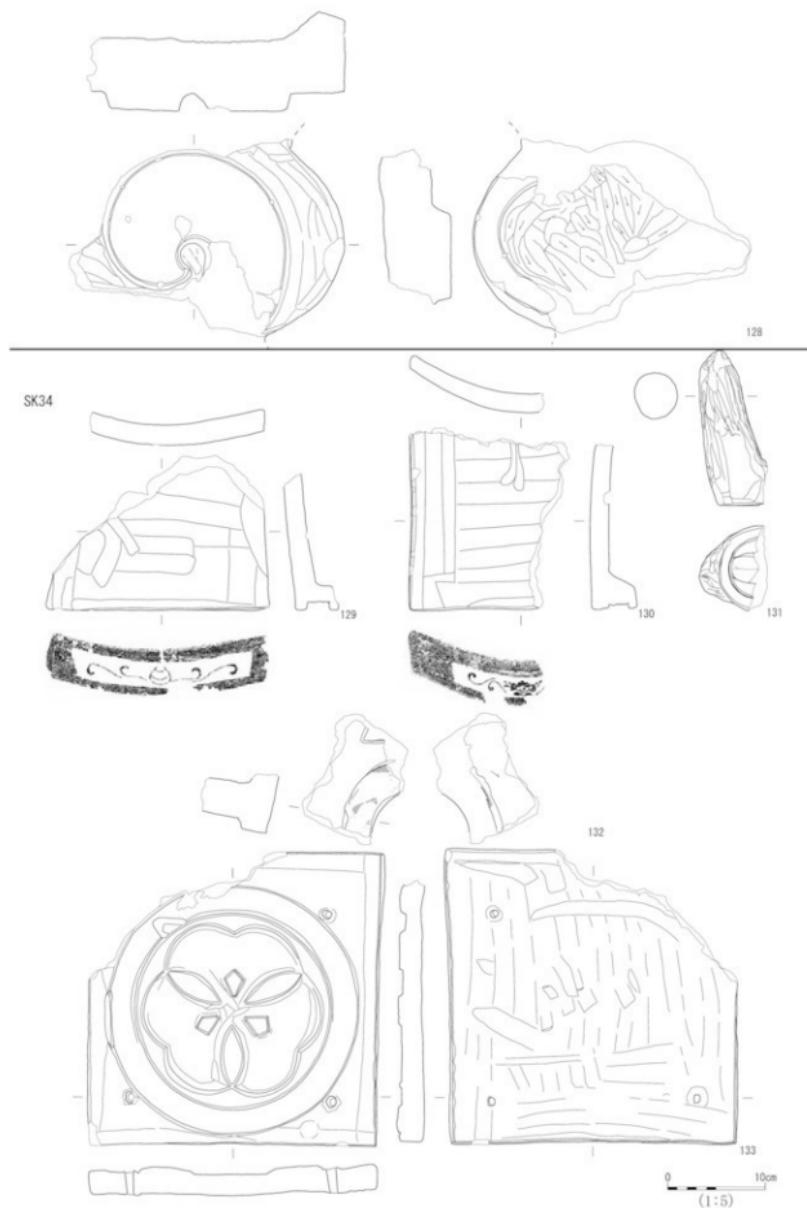


第108図 出土瓦 遺物実測図(13)

SK27



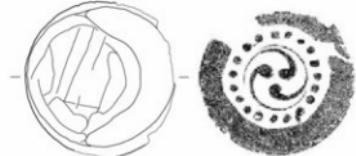
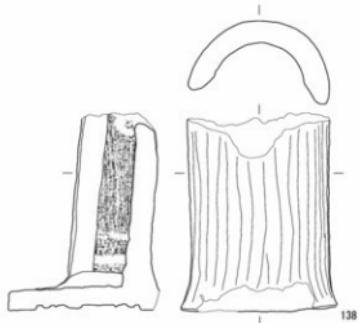
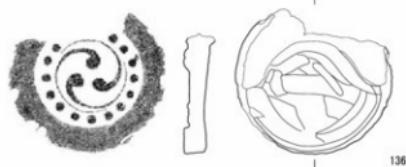
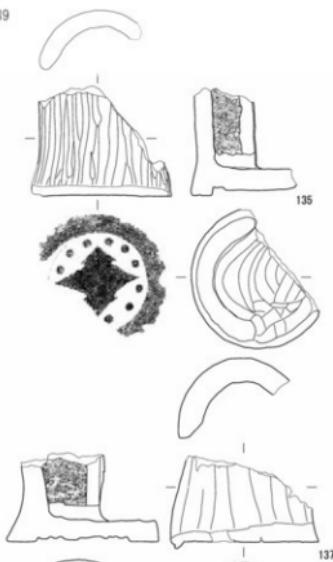
第109図 出土瓦 遺物実測図(14)



第110図 出土瓦 遺物実測図(15)

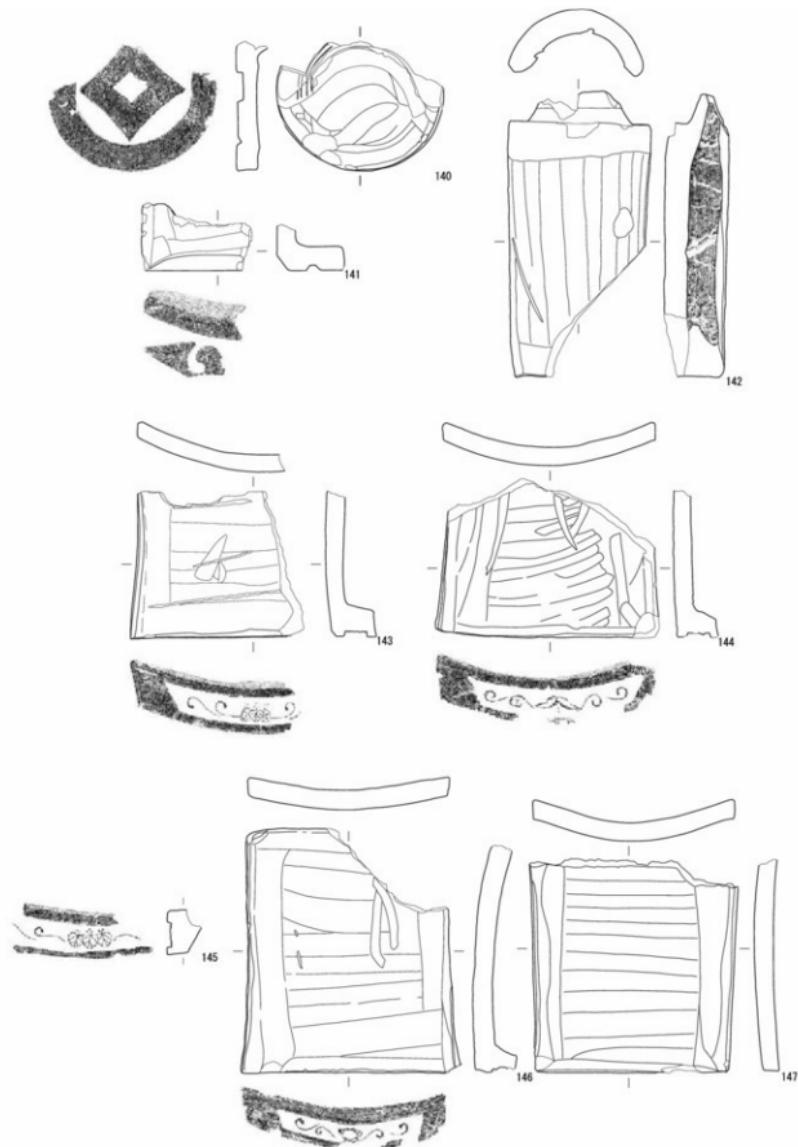


SK39

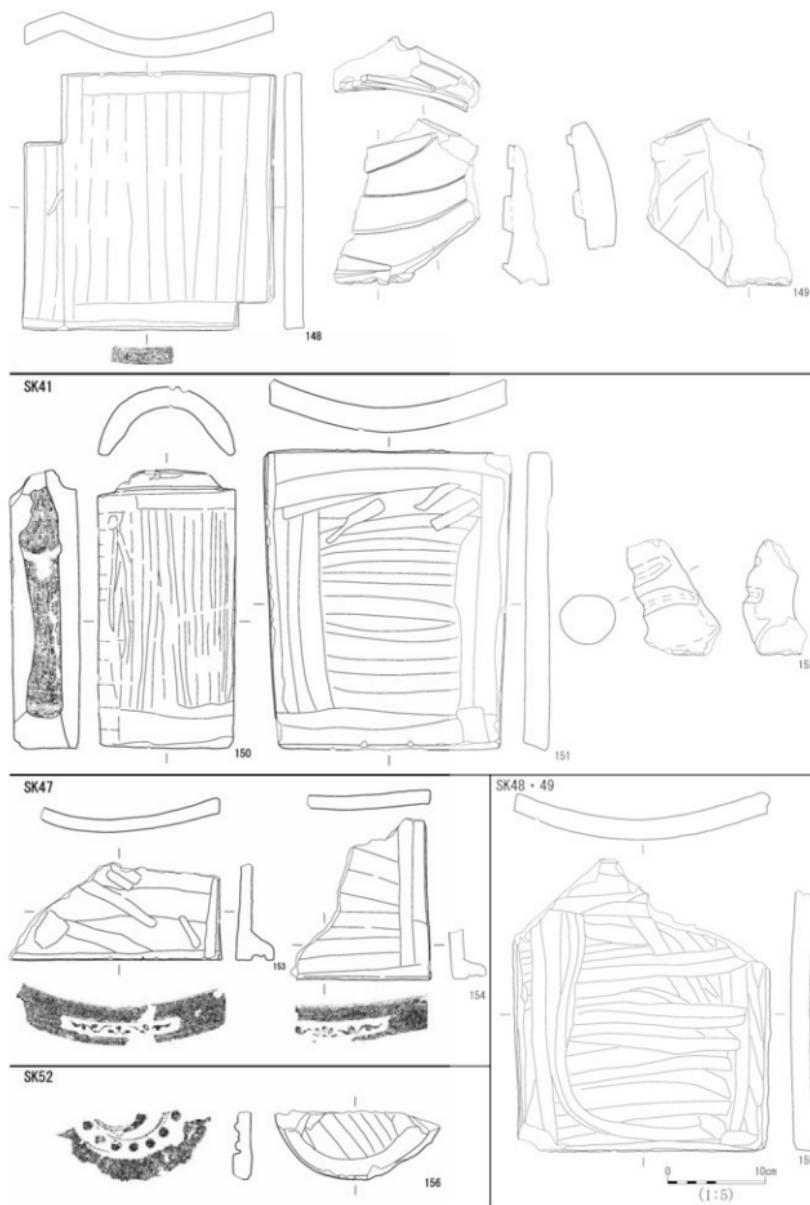


0 10cm
(1:5)

第111図 出土瓦 遺物実測図(16)



第112図 出土瓦 遺物実測図(17)



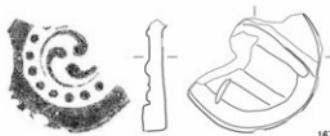
第113図 出土瓦 遺物実測図(18)

SK57

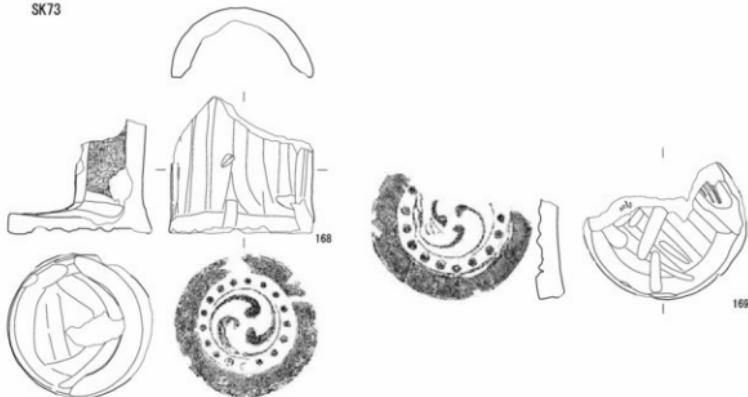


第114図 出土瓦 遺物実測図(19)

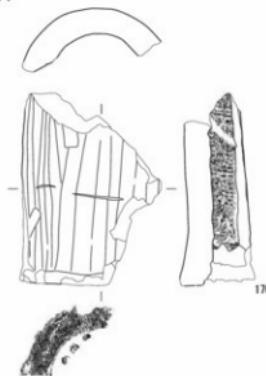
SK64



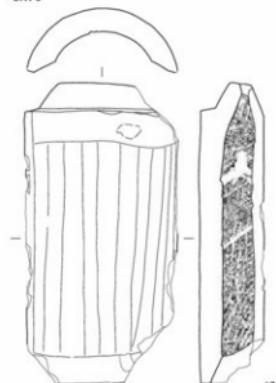
SK73



SK74



SK76



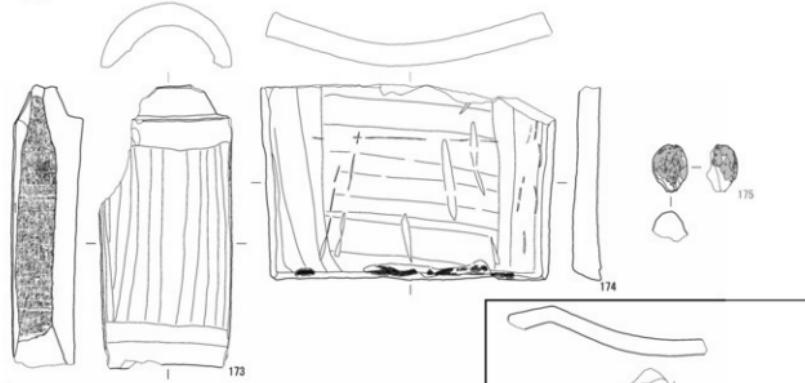
SK80



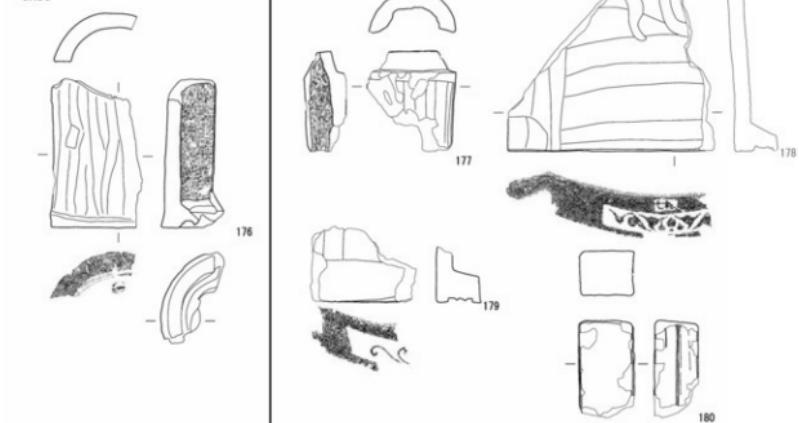
0 10cm
(1:5)

第115図 出土瓦 遺物実測図(20)

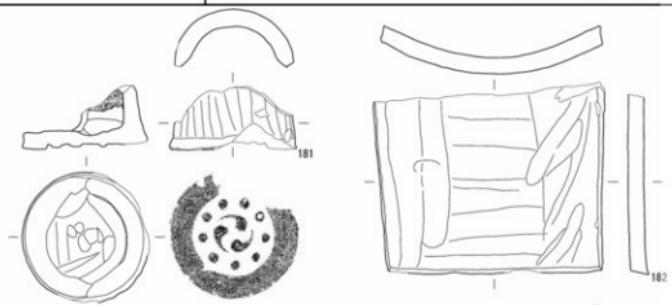
SK84



SK88



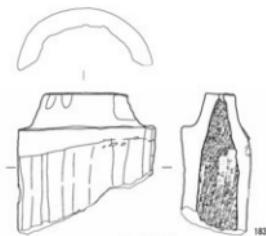
SK91



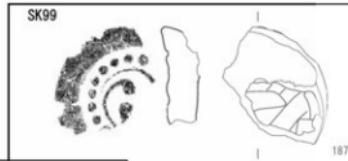
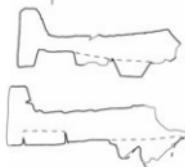
0 10cm
(1:5)

第116図 出土瓦 遺物実測図(21)

SK92



184



187

SK93

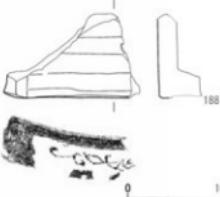


185

SK95



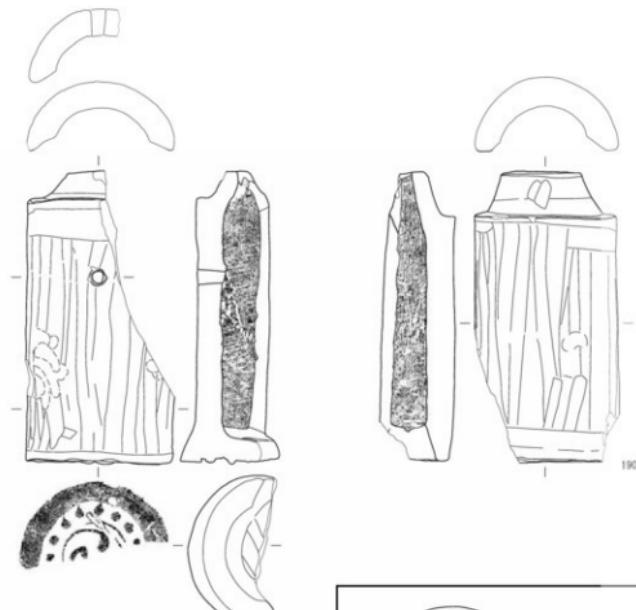
186



10cm
(1:5)

第117図 出土瓦 遺物実測図(22)

SK100



189

SK101



191

SK104



第118図 出土瓦 遺物実測図(23)

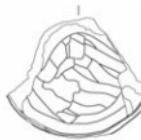
-195-

0
(1:5) 10cm

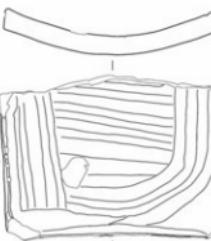
SK106



197



198

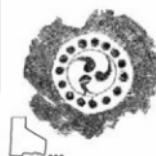


201

SK109



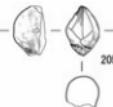
SK110



203



204



SK112



206



208



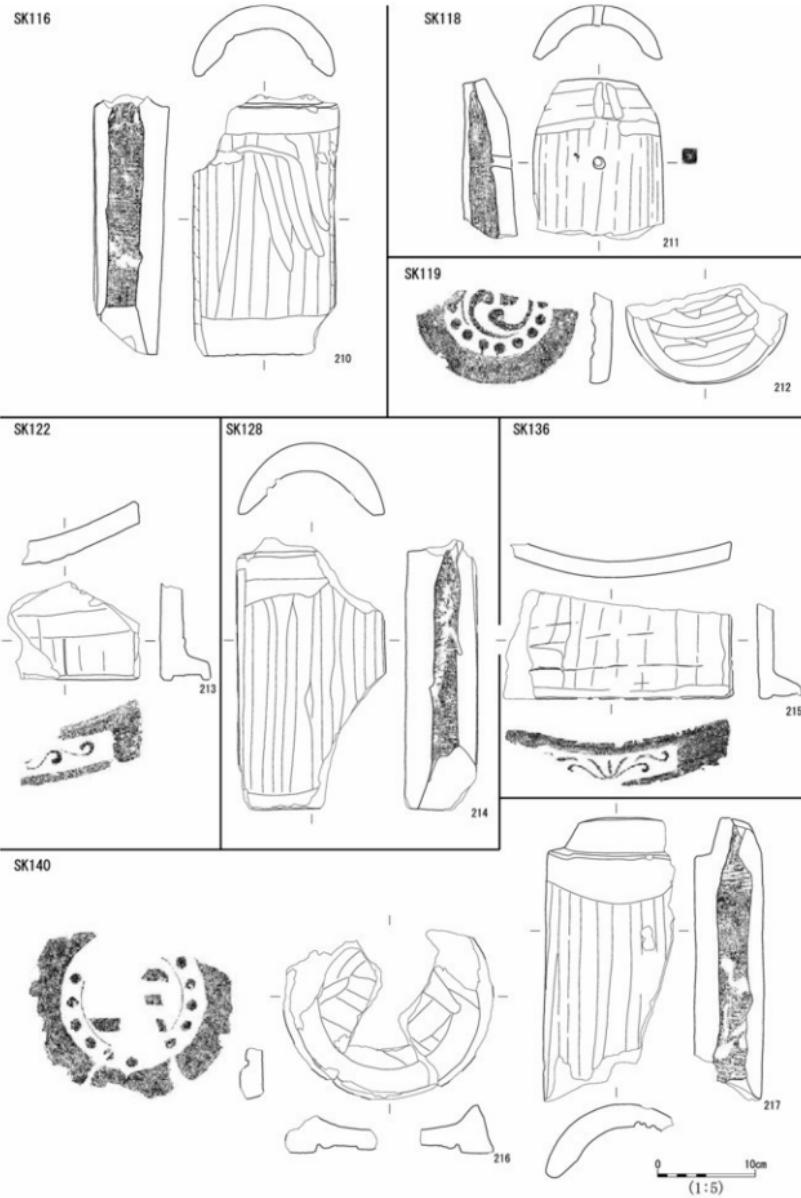
209



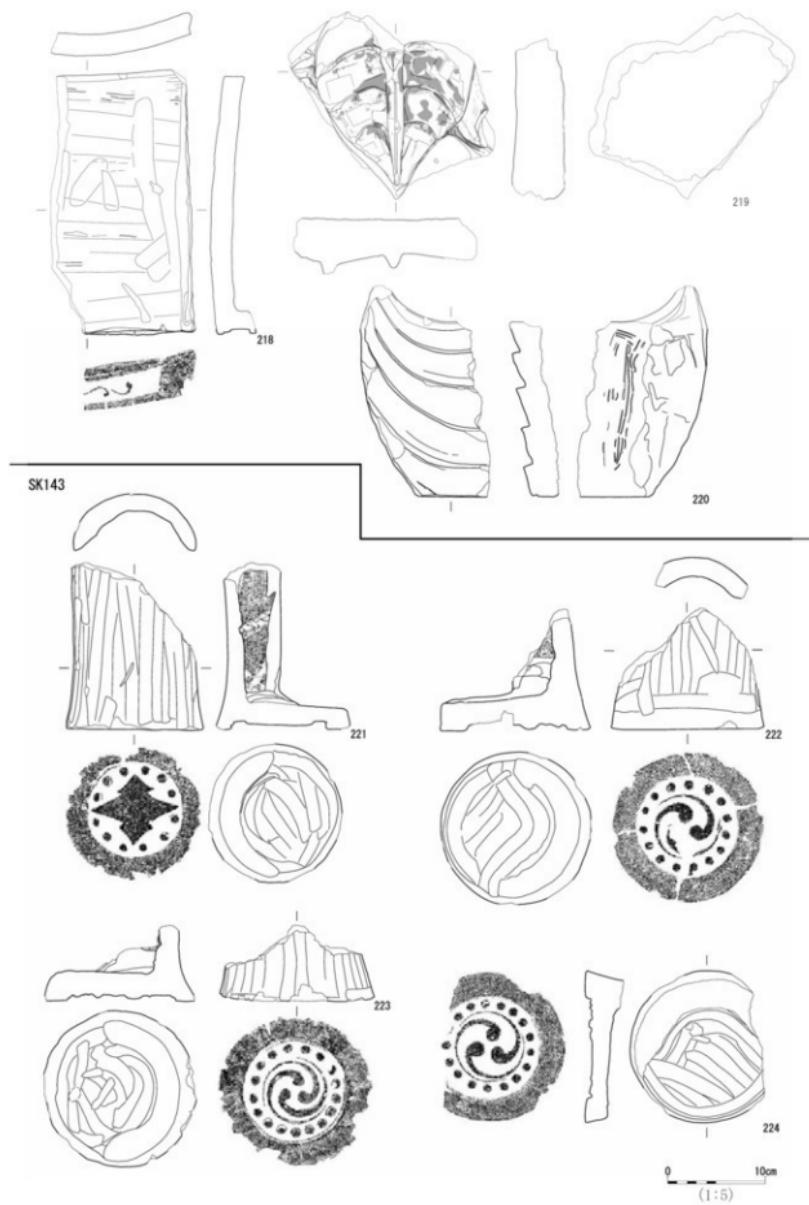
209

(1:5)

第119図 出土瓦 遺物実測図(24)



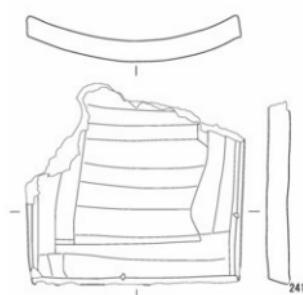
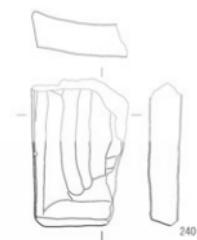
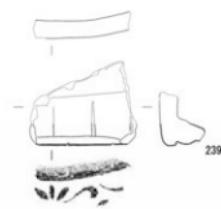
第120図 出土瓦 遺物実測図(25)



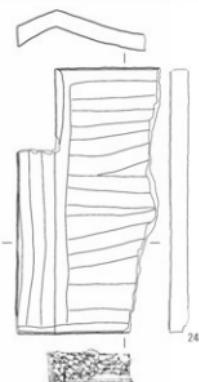
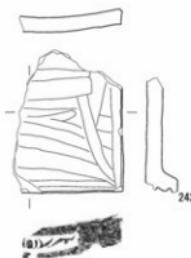
第121図 出土瓦 遺物実測図(26)



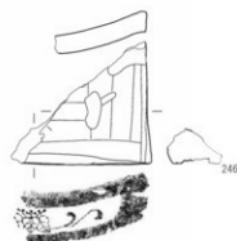
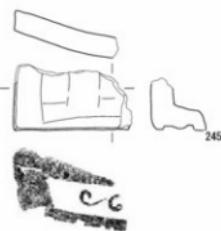
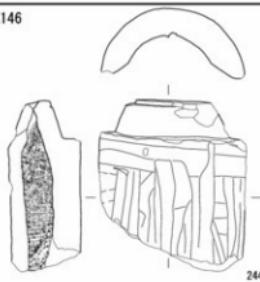
第122図 出土瓦 遺物実測図(27)



SK144



SK146

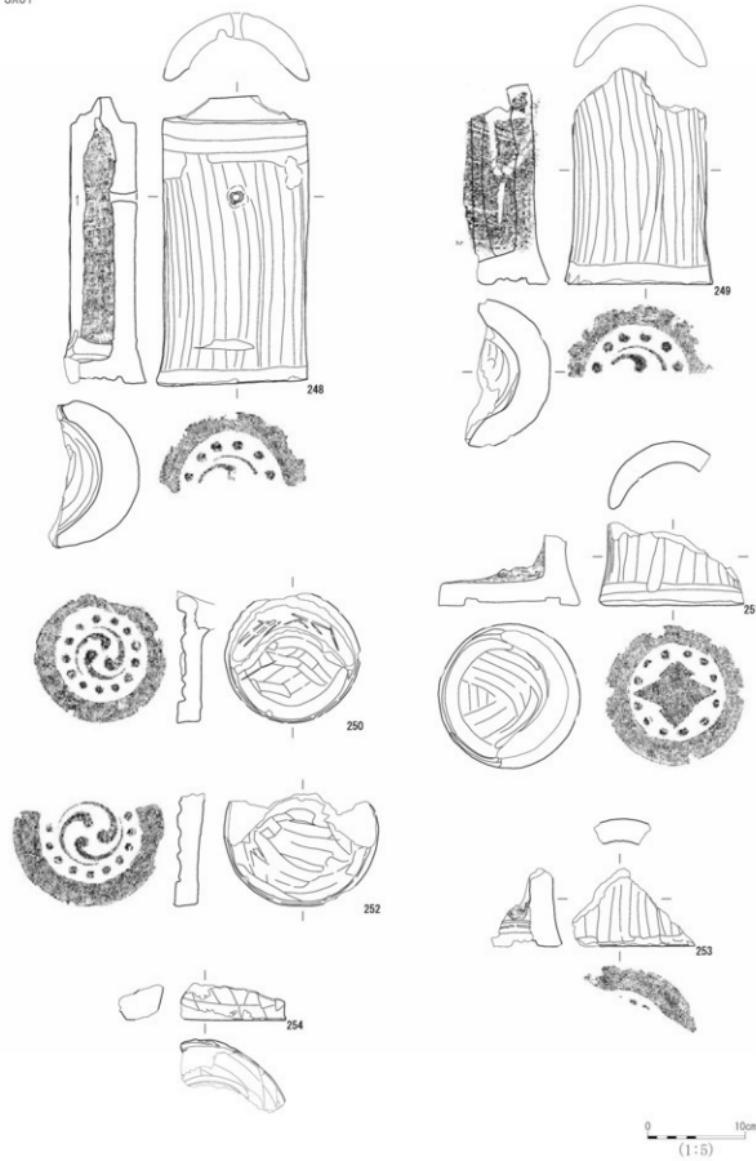


SK150

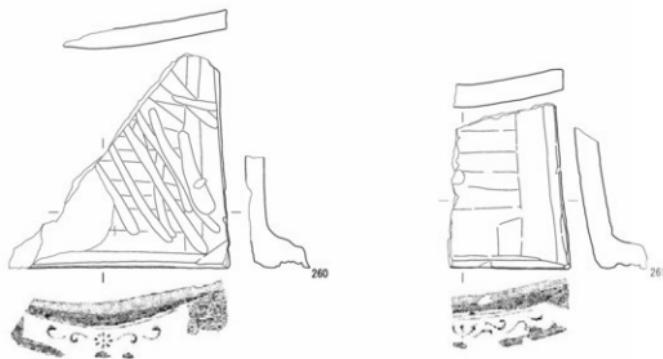
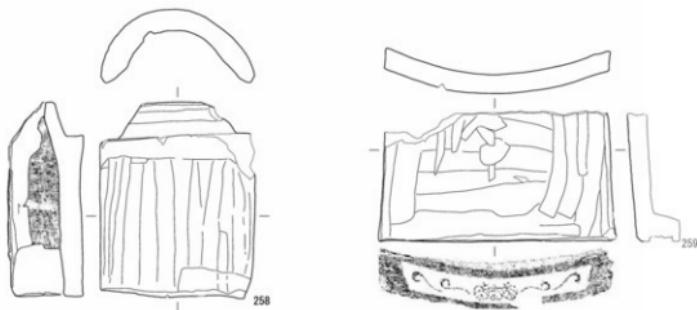


0 10cm
(1:5)

第123図 出土瓦 遺物実測図(28)



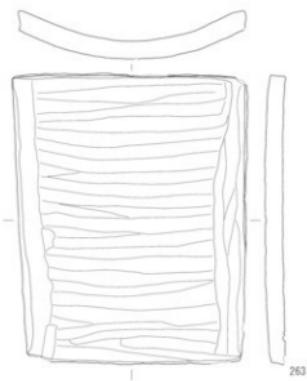
第124図 出土瓦 遺物実測図(29)



第125図 出土瓦 遺物実測図(30)



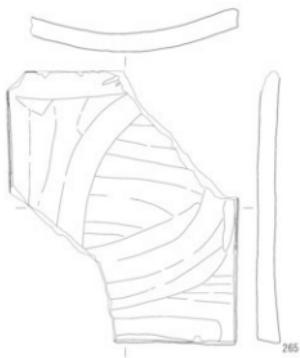
262



263



264



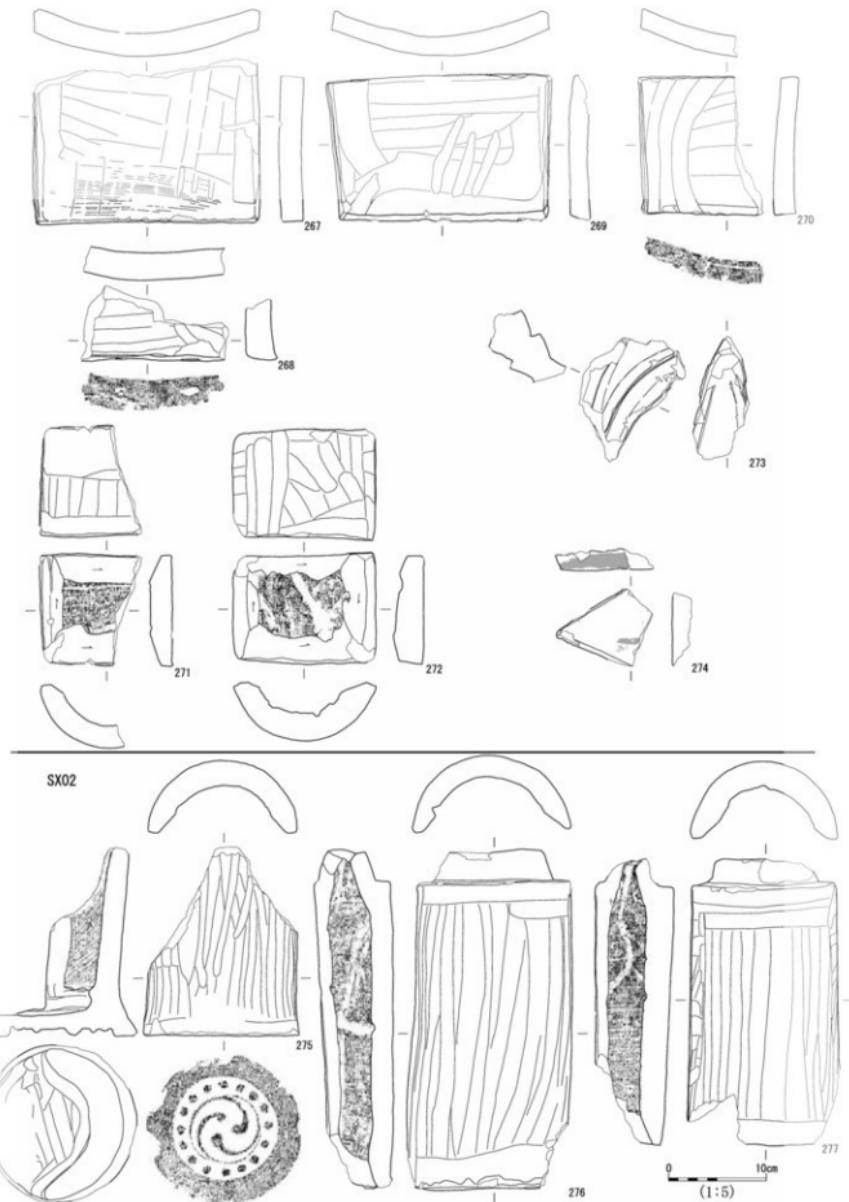
265



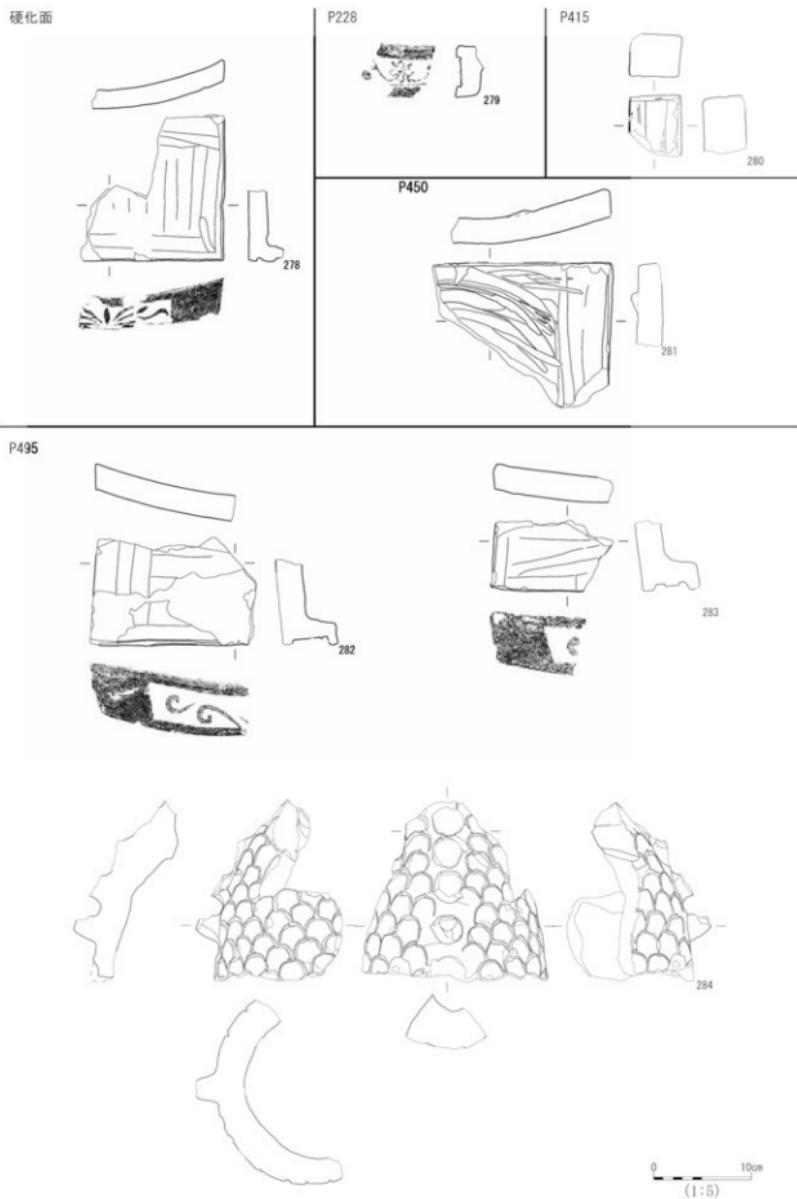
266

0 10cm
(1:5)

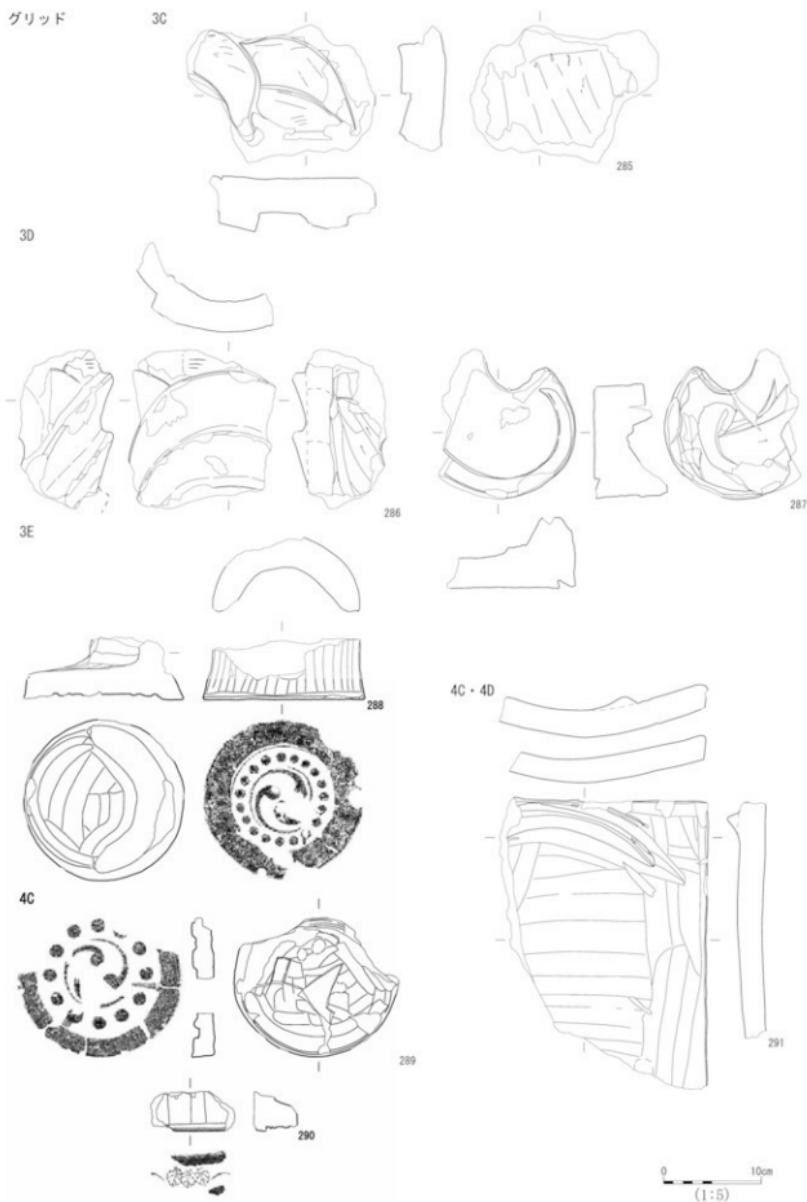
第126図 出土瓦 遺物実測図(31)



第127図 出土瓦 遺物実測図(32)

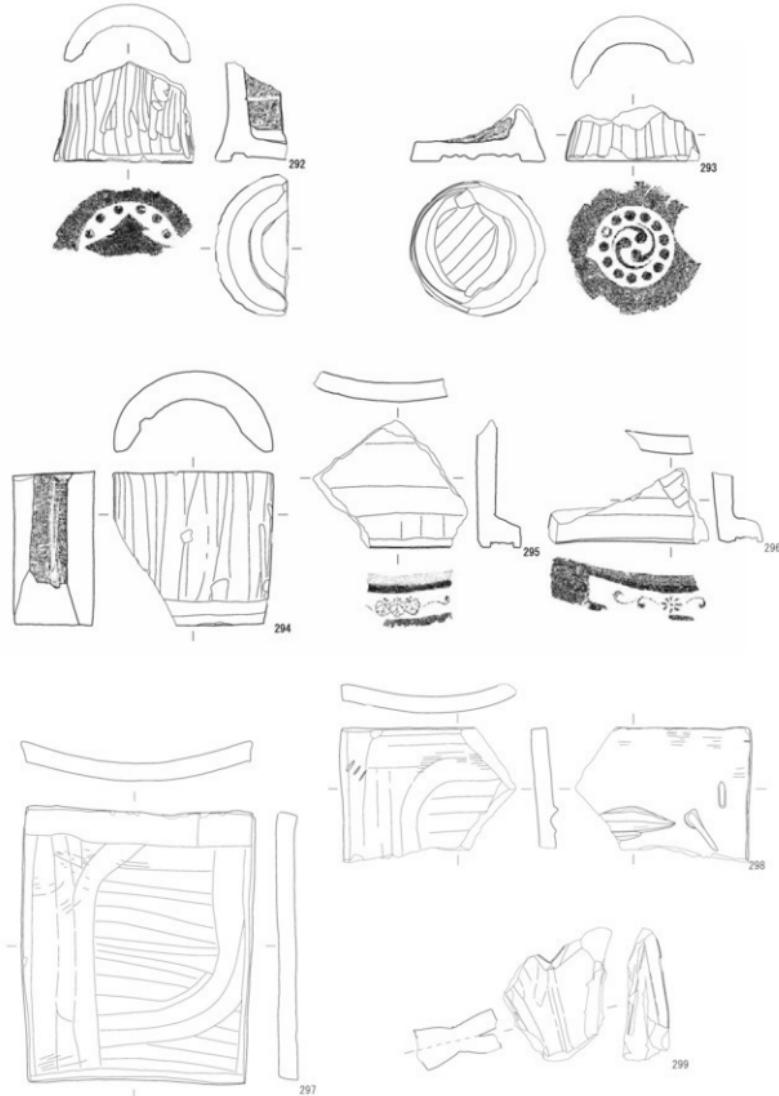


第128図 出土瓦 遺物実測図(33)



第129図 出土瓦 遺物実測図(34)

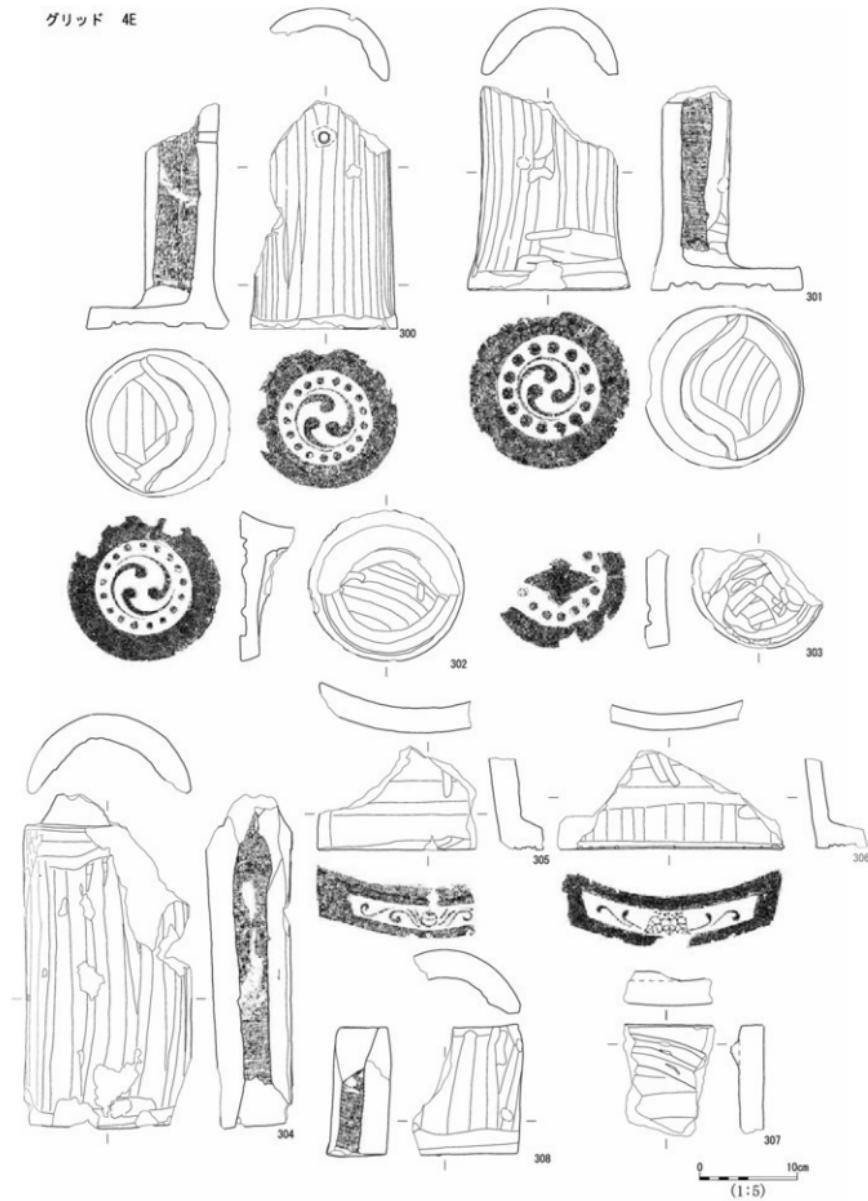
グリッド 4D



0 10cm
(1:5)

第130図 出土瓦 遺物実測図(35)

グリッド 4E

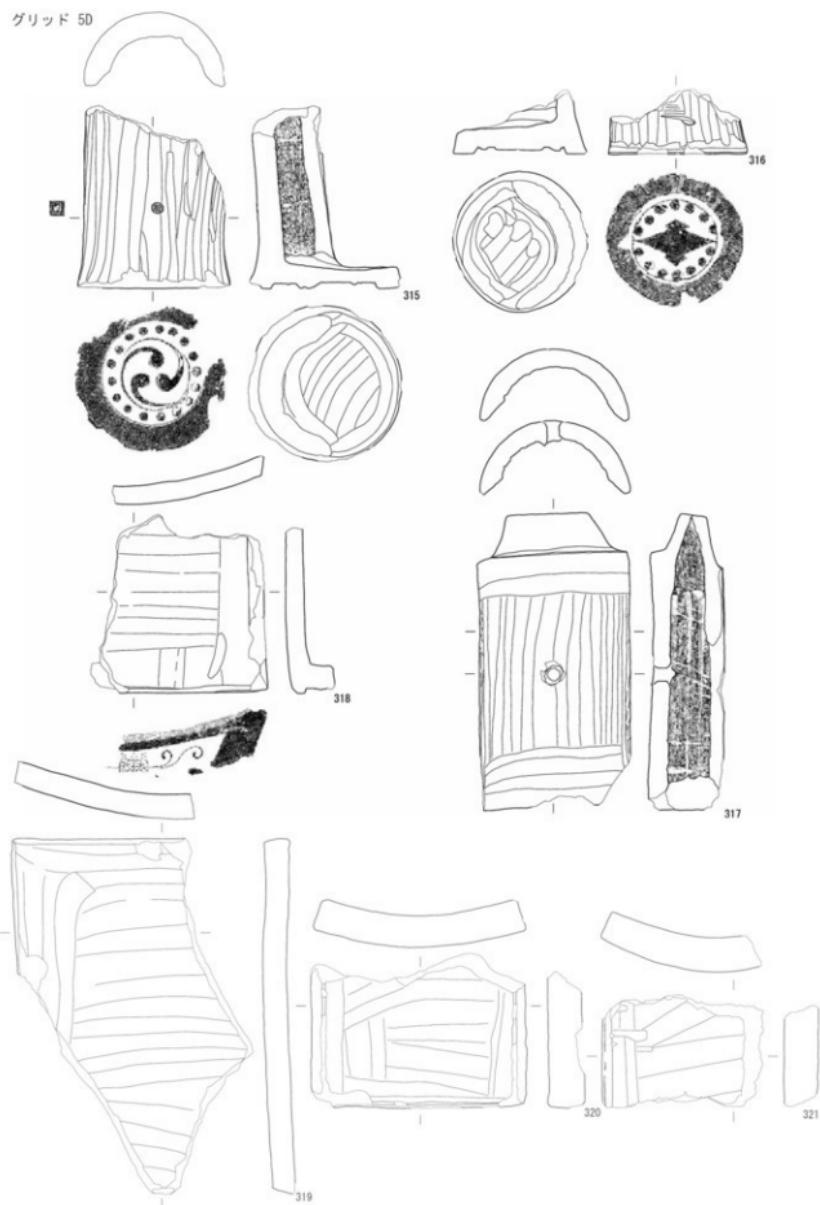


第131図 出土瓦 遺物実測図(36)

グリッド



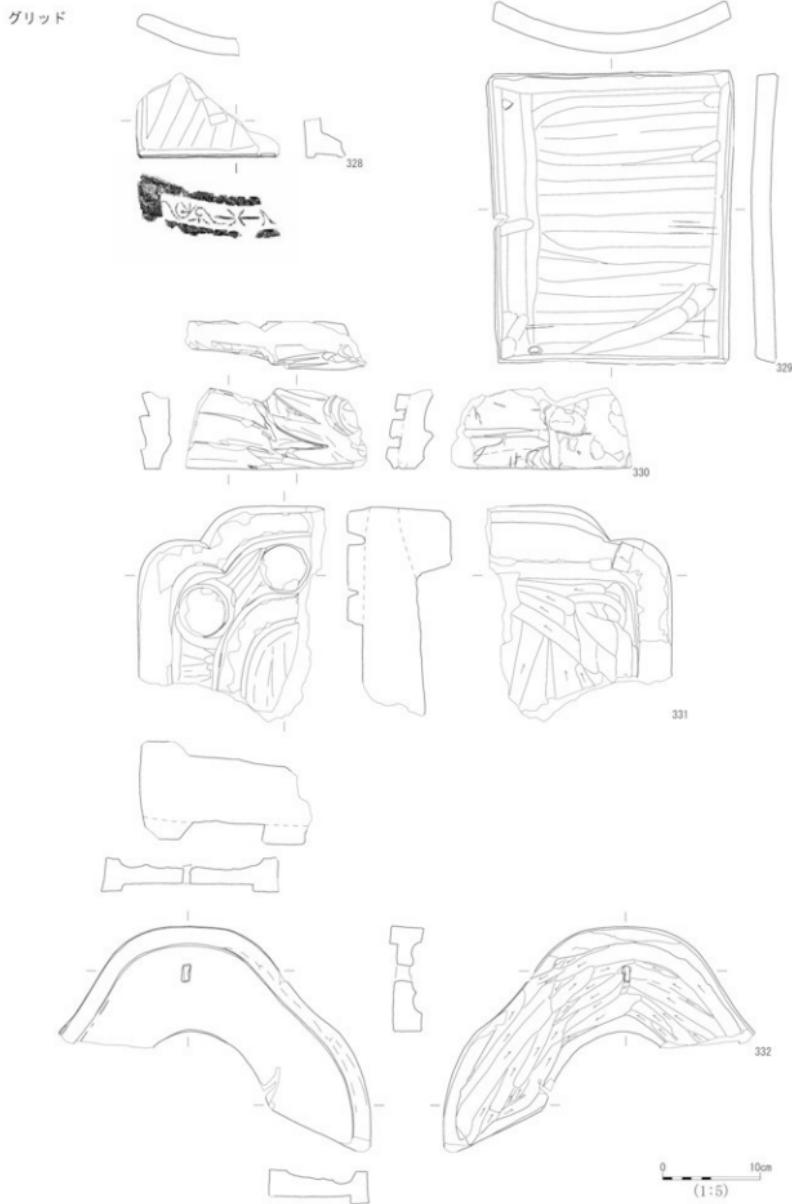
第132図 出土瓦 遺物実測図(37)



第133図 出土瓦 遺物実測図(38)

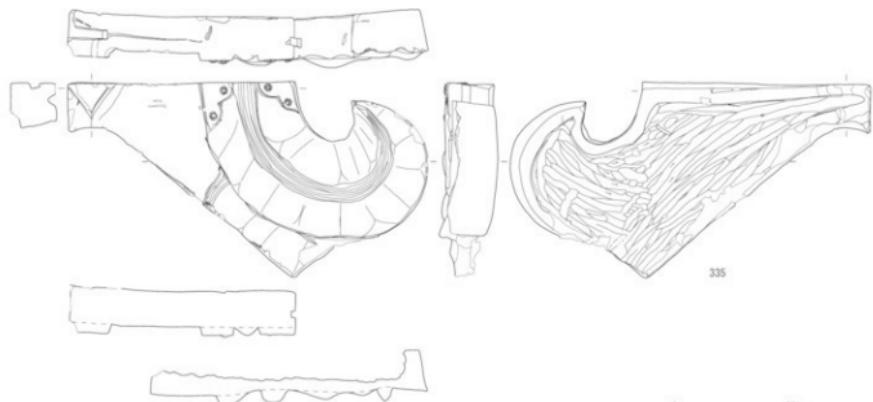
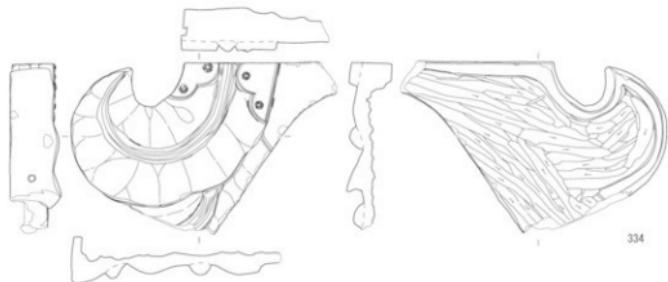
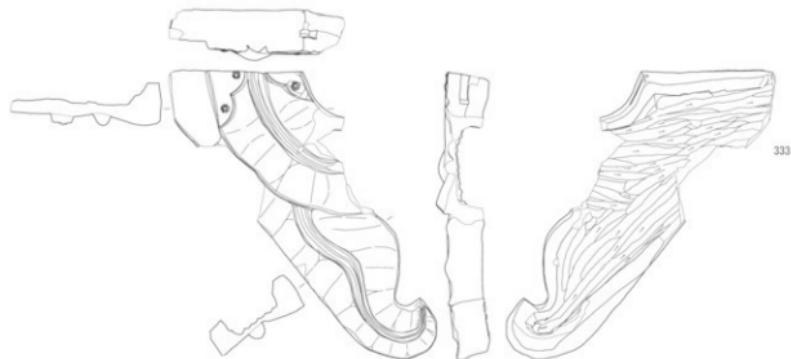


第134図 出土瓦 遺物実測図(39)



第135図 出土瓦 遺物実測図(40)

グリッド



0 20cm
(1:8)

第136図 出土瓦 遺物実測図(41)

グリッド 6E

6E・6F



336



337

表土



338



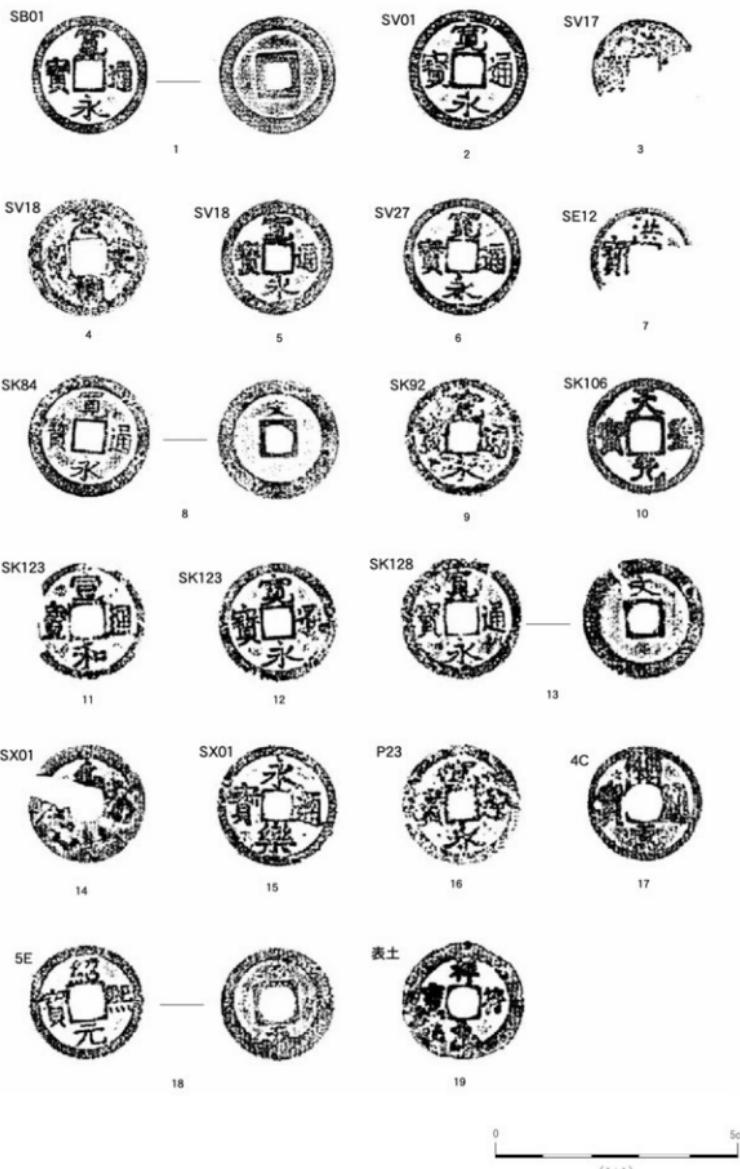
339



340

0 10cm
(1:5)

第137図 出土瓦 遺物実測図(42)



第138図 出土貨幣 遺物実測図